

白野田古墳

宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集

1978

熊本県宇土市教育委員会

序

宇土地方の前方後円墳は昭和40年ごろまでは、古保山の女夫塚の男塚のみであった。それも30年代のはじめ頃、附近の橋をかけるための土取りで、道路側がこわされ、石室が露出し、転落してしまった。ひそかにこの古墳の調査を計画しておられた第二代肥後考古学会長の小林久雄氏を歎かせたものであった。

それが昭和39年ごろから、蜜柑畑造成のために宇土半島基部の山がひらかれ、ことに小天・河内の業者によって大規模になされると、次々に大前方後円墳が発見された。昭和40年8月に、それらのなかでももっとも破壊の甚しい不知火町の弁天山古墳が、富樫卯三郎氏を中心とする宇土高校社会部によって発掘調査されている途中で、もっとも壮大な容姿をもってスリバチ山古墳が発見され、その東前面に迫ノ上古墳があることが分かった。

かくして宇土半島基部の前方後円墳は女夫塚のほか、弁天山・国越・スリバチ山・迫ノ上・城ノ越・仁王塚・天神山・松橋大塚・向野田・楯崎などに及び、さらにさいきんは向野田古墳の東に御手水古墳^{おちょうず}が発見された。12基に及ぶのである。そのうち破壊のために弁天山、迫ノ上、国越が発掘調査され、城ノ越^{じょうこし}は私どもが中世の城跡と見誤ったために、ブルドーザーで崩され、その途中、古い前方後円墳を中世に城に改造していることが分かったが、三角縁神鏡一面のほか、主体部も遺物も不明のまま終わった。

向野田古墳は国道三号線のすぐ東側で、不知火町との境に近いところにあるが、藪が深いために発見がおくれた。それが古墳であると分かったのは、昭和41年夏で、現宇土市教育委員会の平山主事（当時高校生）によるが、雑木が密生していて調査は不可能であった。しかるに翌42年夏には同地が買収され、採土のために伐採され、トラックの上る道ができ、全長89メートルの大前方後円墳であることが明確になった。そこで何とかしてその保存をはかり、関係者が集まり、直接また間接に工事者に交渉したが、はかばかしくゆかないうちに、年末にはブルドーザーが前方部の前端に入った。そのちかくで箱式石棺や石蓋土壙墓が、土とともに運び去られた。

昭和43年1月に、宇土市では遺跡を守るために「宇土文化の会」が結成された。しかし埋蔵文化財の保護法が厳重でなかった当時は、業者の開発を停止させることができず、前方部は東側から削られ、4月には前方部の東側が後円部近くまで採土されたので、宇土高校・第二高校

などで、前方の残存部を調査した。8月には前方部は全く失われ、後円部の頂上までブルドーザーが削った。そこで緊急調査が行われた結果、嚴重な竪穴式石室のなかに巨大な舟形石棺を包蔵していることが分かり、宇土市の援助により本格的な調査をすることになった。

しかし何分経費が十分でないので、熊本日日新聞社長伊豆富人氏にはかり、同氏の厚意で「熊日調査団」を結成した。伊豆氏が団長、大和忠三宇土市長が副団長、私が調査隊長、富樫卯三郎氏が調査副隊長として、肥後考古学会、宇土市文化財専門委員会の有力メンバーが隊員として協力した。調査は44年9月13日から2週間行われた。処女古墳として、若い女性の人骨、鏡三面のほか、多くの鉄製品、玉類、布帛類が出土した。4世紀初期の弁天山・迫の上に対し、4世紀後期の古墳として、宇土半島基部の前方後円墳編年の上に重要な意味をもつことが分かった。

10年近く待望していた古墳の報告書が、今回富樫氏の手によって整理され、多くの専門家の意見を加えて刊行される運びになったことは、関係者の一人として喜びにたえない。

熊本大学名誉教授

松 本 雅 明

序

「向野田古墳発掘報告書」が、宇土市教育委員会の手で刊行された。まず執筆者をはじめ関係者の、長年のご努力を多としたい。

思えば向野田古墳の発掘は44年秋であった。熊本における考古学調査では、戦後最大の発掘とされ、郷土の古代史を書き改める端緒となっただけに、こうして調査がまとめられるものは意義深いものがある。

発掘に当たったのは熊日（熊本日日新聞…以下同じ）学術調査団であった。調査は9月13日から始まり、熊日と宇土市教委で調査団を編成、団長に伊豆富人氏（当時熊日社長）副団長に大和忠三氏（宇土市長）調査隊長に松本雅明氏（熊大教授）副隊長に富樫卯三郎氏（宇土高教諭）らの名が挙げられている。当日現地で結団式がなされた。

向野田古墳ではすでに大型の舟形石棺をおさめた石室が発見されており、県下でも類例のない古墳として注目されていた。しかし付近一帯の山で採土作業がなされ、古墳の崩壊が激しくなったため、緊急調査の運びとなった次第であった。

調査の成果については、報告書のなかで詳細に述べられているので省略し、当時の新聞報道から、調査をふり返ってみよう。

まず14日付けの熊日では「向野田古墳に学術のメス」と、調査団の結団式のもようが出ている。ついで15日付けでは「フタ石、石積みが出土」と、七枚の砂岩のフタ石や、石室を固める石積みが発掘されている。16日付けになると、これが「県下最大の石棺」であり、「石室構造はみごとなもの」との松本隊長の談話が付け加えられている。

16日は調査がクライマックスに達した日であった。石棺があげられるや、「完全な女性の人骨」と「中国製の鏡が3個」などが現われた。そして人骨の主な写真は五段、石室部の写真は3段に扱われている。記事はもちろんトップ五段である。戦後最大の発掘成果で、終日興奮が渦まいた現地のもようが、紙面にあざやかに出ていて興味深い。

石棺のフタがチェーン・ブロックで揚げられた時、なぜか一陣の風が吹いた。人々は異様な感に打たれた。まもなく人骨のほか、おびただしい副葬品が発見される。調査隊は万歳を叫んだし、あのときのことが昨日のような気がする。

新聞が大成果の内容を報道した日から、現地には見学者の列が続いた。近所の人のもとより、熊本県下や九州各地から見物客がつかめた。一日で約700人、調査日程の10日間では7000人に及んだ、と新聞は伝えている。調査はまったく大成功であった。

ただ、ここで忘れてならぬのは、この大成功を導いたものが、地域住民の力であるということ

とだ。地域の人々は、調査の一年前から、同古墳を崩壊から守るべく、「宇土文化の会」を結成した。

この会では熊本県や宇土市当局に対し、何度も保存を訴えた。また宇土高校生たちは、降雨のため墳頂部に大ヒビが入るや、必死で崩壊を防いだ。また調査に当たって、開発の事業主や地主がみせた好意の数々も、忘れることは出来ない。

21日付けの熊日社説で私は「文化財保護で行政の強化を」と題し、向野田古墳の発掘成果にふれるとともに、保護行政強化の要を力説した。調査を大成功に導いたのは、地域住民の文化財保護に寄せる熱意であるが、同時に行政がこれに対応せねば、国土あげての開発ブームに、文化財は危機に陥ると考えたからである。

あれから10年の歳月が立つ。文化財保護行政も、ずいぶん充実したものとなった。当時熊本県の文化財行政専門家は一人、関係予算は単県で200万円だった。これが今日では、新しく文化課が生まれ、スタッフは24人、予算(53年度)は2億3,400万円となっていて、隔世の感が深い。

向野田古墳の発掘調査が、文化財保護行政に果たした役割りは大きい。

熊本日新聞社取締役(編集担当)

平 野 敏 也

序

熊本～肥後～火の国、いったいわれわれの古里はどこだろうか……。

近年、とくに宇土地方では従来の県史を再考せねばならないことが、つぎつぎに起りました。

「火の国の発祥は宇土だった」の説が、にわかに関心をあびてきたのです。

それは、先頃出した宇土城跡（西岡台）の報告書により大溝をめぐる高地性集落跡と、向野田古墳の被葬者は、若き女性であったことや、副葬品からしてこの王者こそ火の君では……、の見方が有力になったもの衆知のとおりであります。

ここに昭和42年に発掘し、以来永く研究をあたためられた向野田古墳の報告書が、関係者によりまとめられ発表されることになりましたが、おそらく、関心ある方々の興味をひく事と存じます。

これからは、昨年10月末に発足した「宇城風土記の丘研究会」や、「宇土市史研究会」の方々に、是非、これが風土記の丘実現の中心的な役割を果たすことになりましょうから、関係者の研究のよすがと、更に市民各位にとりましても、ますます文化財の保護にご協力いただきますようお願い申し上げます。あわせてこの編集にあられた関係者の熱意にも報いるべく、ここに深甚の意を表し、ごあいさつにかえさせていただきます。

熊本県宇土市長

大 和 忠 三

例 言

1. 本書は熊本県宇土市松山町字向野田3978番～4020番に所在する向野田古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査（後円部）は熊本日日新聞社と宇土市教育委員会が別項の調査団を組織して昭和44年9月におこなった。
3. 調査にあたっては熊本県内はもとより、ひろく九州各県からの来訪があり、指導・助言を得ることができた。
4. 本書の執筆は富樫卯三郎が行ない、編集は富樫のほか平山修一・高木恭二があたった。
5. 本書に掲載した遺構実測図は発掘調査に参加した各員が作成し、遺物実測図と整図は富樫・平山・高木のほか、一部木下洋介氏・浦田信智氏の手をわずらわせた。
6. 付論として、各専門家による玉稿をいただくことができた。なおその中に掲載されている写真・図等は、各先生方によるものである。
7. 巻末の図版に用いた写真は、主に富樫・宇土市教育委員会が撮影したものである。
8. 出土した遺物は現在宇土市立図書館（昭和51年建設）に併設の郷土資料室に展示し、公開している。

目 次

I	調査の動機	1
	1. はじめに	1
	2. 開発と発見	2
II	古墳の立地と周辺の遺跡	4
III	調査の経過	16
	1. 前方部調査	16
	2. 後円部調査	17
IV	墳 丘	24
	1. 墳 丘	24
	2. 墳丘実測	27
V	内部主体の構造	32
	1. 墓壇・石室・石棺	32
VI	遺物の配列	42
	1. 棺外の遺物	42
	2. 棺内の遺物	43
VII	遺物の観察	46
	1. 鏡 類	46
	2. 玉 類	50
	3. 車 輪 石	57
	4. 貝 輪	58
	5. 鉄 器 類	58
	6. 土 器 類	71
	(付) 石 蓋 土 壇	102
VIII	おわりに	105
	1. 考 察	105
	墳丘・墓壇・石室・石棺・副葬品・被葬者	
	2. ま と め	133
付論	1. 向野田古墳の人骨について	北條 暉幸 ... 157
	2. 向野田古墳の貝輪について	菊池 泰二 ... 158
	3. 向野田古墳出土鏡について	堀 一夫 ... 159
	4. 向野田古墳出土車輪石・勾玉の石材について	井上 正康 ... 165
	5. 向野田古墳出土試料の分析	実政 勲 ... 166
	6. 向野田古墳出土刀剣付着の鉄錆状材の樹種	嶋倉巳三郎 ... 168
	7. 向野田古墳出土の薄片状物について	嶋倉巳三郎 ... 183

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図…………… 6	第21図 刀子(2)……………64
第2図 周辺地形図……………25	第22図 刀子(3)……………65
第3図 墳丘測量図……………折込み	第23図 刀子(4)・鉄斧……………66
第4図 字 図(部分)……………28	第24図 埴 輪(1)……………79
第5図 墳丘企画推定図……………30	第25図 埴 輪(2)……………80
第6図 竪穴式石室(1)……………折込み	第26図 埴 輪(3)……………81
第7図 階段状遺構……………33	第27図 埴 輪(4)……………82
第8図 竪穴式石室(2)……………34	第28図 土 師 器……………85
第9図 竪穴式石室(3)……………折込み	第29図 石蓋土墳……………103
第10図 竪穴式石室(4)……………折込み	第30図 枕石未製品……………107
第11図 舟形石棺……………折込み	第31図 熊本県内前方後円墳分布図……………150
第12図 竪穴式石室構築過程推定図……………39	第32図 スリパチ山古墳墳丘測量図……………折込み
第13図 (上段)棺内・棺外遺物配置状態…折込み	第33図 迫ノ上古墳墳丘測量図……………151
(下段)棺外遺物出土箇所番号…折込み	第34図 檜崎古墳墳丘測量図……………152
第14図 玉類出土状態……………折込み	第35図 天神山古墳墳丘測量図……………折込み
第15図 内行花文鏡……………47	第36図 女夫塚古墳(男塚)墳丘測量図……………153
第16図 方格規矩鏡……………48	第37図 弁天山古墳墳丘測量図……………154
第17図 鳥 獸 鏡……………49	第38図 松橋大塚古墳墳丘測量図……………折込み
第18図 車輪石・玉類……………52	第39図 国越古墳墳丘測量図……………155
第19図 鉄剣・鉄刀……………折込み	第40図 仁王塚古墳墳丘測量図……………156
第20図 刀子(1)……………63	

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表(高木作成)…………… 7	第11表 埴輪片分類一覧表(富樫)……………88
第2表 宇土半島基部前方後円墳群編年試案 (富樫作成)……………14	第12表 竪穴式石室分類表(1)(富樫)……………108
第3表 検出葦石一覧表(富樫)……………26	第13表 竪穴式石室分類表(2)(富樫)……………108
第4表 向野田古墳墳丘計測数値(富樫)……………29	第14表 竪穴式石室分類表(3)(富樫)……………109
第5表 勾玉計測表(高木)……………53	第15表 関連石棺一覧表(高木)……………112
第6表 管玉計測表(高木)……………54	第16表 図版からみたくつかの車輪石一覧 (富樫)……………120
第7表 小玉計測表(高木・木下・浦田)……………56	第17表 車輪石出土地名表(富樫・高木)……………122
第8表 刀子布痕の重ね枚数および繊維方向一 覧表(富樫)……………67	第18表 熊本県内前方後円墳地名表(富樫・ 平山・高木)……………138
第9表 刀子出土個所別、布痕重ね枚数一覧表 (富樫)……………67	第19表 熊本県内埴輪出土地名表(高木)……………144
第10表 刀子計測表(高木)……………68	

図 版 目 次

- | | |
|--|---|
| <p>図版 1 (1) 古墳遠望 (西側より)
(2) 同 上 (前方部は消滅)</p> <p>図版 2 (1) 古墳近影 (西北側より)
(2) 同 上 (北側より)</p> <p>図版 3 (1) 竪穴式石室 (墓壇と粘土被覆)
(2) 同 上 (石室蓋石)</p> <p>図版 4 (1) 粘土被覆南端の立石 (南西側より)
(2) 同 上 (南側より)
(3) 墓壇北東隅の階段状遺構</p> <p>図版 5 (1) 階段状遺構 (南側より)
(2) 同 上 (西側より)</p> <p>図版 6 (1) 竪穴式石室 (石室蓋石除去)
(2) 同 上</p> <p>図版 7 (1) 竪穴式石室 (西側より)
(2) 棺外遺物出土状態 (北側)</p> <p>図版 8 (1) 棺外遺物出土状態 (北東側)
(2) 同 上 (西側、刀 4)</p> <p>図版 9 (1) 石棺蓋石出土状態
(2) 石棺蓋石の矩形小孔
(3) 石室控積状態 (南西隅)</p> <p>図版 10 (1) 棺内遺物出土状態 (南側より)
(2) 同 上 (北側より)</p> <p>図版 11 (1) 棺内遺物出土状態 (頭部付近)
(2) 同 上 (腰部付近)</p> <p>図版 12 (1) 棺内遺物出土状態 (南端)
(2) 棺内遺物除去後</p> <p>図版 13 (1) 石棺内の枕石
(2) 石室控積検出の枕石未製品</p> <p>図版 14 (1) 石室東側壁
(2) 石室北東隅側壁
(3) 石室北西隅石積状態
(4) 石室南西隅石積状態</p> <p>図版 15 (1) 石棺南端部近影
(2) 棺身と石室側壁
(3) 石棺基底部と板石敷</p> <p>図版 16 (1) 石棺蓋石正面 (北側)
(2) 同 上 (南側)</p> <p>図版 17 (1) 石棺蓋石側面 (北側)
(2) 同 上 (南側)</p> | <p>図版 18 (1) 葺石・埴輪出土状態 (後円部東側)
(2) 葺石・埴輪出土状態 (後円部墳頂)
(3) 後円部南側、土師器(2)出土状態</p> <p>図版 19 (1) 内行花文鏡 径17.1cm</p> <p>図版 20 (1) 方格規矩鏡 径18.4cm</p> <p>図版 21 (1) 鳥 獸 鏡 径11.3cm</p> <p>図版 22 (1) 内行花文鏡鏡面 (出土時)
(2) 同 左 (現在)
(3) 鳥獸鏡鏡面</p> <p>図版 23 (1) 車輪石</p> <p>図版 24 (1) 車輪石裏面 (上)
(2) 車輪石部分 (下)</p> <p>図版 25 (1) 玉 類</p> <p>図版 26 (1) 鉄 劍
(2) 鉄 刀</p> <p>図版 27 (1) 鉄劍柄部 (上から劍 1・劍 2・劍 3・劍 4)
(2) 鉄刀柄部 (上から刀 1・刀 2・刀 4)</p> <p>図版 28 (1) 刀 子 1
(2) 刀 子 2</p> <p>図版 29 (1) 刀 子 3
(2) 鉄 斧</p> <p>図版 30 (1) 不明遺物
(2) 貝 輪 片
(3) 土 師 器</p> <p>図版 31 (1) 埴 輪 1
(2) 同 上 2</p> <p>図版 32 (1) 埴 輪 3
(2) 同 上 4</p> <p>図版 33 (1) 石蓋土壇 (側面)
(2) 同 上 (平面)
(3) 同 上 (蓋石除去後)</p> <p>図版 34 (1) 東南より古墳を望む
(2) 北側より後円部を望む (採土中)
(3) 古墳より東南を望む
(4) 古墳より西北を望む</p> <p>図版 35 (1) 調査風景</p> <p>図版 36 (1) 調査風景</p> |
|--|---|

向野田古墳調査団組織一覧

—熊日（熊本日日新聞社）学術調査団（役職は調査当時）—

団	長	伊豆 富 人（熊本日日新聞社社長）
副 団	長	大 和 忠 三（宇土市長）
		島 田 四 郎（熊日専務）
隊	長	松 本 雅 明（熊本大学教授）
副 隊	長	富 樫 卯三郎（宇土高校教諭）
調 査	員	坂本経堯（肥後考古学会長） 原口長之（県文化財専門委員） 佐藤伸二（熊本大学 助手） 井上 正（宇土市文化財専門委員） 古田一英（肥後考古学会員）
調 査 補 助 員		宇土高校社会部OB 敷島安人・佐藤哲三・中野章・平山修一・高木恭二・井上洋一 宇土高校社会部（部長 沖村 徹ほか） 九州学院考古学部（部長 山下敏文ほか） 第二高校考古学部（部長 津村隆司ほか）
地 元 協 力 者		山村一夫・尾崎信義・緒方増男・緒方正一
調 査 協 力 者		三島 格（福岡市文化財主事） 乙益重隆（熊本女子大学教授） 田辺哲夫（県文化財 専門委員） 隈昭志（鹿本高校教諭） 杉村彰一（同） 田添夏喜（玉名市文化財委 員長） 松本安雄（県教育庁） 上野辰男（同） 緒方 勉（肥後考古学会員） 東 光彦（熊本市立博物館） 桑原憲彰（県教育研究所） 平岡勝昭（肥後考古学会 員） 江上敏勝（八代市教育研究所） 富田紘一（熊本市立博物館） 石原幸男（宇 土高校教諭） 枝森久一（三角町文化財協力委員） 西原昭明（宇土文化の会） 清見 末喜（宇土文化の会） 山崎純男・石橋新次・板楠和子・岩井瑞穂
調 査 事 務		宇土市教育委員会社会教育課（主事） 本郷裕幸・萩原明彦

I 調査の動機

1. はじめに

去る昭和42年夏、向野田古墳が採土進行中の宇土市松山町の丘陵で発見されてから早くも10年の歳月が過ぎ去った。

その間、宇土高校社会部ではとりあえず墳形実測につとめ、クラブOBをはじめ熊本市九州学院、同第二高校などの考古学部員、地元研究者などの協力の下に採土の池田組および宇土市教育委員会の諒承を得て、県当局へ連絡、調査を行なってきた。昭和43年5月の発掘調査は、採土に追われてやむなく行なわれた。

その後、採土から前方部消滅というかなしむべき事態を迎えた。昭和44年9月、当時指導をいただいていた熊本大学松本雅明教授の斡旋により宇土市教育委員会および熊本日日新聞社共催による熊日学術調査団が結成され、本格的な発掘調査が行なわれた。調査関係者はよく奉仕的に努力して下さったことを銘記しておきたい。今日、このような無償の調査活動は到底考えられない。

昨秋、宇土市教育委員会では、同市立図書館郷土資料室展示の向野田古墳出土の鉄器類補修と保存処理のため鉄器類を奈良市の元興寺文化財研究所へ送られた。その折、修理の参考に数年前から実測していた副葬品のうち、鉄器類の図面を提出したことであった。

このたび、市教育委員会から向野田古墳調査報告の執筆を委嘱され、微力ながら終始たずさわった者として責務の一端を果たすことにした。

向野田古墳については、発掘当時、熊本日日新聞社から調査経過の報道があり、ことに平野敏也氏（当時政治部長）により調査団の座談会が催されたことは忘れがたい。

昭和45年10月、熊本大学井上辰雄教授の高著『火の国』により向野田古墳の概要が広く紹介され、古代史の上から教えられるところが多かった^①。

今思えば、松本雅明博士の、高配がなければ、向野田古墳の発掘調査は私たちの手で行なうことはむづかしかったといえよう。さいわい、松本雅明隊長の下に宇土高校出身の佐藤伸二助手がおられ、ベストをつくしていただいた。また当時宇土高校社会部OB農業古田一英、OB熊本商科大学生敷島安人、別府大学生山崎純男、明治大学生石橋新次、九州学院高校生山下敏文諸氏、地元研究者枝森久一、西原昭明両氏らが献身的に協力して下さったことも思い出となっている。

今回、報告作成にあたり、当時宇土高社会部OBの平山修一、高木恭二両氏は、現在市教育

委員会に勤務され、種々の方面でお世話になった。

終りに熊本日日新聞社、宇土市当局、同教育委員会、同文化財専門委員会ならびに調査関係者へ、また県当局、上野辰男主幹、国学院大学乙益重隆教授、原口長之、田辺哲夫、田添夏喜、三島格諸氏のご厚意に心から御礼を申し上げます。

なお、地主池田勲氏は、調査終了後、向野田古墳の後円部付近の地所を宇土市へ寄付されました。同氏の芳志に深謝いたします。

2. 開発と発見

向野田古墳発見のいきさつについては、調査当初松本雅明隊長の「宇土地方の古墳—前期古墳最大の群集地帯—」の論文とともに筆者の「向野田古墳調査の意義—現在までの経過を中心として—」の報文に、そのあらましを記したことがある。

昭和41年夏、当時宇土高社会部の平山修一氏が、向野田の丘陵上に立つ九州電力鉄塔下の地形が古墳らしいことに注目され、部員たち一同と途中まで登ったが、雑木林に覆われ、上へは登れなかったことがある。

同42年夏、同じく部員であった高木恭二氏が向野田の丘陵上で土師器片1個を表採され、さらに前方後円墳らしいことを伝えてきた。その知らせで、早速部員たちと現地に行くと、すでに採土のためブルドーザーが丘陵上をのぼり、採土運搬のためトラック用の道がつけられていた。

トラックの道西側は採土で急な崖となり、その道の丘陵側の削られた低い崖面に点々と土器片や葺石らしい自然石が見付かった。ことに前方部先端とみられる西北の一角で、葺石にまじり、幅数cmの平たいタガをもつ円筒埴輪とみられる土器片など数個が採取され、鉄塔下の高みが後円部にあたることを確認できた。

一見した所、丘陵尾根突端上に立地し、宇土半島基部では比較的大形の前方後円墳であった。前方部切断の形を呈し、その前端に沿って小路がついていた。前方部の起伏は緩かで、続く後円部はやや高くなり、墳丘上の大きな雑木はあらかじめ伐採されていた。墳丘の方向はほぼ南北で、前方部を北にし、南端の高みを後円部とする。墳丘西側のすぐ下方を国道3号線が通っている。

近年、宇土半島基部をめぐる前方後円墳の発見があいついだけけれど、向野田の前方後円墳の存在は私たちに驚かせた。

発見の遅れた事情はいろいろあげられるが、その主な一つは山林に古墳が隠されていたことであった。土地開発で山林の伐採が行なわれ、墳丘の姿が現われた例はほかにもあり宇土市榑鉢山古墳・迫ノ上古墳などがある。岡山県赤磐郡山陽町の丘陵地帯では、最初の分布調査で

は、数カ所の遺跡しか確認されなかったのに、立木を伐採した後にやりなおした所、集落遺跡等7カ所、古墳は新たに65基が見つかったといわれている^④。

今年1月、宇土市内、御手水の丘陵尾根突端で高木恭二氏が前期的な様相をそなえた前方後円墳1基を発見された^⑤。櫟林伐採直後で、倒された木々の上に立てば、やや西南寄りにはるか低く向野田古墳が見下される。この御手水の古墳も、向野田調査の折、山崎氏らが古墳らしい地形を目指して登ったけれど、つかめなかったところである。向野田古墳から北東へ図上、直線距離約250m・標高48mの尾根突端に立地し、はるか有明・不知火両海を望む御手水の古墳は西側が急斜面をなし、東側は墳丘側面を多少削られ、道路となる。いかにも前期的なけわしい感じのする前方後円墳として、向野田古墳などのかかわりを改めて考えさせられる。

註 ① 井上辰雄『火の国』学生社、1970

② 松本雅明「宇土地方の古墳」、富樫卯三郎「向野田古墳調査の意義」熊本日日新聞、1969.9.10付

③ 富樫卯三郎「第2表 宇土半島基部前方後円墳群一覧表」宇土城跡（西岡台）一本文編一、1977.所収

④ 神原英朗「用木古墳群」岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(i)山陽町教育委員会、1975

⑤ 御手水の前方後円墳発見、熊本日日新聞、1976.1付、
本文校正中、御手水の前方後円墳から近い山腹の道路わきで、採土中箱式石棺8基が出土した。
そのうち2基はT字形に配置される。はるか不知火海を望む高所に立地している。

Ⅱ 古墳の立地と周辺の遺跡

宇土半島基部の主要な遺跡について、昨年「周辺の遺跡から見た西岡台」の小篇でとりあげ、若干所見を記した^①。重複するところがあるけれど、向野田古墳を中心にふたたび素描をこころみることにする。

向野田古墳は、現在熊本県宇土市松山町3993番地に墳丘の後円部が残存している。前方部は採土のため失われてしまった。

国土地理院5万分の1地形図「八代」の図幅東端から13.9cm、北端から1.5cmの地点にあたる。国鉄鹿児島本線宇土駅の南方約3.5km、九州産交バス松山停留所の南方約800mの所にある。国道3号線上に宇土市・不知火町の境界標があるが、その手前すぐ東側丘陵上に立つ九州電力の鉄塔が目印となる。

熊本県西海岸中部で、有明・不知火両海を分ける宇土半島がほぼ東西の方向に突出している。半島全域にわたり宇土山地が縦走し、南北両海岸は狭い平地となっている。半島基部には宇土山地と東方、雁回山南麓に続く丘陵がさし挟むほぼV字状の平野がひらけている。平野の北方に緑川、南方にやや小さな大野川が流れている。

宇土半島北辺には縄文早・前期の轟・曾畑両貝塚があり、現在の有明海沿岸から約5km～8km引っ込んでいて、半島基部のほぼ中央の辺にあっている。半島基部の南辺にも不知火町御領で縄文早期の土器片が出土している^③。

曾畑貝塚の南方約2kmの舌状台地に縄文後期の古保里貝塚^④、さらに半島基部の南辺に同じく後期の松橋大野貝塚がある^⑤。後者は大野川に臨む台地縁辺にあり、かなりの広がりをもっている。

古保里貝塚の西方約1kmの境目・善導寺台地西辺では弥生中期の大形甕棺が出土した。本年2月、その出土地わきの道路拡副工事にともなう調査でも2基の甕棺などが見つかった。轟貝塚の東方1km余の宇土城跡(城山)・轟貝塚北方約0.8kmの北平からも弥生中・後期の甕棺が発見されている。ことに境目遺跡は弥生・古墳・歴史各時代の遺物包含地で、西方の水田地帯は条里制^⑥の痕跡を留めている。

縄文・弥生各期にわたる遺跡にはまだミッシング・リンクのものがあるけれど、半島基部へ北九州・有明海などを通じて、文化の波及が及んでいることが窺われる。

半島基部の弥生文化は、なお究明を要するが、農耕・漁撈などの生産力向上を伴ったことが考えられ、次の古墳文化への社会的基盤を築いたことが想像される。

城山の西方に続く西岡台上に見出された高地性集落跡・防禦用V字溝をそなえた千疊敷は、

城山の周辺に生活を営んだ弥生人またはその後続者とのかかわりを無視できないであろう。そこに生活基盤の変化の生じたことが考えられる。海上その他からの外敵に対するきびしい防備体勢が窺われる。V字溝から二重口縁の古式土師器が出土している^⑦。

向野田古墳の墳頂は標高37m余、半島の山地と雁回山南麓続きの丘陵がさし挟む狭隘地帯東側の丘陵突端に位置する。墳頂から眼下の狭隘地帯を南北に通る国道3号線・鹿児島本線を越えて向かい側半島の丘陵突端に前方後円形の仁王塚古墳がある。熊本商大生らによる実測図がある。仁王塚には一部周溝の跡がみられるが、内部主体は未調査である。近年、墳丘近くまで道路がつけられ、向野田の葺石とよく似た自然石など目についた。仁王塚の墳丘葺石かどうか明らかでない。

仁王塚南方約1.5kmの丘陵上には不知火塚原古墳群がある。その中の塚原第1号墳は封土の失われた横穴式石室で、線刻の舟などの装飾があり、鬼塚ともよばれる。石室の形状から6世紀末～7世紀初頃に編年されている^⑧。

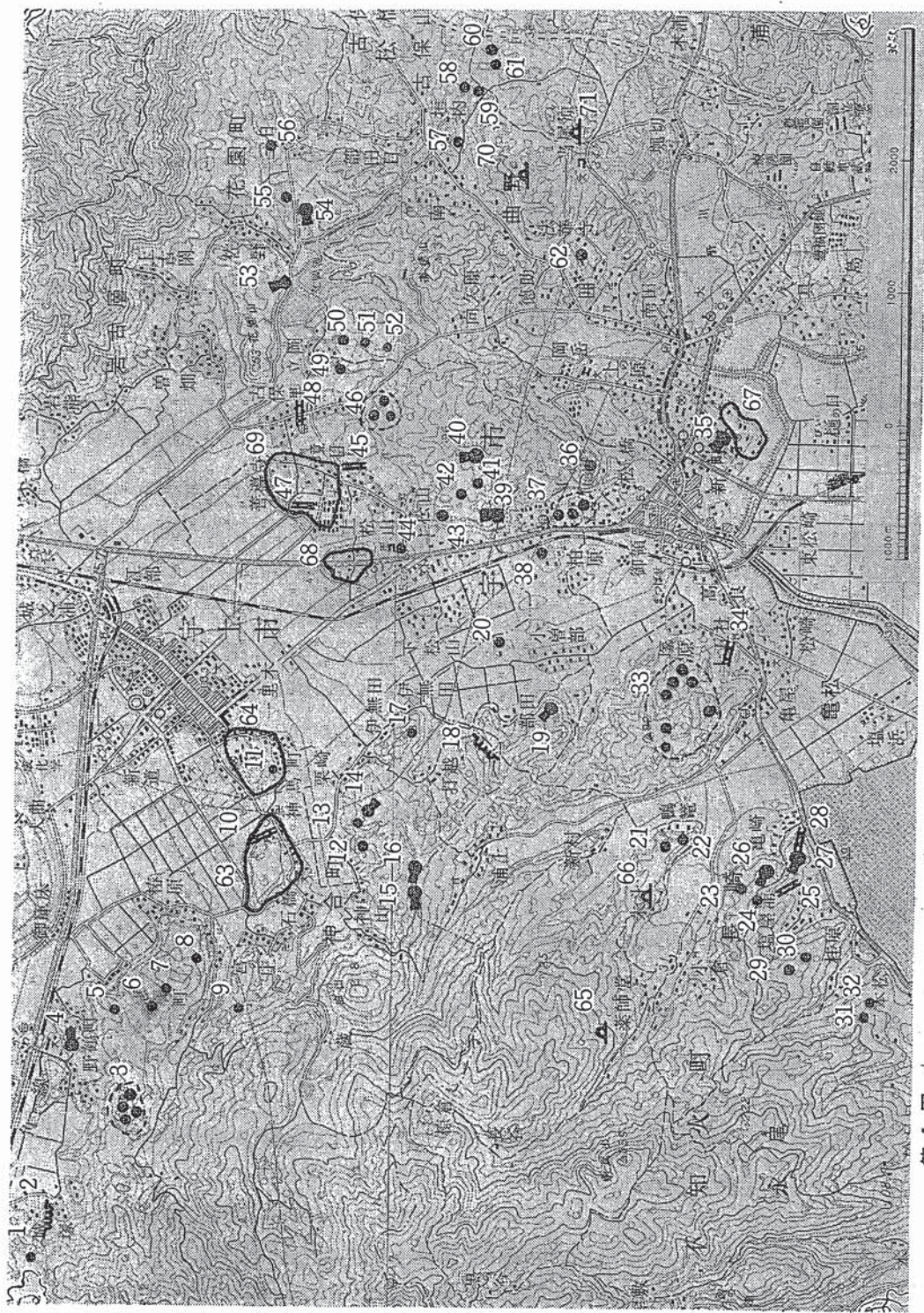
不知火塚原古墳群から西方約1.5km、不知火海沿岸に突出した丘陵上に亀崎古墳群がある。丘陵突端の前方後円形の弁天山古墳^⑨、その北方約500mの丘陵突端に同じく前方後円形の国越古墳がある。弁天山は後円部中央でほぼ主軸と並行の割石小口積みの狭長な竪穴式石室の残骸内に割竹形木棺の粘土床が残っていた。底部穿孔二重口縁の土師器壺がくびれ部北斜面から出土している。4世紀代の古墳とみられる。国越古墳は横穴式石室で、奥壁に平入りの家形石棺がつけられ、中央通路東西両側に屍床があり、家形石棺と屍床の間に狭い別床が設けられ、鉄斧など鉄製品その他多数の遺物が出土した。家形石棺の軒縁と両側前壁に直弧文や三角連続文の線刻彩色の装飾がある。奥壁に上下2個ずつ並行の刀掛突起をそなえる。羨門の扉石に造りつけの巨大な把手がある。各屍床から鏡1面ずつ計3面が出土し、その中の画文帯環状乳神獸鏡は江田船山古墳出土の鏡に同範鏡のあることが指摘されている^⑩。国越古墳は6世紀前半に比定されている。

この古墳は、横穴式家形石棺の船山古墳ほど豪壮な遺物はみられないけれど、半島基部周辺では稀にみる出土遺物の多いものであり、また両者が同範鏡をもつことから5・6世紀の在地首長の発展が示唆されるようで興味がある。

横穴式家形石棺と墓室腰壁の板石や石棺内外に幾何的文様のある例は、有明海東岸地方のそれぞれ新しい土着的な墓制としてとりあげられていることも注意される^⑪。

亀崎古墳群と不知火塚原古墳群の間、長崎の扇状地に突出した丘陵突端に鴨籠古墳がある^⑫。巨大な砂岩4枚を組合せた擲壁が残存し、重厚な、底部やや舟形を呈する家形石棺1基が埋納されていた^⑬。棺蓋に直弧文その他が線刻彩色される。新しい土着的な墓制の例にあげられる。5世紀末から6世紀初頭に位置づけられている。前方後円墳の疑いがあるという。

弁天山古墳西方約1km、海岸寄り丘陵中腹に横穴式石室の桂原古墳がある。奥壁に石棚があ



第1図 周辺遺跡分布図

第1表

周辺の遺跡一覧表

No.	名称	概要	文献
1	城塚古墳	横穴式石室(装飾)	
2	尾上横穴古墳群	14基	富樫卯三郎「城塚尾上横穴古墳群」 宇土市の文化財第3集(1977)
3	神ノ木山古墳群	4基・横穴式石室	富樫卯三郎「神ノ木山遺跡」 宇土市の文化財第3集(1977)
4	天神山古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「天神山古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
5	経塚古墳	横穴式石室	
6	東畑古墳	横穴式石室(装飾)	
7	金嶽山古墳	横穴式石室	
8	椿原石蓋土壙	石蓋土壙	三島格「宇土市轟椿原における石蓋土壙の一例」 熊本史学第15・16号(1959)
9	仮又古墳	横穴式石室(装飾)	濱田・島田・梅原「宇土郡緑川村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊(1919)
10	西岡台石棺	箱式石棺	
11	古城古墳	装飾古墳石材	富樫卯三郎「宇土古城古墳」 熊本の装飾古墳(1976)
12	神合古墳	円墳	
13	猫城古墳	円墳	
14	城ノ越古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「熊本県宇土市栗崎町城の越古墳出土の三角縁神獸鏡」 熊本史学第33号(1967)
15	スリバチ山古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「摺鉢山古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
16	迫ノ上古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「迫ノ上古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
17	久保古墳	円墳	
18	大平横穴古墳	2基	平山修一「大平横穴古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
19	仁王塚古墳	前方後円墳	坂本経堯「仁王塚古墳」 不知火町史(1972)
20	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	坂本経堯「北園鬼塚古墳」 不知火町史(1972)
21	鴨籠古墳	円墳・箱形石室	浜田・梅原「宇土郡不知火村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊(1917)
22	鴨籠2号墳	横穴式石室	坂本経堯「鴨籠古墳2号」 不知火町史(1972)
23	八久保古墳	箱式石棺	坂本経堯「八久保古墳」 不知火町史(1972)
24	道免古墳	円墳	坂本経堯「道免古墳」 不知火町史(1972)
25	東塩屋浦石棺	箱式石棺	坂本経堯「東塩屋浦古墳」 不知火町史(1972)
26	国越古墳	前方後円墳	乙益重隆「宇土郡不知火町国越古墳」 昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報(1967)
27	弁天山古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「弁天山古墳発掘調査概報」 熊本史学第30号(1965)
28	弁天山石棺	箱式石棺2基	坂本経堯「亀崎古墳群」 不知火町史(1972)
29	塩屋浦鬼の岩屋1号墳	横穴式石室	
30	塩屋浦鬼の岩屋2号墳	横穴式石室	
31	桂原古墳	円墳・横穴式石室(装飾)	濱田・島田・梅原「宇土郡不知火村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊(1919)
32	桂原2号墳	横穴式石室	
33	塚原古墳群	円墳・横穴式石室(装飾)	三島格「塚原第1号古墳」 不知火町史(1972)
34	十五社石棺群	箱式石棺3基	

No.	名 称	概 要	文 献
35	松橋大塚古墳	前方後円墳	林田憲義『松橋町史』(1964)
36	宇賀岳古墳	横穴式石室(装飾)	富樫卯三郎「宇賀岳古墳」 熊本の装飾古墳(1976)
37	御領東原古墳群	横穴式石室 3基	坂本経堯「御領東原古墳群」 不知火町史(1972)
38	柏原古墳	円墳	坂本経堯「柏原古墳」 不知火町史(1972)
39	向野田古墳	前方後円墳	本 書
40	御手水古墳	前方後円墳	
41	御手水2号墳	円墳	
42	南山内古墳	円墳	
43	チャン山(茶臼山)古墳	円墳(?)	富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」 宇土市の文化財第1集(1972)
44	桶底古墳	横穴式石室	
45	上松山石棺	箱式石棺	
46	神ノ山古墳群	円墳・3基	富樫卯三郎「神ノ山古墳群」 宇土市の文化財第3集(1977)
47	境目石棺群	箱式石棺・8基	富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」 宇土城跡(西岡台)(1977)
48	古保里石棺群	箱式石棺・5基	同 上
49	二枝古墳	円墳	
50	晚免古墳	円墳	濱田・島田・梅原「肥後国宇土郡花園村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究报告第3冊(1919)
51	潤野古墳	円墳	同 上
52	西潤野古墳		富樫卯三郎「古代から近代までの遺跡について」 花園小学校創立百周年記念誌(1975)
53	檜崎古墳	前方後円墳	梅原・古賀・下林「熊本県下にて発掘せられたる主要なる古墳の調査」 熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊(1925)
54	女夫塚古墳(男塚)	前方後円墳	富樫卯三郎「女夫塚古墳」 宇土市の文化財第1集(1972)
55	女夫塚古墳(女塚)	円墳	富樫卯三郎「古代から近代までの遺跡について」 花園小学校創立百周年記念誌(1975)
56	三日鬼の岩屋古墳	横穴式石室	
57	池尾古墳	前方後円墳(?)	
58	鳴瀧古墳	円墳	
59	真辻古墳	円墳	
60	大道夫婦塚古墳(男塚)	円墳	
61	大道夫婦塚古墳(女塚)	円墳	
62	ガローバル古墳	円墳	
63	西岡台遺跡		『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書 第1集(1977)
64	宇土城跡遺跡		
65	元米の山窯跡	須恵器窯跡	坂本経堯「古代の生産」 不知火町史(1972)
66	朱斗窯跡	須恵器窯跡	同 上
67	前田遺跡		佐藤伸二「中部九州における前期古墳発生の一側面」 法文論叢 第26号 史学編(1970)
68	畑中遺跡		
69	境目遺跡		富樫卯三郎『境目西原遺跡』(1969)
70	琵琶田窯跡	須恵器窯跡	
71	当尾小学校東窯跡	須恵器窯跡	

り、その上方に浮き出た感じの二重円文がある。他の側壁に10隻余の線刻の舟がある。石室構造上から6世紀後半の所産と考えられている。

国越古墳	6世紀前半	(乙益説)
不知火塚原第1号墳	6世紀～7世紀初	(三島説)
桂原古墳	6世紀後半	(三島説)
鴨籠古墳	5世紀末から6世紀初頭	(坂本説)

かつて後期前方後円墳と線刻の舟をもつ装飾古墳について、それぞれの被葬者のかかわりを着想したことがある。上記4墳の中、3墳はいずれも横穴式石室であり、6世紀代の編年が示される。地域的に不知火長崎を中心としたグループである。国越古墳は3屍床をそなえ、おそらく首長一族の合葬墓で、それら被葬者の支配が半島基部南辺から不知火海を通じ、行なわれたにちがいない。その際、水軍の主力をなして活動したのが塚原第1号墳や桂原古墳の被葬者をめぐる一味のものではなかったかとみられる。

国越古墳が、前期古墳の弁天山すぐ近く立地していることは不知火海制圧へ力点の置かれたことが考えられ、6世紀代半島基部の政治的情況変化の一端が示されている。

向野田の古墳からやや西北約3kmの丘陵上標高100m余に前方後円の播鉢山古墳がある。前方部切断の形式で、かつて山林伐採中にくびれ部北側から破碎した底部穿孔土師器が数個つらなつて出土した。有明・不知火両海を望み、また両海沿岸から仰がれる半島基部第一に数えられる立地を占めている。現在、前方部は道路と化し、後円部墳丘は密柑が栽植されている。

この古墳すぐ眼下に前方後円の迫ノ上古墳がある。割竹形木棺のカーブの明らかな粘土床をそなえた竪穴式石室で、調査当時割石小口積や蓋石がよく揃い、鏡などの出土が期待されたが、遺物は短剣その他わずかであった。盗掘のあったものであろうか。播鉢山との近接から迫ノ上は、おそらく播鉢山と同族関係のものともみられる。

播鉢山の被葬者は、半島基部周辺の支配確立の頃にあたり、不知火海制圧を示す弁天山古墳の被葬者とかかわりが考えられる。播鉢山被葬者の指示により不知火海へ臨む前線拠点として亀崎付近に弁天山被葬者は居を構えていたのでないかと臆測される。前期古墳の被葬者は、舟の装飾古墳とかかわる後期古墳の被葬者と異なり、みずから率先して水軍を指揮したのではなかったかと想像される。

播鉢山、迫ノ上の尾根続き東方端に前方後円の城ノ越古墳がある。ブルドーザーの採土で墳丘南側が残存していた。後円部に小形箱式石棺様のものが出土したが、主体部は失われ、割石積の痕跡はなく、墳丘わきの九州電力鉄塔付近に板状石材があり、箱式石棺の類があったのではないかと推測される。採土中、後円部から三角縁四神四獣鏡1面が出土した。出土地の明らかなものとして注目される。この鏡について先学から仿製鏡・舶載鏡二説のご教示をいただいたことがある。

とくに小林行雄博士から、この鏡が出土したことの意味を考えられるよとの趣意の私信をいただいたことがある。

なお半島基部北辺に国鉄三角線緑川駅東方すぐ近く突出した丘陵に前方後円の天神山古墳がある。古代にはほとんど海岸へ接していたかとみられる地形にある。前方部・後円部ともに崖崩れをなしているが、ほぼ完形の墳丘をなしている。後円部崖崩れの面で、盛土の跡が窮われる。その崖崩れ下方の面から土師器片が出土した。未調査で、おそらく立地からみて、後期古墳ではないかと思われる。

この古墳西北約2.5kmの丘陵上標高59mに梅崎山古墳がある。コ字形の巨石墳で東側壁に長さ1.29mの線刻の舟がある。舟底に右上から斜め左下へ20本余の櫂か櫓とみられる刻線がある。ほかにもう1隻あり、なお舟底の曲線らしいものがある。海をゆく巨船をしのばせるものがある。

天神山古墳南方約1.5kmの丘陵北斜面標高約40mの所に巨石の仮又古墳がある。横穴式石室で、東壁は約10隻、実に紛らわしい線刻があり、西壁は帆をあげた形の1隻の舟で、舟底に10本ほどの斜線がみられる。

本年1月、仮又古墳北方約800m、向い側ほぼ同じ標高の丘陵上で、天神さんの社裏手の籩にある通称鬼の岩屋が三角文の線刻などをもつ横穴式石室であることが発見された。字名は東畑という。

上述の国越古墳の場合と同じく、天神山古墳を中心として、梅崎山・仮又また東畑の装飾古墳のかかわりが考えられる。天神山古墳は未発掘で、今後の課題である。

仮又古墳東方約2.6kmの低丘陵上に宇土城跡(城山)がある。この城跡の石垣石材に舟などの線刻をもつものがあつた。大小の自然石もあるが、板状石材の大きさから石室が想像される。三の丸跡から出土し、その跡から小玉の熔融密着した小片も採集された。おそらく城山の付近にあつた装飾古墳のものではないかと思われる(古城古墳)。

東畑(飯塚天神)の古墳東方800mの丘陵上には金獄山古墳の横穴式石室がある。封土を失い、露出している。

宇土城(城山)出土の舟をもつ幻の装飾古墳古城古墳が天神山かどの古墳とかかわるものか、古墳分布の上から想定はむずかしい。ただ有明海を志向していることは明らかであろう。

舟の線刻をもつ装飾古墳は、いまのところ半島基部宇土山地の周辺に見出され、それぞれ有明・不知火両海を志向していることが注目される。

次に国道3号線東側、向野田古墳の丘陵に続く縁辺に立地する古墳として向野田古墳からやや東南約800mの丘陵突端に宇賀獄古墳がある。標高65m余、不知火海側に面した家形石棺の巨大化した形を呈する石室で、封土は失われ、屋根形の巨石が落ち込む。奥壁の2個の突起に並行して円文、連続三角文などの線刻がある。他の側壁にも幾何学的文様の線刻の跡が残る。

上述の新しい土着的な墓制の系統に属するものとしてあげられる。

宇賀獄古墳と上述の鴨籠古墳は、地形上立地の点でともに丘陵突端にあり、また巨大な柳壁や巨大な石棺状石室をそなえ、さらに幾何学的文様の線刻がある。先学により鴨籠は5世紀末から6世紀初頃に位置づけられたが、5世紀という見方もあり、宇賀獄はその時期からかなり下降したものではないかと考えられる。

宇賀獄古墳南方約1kmの低台地に前方後円の大塚古墳がある。最近、墳丘上が一部児童公園化された。その後、円筒埴輪片が表採された。児童公園開設の際、県文化課の一部調査があったと聞く。大塚古墳は半島基部南辺、不知火海の東北隅、大野川に臨み、不知火海制圧を志向している。半島基部北辺有明海沿岸に臨む天神山古墳とともに半島基部南北端を押え、それぞれ有明・不知火両海へ威容を示したものであろう。大塚も内部主体が未調査で、明らかでない。

向野田古墳から北方400m余の標高42m余丘陵上にチャン山(茶臼山)古墳があった。採土中、頂上崖面に露出し、調査した所、割石小口積ではないが、板石と塊石を積んだ粘土床の竪穴式石室残欠であった。粘土床から鳥獣鏡1面と直刀が出土した。鏡は後漢の鏡であった。石室構造などから墳形は前方後円墳ではなかったかと推測される。

本年1月、向野田古墳東北約250m、チャン山古墳東南約250mの標高46m丘陵突端に主軸方向北西、前方部を突端に向けた御手水の前方後円墳が櫟林伐採でその姿を現わしたことは上述した。御手水は後円部墳頂平坦部から前方部は細長く、立地上からも前期古墳らしく、処女墳ではないかと思われる。

御手水—チャン山—向野田の順序で、3基の地域的なグループが考えられる。

向野田古墳東北約2.5km雁回山南麓の花園山南側、立岡池北縁に前方後円の檜崎古墳、その東方400mに同じく前方後円の女夫塚古墳(男塚)がある。男塚東方約150mに残骸の女塚がある。

女夫塚古墳は墳丘北側が採土で削られ、石室構築に用いられたとみられる阿蘇凝灰岩の石材が2、3個放置されている。箱式石棺・割石小口積石室ではないことは察せられる。

檜崎古墳は家形石棺3基、石蓋土壙1基が後円部に露出し、板石が周りを囲む箱式石棺1基が前方部に同じく出土している。前方後円墳的な墳形とみられたが、昭和50年11月、前方後円墳として県指定史跡となった。6世紀前半に比定されている。檜崎古墳と女夫塚古墳は地域的なグループに数えられる。

檜崎古墳西南600mに円墳の晩免古墳があり、晩免南方約250mの標高約40m丘陵中腹に潤野古墳がある。晩免、潤野両古墳はともに家形石棺で、内壁に円文、連続三角文などの線刻がある。両古墳が上述の新しい土着的な墓制に属するとともに檜崎・女夫塚両古墳の付近にあり、それらとのかわりは今後の課題であろう。

檜崎（第2号棺）、晚免、潤野、檜崎西南約1kmの神ノ山、宇賀獄、国越など諸古墳の家形石棺内壁にはそれぞれ阿蘇凝灰岩の棺材に造りつけの突起がある^②。ことに檜崎、女夫塚の地域的なグループに4基が数えられ、半島基部をめぐる、国越へ続くことは石棺構造の上から技術的なつながりが窺われる。或は石棺製作の工人集団があり、彼等の手によったものではないかと想像される。そして彼等工人を利用した在地首長の間にもなんらかのかかわりがあったのではなからうかと臆測される。

向野田古墳をめぐる遺跡を若干とりあげてゆくうちに、以前から気のついたことであつたけれど、とくに前方後円墳が半島基部の要所にわたり分布していることであつた。このことはそれらの前方後円墳被葬者が親縁関係か、服属関係か、とにかくつながりのある在地首長として半島基部を中心に支配的勢力を維持発展させてゆく必要から生じたものではなかつたかと考えられる。あらい素描にすぎないが、ここに宇土半島基部前方後円墳群と呼ぶことのできる意味が秘められているように思われる。

先学の諸説があるけれど、試みに宇土半島基部前方後円墳群の編年順を記したことがある^③。弁天山古墳→迫ノ上古墳→城ノ越古墳→チャン山（茶臼山）古墳→向野田古墳→国越古墳→檜崎古墳→女夫塚古墳。未調査の播鉢山古墳・松橋大塚古墳・天神山古墳・仁王塚古墳それに御手水古墳の5基は入れていない。

熊本県内の前方後円墳は、去る昭和41年1月現在で40基を数えたけれど、^④その後の新しい発見を加えると、今日62基が数えられる（巻末第18表熊本県内前方後円墳地名参照）。その中でも宇土半島基部の前方後円墳群は九州においても特異な地域であることが注目される^⑤。

なお宇土半島基部前方後円墳の地形実測図は、ほとんど筆者ら宇土高校社会部および同OBの協力により数年かかって作成された。仁王塚古墳のは、かつて社会部で着手したが、熊本商大生らが遂行した。御手水古墳はまだである。それらの地形実測図の若干は石人石馬研究会へ提供したことがある。

- 註 ① 富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」宇土城跡（西岡台）所収、宇土市教育委員会、1977
② 松本雅明・富樫卯三郎「縄式土器の編年」考古学雑誌第47巻第3号、1961
富樫卯三郎「甕貝塚と曾畑貝塚」宇土市の文化財第1集、1972
③ 古田一英「不知火町における早期縄文遺跡」不知火町史、1972
④ 乙益重隆「地域的にみた肥後の貝塚」肥後上代文化史、1954
⑤ 前掲書註④。昨年末から今春へかけ、県立松橋高校跡地で大野貝塚と一連とみられる御領式の貝塚を調査した。
⑥ 富樫卯三郎『境目西原遺跡』宇土市教育委員会、1969
富樫卯三郎「甕棺とその遺跡」宇土市の文化財第1集、1972
富樫卯三郎「熊本平野における条里制の遺構について」西日本史学、1951
日野・牧野・規工川・隈・島津「熊本県の条里」熊本県文化財調査報告第25集、1977
⑦ 前掲書註①
⑧ 三島裕「塚原第1号古墳」不知火町史学、1972

- ⑨ 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報」熊本史学第30号、1966
- ⑩ 乙益重隆「不知火町国越古墳」昭和41年度埋蔵文化財調査概報、1967
小林行雄「倭の五王の時代」古墳文化論考所収、1976
- ⑪ 森貞次郎『北部九州の古代文化』、1976
- ⑫ 濱田耕作、梅原末治「宇土郡不知火村古墳」肥後に於ける装飾ある古墳及横穴、京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊、1917、1976覆刻
坂本経堯「鴨籠古墳」不知火町史、1972
- ⑬ 前掲書註⑪
- ⑭ 三島格「桂原古墳」不知火町史、1972
- ⑮ 富樫卯三郎「摺鉢山古墳」宇土市の文化財第3集、1977
- ⑯ 富樫卯三郎「迫ノ上古墳」前掲書註⑮
- ⑰ 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越出土の三角縁神獸鏡」熊本史学第33号、1967
- ⑱ 「城の越古墳の発見が熊本県の古墳文化に対する従来の知識を一変したものであることは何人も肯定せざるをえぬ事実と存じます。四世紀後半の中頃かどうかは別として、おそらく、熊本県の既知の古墳の中ではもっとも古い可能性のあるものでしょう。
この鏡を中国製と認めていただいた上で、その事実がどのような歴史を物語るかを、熊本県の問題として解決していただきたく存じます。」小林博士の私信による。1967.12.18付
- ⑲ 富樫卯三郎「天神山古墳」前掲書註⑮
- ⑳ 富樫卯三郎、清見末喜「梅咲山古墳発見線刻の舟」考古学ジャーナル20、1968、(咲は崎と訂正)
富樫卯三郎「梅崎山古墳」熊本の装飾古墳(松本雅明監修)、熊本日日新聞社、1976
- ㉑ 濱田・梅原・島田「肥後国宇土郡緑川村の古墳」九州における装飾ある古墳、京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919、1976覆刻
- ㉒ 的場義夫「装飾をもつ宇土市飯塚天神古墳発見のいきさつ」宇土とところどころ、1978
- ㉓ 富樫卯三郎「宇土古城古墳」前書掲註㉒熊本の装飾古墳
- ㉔ 濱田・梅原・島田「肥後国下益城郡松橋の古墳」前掲書註㉒
- 富樫卯三郎「熊本県宇賀郡古墳の装飾」古代学研究68、1973
- ㉕ 富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獸鏡」石人 No.106、1968
- ㉖ 富樫卯三郎「女夫塚古墳」前掲書註㉒宇土市の文化財第1集
- ㉗ 梅原・古賀・下林「宇土郡橋崎の古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊、1925
- ㉘ 濱田・梅原・島田「肥後国宇土郡花園村の古墳」前掲書註㉒
- ㉙ 三島格「九州における突起ある横穴式石室墳」熊本史学第13号、1957
富樫卯三郎「石棺内の突起は刀架 神ノ山古墳」西日本新聞、1967.7.9付
- ㉚ 前掲書註①
- ㉛ 三島格「肥後における古墳研究—戦後の成果と問題点—」、古代文化第17巻第3号、1966
- ㉜ 前掲書註㉚
- 松本雅明「前方後円墳の発生」古代アジアと九州、1973
松本雅明「日本古代文化の成立と海上の道」東アジアの古代文化第14号、1978

第2表

宇土半島基部前方

編年 順	名 称	発 見	所 在 地	立 地	内 部 主 体	全 長	後円部径
1	弁天山古墳	昭和38年12月	宇土郡不知火町長崎字弁天山619-1	丘陵突端上	竪穴式石室	*53 [53]	*35 [35]
2	迫ノ上古墳	昭和40年8月	宇土市神合町字水谷865-4.5.6	尾 根 上	竪穴式石室	*54(56) [58]	*28(32) [39]
3	城ノ越古墳	昭和41年4月	宇土市栗崎町字城ノ越658	丘陵突端上	箱式石棺(?)	* (49)	* (28)
4	チャン山古墳(茶白山)	昭和42年2月 (墳形推定)	宇土市松山町字南山内2106-1	丘陵突端上	竪穴式石室		30
5	向野田古墳	昭和42年6月	宇土市松山町字向野田3993	丘陵突端上	竪穴式石室 舟形石棺	89 [86]	55 [52]
6	国越古墳	昭和38年12月	宇土郡不知火町長崎字国越581	丘陵突端上	横穴式石室	*65	*42
7	檜崎古墳	大正10年10月 (昭和50年指定)	宇土市花園町字檜崎428-2	丘陵突端上	家形石棺3基 石蓋土壘 箱式石棺	(32)	(18)
8	女夫塚古墳		下益城郡松橋町古保山字女夫塚620	台地縁辺	巨石墳(横穴式石室?)	*46	*26
	擺鉢山古墳	昭和40年8月	宇土市神合町字水谷861	尾 根 上	未 調 査	*96 [100]	*64 [62]
	松橋大塚古墳		下益城郡松橋町字前田376-378	台地縁辺	未 調 査	*79	*45
	天神山古墳	昭和40年12月	宇土市野鶴町字桜畑1311-1-11	丘陵突端上	未 調 査	* (110)	* (60)
	仁王塚古墳	昭和43年12月	宇土郡不知火町字袖ノ原	丘陵突端上	未 調 査	46.8	21.8
	御手水	昭和53年1月	宇土市松山町字御手水	丘陵突端上	未 調 査	65	37

註 本表の墳丘計測数値の中、*は三島計測(古代文化第17巻第3号)
「」は松本計測(九州文化論集1)による ()は復原数値

後円墳群編年試案

前方部幅	後円部高	前方部高	遺物その他	現況
*21 [20]	*4.5(6) [6]	*2.5(3) [3]	底部穿孔壺形土師器・甕形土器・小形丸底埴	埋め戻し保存、後円部蜜柑畑の高みとなる
* (15) [15]	*4 [4]	*2 [2]	刀子・鉄鏃・土師器片(粘土床から) 鉄剣・直刀・ヤリガンナ・刀子(棺内)	埋め戻し保存、後円部蜜柑畑の高みとなる
	*4	2.5	残存後円部から小形箱式石棺出土 採土中、三角縁四神四獣鏡出土(船載鏡、仿製鏡二説がある)周溝の跡が残る	蜜柑畑となり、消滅
	5		粘土床から直刀・鳥獣鏡出土	採土で消滅
35 [39]	9 [9]	6 [6]	方格規矩鏡・内行花文鏡・鳥獣鏡・ヒスイ勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉・碧玉製車輪石・貝輪片(石棺内) 鉄剣・直刀・鉄斧・刀子(石室と石棺の間) 朝顔形埴輪	前方部は採土のため消滅
*27	*6	*5	画文帯神獸鏡・鹿角製直弧文飾付鉄矛・ガラス勾玉・ガラス小玉・ガラス粟玉・鉄鏃・帯先金具・鉄製帯金具(以上石棺内) 四獣鏡・純金環・純銀環・鉄鏃・鉄刀(東屍床内) 獸帯鏡・金環・純金環・硬玉製大勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉・銀製空玉・ガラス丸玉・鉄矛(西屍床内) 鉄斧・鉄ノミ・刀子・ヤリガンナ・矛の石突・鉄矛・鉄鋤先・鉄鎌・鉄鏃・雛形鉄斧・同鋤先・同刀子・同鎌・同鋤先・銅製椀・杏葉・辻金具・鉄製帯金具(別床内) 須恵小形高杯・脚台付壺(蓋付)(中央通路) 埴輪円筒片・象形埴輪片(手・釧・鈴釧・壺・大刀)	埋め戻し保存 羨門部および羨道は露出したまま
(15)	3	2	直刀・鉄鏃(第1号棺)・直刀(箱式石棺)	盛土がなくなり、石棺など露出したまま
*24	*5	*5.5	赤褐色土と黒色土の交互版築 土師器・須恵器片出土 東方近く残骸の女塚残存	半壊、後円部北側、くびれ部北側が削られる
*15 [25]	*11 [12]	*8 [6]	北側くびれ部に底部穿孔壺形土器列一部出土	前方部道路となり消滅、後円部蜜柑の段々畑となる
*28	*5	*3	遺物不明 南側近くの畑地から円筒埴輪10個ほど出土、但し関係不明	後円部上、またその前に石碑や墓碑が立つ 前方部広場化
* (40)	14	9	後円部東側断面下層から土師器出土 断面に盛り土のあとがみられる	前方部前端垂直にくずれ、後円部東側垂直に削られる
26.8	3.5	3.5	周溝の跡が残る	藪となり、墳形がつかみにくい
15	4.5	3		山林伐採で発見、古式古墳とみられる

Ⅲ 調査の経過

1. 前方部調査

昭和42年12月29日

向野田古墳の前方部前方にブルドーザーが入ったことを宇土高校社会部々長高木君から伝えてきた。

同43年1月3日 同社会部OBの古田君からの連絡で、同君らとともに向野田古墳向い側の丘陵不知火町小曾部の仁王塚の山へ登った。同君の発見はまちがいでなく、ここに仁王塚前方後円墳の存在が明らかとなった。その後、宇土高校社会部で墳丘実測に着手したけれど続かず、熊本商大生山下君らの手で行なわれた。

1月初め 仁王塚古墳発見後、社会部、同OB諸君らと向野田へ登り、墳丘上を踏査した。前方部東北の一角に葺石、前方部西側に埴輪片、またくびれ部西側辺に葺石のあることをみとめた。

1月28日 向野田古墳すぐ下、国道3号線沿いのドライブイン味食堂で宇土地方の遺跡などを調べ、また守るため「宇土文化の会」を結成した。故坂本経堯先生（当時肥後考古学会会長）、宇土市文化財専門委員、市社会教育課主事、考古学研究者、宇土高校社会部、同OB多くの方々の参加を得た。また採土現場の池田組池田四男氏も出席された。会結成後、一同で向野田古墳に登った。坂本先生は、墳頂がフラットであり、古式のものであることを指摘された。

2月1日 暮れ方に池田組の現場から石棺かなにか出たとの連絡があり、すぐ駆けつけた。現場の方にお礼を述べ、調べると、それは石蓋土壙であった。

前方部前端北西へ数10m離れて、ブルドーザーが削平して細長く残った西側丘陵の崖面に石材の一部と石材下方に穴がある。市当局へ緊急調査を届け出て、2月3・4日宇土高社会部で調査した。遺物はなかった。宇土市花園町檜崎古墳の石蓋土壙と似たところがある。向野田古墳の近くにあり、或は陪塚であろうか。遺物もなく、明らかでない。

2月10日 市文化財専門委員会で3月まで墳丘採土の中止を申し合わせるとともに向野田古墳の重要性和保存について県・市へ具申書を提出した。前年9月にも肥後考古学会を通じて同趣旨の要望書を提出していた。

2月12日 熊本大学松本雅明教授へ向野田古墳について宇土高社会部との共同調査のことを私信で申し入れた。

3月10日 向野田の石蓋土壙が崩され、消滅したことを宇土高社会部員から聞いた。

3月11日 現場の池田組から市当局へ前方部だけでも調査をとの要請があり、また宇土高へも池田組から電話連絡があった。高校入試、学年末の多忙と、また調査後の破壊のことを考えると、大前方後円墳でもあり、簡単に着手できなかった。

4月5日 市文化財専門委員会では向野田古墳へ登った。採土のブルドーザーは相変わらず動いていた。
4月29日 現場関係者からの電話で、社会部の井上君が行った由を聞き、暮れ方すぐ出かけた。ブルドーザーが前方部へ少し入り、前方部西側を細長く残して、上面を後円部近くまで削平していた。翌日、市当局へ出かけ、県当局へ連絡を願い、またやむなく緊急調査のことを申し入れた。5月3・4・5日の子定。

昭和43年5月の前方部調査

5月3日(金) 雨で中止。
5月4日(土) 晴 高木・井上両君にブルドーザーで壊されたあとの地形測図、前方部残存個所の草木を払うことを注意する。九州学院の山下君らがきた。明日、第二高校がくる由。古田・清見・枝森諸氏へ電話。
5月5日(日) 曇のち雨 九州学院・第二高校・宇土高校、枝森・西原両氏、本郷主事参加。
前方部西側残存個所を発掘。昼食後、雨がふり、池田組事務所で休む。3時過ぎ、次の土・日を期して散じた山の石・木の根など片付けて帰る。
5月11日(土) 曇のち小雨
5月12日(日) 小雨のち晴 九学・第二高・宇土高、井上委員参加。
先日に続き、発掘。実測をはじめる。トレンチを入れ、Eでは地山を出した。葎石や埴輪片出る。須恵器杯の蓋のような破片も出る。80cmの表土下に土師器片。向野田の山下に住む緒方増男氏がこられ、昨日ゴルフしながら池田組の社長と話した由、後円部を残すという。そこに九州電力の鉄塔が立っている。
6月1日(土) 曇 先日発掘した前方部の後片付けをした。現場の池田四男氏から前方部残存個所はノリをつけて残されるということを伺った。熊日(熊本日日新聞社…以下同じ)の中村記者が取材された。
現場の人から、今そういつているけれど、先でどうなるか分からない、後円部を調査したらとの注意があった。

2. 後円部調査

昭和44年5月30日(金) 晴 古田君からの連絡で、暮れ方2人で向野田へ登る。ブルドーザーは前方部を削り、前方部下方に1台、また後円部東側から墳頂を越え、前方部上に1台がとまり、ショックを受けた。調査を迫られている。

6月4日(水) 晴 中間調査終りの日、社会部の高木君から、ついで沖村君からも向野田について連絡があった。夕方、高木君と登る。

6月5日(木) 小雨 市の萩原主事と向野田へ。池田組からも連絡があった由。

6月6日(金) 小雨のち晴 市の上田課長、現場の池田氏らと向野田へ。現状から緊急調査の要があり、県当局へ連絡をお願いした。社会部・同OBは、連日見守っており、直ちに調査にかかることを打ち合わせた。沖村君らが体育部から借りたテントを向野田の墳頂へ張りに行く。池田組では鉄塔の基礎レベルまで削平するということを知った。

昭和44年6月の後円部調査

6月7日(土) 晴 宇土高校社会部・同OB、枝森・西原・清見諸氏、井上委員参加。

後円部墳頂の平坦部に南北、東西へ十字形のブリッジを設け、夕方まで発掘した。西北の一角で一部粘土の被覆が出土した。

6月8日(日) 晴 宇土高校、九州学院で十字形の西北角から発掘を進め、粘土被覆の脇に平たい割石が出土した。追ノ上古墳の割石積みと似ている、被覆粘土の厚さ30cm~35cm。押しつぶされたようなカーブをなしている。平坦部を測図し、鉄塔東端の鉄柱底部に-1mのしるしをつける。夕方7時頃終る。

6月9日(月) 晴 宇土高校・同OB、山下・西原両氏参加。発掘継続。南北ブリッジの断面図をとる。

6月10日(火) 晴 OBで継続。萩原主事参加。放課後、社会部が行く。林原教育長、龍野主事と登り、視察された。墳頂平坦部東側に小さな列石状の自然石が出土し、また墓壙東北隅に長さ40cm前後の平たい石が2個、階段状に見つかった。

6月11日(水) 小雨

6月12日(木) 小雨のち曇 OBが測図継続。夜、明日南北ブリッジを外すとの電話連絡があった。

6月13日(金) 晴 鉄塔から墓壙の写真を撮り、南北ブリッジを外した。測図継続。午後7時半頃下る。東海高校から15日生徒4名くる由連絡があった。萩原主事参加。

6月14日(土) 晴 鏡製材所で材木を求め、測量用具を整え、向野田へ。林原教育長、八代の九州電力支所長と登られた。萩原主事から県当局は午後4時まで会議がある由。九州学院山下君ら10名応援にくる。頂上の採土を整理した。葺石らしいものがあり、土師片がまじっていた。日没、7時半頃下る。南北東西のブリッジがとれて、粘土被覆の堅穴式石室上面の全景が墓壙内にある。

6月15日(日) 晴 宇土高校・同OB・九州学院・松橋高校・東海高校・枝森・西原・井上・萩原主事参加。

墓壙内を掃除し、鉄塔から写真をとる。測図用の杭を打つ。用意の薄板を古田君提供の板材に替える。水糸を張る。粘土被覆を実測。作業前、枝森氏が祝詞をあげ、一同黙禱した。皆で粘土をはぐ。緒方正一氏の世話してくれた丸太と鉄棒を利用し、天井石7枚をあげた。石室内部に舟形の石棺があり、赤色顔料も鮮やか、石室内壁と巨大な縄掛け突起の石棺の間、ことに北側に直刀・鉄斧・刀子などが目立った。天幕を覆いにして、午後7時頃下る。

6月16日(月) 晴 市当局へ行き、県へ石室内石棺のことを連絡の上、県から来ていただくようお願いした。田辺哲夫県文化財専門委員がこられる由。

県の上野主事・市の上田課長が井上委員と向野田へ。地主の藤谷義雄氏もこられていた。話し合いの結果、とにかく後円部の竪穴式石室と石棺は保存に決まった。この日、はじめて藤谷氏と会うことができた。それまで池田組が前面にあつて交渉された。放課後、また登る。OBが測図する。

6月17日(火) 小雨 枝森氏の手紙を女生徒が持参、昨日阿曾田県議が宇城県事務所長と向野田へ登った由。

6月18日(水) 曇 宇土高校・同OBで測図継続。萩原主事から石室・石棺をめくり、残す面積の図面で問い合わせがある。九州電力では、鉄塔の付近7m平方は必要という。現場の状況からみて、鉄塔を含む後円部墳頂の保存区域を考える。

原口・小田両先生・上野主事がこられる。西原・清田両氏も登られた由。

6月19日(木) 小雨 登校前、清田氏から調査について助言の電話があつた。

- (1) 続ける。
- (2) 蓋をして、後日やる。
- (3) 蓋をしたまま保存。

午後、市文化財専門委員会が教育長室で開かれた。同委員会として調査続行に決まる。

熊本の佐藤助手と会い、松本教授宅へ。緒方勉氏も来ていた。教授はやってはといわれる。

6月20日(金) 晴 向野田へ。萩原主事・佐藤助手・古田君らがあつた。西原・清田両氏もこられる。社会部で実測にかかろうとしたが、遅いので帰した。

6月21日(土) 曇 午前中、大和市長が向野田へ登られた由、上田課長から電話があつた。午後、登ると、乙益教授・上野主事がこられた。坂本先生は、先に登られていたよう。伊藤・西両先生もおられる。古田君もきていた。乙益教授から、測図について迫ノ上、大王山を参考にしたらと助言があつた。三島先生もこられた。

6月22日(日) 雨のち晴 午前中、出かけようとしたら雨。石村君ら登った由、療護園の白石園長ら見えて降りられたらしい。午後、熊本の肥後考古学会へ。スライドにより、向野田古墳の中間報告をする。簡単に調査過程を示した。

6月23日(月) 晴 午前中、上田課長・本郷主事・井上委員と市長室で市長と会う。話し合いの末、市から調査費25万円を組まれることになり、市長から続けてやるように励まされた。

社会部で実測継続。

6月24日(火) 晴 OBら実測継続。市議長、文教委員が登るので待ったが、都合で明日になる。枝森氏と登ると、清見氏、萩原主事が来ていた。ブルドーザーが後円部東脇を通り、前方部上にある。市の中山総務課長らが見えた由。

6月25日(水) 雨

6月26日(木) 曇のち晴 昨日かなり雨が降ったのに、ビニールの覆いに水は乾いて無い。石室内は異状がみられない。

6月27日(金) 晴 市当局へ県から調査につき予算・メンバーなどが不十分なので、現在の測図でとめるようにとの公文が昨日きていた。

6月28日(土) 晴のち小雨 市議長・副議長・収入役・文教委員・林原教育長・上田課長ら一行と登る。向野田古墳について視察された。石棺の測図へかかったが、小雨で中止した。今日もブルドーザーが前方部上で動く。

6月29日(日) 雨

6月30日(月) 曇 向野田古墳調査について、市長と松本教授・佐藤助手・県の田辺哲夫委員・上野主事・市の上田課長・本郷主事・市文化財専門委員らの話し合いがあった。教授から万日山の例を引かれ、現状からみて、発掘調査の上保存するという見解を述べられた。結局、保存個所の杭打ち、測図後鉄器を取り上げ、天井石をもとへかけること、地主との交渉、調査方法をたてることなどで話し合いを終った。

7月3日(木) 晴のち小雨 佐藤助手・桑原先生・高木氏が見える。上田課長もこられた。測図後、鉄器を一部取り上げた。

7月4日(金) 雨 井上委員雨のなかを登って雨の水吐けの具合を見て、排水口がないか見回られた由。雨水は石室まで行かぬうちに割石敷へ吸い込まれたという。

7月7日(月) 雨のち晴 枝森氏のお世話でチェーン・ブロックを用い、天井石を元通りにした。井上委員、古田君ら現場へ。

7月9日(水) 曇 鉄器を東京の国立文化財研究所へ送って修理してはと県の助言があった由、本郷主事から聞く。熊本日日新聞社後援のことなどもあり、松本教授宅を中山君と訪れた。

7月10日(木) 晴 向野田古墳の調査費を組む。40万円を超える概算を作った。資料報告、保存施設などまで考えれば、切りがない。

7月11日(金) 晴 市当局へ調査費概算書を持って行く。

7月12日(土) 雨のち晴 向野田の実測継続、雨でできない。

7月13日(日) 晴のち雨 枝森・西原両氏が向野田へ、三角の山村氏(八雲園)がチェーン・ブロックをとり市役所へこられた。

7月14日(月) 曇 松本教授へ電話。スタッフを揃え、資金面を用意し、その上で県当局へ交渉することにした。井上委員と林原教育長、上田課長と会い、松本教授との話を伝えた。調査期間を10日間とする。三島先生から「福岡市老司古墳」が送られてきた。

7月17日(木) 晴 井上委員と熊本の地主藤谷氏の憩別荘を訪ねたが、不在。松本教授宅へ回った。向野田で借金しましょうやといわれたのには感銘した。教授から、調査費60万円、保存施設40万円、報告20万円。市から25万円、熊日20万円、あと醸金という案を伺う。

7月18日(金) 晴 市当局へ、松本案を連絡した。古田君へ測量用の板木を返し、お礼した。

7月19日(土) 晴 本郷主事から議会運営委員会へ向野田古墳のことをかけると連絡があった。

7月21日(月) 晴 井上委員と画図町の藤谷義雄氏を訪ね、向野田古墳発掘の地主承諾書印をいただく。

7月22日(火) 晴 市当局へ行く。林原教育長が向野田の予算のことで、市25万、熊日20万、あと醸金15万と電話されていた。議会への由。本郷主事へ藤谷氏の承諾書渡した。

7月25日(金) 県当局へ発掘届を提出した。井上委員同行。

その後、8月4日藤谷氏から遺物保管承諾書印、同21日原口長之先生調査員承諾印、同22日再度訪問で乙

益教授調査員承諾印をいただき、同23日県当局へ提出した。同25日、林原教育長・本郷主事・井上委員と県当局へ、上野主事と会った。

8月24日(日)晴 昨日、後円部近くにブルドーザーがかかり、社会部で杭を打ち、縄を張った由。前方部残りの岩盤へダイナマイト30本くらい打つという。

8月25日(月)雨 午後、松本教授・井上委員と熊日に平野政治部長を訪ね、向野田古墳発掘調査への協力について島田専務、築紫地方部長と会い、御礼を述べた。

8月27日(水)晴のち曇 夕方沖村・右田両君が来宅。向野田の後円部北端で大ひびが入り、崩れ落ちそうになっているとのことで、現場へ行く。社会部・同OBも来ていた。

8月28日(木)晴 熊日への原稿・墳形破壊の図・現場写真を持って、松本教授を訪ねた。帰り、熊日へ寄り、原稿などを渡した。

8月30日(土)曇 夜、松本教授からの電話で、県の田辺哲夫氏が熊日へ、また平野政治部長が県へ、それぞれ御足労いただいたことを伺った。

9月1日(月)晴 午後、林原教育長、上田課長、本郷主事と会い、発掘調査のことについて話し合う。調査員の宿舎は市内岬旅館を予定。

9月10日(水) 熊本日日新聞に、宇土市教育委員会と熊日共催で向野田古墳の熊日学術調査団により13日から調査を行なうことが発表される。併せて「向野田古墳調査の意義」(富樫)と「宇土地方の古墳群」(松本教授)が掲載された。

昭和44年9月の後円部調査

9月13日(土)晴 午後1時半、向野田古墳熊日学術調査団結団式が現場墳頂で行なわれた。

出席者 伊豆熊本日新聞社長(調査団長)代理平野政治部長、大和宇土市長(副団長)代理林原教育長、松本隊長(熊本大学教授)、富樫副隊長(宇土高校教諭)、調査員坂本肥後考古学会長、田添夏喜玉名市文化財保護委員長、北條熊本大学医学部助手、佐藤伸二熊本大学法文学部助手、井上正宇土市文化財専門委員、枝森久一三角町文化財協力委員、別府大学生山崎純男、明治大学生石橋新次、宇土高校社会部、同OB、熊本商大生数島安人、同平山修一、九州学院高校考古学部約7名。

西岡神社中林神官による神事のあと、平野部長・林原教育長の挨拶、ついで松本教授から調査の意義を説明された。結団式の終了後、早速墓壇内石室上面を覆った天幕、材木などを片付け、5時過ぎ天井石を墓壇西側壁へ運び、立てかけた。竪穴式石室上面周りの粘土をとる。墳頂平坦部東南隅の雑木を切りはじめ、東斜面にも手をつける。佐藤助手・山崎・石橋両氏・OBで石室および石棺の実測に着手。

9月14日(日)曇 宇土高校社会部、同OB、九州学院、第二高校参加。

石室および石棺の実測続行。平山君、九学5名と測量へ。山崎君・宇土高・第二高4名と東斜面トレンチ発掘、東斜面3段目に葺石の一部が出土した。石室西側壁の一部をとり外しにかかる。石室側壁が迫持式に狭くなり開棺できないので、葺石のとり外しもやむをえない。枝森・山村(八雲園主)両氏らの手により、チェーン・ブロックを設置した。

江上敏勝八代史談会員・同中田好則両氏・鶴田倉造松橋養護学校主事・阿部堅二天草農高大矢野分校教諭・西原昭明宇土文化の会員・同坂口和子氏らが調査、視察へこられた。午後、阿曾田勝県議（文教治安常任委員長）が視察された。夕方、緒方勉肥後考古学会員、ついで三島格福岡市教委文化財主事がこられた。

9月15日（月）晴 開棺の日。昼前、全員墓墳の周辺に集合、枝森氏が祝詞をあげ、一同黙禱。枝森・山村・西原3氏、佐藤助手らでチェーン・ブロックを使い、割れた棺蓋南側部分、ついでその北側部分をあげ、墓墳東側に置く。棺身北側の枕石に頭骸をのせた仰臥伸展葬の人骨はほぼ完形とみられる。頭部の枕上に2面の鏡、枕石すぐ下、棺身西側に立てかけた形の鏡1面、同じく棺身西側で腰部近く車輪石1個、頭部から両腕付近に玉類、足の先方にいくつかの貝輪片がある。棺内は赤色顔料がみられ、ことに頭部辺は鮮やか。棺底に1条の浅い溝がある。開棺直後、作業を見守っていた人びとは等しく一種異様な感に打たれたことであろう。松本教授から簡明な説明がなされた。

大和市長・林原教育長・平野政治部長・乙益教授・原口県教委指導主事・小森緑川小校長・板橋熊本大学国史科助手・古財植木町文化財保護委員・清田東海大戸馳分室主事らが視察された。現場の保護を慎重にした。

9月16日（火）曇のち晴 佐藤助手らが石棺内の実測。東斜面のトレンチの発掘、実測など続行。熊日中村記者が出土品につき、松本教授から取材された。午後、熊大医学部北條助手らがこられた。棺内の調査実測から人骨の取り上げまでは行かなかった。

9月17日（水）曇のち晴 石棺内実測その他続行。熊日平野政治部長から20日午後7時半頃から宿舎岬旅館で発掘調査の座談会開催の電話があり、市当局へ連絡のことを頼まれた。県の上野主事が視察された。

9月18日（木）晴 棺内実測その他続行。午後、北條助手らが人骨を調査された。夕方、人骨は熊大医学部第二解剖学教室へ運ばれた。熊日島田専務ら一行・地主藤谷義雄氏・松川武男宇土市教育委員長・岡崎正人同市議・沢山収蔵同文化財専門委員・清田盛也東海大有明分室主事・串山真勝マリスト高教諭・伊藤奎二済々黌高教諭・杉本正蔵岩古曾地区郷友会長らが見学、協力された。

9月19日（金）晴 棺内玉類などの実測を終え、石室の実測へ。トレンチ作業を続行。中村宇土市助役、栗田収入役ら見学にこられた。

9月20日（土） 石室側面、断面など、棺蓋の実測が進む。墳頂平坦部東側の葺石を探し、また後円部南斜面へトレンチを入れた。

城南町社会教育課徳本明・県文書課花岡興輝氏らが視察にこられた。

9月21日（日）晴 後円部南斜面のトレンチで口縁の欠けた壺形土器1個が出土した。雑木林の南斜面ではトレンチ発掘は壺形土器出土の辺までとした。石棺南端でその基底部を掘り下げた。石棺基底部下の調査は宇土地方ではじめてである。酒井福岡県教育庁文化課技師・平野市文化財専門委員らが視察された。この日から宇土高文化祭で、向野田古墳出土の副葬品が展示された。開棺後、連日宇土市民をはじめ各地から多くの人びとが現場へこられた。取り上げた主な副葬品は現場へ運び、団員が説明に当り、見学に供した。

9月22日（月）曇 石室断面の実測、後円部南斜面トレンチの実測、また後円部斜面の地形実測など続ける。

9月23日（火）曇 棺身は磨いてあるけれど、棺蓋は削ったあとが残っている。棺蓋の一部を拓本にとつ

た。後円部東斜面の中腹、南斜面で実測を続行。午後3時頃、チェーン・ブロックを使い、枝森・山村・西原・尾崎諸氏が棺蓋を棺身の上にのせ、棺を閉じた。トレンチの一部埋め戻しに全員でかかる。

9月24日(水)晴 夕方RKKテレビで松本教授、平野政治部長と筆者の三者対談で、向野田古墳発掘調査について録画をとった。

9月25日(木)晴 熊日紙上に先日の座談会の話し合いをまとめた記事が「若き女王の墓を掘る」というタイトルで掲載された。併せて松本教授が「前期古墳の問題点」という論文を執筆された。

9月26日(金)曇 後円部東斜面トレンチの葺石を実測。東斜面の墳頂近い面にも葺石や埴輪片が出土した。松本教授へ石室復元のことなどを連絡。

高校は2学期中で、またOBは大学生で、それぞれ学業の間を縫って、10月初旬まで残りの調査を続けた。

10月7日(月)晴 市当局からトラック2台分粘土を墳頂へ運んだ。人夫8名で、ベルト・コンベアを使うことにした。天井石の上に粘土被覆を復元した後、墓壙の埋め戻しにかかった。

8日は小雨、9日墓壙内は七分通り埋まった。10日墳頂東側すぐ下方で土師器の小皿1個が採取された。16日も墓壙やトレンチの埋め戻しにかかった。17日墳頂で、心ばかりの木碑へ竹筒の花立てに菊を生け、割石の中で枕用の石材かとみられた石の上に湯呑を供えた。

Ⅳ 墳 丘

1. 墳 丘

宇土市の中心部をめぐるV字状平野の狭隘地帯、その間を通る国道3号線沿いの東側、雁回山南麓に続く丘陵南端に向野田古墳がある。丘陵尾根の方向から墳丘の主軸はほぼ南北を示している。墳丘は尾根いっばいに跨り、前方部を北にして、後円部は丘陵南端を占めている。

丘陵の自然地形を利用し、墳丘を築造している。周濠は認められない。また長い間に墳丘の変容があり、段築の姿は明確でないが、墳形実測図から推測して、段築はなされたのではないかとみられる。

現状では、前方部およびその北方尾根付近は約100㎡にわたり、また前方部は長さ30m余削平され、後円部とその北方先に残る丘陵尾根との間は広く平地化された。昭和45年8月撮影、同46年2月測図のパンフイック航業KK調製宇土市図15は、削平化の跡がよくみられる。

墳丘の上部および斜面は雑木林で覆われていたが、発見当時すでに西斜面はトラック道路がつき、採土で急な崖面となり、東・南両斜面は雑木林であった。

前方部存在の頃、葺石の一部が前方部前端上、前方部東北隅および前方部西側にあることが認められたが、葺石は後円部上および後円部斜面をめぐる発掘の個所にも埴輪とみられる土器片とともに認められた。葺石が墳丘全体を覆っていたかどうか、また帯状にとり巻いていたものか、局所的な発掘で明らかでない。

前方部前端上に長辺をその前端線に並行し、短辺の歪んだ、約14m×6.5mの長方形の小高い平場があり、その上に葺石の一部が残り、東南隅に葺石とともに土師器片が出土した。

昭和43年春、前方部前半が削られた際、箱式石棺1基が採土のブルドーザーにかかり出土した。出土面は黄色い土というから黄褐色の風化した砂岩であろう。棺材は採土とともに運び去られた。以上はブルドーザー運転の杉浦知治氏からの聞書であることを記しておく。上述の小高い平場付近に埋納されていたらしく、墳丘下約1mの辺にあったという。前方部にも埋葬施設が置かれていたことになる。

後円部墳頂の平坦部東南一角の雑木を切り払った時、その付近から葺石が見付かった。墳頂平坦部の葺石は墓壇の東辺にわずかしか残存していなかったけれど、墳頂平坦部には広く敷かれていたのではないかと思われる。墓壇東辺の残存葺石の間に埴輪円筒1個の底部片が出土したが、墳頂平坦部に埴輪が並んでいたかもしれない。ただ他の個所出土の埴輪円筒よりやや薄手で、淡赤褐色を呈して、異なるところがある。



第 2 図 周 辺 地 形 図

後円部の墳頂から東・南・西の3斜面にトレンチを入れ、葺石・埴輪などの所在を探した。特に東トレンチはかなり下方まで伸ばした。葺石残存のやや良好な個所は、西斜面の登り路墳頂近く左手の一個所くらいであって、他は散乱した形であった。南斜面トレンチでは墳頂から15mほど下がったところに葺石、埴輪片の散った間に口縁の欠けた壺形土器1個が直立した形で見出された。このトレンチから寛永通宝1個が採取された。

墳形実測図は、昭和42年発見当時に作成した西斜面登り路からの墳丘全体のものと、昭和44年9月後円部調査当時改めて後円部斜面をできる限り測図したものがある。

次に東・南・西3斜面の出土した葺石所在辺のコンターを記す。()内はトレンチの番号。

第3表 検出葺石一覧表

	東 斜 面	南 斜 面	西 斜 面
(a)	-5m ~ -6m(IV)	-6m ~ -7m(II)	-5m ~ -6m(I)
(b)	-7m ~ -8m(V)		
(c)	-14m ~ -15m(VI)		-14m ~ -15m

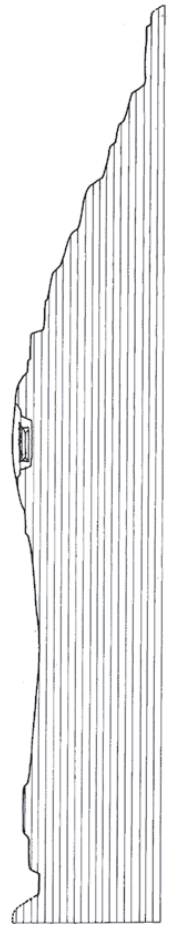
なお、後円部北側の前方部方面はほぼ垂直に削られ、その東斜面の崖面は現在6段ほど段をなして、コンターの-8m~-9m、-11m~-12m付近の崖面に葺石が露出している。

(a)の場合、3斜面ではほぼコンターの-6m辺に発掘から葺石の散布が確かめられた。後円部の墳頂近く墳丘をめぐる葺石の存在が推定される。西斜面登り路左手の、そのすぐ北側が採土で崖面となった個所は傾斜は20°ほど、幅1.5m、長さ2.3mの発掘面であったが、葺石の出土状態の比較的良好な所で、埴輪片も混在していた。

(b)の場合、東斜面のトレンチの幅3m余、長さ約6mの個所は散乱した状態で、葺石や埴輪片も混在していた。攪乱を受けたか、原位置から落下したものであろう。コンターの-7m~-8mの地点で、削られた北側東斜面の崖面-8m~-9mの露出した葺石や同じく-8m~-9mで実測図前方部前端から後円部寄り約17mの所にある葺石などとのつながりが考えられる。おそらく-8mの上方に葺石があったのではないかと推測される。ただ北側東斜面の崖面では-11m~-12m辺にも葺石が露出し、そのコンターでは他の斜面での葺石出土がみられない。その個所の葺石も、或は攪乱、落下したのではないかという疑いがある。それにしても墳丘上から下方に当たることが注意される。

(c)の場合、東西両斜面で-14m~-15m辺に、東斜面のVIトレンチで葺石が検出され、同じコンター辺で西斜面の登り路左手の崖面近く葺石が採土で露出した。(b)の場合よりさらに墳丘下方となる。東西両斜面の裾近くにも、葺石が一部見出され、西斜面で登り路にある。葺石の斜面落下が考えられるが、なお追究の要があろう。

葺石は長さ10cm余の不整形な自然石で、後円部の墳頂や斜面に丸味をもつ角閃石安山岩およ



第3圖 填丘測量圖

び砂岩の小片などが目立つ。角閃石安山岩は網津川の山地に分布している^①。

墳丘は丘陵尾根の自然地形を利用し、築成している。前方部が失われたけれど、その際風化した黄褐色砂岩や赤紫色泥岩が地形の基盤をなしていた。こうした岩石は、向野田周辺古墳立地からも観察される地質時代中生代末の上部白亜紀の堆積岩で、約7千万年続いたとみられている^②。宇土半島が火成岩を主とするのに対し、国道3号線以東は堆積岩がひろがり、地質的な対照を示している。なおこの砂岩・泥岩の層に葺石となるような安山岩は含まれていない。また葺石は削られた地山に接して敷かれていたとみられる。

向野田古墳後円部の発掘で、丘陵を削り、墳形を整えた場合、盛り土を運んで築成している。現状では後円部墳頂平坦部がブルドーザーに削られ、盛り土層残存の厚さは約20cm、墳頂斜面で30数cmであるが、長い間に土砂の流出が行なわれたことはまちがいない。

向野田古墳は丘陵尾根南端に後円部を置き、前方部は丘陵尾根を切断した形で、不要の土砂は墳丘の盛り土に使われたのであろう。後円部下方東西両側に用水池があり、或は築造当時盛り土のため採土したことがあったかもしれない。

2. 墳 丘 実 測

向野田古墳は、国道3号線の宇土市・不知火町境界標から、東方直線距離約215mの地点にあたる。現在、前方部は失われたが、後円部を南に、前方部を北にして、前方部に続く丘陵は北へ伸び、チャン山（茶臼山）古墳のあった所まで伸びていた。

国道3号線西側は水田地帯がひらけるが、向野田古墳から国道3号線の間も一部水田がある。向野田古墳の後円部裾西南と東側には用水池がある。また向野田の後円部裾を道路がめぐり、後円部裾道路すぐ南側は宇土市と不知火町の境界線が通っている。

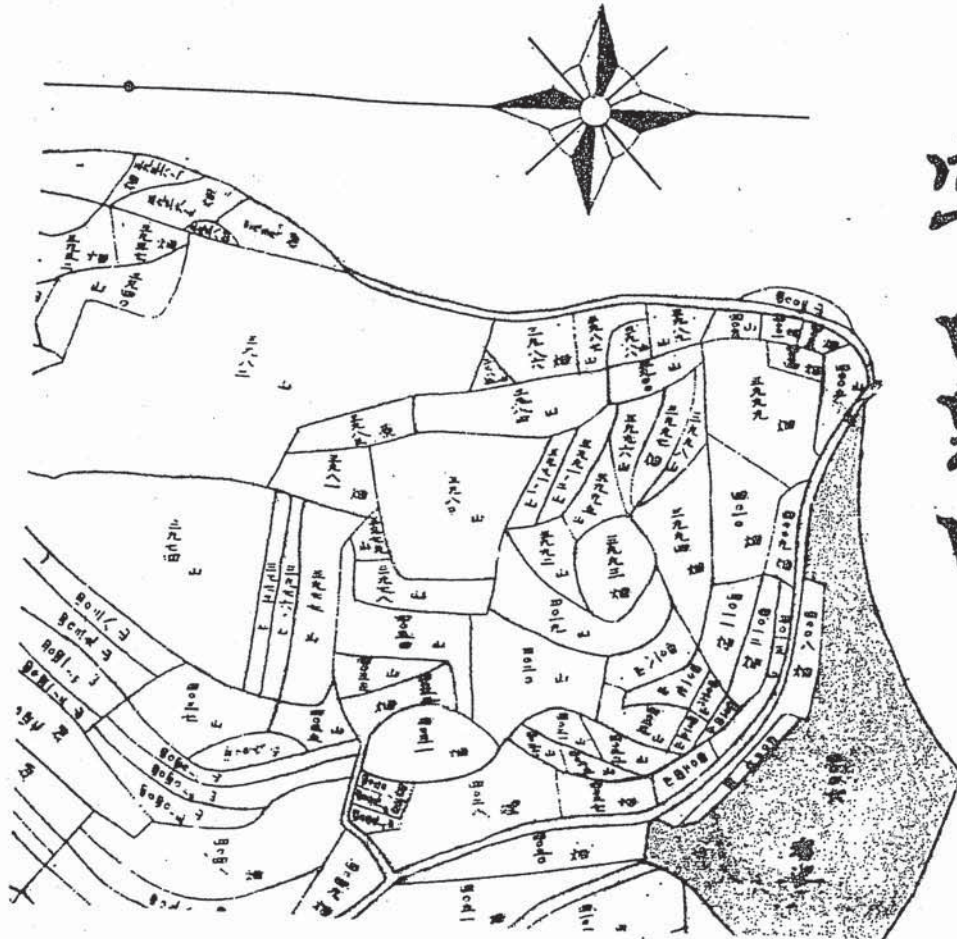
向野田古墳の発見された昭和42年6月半ばから断続的ながら土・日曜日を利用し、夏休みへかけ、採土現場の諒解を得て、宇土高社会部では墳丘の実測を行なった。

当時、墳丘の前方部西側から後円部西側の登り路近くすでにブルドーザーによる採土が進んでいた。実測は墳丘前方部の前方から後円部へかけ、さらに後円部裾西側道路辺を主とした。前方部および後円部の東斜面と後円部の南斜面は雑木林で、実測は困難であった。

墳丘前方部裾西側はトラックの道路となり、道路西側の路肩近くからかなり急な崖崩れをなし、その下方ではブルドーザーが動いていた。その崖崩れ下方の一隅に拳大の自然石がかたまっていたが、葺石の落下したものではないかとみられた。

葺石は前方部先端北西の一角4mの崖面で、前方後円墳確認当時に土器片とともに見出された。実測中、前方部先端近い墳丘上3mの辺に長辺の前方部前端に並行したやや歪んだ長方形の高みがあり、その東南隅で葺石とともに土師器片があるのに気付いた。調べたが、器形

字向野田



第 4 図 字 図 (部 分)

は壺形土器のようであった。その出土地点は地形実測図に入れてある。実測図をみると、前方部東斜面で、前方部先端から南へ約17m辺、-8mの所にも葺石らしきものと記されている。葺石は後円部西斜面で-14mと-15mの間、登り路西側崖面近くにも実測された。また登り路のかなり下方で、登りだしてすぐの所にも葺石らしいものがある。余りに下方なので、或は落下したものではないかと思われる。

後円部の墳頂は円形のようにだけれど、東西にやや長い歪んだ楕円形を呈し、長軸約12.2m・短軸約16mの平坦部をなしている。おそらくもとは円形をなしていたものであろう。後円部西南-2mと-4mの間に九州電力の鉄塔が立っている。

墳丘実測を通して、前方部前端は多少歪みながらも-4m前後で東西に細道がつき、前方部

切断の形をなしていたことが分る。また後円部は丘陵尾根突端を占めている。丘陵尾根を利用し、墳丘を形成したことは明らかである。後円部墳頂の高さは、国道3号線から宇土市一里木へ通ずる県道に入ってすぐ道路右側にある水準点5.6mの所から計測したところ、標高37.35mある。

墳丘は前方後円墳であるけれど、実測図で知られる通り、かなり変形を受けており、前方部前端東北の一角にいわゆる段築の痕跡をわずかにとどめている。

第4表 向野田古墳墳丘計測数^③値

墳丘長	後円部径	前方部幅	後円部高	前方部高	備考
89	55	35~38	9	6	熊日調査
86	52	39	9	6	松本計測

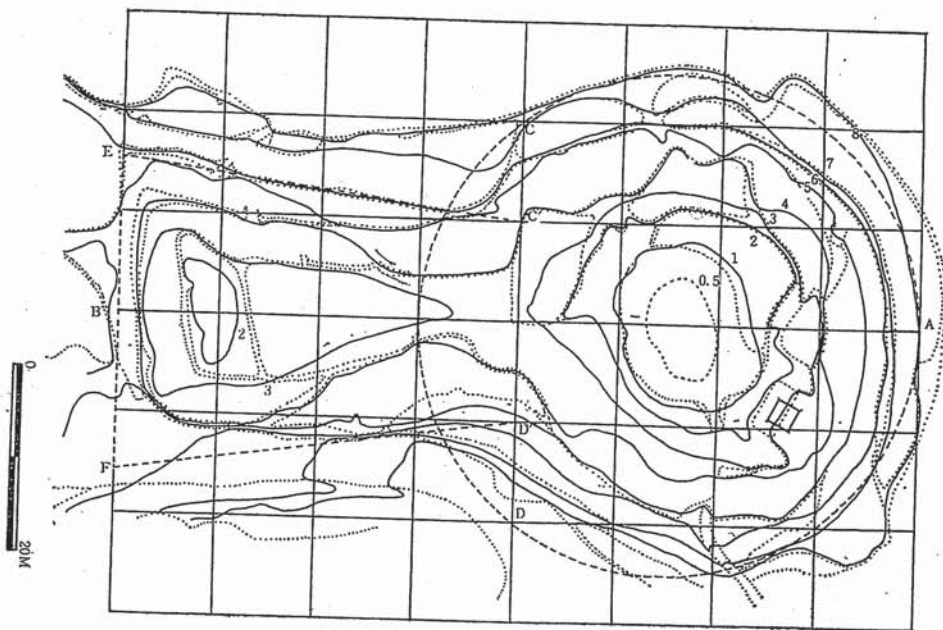
梶国男氏の方法により、墳丘長を8とした分割比からはどうか、あらためてみた^④。

墳丘長を89mとして、墳頂平坦部の中心点を推定し、後円部径55mの半径27.5mで円を描くと、実測図後円部の東端および南端の2点を通る。後円部西端の辺はかなり変形して、明らかでない。墳丘の中軸線墳丘長を8分割すると、1区画の長さ11.1mほどになる。もし1区画11mとし後円部径55mを割ると、5区画近くなり、前方部に8分割した3区画が残る。

前方後円墳の三設計型のうち、日葉酢媛陵型設計と似ている。

前方部幅35m~38m、また39mについて、実測図前方部-7mのコンター辺をとれば、39mほどとなる。しかし前方部-7mのコンター辺となれば、前方部の墳丘が墳丘のある丘陵尾根にまたがるような形となり、おかしいようである。前方部-5mのコンターにふれ、前方部東側で-6mのコンター辺は、ほぼ地形の線に沿う。また-6m辺では後円部の東・南・西の三斜面に埴輪片の散在がみられた。-6mコンターに添う地形の線が-5mのコンター辺とふれ、そこから推定し、前方部幅33.5mを計った。前方部幅33.5mの場合-6mコンター辺の平面上にある前方部前端の墳丘は前方部切断の形としてうなずかれる。その場合、前方部の墳丘は丘陵尾根にまたがったりしないであろう。前方部切断の形はそうみるのが自然なように思われる。そうすれば、後円部の墳丘は-8mのコンター辺にかかるので、中軸線の通る墳丘は北から南へ傾斜することが注意される。後円部の高さ8m、前方部の高さ4mある。

墳丘長を86m、前方部幅を33.5mとし8分比の計測によると、後円部径53.75mとなり、またAB:CD(C'D'):EF=8:4(2):3.1弱を示し、日葉酢媛陵型設計と似ている。なお前方部幅33.5mの場合前方部は3段、後円部は4段の築成ではなかったかと思われる^⑤。梶氏の方法を十分理解したわけではなく、興味をもち、ひとつの試みとしておく。ただ畿内の大前方後円墳の設計型から肥後方面の前方後円墳をみることができるかどうか、問題がある。



第 5 図 墳 丘 企 画 推 定 図

向野田古墳は前方部が消滅してしまった現在、前方部については、この実測図が唯一の資料となっていました。

梶国男氏から次のご教示をいただいた。^⑥

「お問い合わせの件ですが、設計技法というような単純で効率高いものは畿内系かそうでないかにかかわらず普遍的に使われているように思われます。最近、武蔵国の成立過程を前方後円墳の設計型から研究し、50枚余の論文にしましたが、畿内と同じように三設計型がみられました。しかし畿内にもっとも多い定形の応神陵型設計古墳がみられず、定形型成立直前の小那辺古墳と同形のもの（群馬県太田市の天神山古墳など）がみられるだけです。そして日葉酢媛陵型設計の古墳が長期間にわたり、その中の新しいものには、応神陵型古墳にみられる濠をめぐらしていたり、応神陵型古墳に横穴式石室がみられたり、後進的現象が認められます。また文化を畿内より受け入れた地域ですから、受けいれきれなかったことなどによるローカル性もみられます。しかしかなり武蔵国の成立過程をつかむことができた、自分では思っておりません。富樫さんがお住まいの土地は関東とちがって、先進文化地ですので（福岡や佐賀よりは少しわきに寄っておりますが、）どのような研究結果がでてくるかたのしみです。普遍性とその

中における個別現象をどう読むかということが大切のように思います。

西都原の柄鏡型の古墳は桜井茶臼山古墳とは似て非なる設計型で新しいもののおもわれれます。それから8設計型に細分したうち、Ⅵ型とⅦ型の関係だけはまだつかみきっていないことにご留意ください。」

日葉酢媛陵型設計の古墳が長期間にわたるといふことは、その設計が広く用いられたことを窺わせ、向野田の場合、竪穴式石室に舟形石棺をもつものであることは構造の上からも編年の手がかりの一つとなる。

- 註 ① 葺石について、宇土高校渡辺富士男教諭の鑑定による。同教諭と向野田古墳の墳丘葺石および周辺の岩石を視察した。なお、熊本市立博物館による葺石の鑑定も同じであった。
- ② 「地形説明書」国土調査、経済企画庁・熊本県、1958。「熊本県地質図」熊本県、1962。「人類以前の熊本」郷土の地質、熊本日日新聞社、1964
- ③ 熊日調査は「熊本日日新聞」向野田古墳学術調査とその成果、1969. 9. 25付。松本計測は「古代アジアと九州」古墳文化と大陸 表2、1973
- ④ 梶国男「古墳の設計」築地書館、1975
- ⑤ 向野田古墳の計測中、梶氏の方法により推定復元された熊本県御船町長塚古墳の例があることを知る。（「久保遺跡」熊本県文化財調査報告第18集、1975）校正中、古墳の企画性について他の方法があることを知る。（「考古学ジャーナル」No.150、1978）
- ⑥ 梶国男氏の1978. 2. 23付私信による。

V 内部主体の構造

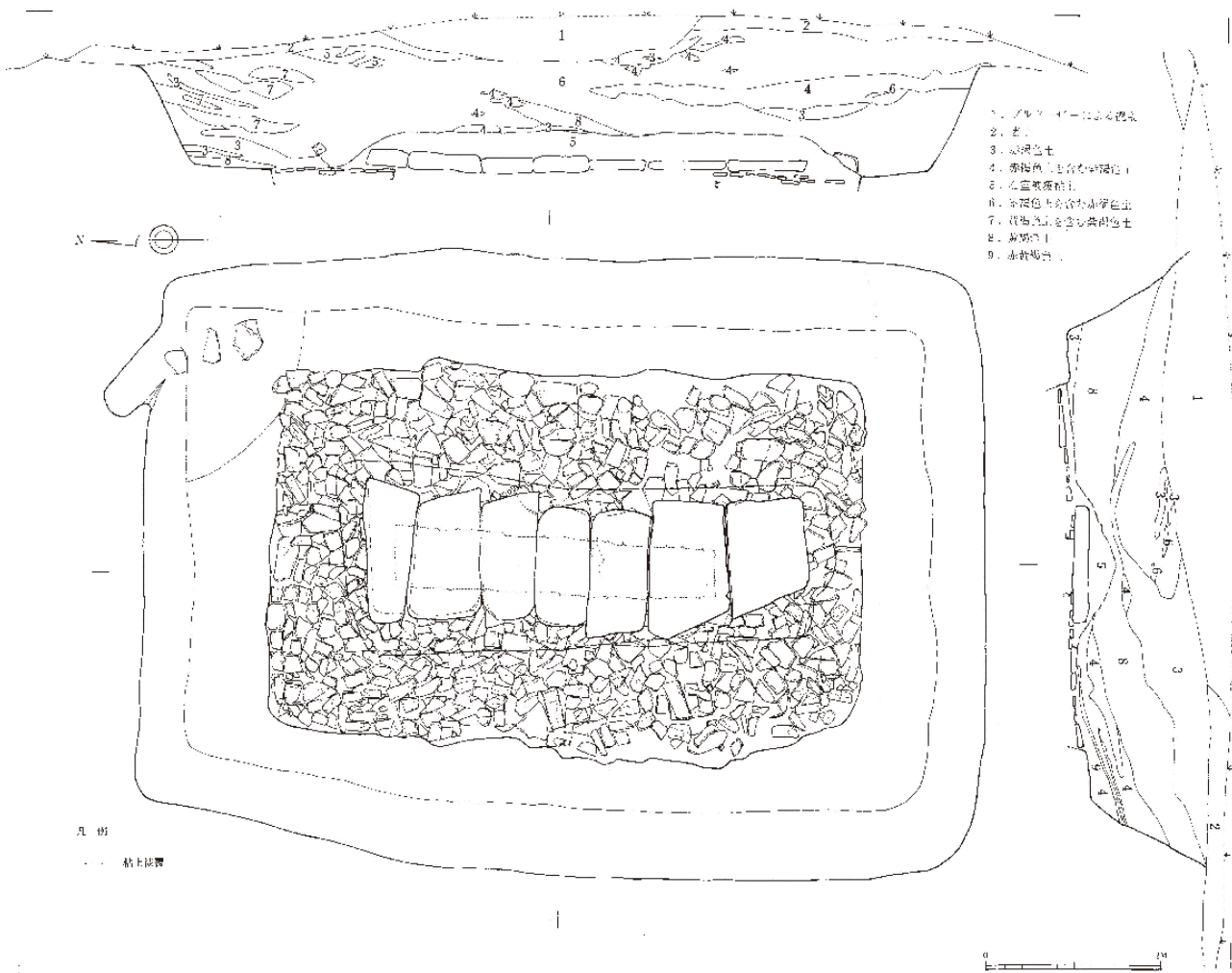
1. 墓壙・石室・石棺

後円部墳頂の平坦部は、もと円形をなしていたとみられるが、現状は変容して、東西約12.2 m、南北約16 mの楕円形を呈している。墓壙は墳丘主軸と並行している。その中央辺はやや高くなっている。はじめ、平坦部中央に十字形のブリッジを設け、発掘したとき、東・西ブリッジの断面でブルドーザーに削られた中凹みになった厚さ約10 cmの表土下に赤紫色の土層と、さらにその下に黄褐色の土層の厚い2層が目立った。この2層は風化した泥岩と砂岩の破碎したもので、黄褐色の土層は日の光で金色に輝くように見えた。その黄褐色の土層の下に蒲鉾形の粘土被覆があった。南北ブリッジの断面最下方に蒲鉾形粘土被覆の半分が細長くあり、その下の竪穴式石室の主軸方向が南北であるのが窺われた。粘土被覆の周りは板状割石がほぼ長方形に敷かれて、板状割石の周りは、東西両側で幅50 cm余、南北両側で幅80 cm余の平らに削られた地山がやや歪みながら帯状にとりまく。墓壙の深さは、現存表土から深い所で約1.7 m、浅い所で約1.3 mあり、墓壙中央部では1.7 mを越えていたろう。墓壙内斜面は逆台形を呈し、斜面の傾斜は東西、南北とも60°前後ある。

墓壙床面東北隅は墓壙の内外に上り下りするため盛り土がなされ、3個のほぼ長方形の踏石が出土した(第7図、図版5)。3個の踏石上方は階段状に掘り込んだのではないかとみられる。そして前方部上へ続いていたものと想像される。踏石は最下段が一辺36 cm・厚さ12 cm、中段が一辺39 cm・厚さ8 cm、上段が一辺32 cm・厚さ12 cmある。

墓壙床面で、粘土被覆をはいだとき、北端の天井石西側の板状割石上にうすく粘土が塗ってあり、その上に黒い炭化物があって、さらにその上にうすく粘土が覆っていて、その粘土には赤色顔料がみられた。或は天井石裏面の赤色顔料がつき、また天井石と割石の間にうすく粘土が塗られたかもしれない。推測をすれば、天井石をかぶせる前に何か火を焚いたことも考えられる。3個の踏石は、墓壙内へ上り下りに用いられ、また火を焚いた跡はわずかであるけれど、埋納の儀礼とかかわりがあったかどうか、痕跡だけでは臆測にとどまる。福岡市老司古墳では、墓道とともに竪穴式石室へ横口式に踏石のつく例があげられる^①。最近、長い墓道が熊本県城南町塚原古墳群でも確められている^②。向野田の場合は、墓壙床面への上り下りの踏石として注目される。踏石の石材は泥岩で、風化してもろくなり、角はやや崩れる。

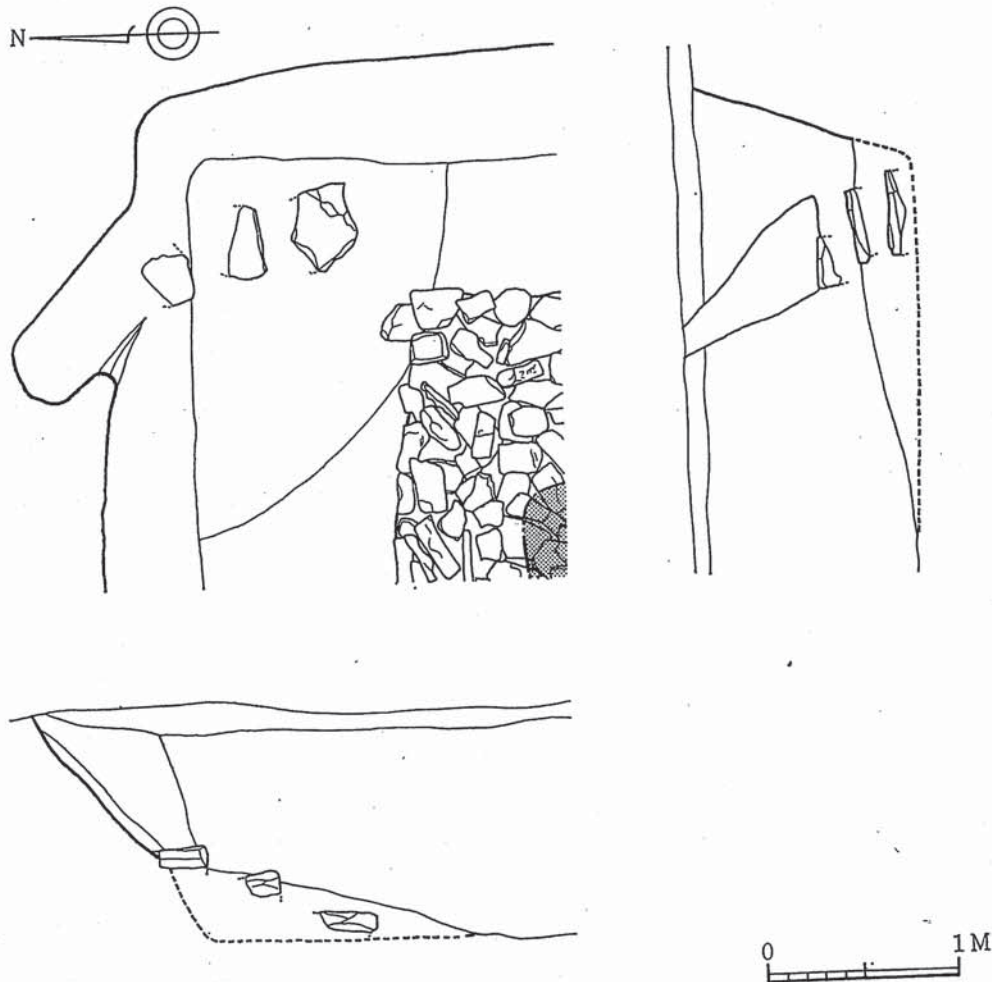
墓壙の十字形ブリッジを外して、排土の後、蒲鉾形の粘土被覆があらわれたとき、その形は両端へややひろがり、中ほどで狭まり、南端はややすぼまる様相を呈し、押しつぶされたよう



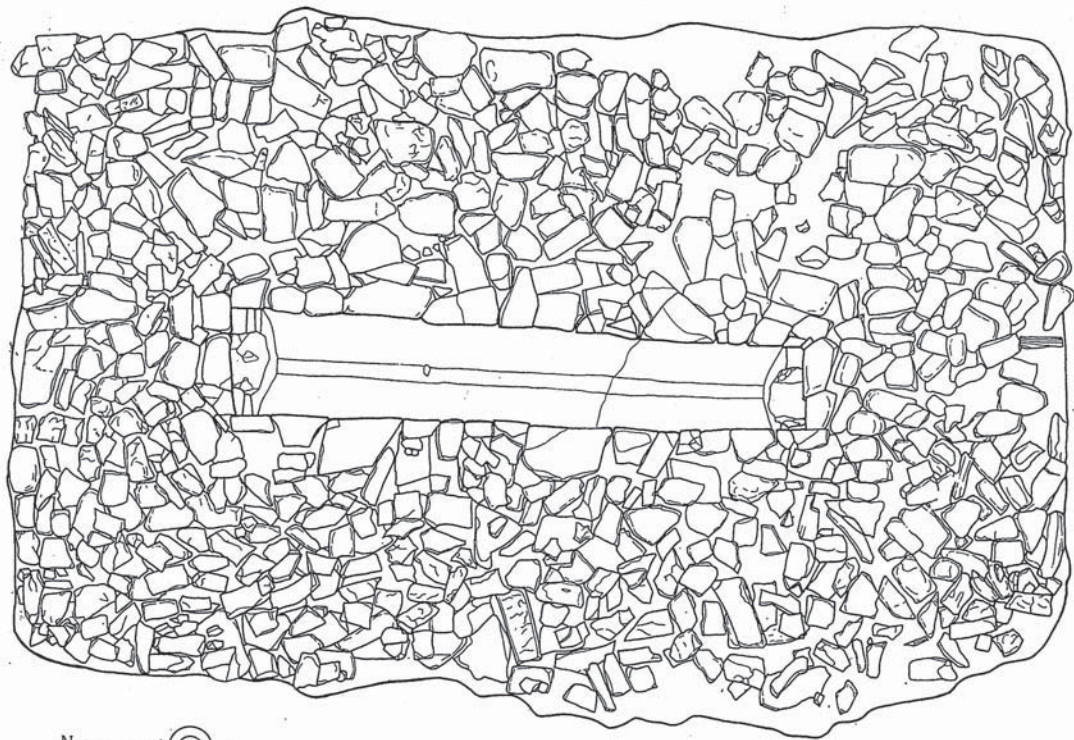
第6圖 整穴式石室 (1)

な姿であった。被覆粘土南端の先にただ1個長方形（長さ30cm・幅26cm・厚さ6cm）の板状割石が直立していたのは異様の感がした（図版4）。何のしるしか、割石敷の上にある。何か、舵のような気もしたが、おかしい。粘土被覆の広さは、長さ約5.7m・幅北側で2.25m・南側で1.8mある。その厚さは、天井石の上で25cm~30cmはあり、良質の白粘土であった。

粘土被覆をはぐと、大きさがちがひ、短辺は不揃いだが、長辺の並行する長方形近い板状天井石が7枚ならぶ、（北から順に1番目の石長さ1m~1.34m・厚さ17cm、2番目長さ1.22m~1.54m・厚さ21cm、3番目長さ1.32m~1.4m・厚さ18cm、4番目1.18m~1.33m・厚さ15cm、5番目長さ1.34m~1.2m・厚さ11cm、6番目長さ1.38m~1.32m・厚さ9cm、7番目



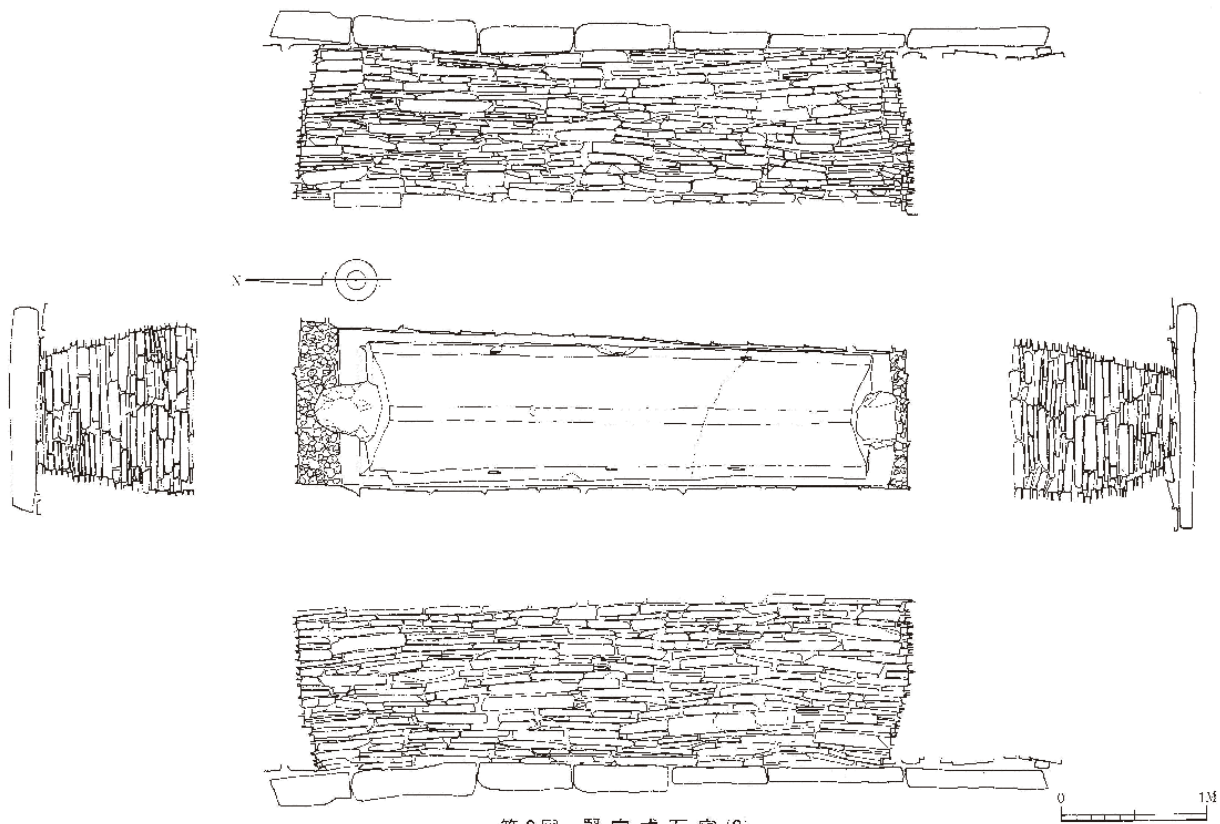
第7図 階段状遺構



第 8 图

竖 穴 式 石 室 (2)





第9圖 豎穴式石室(3)

1.48~1.5 m、厚さ12cm)裏面に赤色顔料が塗られている。石材は剝離性のある砂岩状の岩石で、すでに一部剝離したものがあつた。天井石裏面と板状割石の間は丁寧に粘土がしかれていた。板状割石の表面にカキの貝がらとみられるものが付着していたものがあつた。

板状割石の石材は、宇土半島南岸の小松から網田へかけ、その付辺の山中また海辺に産する砂岩ではないかと思われる。板状割石を使う古墳もその付近で目立つものがある。天井石の石材は、特に網田方面の山中や海辺で見かけたことがある。小松、網田方面は向野田古墳から西方图上直線距離で11kmほど離れている。

天井石をあげると、割石小口積みの竪穴式石室に長大な舟形石棺が置かれていた。竪穴式石室は上面で長さ3.84m、幅北側73cm・南側57cm、床面で長さ4.25m・幅北側1.1m・南側94cm、床面から上面までの高さ1.08m、床面は北側が南側より6cmほど高くやや傾斜している。石室の4側壁の割石は上方へ持送式に積み重ねられ、割石の隙間には粘土が詰められている。側壁の割石が隣りの側壁の割石とどう接しているか。それにより側壁割石の積み工合がみられる。石棺を置いたプランを見ると、最下部の並べかたは石棺長辺両側に1cm~4cmへだてほとんど棺壁に接して、割石がある。ことに西側は12個の割石が置かれ、その南北両端で短辺の側壁割石が喰い込んでいる。短辺両側壁の間に東側長辺側壁の割石があり、東側壁両端は長さ7cm、17cmの小さな割石が詰められる。はじめ、石棺西側から並べ、南北両側へ、それから東側へ、東側壁は最後になったと考えられる。割石の長さ、厚さはちがうが、ほぼ水平によく積み重ねられ、次第に長辺側壁の間に短辺小口側壁が喰い込んでいる。

石室床面に置かれた石棺南北両側で、北側は北側壁と棺側の間に幅約30cm、南側は南側壁と棺側の間に約10cmの空間があり、主に縦横数cmの礫石がしかれる。

墳丘の葺石や石室内床面の敷石には、角ばつたものや円味のあるものなどさまざまある。角ばつたものは主に黄褐色砂岩の割れたもので、向野田付近の山からとられる。円味のあるものは多く角閃石安山岩で、宇土半島基部北側の網津川から住吉の海岸、緑川の手海辺にある。床面敷石には、凝灰岩、カキ付の礫石もあつた。なおこの礫床の礫石は後述の通り、石室構築のとき、墓域内の石棺の周りに広くしかれたものであつた。

向野田の石棺は舟形石棺であるけれど、いわゆる典型的な舟形石棺ではない。舟形石棺は、割竹形石棺に近似するが、円筒形が平らかになり、蓋の中央に稜があり、断面あたかも扁円形を呈し、中央部やや広がっている。身の両端も垂直でなく、斜めに切られ、全体の感じが舟に似ているのでかく命名された。蓋、身ともに両端に縄掛突起が付き、時には左右側面にも付けられたものがある。身の内部には石枕が作りだされるのが普通である^③と辞典にある。

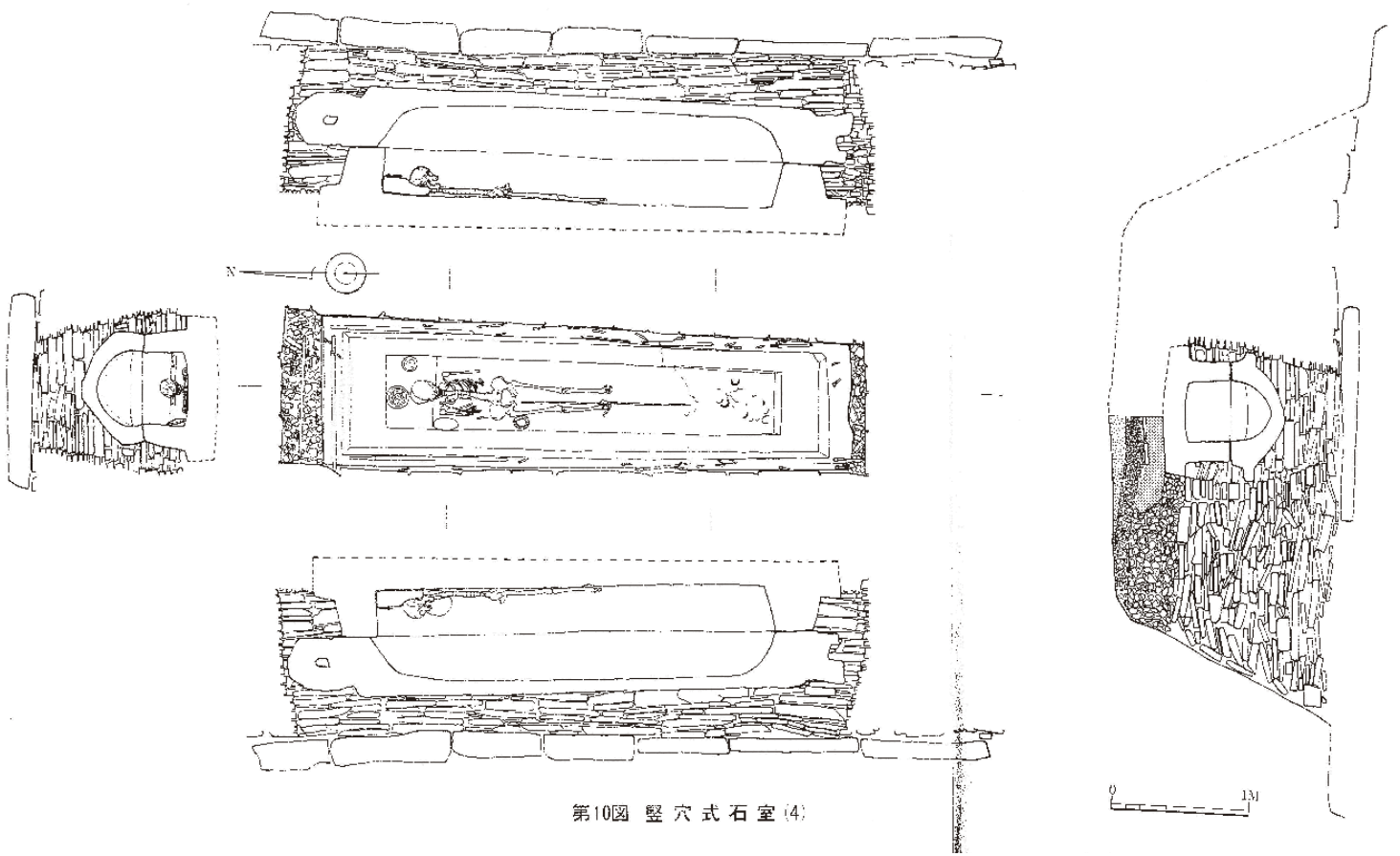
向野田の石棺を舟形石棺としてあげた「九州における主な舟形石棺出土地名表」の終りに、割竹形石棺と舟形石棺、長持形石棺、家形石棺の中には厳密な区別の困難なものがあると記されている^④。

かつて舟形石棺と割竹形石棺とに分けられたものを合わせて、舟形石棺とする見方をとり、舟形石棺の幅が前後両端でちがいの著しいことともに必ず縄掛突起があり、諸手槽の例から舟棺の理念をもって作られたとする先学の見解がある。蓋のある棺をもって蓋のない舟形の棺の変形であるとする、舟棺の理念にもとづく見方に対して有力な舟葬説批判がある。舟に似ていると見て舟形石棺とよんだのはたんなる現代の命名であるとされる。

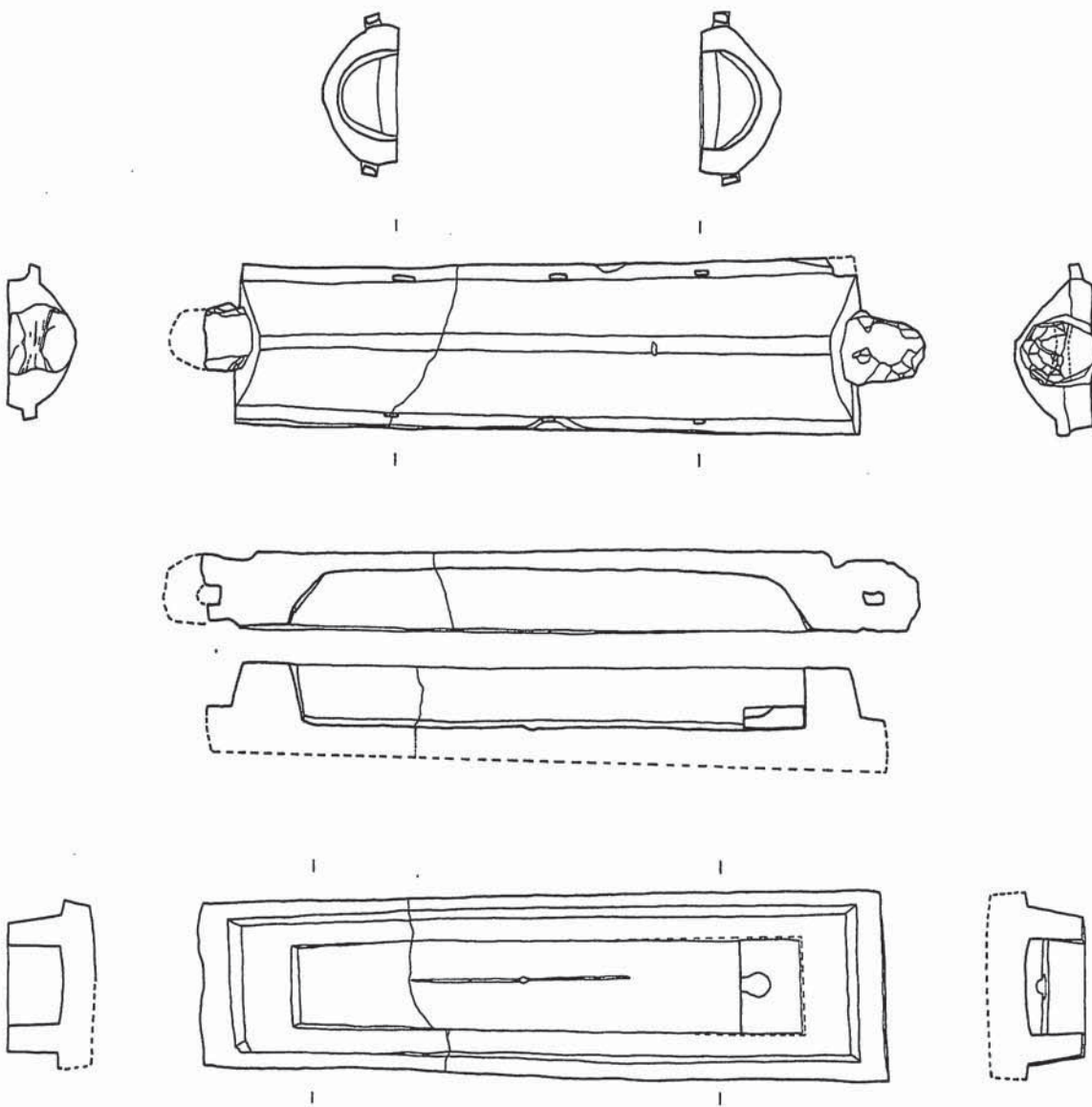
向野田の石棺の石材は阿蘇溶結凝灰岩である。現存の棺蓋は縄掛突起を含め、長さ4.0m、幅北側1m、南側87cm、扁円形の上部中央に幅北側10cm、南側7cmの稜がつき、南北両側は斜めに削られ、長辺両側に幅7cm～10cmの平縁がつくれ、両側の平縁に南北の両端から約80cmの所から70cm余おきに3個の長さ6cm～12cm・幅1.5cm～2.5cmほぼ長方形の孔がある。このような長方形の小孔をもつ例として、熊本県八代郡大王山古墳・同室ノ山古墳・佐賀市熊本山古墳の棺蓋には両側に計6個がつき、京都府綴喜郡茶臼山古墳の舟形石棺の棺身両側平縁部には計12個がついている。棺蓋は西北一角、両側平縁などに一部欠けた所があるほか、北側の縄掛突起の先端が欠損している。北側突起はプランで、長さ46cm・幅26cm～42cm、断面上部は円弧、下部は平らで、厚さ40cm、亀頭状を呈し、中央横に長さ10cm・幅約6cmのほぼ隅丸長方形の穴があき、穴は両側からあけられ、東側幅15cm、西側幅10cmで、鼓のようにくびれる。南側縄掛突起は半壊で、プランの現存長27cm・幅34cm～39cm・断面厚さ38cm、亀頭状の先端が欠失し、中央やや下横に長さ約10cm、幅約11cmの逆コ字形の穴があき、同じく両側からあけられ、東側幅18cm・西側19cmで中くびれとなる。棺蓋表面は稜・平縁のほかかなり削り跡があり、ことに縄掛突起は荒削りながらよく形をととのえている。鏝かなにかで削ったものであろう。

棺蓋裏面は刳抜きである。縦断面で高さ44cmの棺蓋に深さ約33cm刳抜き、棺蓋上部厚さ約10cm残し、両端は弧状に彫られ、刳抜き下部の長さは2.9mある。横断面では扁円形の棺蓋両側に幅8～9cm、高さ7～10cmの平縁がつき、平縁外側は斜めとなり、平縁下方は扁円形からややすぼまり、刳抜いた棺蓋内部は半円状を呈し、半円の幅棺蓋の稜下方で厚さ約10cm、扁円形の両側で厚さ約13cmある。棺蓋裏面は磨きがかかる。

棺身は台上で箱形に刳抜く。台上の北側は何故か壊われ、欠けてやや出入りのある形となる。台の現存長3.95m・厚さ約18cm・北側幅1.06m・南側幅90cmで先狭まった長方形をなし、東西両側に幅約10cm・北側に幅25cm・南側に幅14cm～18cmの出入りのある平縁をなし、箱形を囲む。箱形上面の長さ3.1m・北側幅79cm・南側幅（一角が崩れ推定）71cm、平縁面で長さ3.15m・北側幅88cm・南側幅（一角が崩れ推定）75cmの先狭まった台形の箱式となる。棺の内法は上面で長さ2.86m・北側幅52cm・南側幅45cm・深さ33cmあり、床面で長さ2.82m・北側幅54cm・南側幅45cmあり、北側では上面より床面がわずかに広く、なお上面よりわずかに北へ奥まっている。南側では上面が底面よりわずかながら広く逆台形に彫り込まれる。



第10図 竪穴式石室(4)



第11圖 舟形石棺

0 1M

彫り込まれた棺内北側いっばいに接して幅34cm・厚さ北側13cm・南側11cmやや南へ傾いた長方形で、南側に頭部をのせるため半ば電球状に刳抜いた石枕がはめ込まれる。また棺床中央に長さ1.23m、幅約1.5cmのごく浅い溝がつき、溝の中ほどに径3cmほどの穴をあけようとして深さ約2cmの穴跡があり、棺床を貫通していない。溝の南端に棺身をやや斜めに横切ってヒビ割れがあり、溝はヒビ割れのところでとまる。

棺蓋と棺身は、棺身の箱式4側壁の上縁に棺蓋下部の箱形側壁の下縁がのり、はめ込みのものではない。なお棺内はすべて赤色顔料が塗ってある。石枕下の床面も塗ってあるが、石枕の下には塗っていない。石枕上の赤色顔料の厚さは約5mmあった。

向野田古墳の石棺に近い例として上記の八代郡大王山古墳の舟形石棺がある。同じ県内で、距離の上からもそう遠くない。

刳抜式石棺について割竹形石棺→舟形石棺→家形石棺という単純化した図式がある。軟質の石材であっても、刳りぬくには木棺の場合と異なる石工用具がいる。そうした用具は朝鮮から輸入したとみられる。刳抜式石棺の出現について、香川県快天山古墳、静岡県三池平古墳の例から4世紀後葉をさかのぼるものでないといわれる。また石棺の舟形→家形の系列も地域によりちがいが^①ある。

舟形石棺として、向野田古墳の場合、蓋が舟形で、身が箱形であるのに対して、後出とみられる福岡県天神山古墳では蓋が家形、身が舟形となっている^②。蓋と身を異にする石棺製作者の意識に伝統的な石棺形式の観念がひそんでいたことが察せられ、興味がある。

「石棺研究ノート(三)長持形石棺」に、……この造山古墳所在例(刳抜長持形石棺)は、石材が阿蘇石であり、九州的な舟形石棺の系譜の中で、特例の長持形石棺が作られたものに違いないのであるが、唐仁大塚例は、長持形石棺を意識した部分が認められず、九州的な舟形石棺の中で十分説明できる種類に属すると思う。蓋・身の短辺に縄掛突起を2個ずつつけることも長持形石棺である理由にはならないし、見取図で棺身が箱形に近くえがかれていることを考慮して長持形石棺的だというのがあれば、身の断面形が箱形を示す舟形石棺として、肥後宇土市向野田古墳例などあることをあげればよいであろう……とある^③。

向野田の石棺を、九州的な舟形石棺の系列に置かれていることが注目される。

向野田石棺の各部の特徴を各地の石棺例のなかから第15表 関連石棺一覧表(112頁)としてあげた。

(1) 石棺基底部の構造

竪穴式石室に置かれた舟形石棺の基底部がどうなっているか、今回その一部を確かめることができた。宇土地方で石室の粘土床を確かめたことはあったが、石棺基底部ははじめての試みであった。

棺蓋をあげるため、石室西側壁の板状割石を蓋石の縁辺まで外した。そこで棺身西側壁南端

の個所で、保存のこともあり、幅1mほど掘り下げ、その幅で墓壇の西側斜面まで控積みの割石をはいた。

棺身台下の断面をみると、高さ13cmの台側下方に厚さ11.5cmの粘土層があり、その下方に長さ36cm・厚さ3cm、また長さ45cm・厚さ5cmの板石が水平に続き、板石下方は拳大より小さな礫石が厚さ15cmほど層をなし、その下方はごく小さな砂まじりの砂利となる。棺身台下方約40cmで地山となる。

棺身南側で墓壇西側斜面への断面図で石室および棺身台下の構造が知られる。棺身底部は平らではなく、棺底中央は棺身の台側面より3cm下になる。棺身の台側面から水平に墓壇西斜面まで拳大の礫石が層をなし、棺身台下から35cmほどやや斜め下に伸びた粘土層を含んでいる。礫石は墓壇床面まであり、下方35cm辺から厚さ15cmほど土まじりのやや小さめの礫石の層が粘土層の下の板石下まで続き、板石下方では土を含まない締りのあるごく小さな砂利が数cmの厚さで墓壇中央へかけてしかれている。墓壇床面はその東西両側から中央へやや傾斜している。

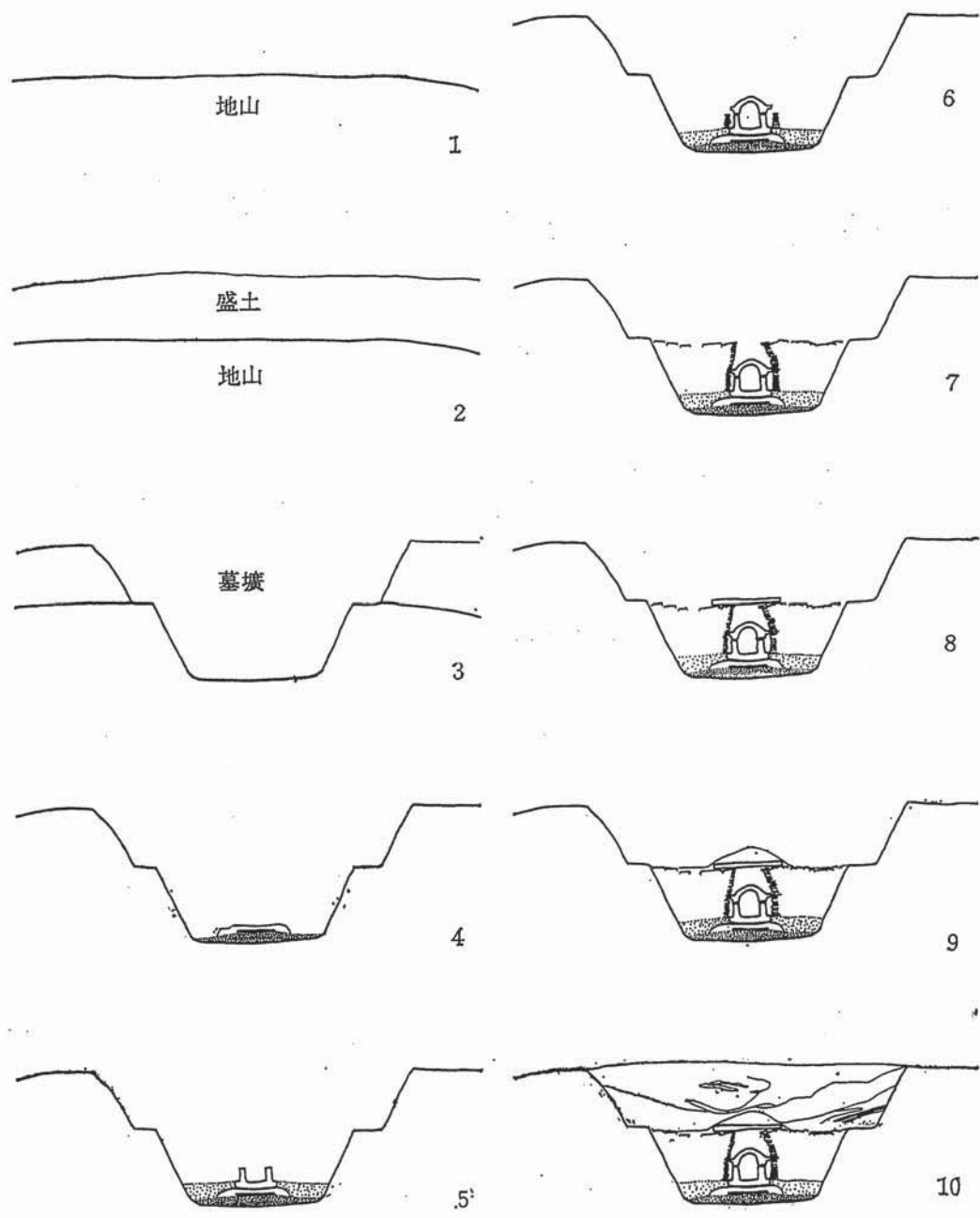
墓壇西斜面まで控積みの割石をはくと、墓壇斜面には粘土が塗られ、割石が張り付けられた形になった所もある。

棺身西側南端の石室、石棺基底部の調査であるけれど、墓壇内の構造を明らかにする手がかりを得ることができた。

排水溝の有無を確かめた所、地山に掘り込みなどのあとではなく、作られなかったとみられる。向野田の場合、墳丘とその地質、葺石、墓壇の構造、石室の天井石上粘土被覆などからとくに排水溝を設けなかったことも考えられる。

(2) 石室構築の手順(第12図)

1. 後円部に当たる丘陵南端を削り、盛り土をし、墳頂平坦部とする。
2. 平坦部中央を掘り下げ、南北長さ10.1m・東西幅北側7m・南側6.9mの長方形で逆台形に深さ1.5mほどの所で墓壇床面とする。墓壇東北隅に墓壇内外へ昇降するための足場をつくる。のちに踏石が置かれる。第1次墓壇とする。
3. 第1次墓壇床面の周りに幅約70cmの平縁部を残し、さらにその中を逆台形に床面南北長さ8m、東西幅北側5.2m・南側5.6m・深さ約1.5mほど掘り込む。第2次墓壇とする。
4. 第2次墓壇床面中央辺にごく小さな砂利をしき、その上に小さめな礫石を積み重ね、石棺の基底部となる所に扁平な板石をしきならべ、さらにその上にやや広く粘土をしきかためる。そしてその上に棺身をおく。
5. 棺身の台側面の高さまで拳大の礫石を墓壇いっばいに填める。棺身の台側面の上、填めた礫石の上に板状割石を棺身台上の箱形棺身の側壁の高さまで積み重ねる。この頃、棺内に被葬者、また棺内外に副葬品が埋納される。
6. 埋納後、蓋石がかぶされ、蓋石両側にはぼ接して割石を積み、さらに持送式に積み上げる



第 12 圖

豎穴式石室構築過程推定圖

とともに墓壙斜面まで割石を控積みし、第1次墓壙床面平縁部の高さまで積む。割石の空間は粘土を填め、墓壙斜面にも粘土が塗られる。

7. 竪穴式石室上に天井石を7枚のせる。天井石の上や周りを薄銚形近く粘土を被覆する。その後第1次墓壙いっばいに、はじめは主に黄褐色土を埋め、次に赤紫色土を入れ、さらに盛り土をして、墳頂平坦部をととのえる。

もし上述のような手順で石室・石棺の構築が行なわれたとすれば、棺蓋および棺身南端の欠損は、石室内に置かれる以前、なんらかの事情により生じたものではないかと思われる。石棺のひび割れが、その時できたかどうか分からない。石室が石棺より狭く構築されたため打ち欠いて置いたのではないかともみられるが、このような石室構築・石棺剝抜の技術をもつ者が、前もって石室構築を進めるに当たり、石棺の長さを誤ったとは考えられない。石棺欠損のためか、天井石の南端7枚目は石室外を覆う形となっている。天井石7枚は、最初予定したものにちがいない。

墓壙・石室の構築過程で、棺内に被葬者を納め、副葬品などを供え、葬送儀礼の後、棺蓋や天井石をのせたのではなからうかと想像される。

なお、内部主体は異なるが、奈良県東大寺山古墳（北高塚古墳）は、標高130mにある復原全長約140mの前方後円墳で、墳丘主軸に並行の墓壙があり、その中央に粘土礫をおく4世紀後半のものである。全長1.1mの中平紀年刀で知られている。盛土をした後円部墳丘中央に、長さ12m、幅北側8m、南側6.5mの墓壙が逆台形に掘られ、途中でその東西両内壁に沿い壇を設け、さらに掘り込んだ墓壙床面は長さ9m、幅4m内外で、墓壙の深さは約3.1mある。内部主体は異なるけれど、墓壙の掘りかたでやや似ている点がある。向野田の場合、東大寺山で東西両壁の壇下の地山に玉砂利がしかれ、その上に粘土がおかれるのに対して、掘った4壁の周りに平縁部を残し、さらに掘り込んで石棺の周りから平縁部の所まで板状割石を積み上げ、竪穴式石室をなしている。古代中国の墓壙にこのような壇のあることが指摘されている^⑭。

東大寺山古墳のことから、そうした中国古代の墓壙では腰坑とよばれ、また奈良県殿塚古墳にもそれを偲ばすような例のあることを知った^⑮。

長野県森將軍塚古墳の報告に、二段墓壙として京都府寺戸大塚古墳、同西山一号墳、群馬県前橋天神山古墳、熊本県向野田古墳などのほか島根県造山三号墳が記され、いずれも古式古墳であることが述べられている。また京都府カジャ古墳例が加えられ、石棺のところであげた京都府茶臼山古墳例も二段墓壙である。それらの中に、すでに向野田古墳があげられているのであった。

二段墓壙の分布は興味があり、向野田古墳の場合、大陸に近い中九州西海岸にあることが注目される。

- 註 ① 九州大学文学部考古学研究室「福岡市老司古墳」、1969
- ② 野田・松本・島津・江本ほか「塚原」熊本県文化財調査報告 第16集、1975
- ③ 藤田亮作監修、日本考古学協会編「日本考古学辞典」東京堂、1962
- ④ 乙益重隆「古墳文化各説—九州」新版考古学講座5、雄山閣、1970
- ⑤ 後藤守一「古墳の編年研究—その三（棺の類）」古墳とその時代(-)、朝倉書店、1958
- ⑥ 小林行雄「舟葬説批判」古墳文化論考所収、平凡社、1976
- ⑦ 乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11、1962
- ⑧ 佐藤伸二「室ノ山古墳調査報告書」宮原町教育委員会、1976
- ⑨ 木下之治、小田富士雄「熊本山船型石棺墓」佐賀県文化財報告書第16集、1967
- ⑩ 堤圭三郎・高橋美久二「茶臼山古墳」（京都府）埋蔵文化財発掘調査概報、1969
- ⑪ 前掲書、註⑥書所収。「神功・応神紀の時代」、「家形石棺」
- ⑫ 柴田常恵「筑後三池郡上楠田の石神山」人類学雑誌第31巻第7・9号、1916
- ⑬ 間壁忠彦・間壁菫子「石棺研究ノート(⇒長持形石棺)倉敷考古館研究集報第11号、1975
- ⑭ 金関恕「卑弥呼と東大寺山古墳」古代史発掘6、講談社、1975
- ⑮ 熊本大学白木原和美教授のご教示による。
- ⑯ 八幡一郎・米山一政・岩崎卓也「長野県森将軍塚古墳」東京教育大学文学部考古学研究報告Ⅲ、1973

VI 遺物の配列

向野田古墳の副葬品は、墳丘の主軸の方向と並行した竪穴式石室内の舟形石棺の回りと舟形石棺の中、すなわち棺外と棺内に置かれている。

1. 棺外の遺物

昭和43年6月、はじめて開室のとき、石室北側壁と棺身北側の間で、石棺周りの平縁部と礎床の上に鉄器類が見出された。礎床東北隅に大小の3個の鉄斧、中央に柄を東に切先を西にした長さ約90cmの直刀1本(刀3)、石棺周り平縁部の上で東から柄付刃部と刃部がやや離れ、合わせた長さ約80cmの直刀(刀2)、その直刀の柄とT字形に柄を接し、刃部が東側平縁部へ伸びる直刀(刀1)、あとは37本を数える刀子が散乱した形であった。

石室南側壁と棺身南側の間で、石棺周りの平縁部西側で切先を南に、柄を北にした直刀の刃部1本(刀4)があり、刀子6本が散乱していた。なお平縁部の東側で何か器物の腐蝕した後の残欠とみられるうす黒い網のような表皮のある小片があった。(第13図×印)

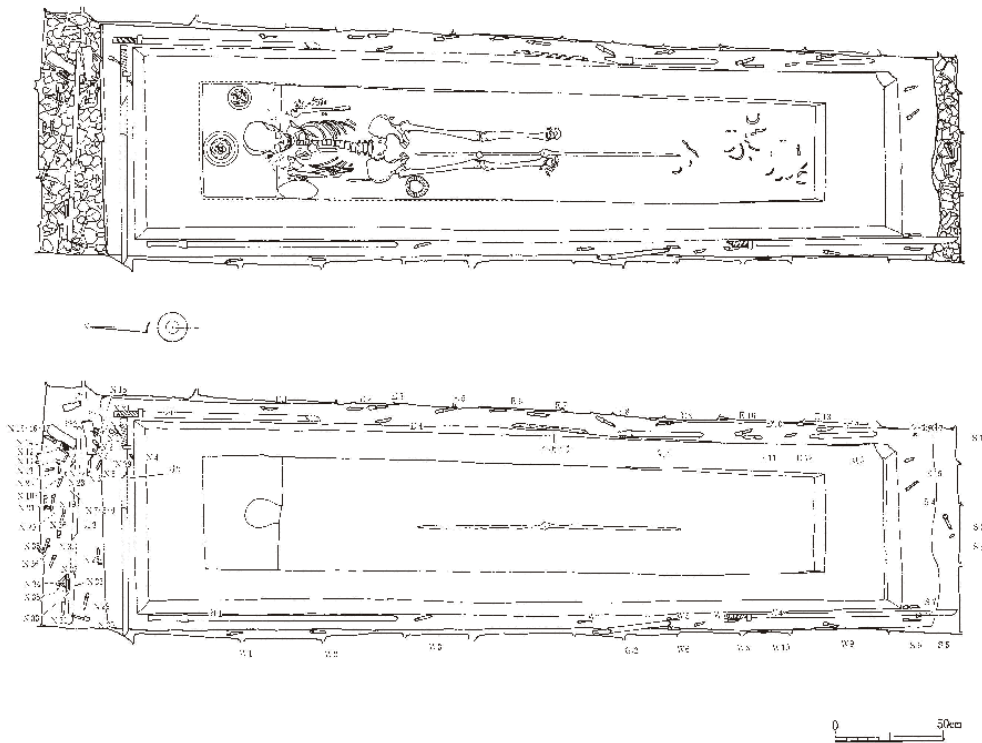
石室長辺東西両側は板状割石が迫り、石室側壁と棺身の間は見られなかった。ただ西側北端で長剣の柄がのぞかれた。

同年9月、はじめて開棺のとき、被葬者の人骨および副葬品などが明らかにされた。

測図を見ると、石室東西両側壁は石棺周りの平縁部に接し、遺物はすべて平縁部上に置かれていた。東側平縁部では北端に刃を東にした柄付刃部があったがそれに続く直刀の一部があり、長さ約1mある。平縁部中ほどに棒状の不明な木質のものがあり、また切先を南にした長さ40cmの柄の残欠のついた短剣があった。或は不明の木質棒状のものと続き、槍であったかもしれない。長さ32cm、切先を南にした短剣が東側平縁部の南端にあった。他に14本の刀子が東側平縁部にずっと置かれていた。

西側平縁部では北端に柄、切先を南にした長さ1.18cmの長剣(剣1)がおかれ、平縁部中ほどに切先を南にした長さ33cmの短剣(剣2)があり、その南端に切先を南にし、柄を北にした長さ約1mの直刀(刀4)があった。10本の刀子が平縁部にずっと置かれていた。

直刀は石室北側棺身の平縁部にあった1本(刀2)と北側礎床の1本(刀3)が石棺へ刃を向けていたほか東西両側の2本はそれぞれ刃を外に向けていた。石室側壁と棺身の間に副葬された鉄器は刀剣・刀子や鉄斧という利器や工具である点が注意される。



第13図 (上段) 棺内・棺外遺物配置状態 (下段) 棺外遺物出土個所番号

棺外に置かれた鉄製の利器や工具は、棺内被葬者を邪霊などから守護する意味があろう。

石室北側に直刀・刀子や鉄斧のあることも被葬者の頭部が棺内北側にあることとかかわりがあるのではなかろうか。

石室東西両側では、刀剣の切先は南をさし、刀子も刃の向きはさまざまだけれど、切先は東側でもほとんど南を指し、西側では数は少ないが、すべて南を指していた。仰臥伸展葬の被葬者が北枕で、顔や手足が南に向いていることとかかわりがあるように思われる。また古墳の立地の上から不知火海や八代方面への指向が窺われ、そうしたことも注意される。

なお石室西側の北端に置かれた長剣はとくに何か儀礼的にも用いられたことがありはしないかと思われる。

上述の刀・剣・刀子などにはかなり布痕がついていた。また刀剣や刀子などの柄にはかなり木質部が残っていた。

2. 棺内の遺物

棺外の副葬品が鉄製利器や工具であるのに対して棺内の鏡・玉類・車輪石・貝輪など鏡のほかは装身具であった。

石枕をした被葬者の人骨は、宇土地方で宇土城（城山）本丸跡西側出土の大形石蓋甕棺の弥生人骨以上に残存のよいものであった。この人骨の状況からみてもこの石室構築・石棺製作の技術のすぐれていたことが知られる。この人骨調査者によれば、骨盤の恥骨結合面から被葬者は女性で、推定年齢は30代の後半で、40才に近いといわれる。女性単独埋葬の確実な例としてあげられる^①。

後円部墓域内竪穴式石室に置かれた舟形石棺の棺内に石枕をした仰臥伸展葬のほぼ完形を示した人骨は、現在熊本大学第二解剖学教室収蔵庫で2個のケースに納められている。

頭部をのせた石枕上には、頭部すぐうしろ西寄りに鏡面を下にした内行花文鏡、東側内壁に接し同じく鏡面を下にした鳥獸鏡、西側枕下で西側内壁に鏡面を出し斜めに立てかけた形で下顎骨の方へ向いた方格規矩鳥文鏡がそれぞれ置かれていた。

鏡の配置は、おそらく置かれた当時の形を示しているとみられる。それは方格規矩鳥文鏡から南に40cmほど離れて置かれた車輪石の位置からも窺われる。

小形の鳥獸鏡が壁際に、中形の内行花文鏡が頭部のうしろに、さらに鏡面を顔面へ向けたやや大形の方格規矩鏡は、それぞれの鏡格ともいべき重要性をもって配置されている。大阪府茨木市紫金山古墳の方格規矩四神鏡は棺内遺骸の頭部におかれ、また福岡県一貴山銚子塚古墳^②の長宜子孫内行花文鏡や鍍金方格規矩鏡は頭辺にあった例が参考される^③。上記3面の鏡は絹布などに厚く包まれていたらしく、鏡の表面に布痕が著しい。ことに内行花文鏡の端には房々し

た布片というか糸片が付着していた。石枕上の内行花文鏡から鳥獸鏡へかけ、その間に布痕のあったことが実測図に記入されている。

車輪石は右大腿骨上端、骨盤下方に当り、大腿骨と棺内壁の間にやや卵形の長径に対し、両端のうち幅広い方を北にし、表をみせ、歪んだ形でなく、見出された。その中央孔や表面に一部人骨の石灰分かとみられる白いものが付着していた。装着していたとしてもおかしくない位置にある。ただ被葬者が埋納時に装着していたとすれば、外れ落ちるとき、位置が現状のようにきちんとなったかどうか多少疑わしい点もある。表面にわずかながら欠けたところがあり、明らかにかつて腕に装着していたことがあるとみられる。

この車輪石は、宇土地方ではもちろんはじめてのものであり、県内で鹿本町津袋大塚古墳出土の小片は円形を呈する車輪石である^④。

宇土地方の車輪石として、宇土市城ノ越古墳出土の三角縁四神四獣鏡とともに、それらが畿内を中心とする分布につながるものかどうか、またつながるとしたらどういう意味があるか、興味がある。

勾玉、管玉や小玉などについて見ると、玉類は分散し、主に上半身の周りにあり、下半身の方まで及んでいる。

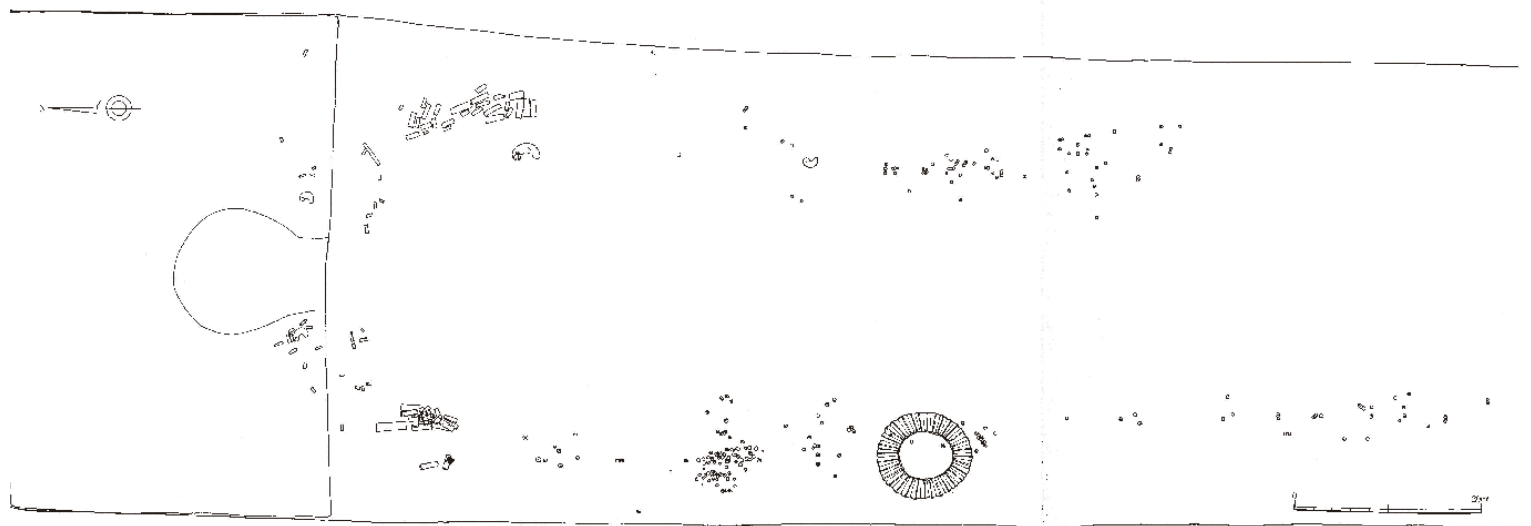
頭部両脇耳下辺から下顎骨辺へかけ、小形の勾玉2個と小形の管玉33個ずつそれぞれ散る。両上腕骨外側で右上腕骨上方では方格規矩鳥文鏡との間に一個所に寄った形で、左上腕骨上半分ほどでは腕骨に添った形で、比較的大きな管玉にわずか小さめな管玉がまじり、右側22・左側27個散っている。また左上腕骨上半分下方内側にやや大形の勾玉ただ1個があり、両下腕骨の外側では右腕外側に小玉数個が散り、左腕外側わずか1個しかなく、骨盤両側では左腕骨外側の小玉に続き70個余の小玉が一個所に散った形であり、右上腕骨に続く側では小形勾玉一個と数個の小玉、1個の三連玉が散っている。両大腿骨、脛骨外側で一方左脛骨辺まで小玉、三連玉が続くの他に他方は大腿骨辺に小玉、三連玉が散り、その先にはみられなかった。

なお小玉の破碎・分散したようなあとが8個所ほどあった。

上記の勾玉、管玉、小玉などの分散状態で気をつくことは胸部内に散ってはず、また上半身に集中して、ことに上腕骨外側に管玉などが目立ち、勾玉4個のうち3個がほぼ等間隔に散っており、頸から胸へ頸飾り状にかけられていたことが想像される。その頸飾が一連のものであったかどうか、検討を要する。

足の方まで小玉が散っているのは、棺内に散らしたものか、何の事情で散ったものか、疑問がある。

棺内壁の南側から長さ約60cm辺まで19個ほどの貝輪状の腐蝕した貝残欠が散乱していた。他の古墳にも貝輪副葬の例はあり、これら貝残欠は2枚貝や巻貝の残欠ではないかとみられる。ただ散乱した形が気になる。副葬の小玉などがかなり散っていることとともに注意される。



第14圖 玉 類 出 土 状 態

- 註 ① 北條暉幸九州産業医科大学教授（調査当時、熊本大学医学部助手）の鑑定による。
森浩一「語りかける出土遺物」邪馬台国のすべて、ゼミナール、朝日新聞社、1976
日本の古墳に、はたして女性だけを、あるいは女性優位の形で葬ったのかどうかよく問題になります。天皇陵の伝承では神功皇后とか、日葉酢媛とか、女性を葬ったと伝えるのがありますが、そういう伝承を別にしましても、いくつかの古墳からは女性の骨が、それだけか、あるいは合葬例でも優位の形で出ておりますから、女性のために築いた古墳があってもおかしくはないと思います。このことは将来の重要な課題です。
- ② 大阪府古文化記念物調査係「新たに学界に出た三島郡豊川村宿久庄紫金山古墳について」なにわ、1947
- ③ 小林行雄「福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究」便利堂、1952
- ④ 富田紘一「鹿本町周辺の古墳」鹿本町史、1976
- ⑤ 前掲書、Ⅱ章註⑦

Ⅶ 遺物の観察

1. 鏡 類

鏡類は3面。2面は石枕上にあり、1面は石枕下で西内壁に立てかけた形であった。棺身の基底部調査のとき、西側割石積みの中から出た石枕様の石材は、長さ50cm・幅23cmで、頭部はまだ彫り込んでいない。その石材の幅23cmでは、頭部の彫り込みを作れば、鏡の置き場所がなくなる。それで石室西側の割石積みの中へ捨てられたのかもしれない。

熊本県玉名郡院塚古墳3基のうち、最高位の被葬者とみられる3号舟形石棺は内壁と石枕上の間が20cmあり、その間に布目の付着した神獸鏡1面のおかれていた例がある^①。

(1) 内行花文鏡 (第15図)

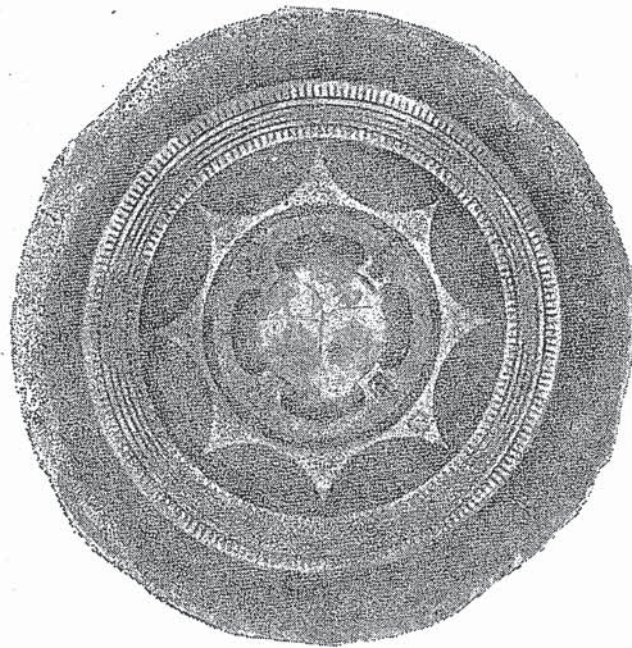
径17cm。幅1.8cmの平縁がまわる。外区は幅4.5mmの円文内で櫛歯の間1.5mmの櫛歯文帯と幅3.5mmの円文内で1.5mmおきの櫛歯文帯の中に三線の有節重線文帯がめぐり、径4mmの円文が三線の外側線と内側の3.5mm幅の櫛歯文帯に接し、円文の両側に二線がところどころで等間隔で円文を挟む形となるが、文様がやや磨滅して明らかでない。内区は四葉文鈕座を中心にめぐる幅3mmほどの太い円文と外区の間内行八花文がある。花文の間に径5mmの円文と山字状の文様が交互につく。四葉文の間に「長宜子孫」の銘がある。鏡面の反りは鏡端で4mm。鏡面に薄手と厚手3種類以上の布痕があり、鏡縁にちょっと房々した糸片がついていて驚かされた。やや丸味をもった素鈕の穴は周りが青錆を帯びるのに紐を通していたせいか鈕の穴は銀色に光る。

田川市伊加利の内行花文鏡で、外区の有節重線文帯は円文と斜行線がめぐり、その点は向野田の鏡とやや似たところがある^②。田川市のは仿製か。岡山県花光寺山古墳の内行花文鏡で、内区八花文の間にある山字状は下の線が円弧をなし、両端へはみだし、渦巻様の円文の先は双葉のように分かれている^③。八花文の間の山字状や双葉状の文様について各鏡の間に変化があるけれど、天をかたどる蓋笠を表現した8連の円弧と、それを支える柱やその幕をしぼった紐をあらわす円弧間の小単位文様からなる主文とする見方があり、興味をひく^④。

向野田の内行花文鏡は古式の内行花文精白鏡でなく、後漢時代に作成の行なわれた長宜子孫内行花文鏡に属する。

(2) 方格規矩鳥文鏡 (第16図)

径18.4cm。幅約5mmの平縁がまわる。平縁内側に幅2mmの沈線がめぐり、幅1.9cmの外区に、鋸歯文帯(幅6mm)・複線の波文帯(幅4mm)・鋸歯文帯(幅5mm)・櫛歯文帯(幅4mm)がめ



第15図 内行花文鏡

ぐる。鋸齒文の三角形底辺3~4mm、外側の鋸齒文帯の鋸齒文がわずか大きめである。幅7mmの銘文帯に「青同(銅)作竟(鏡)明大好長生宜子孫」と12字の銘文がある。内区は円線と複線方格(幅4mm)の間にTLV文が複線でつく。Tの両側に円点をもつ円圈座乳、TLと両側のVの間に頭をV側に向けたほぼ同形の鳥形線文が配される。鳥文は鳳凰の流れであろうか。複線方格(外側一辺長さ6.4cm、内側5.5cm)と小さめな四葉変形文が方格四隅に向いつく径3.4cmの素鈕を囲む単線方格(1辺4.2cm)の間に、小さめな円点をもつ円圈座乳12個があり、その乳と乳の間の一辺に3字ずつ十二支の文字が配される。子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥 このうち不明の字が4字ほどあり、申の字の中央縦線がない。外区の鋸齒文をはじめ素鈕(径3.4cm)の断面ほぼ長方形の穴両端などに一部鑄くずれがある。Vの図形がやや開きすぎ、L字文が左向となっている。鏡面の反りは鏡端で5mm。線文の表出もよく、鑄上がりのよい方であろう。鏡面にかなり布痕が残る。鏡背に青錆のほか何故か藍色に色



第 16 図 方 格 規 矩 鏡

の変わったところがある。

京都府椿井大塚山古墳の方格規矩四神鏡は径18.2cm、その外区やL字文の向きなどの点で向野田の^⑥と似ている。鳥文も頭部辺にやや似たところがみられる。また東京国立博物館蔵、出土地不明の王氏作波文帯方格規矩鏡は径5寸3分(16.6cm)、外区が似ているが、L字文は右向で、八禽であるけれど、その図像はかなりちがうようである^⑦。

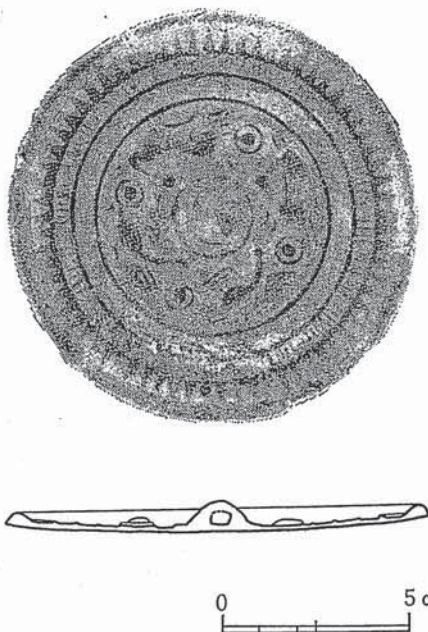
方格規矩四神鏡は前漢末から三国時代に行なわれた鏡式といわれ、向野田の鏡はその系統につながり、後漢のものとみられる。山越茂氏による方格規矩四神鏡の分類によれば、鳥形を主文としており、その第九式にあたるのではないかと思われる^⑧。

天円地方を象った鏡の円い形と中央の方格の間に、それをつなぐ柱梁を象徴する内区のT形文があり、その両側に乳を配することがある。また大地を象った中央の方形には、船載鏡では

方位をあらわす十二支が文字で記入されることが多いといわれる。^⑧

(3) 鳥獸鏡(第17図)

径11.2cm。半三角縁というより半円に近い蒲鉾縁。外区は鏡縁へかけ幅約7mmの外行鋸歯文帯、鋸歯文の三角形底辺約3mm、つぎに幅5mmの櫛歯文帯、櫛歯の間1.5mm~2mm。そして幅6mmの銘帯にあたとみられる無文帯が続く。内区は素鈕円座の周りに4個の円圈座乳があり、乳と乳の間に鳥が2羽、鹿のような獣が2匹続く。鏡面の反りは鏡端で3mm。鏡面に布痕があり、鏡背の外区4分の1ほどに厚手の布痕が残る。



第17図 鳥 獸 鏡

向野田北方近くのチャン山(茶臼山)古墳の鳥獸鏡は径10.5cm。図像もすぐれ、外区は連環文帯・外行鋸歯文帯・櫛歯文帯がめぐり、^⑨ 鑄上りもよく、後漢鏡とみられる。それに比べると、向野田のは図像も生硬で、仿製ではないかと思われる。ともに半肉彫りである。

チャン山の鳥の図像は、長くひるがえる冠羽と長い尾を持っている。「鳳凰の図像の系譜」によれば、その図2の2、図6の2および図像記号の図7の2に似て、現在の金鶏・昔の名前では翟とみられ、後漢では鳳凰とみなされている。^⑩ 向野田の方格規矩鳥文鏡の鳥も冠羽と尾羽根に似たところがある。

かつてチャン山の鏡の鳥獣を、四霊の麟鳳とみたけれど、四神とすれば、朱雀・白虎となろうか。チャン山の場合、鹿の角状に出た頭部は白虎に遠いようである。また朱雀鳳凰の属と区別がむずかしく、先の図6の2は朱雀として掲げられている。

なお、向野田の内行花文鏡、方格規矩鳥文鏡はともに舶載の鏡とみられる。

2. 玉 類 (第18図)

被葬者の両肩の周りから両腕外側付近に多く寄り、両肩上方頭骨両耳脇辺に小さめな管玉と小形勾玉がそれぞれあって、両上腕骨外側に主に大きめな管玉が腕骨に添うような形で集まっていた。また右側骨盤やや北へ小玉がひとつところに集まっていた、割れたものやとり上げた後こわれた小玉もあった。小玉は、一方左脛骨辺まで、他方は右大腿骨辺まで散り、小玉の破碎、分散した痕跡が大小8箇所ほどみられた。小玉とともに三連玉(小玉の3個密着したもの)が12個ほど散っていた。

(1) 勾 玉

胸部左肋骨と左腕骨の間で腕骨に接してあった勾玉は長さ2.94cm、丁字頭、頭部にやや白みがかかる硬玉製(図2)。両側穿孔で、1面の孔は径4mm、他面のは径3.1mm、中心径2.5mmの孔である。一部傷ついたような箇所があるが、本来の凹みかもしれない。

頭部右側のは長さ1.78cm(図4)、左側のは長さ1.61cm(図5)で、ともに両側穿孔、骨盤左側のは長さ1.8mm(図3)で片側穿孔である。孔の中心径1mmほどとなる。背のまるみがC字形に近く、すべて硬玉製で、古式の勾玉に属する^①。

人骨東側で小形勾玉1個が骨盤右側にあり、傍らに玉密集のあとがあるほか、他の3個は頭部両側から上腕骨へほぼ等間隔に散っている。4個とも勾玉の頭を北へ尾の方を南に向けている。

(2) 管 玉

頭部両脇から両肩上へかけ、頭部右側で小形勾玉1個と小さめな管玉10個(図6~15)、左側で小形勾玉1個と小さめな管玉5個(図16~20)、また右肩上に小さめな管玉8個(図21~28)、左肩上の小さめな管玉10個(図29~38)はややこまかく切られている。10個の中、1個は3個分ほどの長さで切っていない(図28)。小さめな管玉と小形勾玉は、個数からみて、頸飾りをなしていたかもしれない。

右上腕骨外側に接し、大きめの管玉22個(図39~60)、左上腕骨外側に大きめの管玉27個(61~87)、両側とも小さめな管玉を含むが、それぞれ主に南北の方向に並び散り、またかたまっている。

管玉の小さめのは長さ3.9mm~27.8mm・外径2.5mm~3.6mm・孔径1.2mm~2.2mm、大き

めのは長さ5.4mm~32.6mm・外径3.1mm~9.4mm・孔径1mm~4.3mmにわたり、碧玉製で、緑青色、暗緑色が主となっている。

両側穿孔の明らかな管玉とくさび形を呈した片側穿孔とみられるものと両端孔径の同じく通ったものがある。小さめな管玉では全て両側穿孔であり、大きめの管玉では片側穿孔が主となっている。両側穿孔の場合も、大きめのははじめ片側穿孔し、その後両側から穿孔したとみられるものがある。

(3) 小玉

右上腕骨外側の管玉群南端から7cmほどおいて小玉がとびとびに下肢の方へ長さ約1mにわたり散っていた。骨盤右側の周りに多く、とくに右側上方に約70個も密集していた。右脛骨外側辺に玉密集の痕跡が大小6箇所ある。

左上腕骨外側の管玉群南端からも15cmほどおいて小玉がとびとびに下肢の方へ長さ約56cmにわたり散っていた。骨盤左側の小形勾玉わきに径約3.5cmの密集跡、左大腿骨外側に幅約5cm~約2cm、長さ約30cm細長く足先の方向にせばまった小玉密集跡がある。

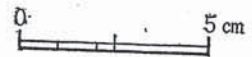
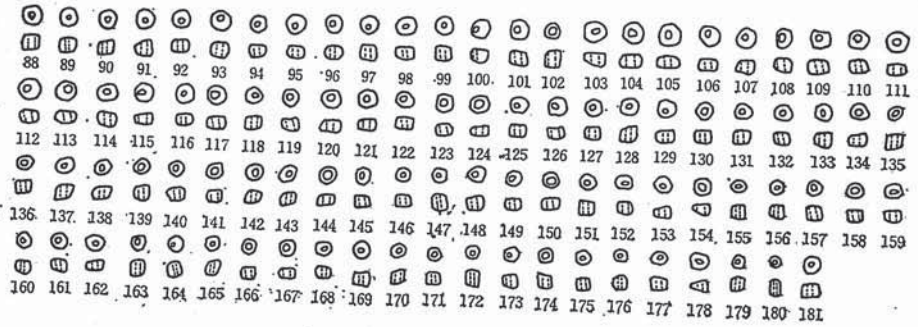
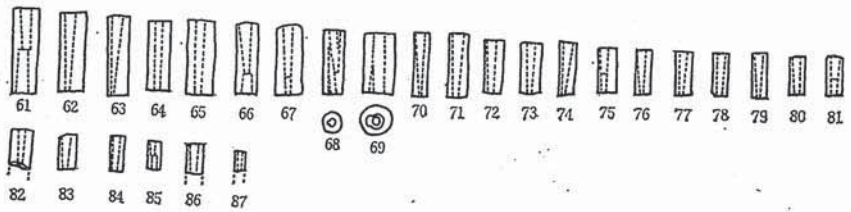
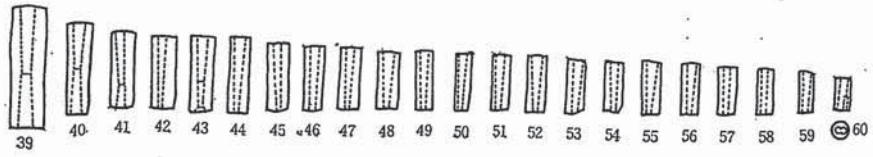
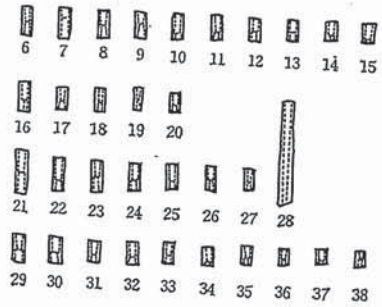
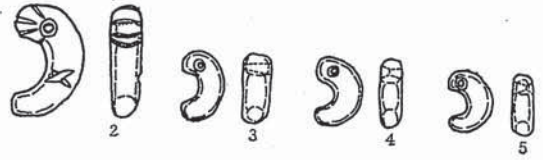
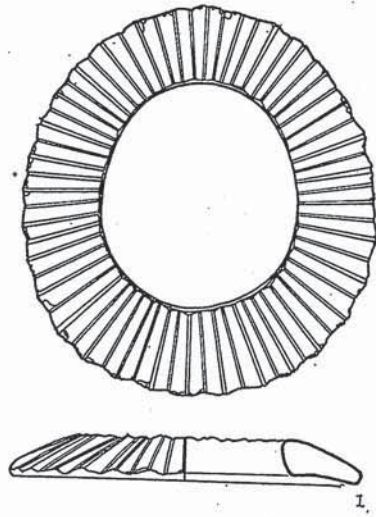
小玉は合計94個(図88~181)が数えられ、密集跡の小玉とともにおそらく数百個あったのではないかと想像される。すき通った淡青色のガラス製で、高さ2.8mm~4.6mm・外径3.5mm~6mm・孔径0.7mm~2.4mmにわたり、不整形なところがある。

小形勾玉を含んだ小さめな管玉が両肩上方へ寄り、大きめな管玉が上腕骨両外側に接し、やや大形の勾玉が左上腕骨内側に、それぞれ集まり、また多くの小玉のうち右側骨盤上方の1箇所はとくに寄っている。胸部内にはみられない。こうした配列が頸飾状を呈していることは察せられるが、勾玉・管玉・小玉の組み合わせやちりかたがどうなっていたのかは疑問がある。

大阪府柏原市国分ヌク谷北塚古墳の粘土櫛内遺物配列実測図の玉類残存の形を見ると、玉2群、玉3群で大きめな管玉は何を根玉としたか明らかでない。残存の形が向野田の大きめの管玉残存の在りかたに似たところがある。2群、3群はもと連条のままで副葬されたと思われる。玉1群は2群、3群の間やや上方に小形勾玉と小さめな管玉が1箇所寄っている。小さめの管玉の在りかたにもやや似たところがある。調査者は着装させることなく、別個に副葬された^⑩とみられている。北塚の場合、両側の大きめな管玉の南側が工事で切断され、その続きに向野田の場合のように小玉群があったかどうか明らかでない。

小形勾玉と小さめな管玉は、向野田の場合、頭骨西側に勾玉1個・管玉10個、頭骨東側に勾玉1個・管玉5個、左肩上に管玉10個、右肩上に管玉8個があり、一連のものであったらしい。両上腕骨外側の大きめな管玉は、西側に22個、東側に27個と大きめの勾玉1個があり、北塚の例と同じく、一連のものであったろう。そして向野田の場合、東側のやや大きめな勾玉が根玉だったとみられる。

またかなり広く散った小玉の中でとくに骨盤西側で密集した約70個の小玉群が小玉として連



第 18 圖

車 輪 石 · 玉 類

糸していても、どんな在りかたをしていたか。小玉群が右手先の辺にあたり、首飾りとしてのほか手にもまかれたことがあったのではなかろうか。骨盤左側の勾玉は散った小玉の根玉であったとみられる。ガラス製小玉は、現在合計94個あるけれど、実測図の上に西側で70個のほか63個計133個、三連玉4個、割れたもの4個があり、東側で49個、三連玉10個がみとめられた。ほかに小玉の破碎・分散した痕跡が大小8個所ほどある。何故破碎したか、軟質のガラスだったせいであろうか。

向野田の場合、北塚とちがい、人骨をめぐる玉類が分散していた。分散の状況から小さめの管玉と小形勾玉で一連、大きめの管玉と大きめの勾玉でもう一連、ほかに小玉の連糸したものが考えられる。

人骨の周りに分散し、首飾りの玉の緒が切れて散ったという見方が自然なように思われるけれど、その散りかたがヌク谷北塚の例に似たところがあり、着装のままでなく、別に副装されたような疑いもある。向野田の場合、勾玉が4個とも尾が一様に南を指している点で、切れて散ったにしてはややおかしいようである。また小玉が上体でなく、足先の方へかなり広く散っていることも注意される。

玉の緒が切れて散ったか、また切って散らしたか、後者についての説もあるが、その反論もある。

第5表

勾玉計測表

単位 mm

図番号	出土地点	長さ (縦)	長さ (横)	最大幅	孔径		色調	備考
2	左腕の脇付近	29.4	18.5	8.2	4.0	3.1	暗黄緑色	両側穿孔、丁字頭(4本)の沈線、表裏に刻線
3	左骨盤横	18.0	11.1	7.0	2.0	1.2	〃	片側穿孔
4	頭部右側	17.8	12.3	6.1	2.8	2.4	黄緑色	両側穿孔
5	頭部左側	16.1	11.8	5.6	2.7	2.7	暗黄緑色	両側穿孔

第 6 表

管 玉 計 測 表

単位 ㎜

図番号	出土地点	長さ	両 端 部				色 調	備 考
			径	孔 径				
6	頭 部 右 側	7.6	3.0	3.1	1.8	1.9	緑 青 色	両側穿孔
7	"	8.0	3.4	3.2	1.7	1.9	"	"
8	"	7.2	3.0	3.2	1.8	1.7	"	"
9	"	6.6	3.3	3.1	1.8	1.9	"	"
10	"	7.0	3.0	3.0	1.6	1.5	"	"
11	"	6.7	2.8	2.9	1.7	1.6	"	"
12	"	6.0	3.1	3.1	1.7	1.7	"	"
13	"	5.8	2.9	2.9	1.7	1.8	"	"
14	"	5.2	3.1	3.1	1.9	1.5	"	"
15	"	5.5	3.6	3.4	2.1	1.8	"	"
16	頭 部 左 側	8.3	3.4	3.4	1.8	1.6	"	"
17	"	5.9	3.4	3.3	1.8	1.6	"	"
18	"	6.7	3.0	2.8	1.4	1.5	"	"
19	"	6.1	2.6	2.5	1.6	1.4	"	"
20	"	5.3	2.9	2.9	1.5	1.5	"	"
21	右 肩 北 側	11.8	3.6	3.6	2.2	2.2	"	"
22	"	9.2	3.4	3.1	2.0	2.0	"	"
23	"	8.2	3.2	3.2	1.6	1.5	"	"
24	"	7.4	3.1	3.3	1.9	1.7	"	"
25	"	7.0	3.3	3.3	2.0	1.6	"	"
26	"	6.9	2.9	2.8	1.6	1.5	"	"
27	"	5.7	2.7	2.8	1.4	1.2	"	"
28	"	27.8	3.7	3.2	1.5	1.8	"	"
29	左 肩 北 側	7.7	3.6	3.5	2.1	2.1	"	"
30	"	7.4	3.3	3.2	2.1	1.9	"	"
31	"	6.2	3.2	3.3	1.6	1.5	"	"
32	"	6.3	2.9	3.0	1.8	1.8	"	"
33	"	5.5	3.0	3.0	1.5	1.4	"	"
34	"	5.4	2.8	2.8	1.8	1.5	"	"
35	"	4.8	2.8	3.0	1.4	1.4	"	"
36	"	4.6	2.7	2.7	1.4	1.5	"	"
37	"	4.0	2.9	2.9	1.6	1.5	"	"
38	"	3.9	2.8	2.7	1.4	1.4	"	"
39	肩 部 右 側	32.6	9.4	9.0	4.3	3.8	"	"
40	"	24.0	6.6	6.1	2.6	2.7	緑 灰 色	"
41	"	24.0	6.5	6.4	2.7	2.2	"	"
42	"	19.3	6.3	6.4	2.3	1.3	"	(片側二孔)
43	"	20.2	6.5	6.4	2.6	1.3	"	片側穿孔
44	"	20.2	5.6	5.6	3.0	1.4	"	両側穿孔
45	"	18.2	6.8	5.7	1.1	2.3	淡 灰 緑 色	片側穿孔 "

図番号	出土地点	長さ	両端部				色調	備考
			径	孔径				
46	肩部右侧	17.3	5.3	5.5	2.7	1.5	暗緑灰色	片側穿孔
47	"	16.7	5.5	5.5	2.4	1.6	暗青緑色	"
48	"	15.6	5.0	4.9	2.4	1.2	緑灰色	"
49	"	15.7	4.8	4.8	2.5	1.3	"	"
50	"	15.3	3.9	3.8	2.8	1.6	暗緑色	"
51	"	14.8	5.0	5.0	2.4	1.0	緑灰色	"
52	"	15.0	6.0	5.9	2.4	1.4	緑灰色	"
53	"	14.8	5.0	5.0	2.1	1.3	暗緑灰色	"
54	"	13.5	4.9	4.7	2.2	1.1	"	"
55	"	14.0	4.8	4.9	2.9	1.2	緑灰色	"
56	"	13.8	4.8	4.6	1.9	1.3	"	"
57	"	12.6	5.0	5.1	2.0	1.5	淡灰緑色	"
58	"	12.5	4.7	4.7	2.0	1.5	緑灰色	"
59	"	11.2	3.6	3.6	2.2	1.0	暗緑灰色	"
60	"	9.0	4.3	4.3	2.7	2.2	"	片側穿孔(片側二孔)
61	肩部左侧	22.8	7.0	6.6	3.0	3.3	"	両側穿孔
62	"	21.7	6.9	7.2	2.6	1.4	"	片側穿孔
63	"	21.4	6.2	5.9	3.2	1.5	緑灰色	"
64	"	19.4	6.3	6.2	2.2	1.7	"	"
65	"	20.0	7.4	7.5	2.7	1.6	暗緑灰色	"
66	"	19.2	6.2	6.3	3.2	3.2	暗緑色	両側穿孔
67	"	18.8	6.6	6.6	2.5	1.2	淡灰緑色	"
68	"	17.6	5.8	5.8	2.9	2.4	暗緑色	"(両側とも二孔)
69	"	16.8	8.4	8.3	4.0	2.7	暗青緑灰色	片側穿孔(片側二孔)
70	"	17.0	4.3	4.2	2.3	1.3	暗灰緑色	"
71	"	17.4	5.8	5.6	2.9	1.4	暗緑色	"
72	"	14.6	5.5	5.5	2.2	1.4	"	"
73	"	13.7	5.5	5.6	2.3	1.5	"	"
74	"	14.1	4.6	4.5	2.5	1.4	"	"
75	"	12.3	5.2	5.0	2.5	1.5	"	両側穿孔
76	"	12.0	4.8	4.7	1.9	1.4	暗灰緑色	片側穿孔
77	"	12.1	4.5	4.5	2.2	1.5	暗緑灰色	"
78	"	11.7	4.4	4.5	2.7	1.6	緑灰色	"
79	"	12.5	4.2	4.1	2.3	1.4	淡緑灰色	"
80	"	10.8	4.5	4.6	2.0	1.7	淡灰緑色	"
81	"	10.6	4.3	4.3	2.2	1.2	"	両側穿孔
82	"	10.2	5.8	5.7	2.0	1.5	暗緑色	片側穿孔?(欠失)
83	"	9.4	4.5	4.5	1.9	1.6	緑灰色	片側穿孔
84	"	9.4	3.7	3.7	2.7	1.8	"	"
85	"	7.9	3.2	3.4	1.6	1.6	灰緑色	両側穿孔
86	"	8.5	4.6	4.4	2.4	1.5	暗緑色	片側穿孔?(欠失)
87	"	5.4	3.1	3.2	1.5	1.3	青緑色	"?(欠失)

第 7 表

小 玉 計 測 表

(色調は全て淡青色)

単位 mm

第18図 番号	高さ	幅	孔径	第18図 番号	高さ	幅	孔径	第18図 番号	高さ	幅	孔径
88	4.4	5.1	1.8	120	3.2	5.0	1.7	152	3.6	4.5	1.4
89	4.2	4.9	1.0	121	3.4	4.8	1.7	153	3.4	4.6	1.6
90	4.1	4.7	0.9	122	3.4	4.9	1.2	154	3.4	4.9	2.0
91	3.9	5.1	1.2	123	3.0	4.8	1.7	155	5.8	4.0	1.1
92	4.0	4.8	1.4	124	2.9	5.3	2.4	156	3.9	3.7	0.9
93	4.4	5.1	1.1	125	3.5	4.3	1.5	157	3.8	4.0	1.3
94	3.4	4.3	1.2	126	2.9	4.7	2.1	158	3.5	4.1	1.7
95	3.4	4.8	1.7	127	3.3	4.2	1.7	159	3.5	4.5	1.7
96	3.3	5.0	1.1	128	3.4	4.5	1.6	160	3.3	4.3	1.0
97	4.0	4.7	1.2	129	3.8	4.8	1.5	161	3.4	4.5	1.4
98	3.9	5.1	1.1	130	3.5	4.8	1.4	162	2.8	4.8	1.3
99	4.2	4.3	1.4	131	3.6	4.6	1.4	163	3.9	4.0	1.3
100	3.9	4.6	1.2	132	3.1	4.6	1.4	164	4.0	4.0	0.7
101	4.0	4.9	1.5	133	3.9	4.7	1.4	165	3.6	4.1	0.9
102	4.6	4.1	2.0	134	2.9	5.0	1.7	166	3.1	4.0	1.6
103	3.7	5.5	2.1	135	3.7	4.3	1.6	167	3.8	4.5	1.9
104	3.6	5.8	2.1	136	3.5	4.6	1.7	168	3.0	4.2	1.3
105	3.2	6.0	1.7	137	3.5	4.2	1.6	169	3.9	4.4	1.4
106	3.4	5.5	1.3	138	5.1	3.6	1.2	170	3.7	3.8	1.4
107	3.7	4.9	1.6	139	3.9	4.5	1.4	171	3.2	3.8	0.8
108	3.4	4.8	2.2	140	3.5	4.5	1.2	172	4.5	3.5	1.0
109	3.9	5.9	1.7	141	3.8	4.7	1.7	173	3.5	4.2	1.2
110	3.4	5.0	1.5	142	3.0	4.4	1.6	174	4.0	3.7	1.7
111	2.9	5.8	2.0	143	3.0	4.5	1.3	175	3.6	3.9	1.2
112	3.1	5.2	1.9	144	2.4	4.6	1.6	176	4.0	3.7	1.1
113	3.3	5.3	1.9	145	2.9	4.0	1.3	177	3.6	4.1	1.1
114	3.0	4.8	1.5	146	3.8	4.5	1.0	178	2.8	4.6	1.8
115	3.0	5.0	2.0	147	4.5	4.0	0.9	179	4.4	3.7	1.1
116	3.0	5.0	1.1	148	4.0	4.5	1.4	180	4.4	2.8	1.0
117	3.1	4.8	2.0	149	3.4	4.5	1.4	181	3.9	4.8	1.3
118	3.3	4.8	1.2	150	3.1	4.5	1.9				
119	3.4	4.4	2.0	151	4.0	4.0	1.3				

3. 車 輪 石 (第18図1)

この車輪石は骨盤右脇下、右大腿骨上部に接し、棺内西側壁の間に表を出し、卵形の環体の幅広い方を北にして、乱れた形でなく、置いたような形で見出された。大腿骨に接した所で赤色顔料がたまり、現在も赤色顔料が付着している。

仰臥伸展葬として丁度被葬者の右手首辺にあたり、着装したまま埋葬されたものかどうか、車輪石の在りかたに乱れた所がないようで、埋葬のときに置かれたかという疑いが持たれる。

車輪石の裏面には少しづつ欠けた所があり、また小さな傷がある。なお環体の孔の周りに白い石灰分らしいあとが残る。内孔の中央長径6.0cm、同短径5.1cm、調査見学の女子大生の腕に通ったことがある。環体の幅2cm～2.3cm、稜に0.5mmほどの細い溝が通り、その両側へ扇状に低くなる。稜の刻線は32本を数えた。稜と稜の間のくぼみにも同数の刻線がある。水平においた高さ1.1cm、両端へゆるやかな弧状を呈する。環体の孔は裏へやや斜めに削られるが、厚さ8mm～2mmほどある。長さ縦10.2cm・横9.3cmの完形の碧玉製車輪石である。暗青色の良質の石材で作られている。石質は専門家の鑑定に待ちたい。

弥生時代に用いられたカサガイの貝輪をうつしたという車輪石の表面の文様はカサガイの肋条を形式化したもので、また孔径6cm以下のものが多く、腕を通すのがむずかしく、実用品でなく、宝器的性格のものとされている^⑮。車輪石の古い形式では、(イ)卵形の輪郭、(ロ)幅の広い環帯、(ハ)扁平、(ニ)内孔に向かって傾斜する裏面などのことがあげられている^⑯。新しい車輪石では、刻線を用いずに、面の起伏で装飾を構成したり、また裏面を平らにして、厚手に作られたものもある^⑰。

福岡県沖の島十七号遺跡の車輪石は、放射状の刻線の数にちがいがあられるけれど、2個とも卵形ではなく、円形をなしている^⑱。同飯氏山古墳の車輪石も円形である。熊本県津袋大塚古墳の残欠の車輪石も推定円形を呈している^⑲。なお福岡県沖出古墳の車輪石片がある。

校正中、九州歴史資料館渡辺正気氏から次のご教示をいただいた。「沖出古墳は嘉穂郡稲築町沖出。円墳(人によれば前方後円墳という人も)。数年前調査未発表。福岡県文化課浜田也氏によると、竪穴系横口式石室の中に舟形石棺あり、盗掘にあっていて、出土品は車輪信石・石釧各破片1片のみとのこと。飯氏山古墳のは、福岡市西区飯氏に所在する古墳出土とします。ここには前方後円墳も数基あります。」

「日本原始美術6」の参考図版によると、鳥取県羽合町馬ノ山4号墳の車輪石は卵形で、内孔は円形、稜とくぼみの刻線はそれぞれ30本を数え、向野田古墳の車輪石に近い例として注目される。向野田の場合、その稜とくぼみの刻線はそれぞれ32本、内孔は卵形状となっている。

4. 貝 輪

向野田の棺内被葬者の足先から南へ約50cmへだて、棺内南壁までの間に、棺内南壁からは北へ約70cmの間で、床面に貝輪片が20個ほど散っていた。

貝輪片の散った辺の床面には、やや黒ずんだ赤色顔料がひろまり、その色を帯びた粘土とみられる小粒が一面に目立った。貝輪は完形のものではなく、弧状に欠け、腐蝕から細く薄くなり、粒々が吹きでたようにつき、白みがあり、淡褐色を呈していた。南壁から北へ25cm~40cmほどの間にある2個の貝輪片は長径6cmと6.7cm・幅約6mmで、円形に近い様相を示す。

散った弧状の貝輪の貝の東・北側の欠けたものが多い。また赤色顔料や粘土の小粒などが貝輪片の散った付近に寄っている。被葬者の埋納された棺身が北から南へやや傾斜していることとかかわりがあるだろうか。

手許にある灘貝塚表採の貝輪片も弧状のものであるけれど、放射肋のあるもの、その痕跡のあるもの、磨かれて分からないが、裏面にその痕跡の窺われるものなどがある。向野田の貝輪片はその痕跡すら明らかでなく、弧状を呈したところから二枚貝がほとんどではないかと思われる。専門家の鑑定を待ちたい。

向野田の場合、女性被葬者はすでに車輪石をそなえ、埋葬にあたり、かつて用いた貝輪をその足先の空間に副葬されたものであろう。

校正中、玉名市繁根木、円墳・複室の伝佐山古墳出土3個のアカニシ製貝輪の例について、同市文化財保護委員会田添夏喜委員長からご教示をいただいた。

5. 鉄 器 類

鉄器はすべて石室内壁と石棺外側の間に置かれる。鉄器の種類は剣・刀・刀子・鉄斧などがある。棺内に利器はなく、鏡と装身具で被葬者は囲まれていた。

石室と石棺の間で、墳丘主軸の方向に添った石室・石棺の長辺両側はほとんど相接して狭く、その小口両側では北側石棺周りの平縁部幅10.3cmに礫床幅30cmあり、南側の石棺平縁部幅約15cmに礫床幅約10cm前後ある。竪穴式石室の床面として北側の方が南側より大きく広めになっている。鉄器類も南側は刀子があるだけで、数も少ないのに、北側では刀子のほか刀や鉄斧などあり、数も多い。棺内北側に被葬者の頭部が置かれたことともかかわりがある。

北側の礫床に30数本の刀子が主に棺壁に並行し、刃先を西へ向けていた。直刀が同じく並行し、柄頭を東に、折れた刃部を西へ向けていた。礫床の東北隅に3個の鉄斧が刃部を石室の東北隅へ向けてあった。また石棺の北側平縁部上に直刀が、礫床の直刀と同じく柄頭を東に、折

れた刃部を西へ向けていた。上記の直刀2本とも刃先は石棺の方、南へ向いていたが、散った刀子の中にも同じく刃先が石棺へ向いてあった。刀や刀子が切先を西へ向けていたのは丘陵西側の方へ平野がひらけていたこととかかわりがあるかもしれない。

石棺長辺の西側では、石棺北側平縁部上の北端から東側に直刀(刀1)、西側に長剣(剣1)がそれぞれ柄頭を北に、切先を南へ向けてあった。直刀の刃先は石棺の方、西へ向けていた。石棺両外側に石室北壁から2.6mほど先に、短剣がそれぞれ1本柄頭を北に切先を南に向け、また両外側南端で東側に短剣(剣3)、西側に直刀(刀4)がそれぞれ切先を南へ向けていた。西側の直刀は刃先を西へ向けてあった。上記の剣や刀の間には刀子が数本ずつあり、刀子も主に切先を南へ向けていた。この南へ向けていたのは被葬者の伸展葬の方向とかかわりがあるろう。

(1) 剣(第19図)

① 長 剣(剣1)

石棺西側平縁部上の北端におかれた長剣は、現存長1.18m、刃部は長さ1.09m、身幅4.2cm～4.8cm・厚さ1cm余ある。刃部の断面はレンズ状に近いけれど、鑄は明らかではない。全体に錆びて腐蝕したところもあるが、欠けたところはほとんどない。被葬者が女性であり、実際それを着装したかどうか、剣の長大さからみると、疑わしい。むしろ侍者が持って従ったか、普通は鄭重に安置された剣ではなかったかと思われる。権威の象徴であり、また神聖視された剣であつたらう。

木柄の残存長17.1cm、断面楕円形の木柄両端は比較的よく残り、外反した両端の長径4.3cm、その間は長径約2.5cmに腐蝕し、狭まる。木柄は刃部接着の所から約3cmでふたつに折れた。調査当初のときは、折れていなかったものである。折れた木柄の両側を見ると、露出した長さ約6.5cm・幅8mm・深さ2.5cmほどの溝になり、溝の間に茎が通り、木柄の先へ8mmほど突き出ている。木柄の先は垂直にとれており、茎の部分を覆う柄頭に何か外装がついていたに違いない。柄頭と柄元がともに柄間から反り上りをみせ残存しており、両者に木製かなか装具がついていたとみられる。柄頭の外装の長さは少なくとも1cm以上あるとみられ、向野田の長剣は推定全長1.20m前後とならう。

刃部にはところどころ布痕があり、木柄にこまかい糸目のようなあとが残る。木柄は腐蝕した所があるが、七分通り残存し、漆を塗ったか、薄膜のような残片がついている。木柄の茎に当る部分は茎を両側から挟むように削られ、径3mmの目釘孔がある。

剣の外装(こしらえ)は、柄木を合わせ、目釘をうち、木地のままか、糸で繁巻にして漆塗としたものが、前期には普通とあり、参考されよう。^④

なお、向野田の長剣は刃部にも鏽着した布痕がある。木鞘のあとはみられなかったが、もしあったとすれば、その残片は木柄と同じく腐蝕しても多少なり残つたらう。剣身は布帛に包まれていたとみられる。

② 短 剣 (剣2)

石棺西側平縁部で、中央よりやや南に1本ずつ短剣がならび、もう1本は棺外東側で南端近くおかれる。

棺外西側の短剣は、残存長36.3cm・刃部の長さ28.0cm・幅3.1cm~3.5cm・厚さ6mm~9mm、刃部断面はレンズ状を呈していて、鑄は明らかでない。刃部は両関とみえる。刃部と木柄の接合部は呑口形を残し、糸の繁巻きが部分的にあり、その裏にも糸巻の部分が残る。木柄は腐蝕して呑口式の柄縁から3.5cm辺で折れている。糸巻の残存した続きに漆を塗ったかと思われる所がある。糸巻きの糸は、目算で太さ1mm弱・幅5mmで6本、6mmで7本ほど数えられた。呑口に近い木柄の断面は楕円形の両側をすばめたような形で、長径3.5cm・幅1.5cm、茎の断面長さ1.9cm・幅5mmの長方形で、目釘孔が残る。

③ 短 剣 (剣3)

石棺東側平縁部の中央よりやや南の短剣は、残存長39.7cm・刃部の長さ33.6cm・身幅2.2cm~2.7cm・厚さ5mm~7mm。刃部に布痕が残る。刃部断面はレンズ状で、杏仁形の木柄断面長径の両端にほぼ接する。木柄と刃部の接着部は直線式で、長径の長さ2.8cm・幅1.2cm、繁巻の糸のあと幅1mmに3本くらい、黒色残り、漆のあとであろうか、石棺平面図で、腐蝕した木柄から北へ8cmほど離れ、残存長30cmほどの棒状の残欠がある。もしその短剣に続いたものとするれば、その短剣は剣ではなく、ヤリ先であったとみられる。4世紀にさかのぼるといふ奈良県桜井市メスリ山古墳では、鉄剣かヤリ先かとあつかわれた鉄剣状の利器が、のちに鉄製ヤリの刃部として記されているのが参考される。刃部と柄元の接着には、呑口式と直線式がある。向野田の場合も、短剣でなく、ヤリ先である可能性がある。1.20m前後の長剣があり、長槍であれば、儀礼としても威儀がそなえられるように思われる。

④ 短 剣 (剣4)

石棺東側平縁部の南端に残存長31cm、身幅3.3cm~3.7cm、厚さ約5mm、断面はレンズ状をなし、刃部に関らしい部分がみえる。茎の長さ5.5cm、幅1.8cmあり、目釘孔がすかしてみえる。茎の末端はほぼ直線的に残る。腐蝕した木柄残欠に糸の繁巻のあとがあり、刃部にもわずかな布痕が残る。

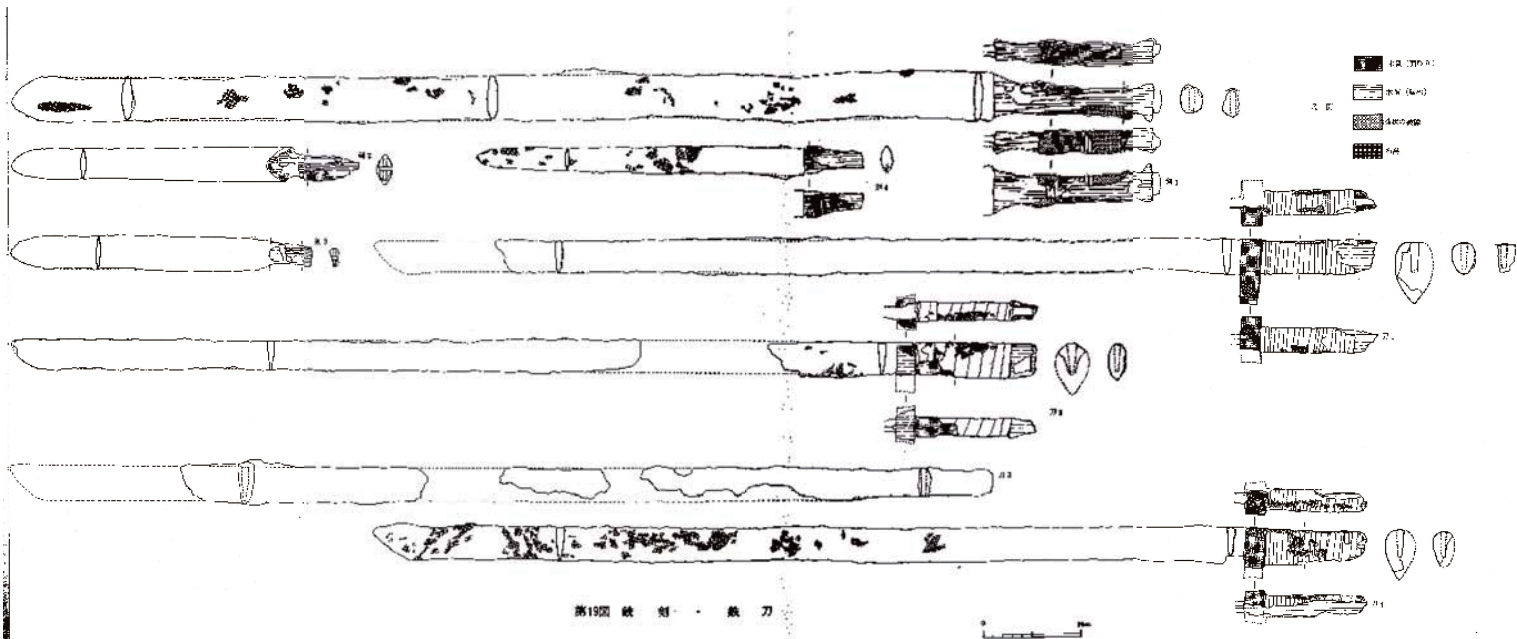
剣類の刃部も腐蝕し、小石などが付着するが、もとはすべて布帛で包まれていたものとみられる。

(2) 直 刀 (第19図)

① 直 刀 (刀1)

石棺東側平縁部上に、柄を北に刃部を南に向けてあった。

石棺平面図の推定残存長1.02mあり、切先を欠く。当初の実測で残存長72.6cm、刃部と柄は折れていた。刃部長さ59cm、棟幅8mm、身幅先の方で3.5cm、中ほどで3.2cm、関近くで3.7



第192圖 鐵 劍 · 鐵 刀

cm、先の方が腐蝕変形していた。刃部断面はくさび形で、刃部はやや内反りする。刃先は石棺の方、西へ向けていた。

刃関から茎へかけ、やや中凹みの幅2cm、半かけの木質部がつき、とり上げると3個ほどに割れた。錆どめ補修したところ、木質部の断面は推定長径6.6cm・短径3.8cmとなり、柄の下方向へ長めに垂れ、驚いた。木質部に一部布痕がつく。

茎から身の棟までまっすぐな直刀で、木質部は茎を両側からはさむ形につき、柄木も同じく茎を中にし、木質部も柄木も茎の上面はそのまま柄部を平紐で柄頭の方から巻く。巻きかさねた紐ごとの外見上の幅4mm~6mmほどある。折れた柄元を見ると、茎との間が空になっていた。木柄の断面も倒卵形近く、木質部のわきで長径3.5cm・短径2.4cm、くさび形の茎は幅8mm・垂直の長さ2.8cmで先端がやや円味をおびる。茎はその先が一部露出する。

錆どめ補修した残存長89.8cm・刃部長さ76.2cm・茎長さ13.6cmあり、茎の長さは変わらない。

② 直 刀 (刀2)

石棺北側の平縁部上に、石棺北壁に添い、柄頭の方を東に切先を西へ向けていた。

当初の石棺平面図で、折れた刃部の間が13cm離れ、1個は長さ約58cm、他の柄のある1個は長さ22cmで、身幅3cm~3.5cm、棟幅約6mm、直刀①より身幅が狭く、やや内反する。

直刀①と同じ作りで、柄元で刃関と茎にかけて幅2cmの木質部の一部が残り、そのあとがある。

木柄に直刀①と同じく平紐が巻いてあり、また柄頭が欠けていた。

刃部2個の間、13cmの空白は欠損したものか、折れ、離れたものかどうか明らかでない。錆どめ補修した1個長さ63.9cm、他の柄のある1個長さ27.4cm、計長さ91.3cmとなる。

③ 直 刀 (刀3)

石棺北側の礎床のほぼ中央に、直刀1本が石棺と石室の短辺に並行した形であった。

柄は欠けるが、東にあったと見られ、切先は西へ向け、写真で見ると、先の方で折れ、またつづく。当初の石棺平面図では残存長約90cmあり、刃先は石棺の方、南へ向けていた。

錆どめ補修した刃部2個があり、1個は長さ50.8cm、身幅2.8cm・棟幅8mm、他の1個は25.3cm、身幅約3.4cm・棟幅9mmで、かなり腐蝕変形していた。2個はつながりがあり、計長さ76.1cmとなる。先の方で折れた刃部1個が不足する。

④ 直 刀 (刀4)

石棺西側平縁部上の南端に直刀1本があり、柄を北に切先を南に向けていた。刃先は西へ向けてあった。その平縁部北端の長剣とともにほぼ完形をなしている。

石棺平面図での長さ1.07cm。当初の実測で残存長1.01cm・刃部長さ86.8cm・茎長さ14.2cm・身幅3.1cm~3.6cm・棟幅約8mmある。刃部断面はくさび形で、刃部中ほどから先へやや内反りしたところがある。

刃関の深さ約8mmで、そこから長さ2cmほど幅約2.7cmの茎が露出し、その続きに木質部がつく。木質部は幅2cm、長さ約4cm残り、倒卵形近く、他の直刀のと作りは同じであろう。ただ刃関と木質部の間2cmの空白になにかあったか明らかでない。

木柄には平紐を巻いてあり、木質部に布痕が一部つく。木柄や木質部には漆かなにか塗ったとみられる。また木質部の上になにか被せてあったかどうか分からない。

錆どめ補修した直刀の長さ1.01mある。

直刀の場合、柄は平紐巻であるのに対して剣の場合は糸の繁巻となっている。長剣にも糸を巻いたあとがあり、平紐巻ではないことが注意される。また直刀に折損の多いのは、或は実際に用いられたことの多かったことを示すものであろうか。

なお、突くという両刃の剣と切るという片刃の刀について、剣は刀とともに古墳時代前期に多く作られ、次第にその長さを増して刀に近づきながら、後期には主役を刀にゆずったという。向野田の場合、おそらく剣の長さも頂点近くに達し、やがて刀の多くなる前段階にあたるように思われる。

(3) 刀 子 (第20図～第23図)

向野田古墳の副葬品中、数の多い点で目立つのが刀子である。石棺外をとりまいて置かれた刀子は本数の少ない剣、刀に対応し、なにか補強するかのように散在していた。

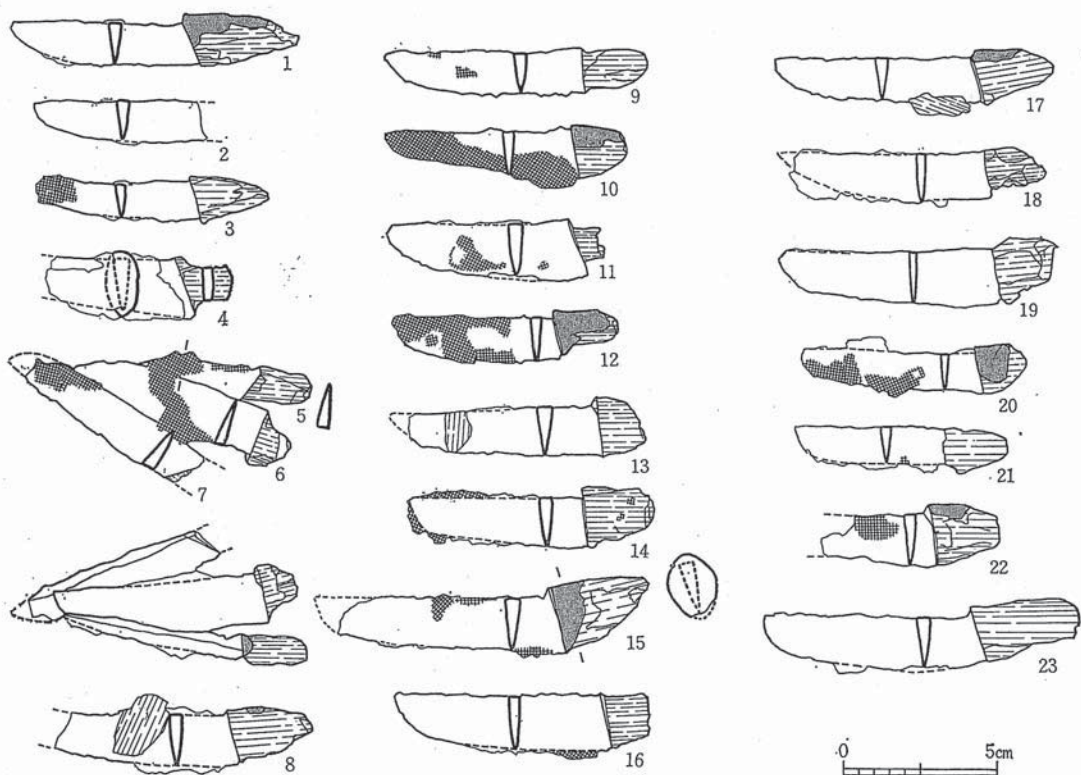
調査当初、やむなくとり上げた石棺外北側では37本を数えた。北側には折損した直刀などのほか東北隅に3個の鉄斧も置かれていた。北側に鉄器類の多いことは棺内被葬者の頭部が北側に安置されたこととかかわりがある。足部の先にあたる石棺外南側では刀子は7本を数えたにすぎなかった。その後の調査で石棺外東西両側の平縁部上に、東側で14本、西側で9本が測図され、その他直刀などに付着して見出されたものがある。現在78本を数える。

刀子は刃部の長さ5cm～6cm余りのものが多く、長くて10cm余りである。刃部断面はくさび形で、身幅約1cm～1.7cm、棟幅2mmほどある。木柄が腐蝕してなくなり、露出した茎は長さ1.5cm・幅1cm・厚さ2mmほどの長方形で、その断面も長方形をなしている。そして両関と刃関の2種類がある。

刃部と木柄の接着で、刃部の棟から柄元へやや斜めになったものが大部分で、垂直というか、まっすぐのものは3本ほどにすぎない。まっすぐ垂直に接着するものを仮に直線式というなら、斜めのものを斜線式とよんでおく。兵庫県朝来郡城の山古墳の小形刀子と似ている^②。大阪府富田林真名井古墳の刀子も柄口と刃部がやや斜角をなしている^③。

木柄の断面は倒ドンダリ形に近く、柄木は腐蝕しながらもほとんどの刀子に残存し、柄元の方に木質部の残るものが多い。

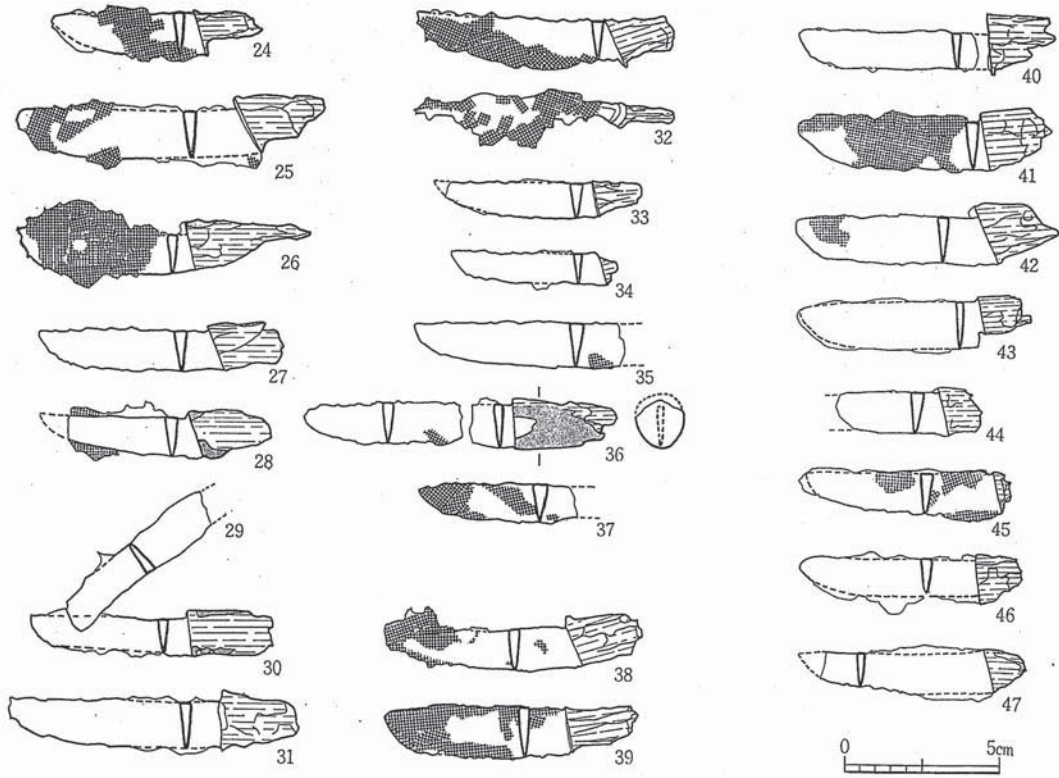
向野田の刀子には、すべてとってよいほど布痕がついていた。布痕は1枚～6枚重なるものがある。刀子を抜身のままなにかで包んだものとみられる。別表の通り、特にNでは重ね



第 20 圖

刀

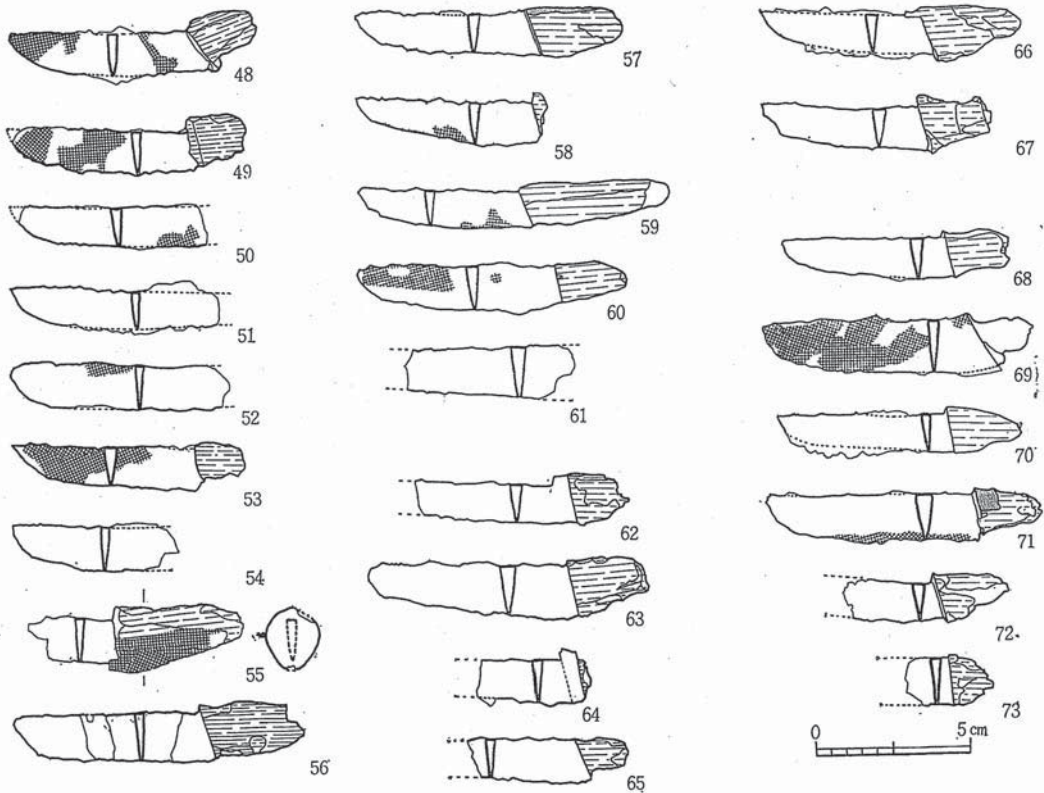
子 (1)



第 21 图

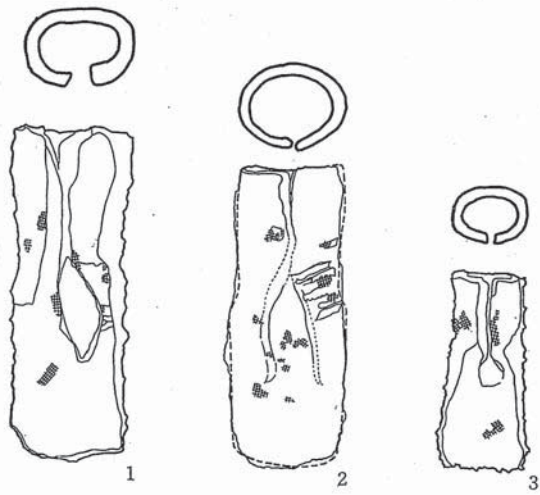
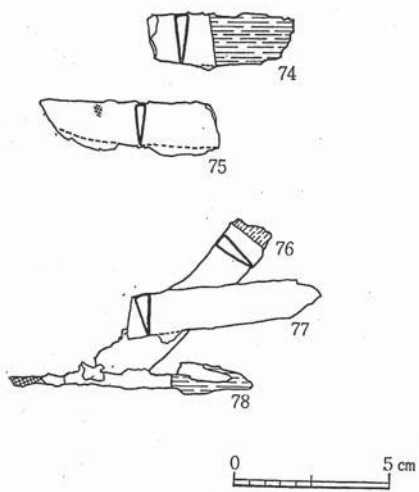
刀

子 (2)






第 22 图

刀 子 (3)



凡例

-  木質 (面取り)
-  木質 (腐朽)
-  布帛

第 23 図

刀 子 (4) ・ 鉄 斧

の枚数が目立って残存していた。腐蝕があったにしても、同じ場所のものなので、もし重ねの枚数のちがいがみとめられるとすれば、副葬時の鄭重さを示すものかもしれない。

城ノ山古墳の刀子にも布痕があった。城の山の1本は柄口部分に鉄製のうす板か漆の上に鉄錆が固着したようなあとがあり、また真名井では皮革様のもので作られたとみらる鞘の付着があった。向野田の1本にも木質でないなにか鞘状のものが付着していた。向野田古墳の竪穴式石室と石棺の間にあった78本の刀子は、数量の上からも注目される。剣・刀・刀子などの木質や布痕については専門家の鑑定を待ちたい。

第 8 表 刀子布痕の重ね枚数および繊維方向一覧表 (刀子78本)

重ね枚数	繊維方向														
	不明	1			2			3			4		5	6	
本数	15	13	2	23	2	1	3	13	1	1	1	1	1	1	1
計	15	13	27			17			2		1	3			

第 9 表 刀子出土個所別、布痕重ね枚数一覧表

重ね枚数	N(石室内、石棺外 北側)	W(石室内、石棺外 西側)	E(石室内、石棺外 東側)	S(石室内、石棺外 南側)	個所不明	計
不明	4	1	3	4	3	15
1	3	3	2	2	3	13
2	16	2	6	1	2	27
3	9	3	3	1	1	17
4	2					2
5		1				1
6	3					3
計	37	10	14	8	9	78

第 10 表

刀 子 計 測 表

単位 ㎜

図番号	出土個 所番号	現存長	刃部長	柄部長	身 幅	備 考
19-1	N 2	93.7	57.4	36.3	12.2	刃部に布帛 (4重・1方向)
19-2	N 4	56.3	56.3		13.5	
19-3	N 5	76.0	50.7	25.3	12.8	刃部に布帛 (2重・1方向) 2個所
19-4	N 6	60.3	42.6	17.7	16.8	刃部に鞘状のものが付着 (木質ではない)
19-5	N 7	82.3	59.4	22.9	16.9	刃部に布帛 (2重・2方向) 6・7と錆着
19-6	N 8	77.5	65.0	12.5	15.2	刃部に布帛 (2重・2方向) 5・7と錆着
19-7	N 9	95.9	57.9	38.0	14.5	刃部に布帛 (2重・2方向) 5・6と錆着
19-8	N10	84.5	57.3	27.2	16.0	刃部に布帛 (2重・3方向)
19-9	N11	85.5	63.2	22.3	12.7	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-10	N12	78.3	60.0	18.3	14.0	刃部に布帛 (3重・1方向)
19-11	N13	70.0	61.0	9.0	15.8	刃部に布帛 (4重・3方向)
19-12	N14	72.7	51.7	21.0	14.0	刃部に布帛 (3重・3方向)
19-13	N15	77.0	60.1	16.9	15.6	刃部先端に布帛 (2重・2方向)
19-14	N16	79.8	56.7	23.1	15.8	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-15	N17	100.8	67.0	33.8	15.4	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-16	N19	82.1	66.1	16.0	16.8	刃部に布帛 (3重・3方向)
19-17	N20	90.2	63.6	26.6	14.0	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-18	N21	83.4	63.6	19.8	13.8	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-19	N22	89.8	69.5	20.3	17.2	柄部に布帛 (2重・2方向) 刃部に布帛 (2重・2方向)
19-20	N23	72.8	56.7	16.1	12.8	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-21	N24	68.8	49.1	19.7	11.5	刃部に布帛 (3重・3方向)
19-22	N25	58.8	33.9	24.9	15.5	柄部から刃部にかけて布帛 (2重・2方向)
19-23	N26	103.0	68.0	35.0	14.4	刃部に布帛 (2重・1方向)

図番号	出土個 所番号	現存長	刃部長	柄部長	身幅	備考
20—24	N27	69.5	47.7	21.8	12.8	刃部に布帛(3重・3方向)
20—25	N28	100.5	71.3	29.2	16.3	刃部に布帛(6重・3方向)
20—26	N29	95.6	54.9	40.7	12.0	刃部に布帛(6重・4方向)
20—27	N30	79.3	55.9	23.4	12.8	
20—28	N31	67.7	39.5	28.2	12.2	刃部に布帛(3重・3方向)
20—29	N32	59.4	59.4		11.5	刃部に布帛(3重・2方向) 30と錆着
20—30	N33	79.3	51.1	28.2	11.2	刃部に布帛(3重・2方向) 29と錆着
20—31	N34	94.8	68.6	26.2	14.9	刃部に布帛(2重・2方向)
20—32	N35	84.3	62.2	22.1	12.8	刃部に布帛(6重・5方向)
20—33	N36	63.7	48.4	15.3	12.2	
20—34	N37	54.3	48.3	6.0	10.2	刃部に布帛(1重・1方向)
20—35	N38	67.9	67.9		13.3	刃部に布帛(1重・1方向)
20—36	N39	48.7 51.7	13.6 51.7	35.1	14.3 12.5	刃部に布帛(1重・1方向)
20—37	N40	52.3	52.3		11.7	刃部に布帛(3重・3方向)
20—38	W 1	83.6	59.6	24.0	13.0	刃部に布帛(5重・5方向)
20—39	W 2	81.8	59.1	22.7	13.5	刃部に布帛(3重・3方向)
20—40	W 3	78.8	55.4	23.4	12.1	刃部に布帛(1重・1方向)
20—41	W 4	82.3	59.3	23.0	12.6	刃部に布帛(2重・2方向)
20—42	W 5	85.0	57.3	27.7	14.2	刃部に布帛(2重・2方向)
20—43	W 6	75.5	58.8	16.7	15.3	刃部に布帛(1重・1方向)
20—44	W 7	47.0	33.8	13.2	12.0	刃部に布帛(1重・1方向)
20—45	W 8	68.5	63.3	5.2	12.7	刃部に布帛(3重・3方向)
20—46	W 9	71.6	57.6	14.0	12.0	刃部に布帛(3重・3方向)
20—47	W10	66.7	54.4	12.3	10.4	
21—48	E 1	79.5	58.5	21.0	12.2	刃部に布帛(3重・3方向)
21—49	E 2	76.7	59.9	16.8	12.2	刃部に布帛(2重・3方向)

図番号	出土個 所番号	現存長	刃部長	柄部長	身幅	備	考
21-50	E 3	61.6	61.6		12.4	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-51	E 4	69.4	69.4		12.0	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-52	E 5	71.4	71.4		12.7	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-53	E 6	75.0	57.8	17.2	11.2	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-54	E 7	54.7	54.7		14.4		
21-55	E 9	69.9	27.5	42.4	12.8	柄部に布帛 (3重・3方向)	
21-56	E10	94.8	60.9	33.4	15.0		
21-57	E11	87.0	55.8	31.2	11.8	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-58	E12	62.2	57.9	4.3	12.2	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-59	E13	101.9	53.2	48.7	11.2	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-60	E14	86.8	64.8	22.0	14.0	刃部に布帛 (3重・3方向)	
21-61	E15	54.6	48.4	6.2	15.4		
21-62	S 1	69.7	49.9	19.8	12.3		
21-63	S 2	90.9	65.9	25.0	16.3	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-64	S 3	36.7	33.0	3.7	13.7		
21-65	S 4	52.0	35.4	16.6	13.0		
21-66	S 7	85.0	53.3	31.7	12.5	刃部に布帛 (3重・3方向)	
21-67	S 8	74.5	51.2	23.3	12.4		
21-68	不明	74.5	53.6	20.9	12.6	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-69	〃	87.2	68.6	18.6	16.0	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-70	〃	78.5	55.3	23.2	10.3	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-71	〃	89.6	69.2	20.4	13.2	刃部に布帛 (3重・2方向)	
21-72	〃	53.1	28.9	24.2	11.6		
21-73	〃	28.4	12.8	15.6	14.2		
22-74	〃	48.5	20.3	28.2	15.3		
22-75	〃	70.0	64.2	5.8	13.8	刃部に布帛 (2重・2方向)	
22-76	〃	67.0	67.0		14.7	刃部に布帛 (1重・1方向) 77・78と錆着	
22-77	〃	80.0	55.2	24.8	11.9	刃部に布帛 (1重・1方向) 76・78と錆着	
22-78	〃	59.1	59.1		13.0	刃部に布帛 (1重・1方向) 76・77と錆着	

(4) 鉄 斧 (第23図)

石棺外、石室内東北隅に3個の鉄斧がハの字形に置かれていた。三本ともかなり腐蝕しているが、原形は有肩式ではなく、上部は両側から平たい楕円形に折り曲げられた袋状を呈し、斧頭の先は石斧の太形蛤刃に似ている。布痕がついていて、包まれていた形跡がみとめられる。

①

最大のもので長さ16.1cm・刃幅4.6cm・袋部の長径5.3cm(内径3.8cm)。柄のさし込み口から約4cm下方で、やや有肩式のような形を呈するが、明らかでない。また手にするとかなりの重さがある。

②

長さ14.8cm・刃幅4.9cm・袋部の長径5.3cm(内径3.9cm)。

③

長さ9.8cm・刃幅3.4cm・袋部の長径3.8cm(内径2.7cm)。

宇土周辺で、鉄斧の出土は宇土郡不知火町国越古墳の横穴式石室内奥屍床南側の別床内に鉄斧8個、錐形鉄斧3個が他の鉄製品とともに副葬されていた例がある。

向野田の場合、剣・刀・刀子のほか工具として鉄斧のみ副葬されている点に注意される。

(5) 不 明 遺 物 (図版30-1)

石棺外、石棺東南隅の平縁部上に(第13図×印)なにか器物の残片とみられる長さ3.5cm・幅1mm~2mm、鍵形に曲った部分長さ8mm・幅5mm、もう1片は長さ1.5cm、曲った部分1cmの中空のもので、布帛に漆を塗ったようにもみえる。棺外は鉄器類ばかりであるけれど、鉄器に付属していたものかどうか明らかでない。(付論7参照)

(6) 鉄 鎌

向野田古墳前方部が削平された頃、前方部のほぼ長方形の高みのあった東辺から出土した。短冊形の鉄板の一端を折り曲げ、柄をはさんだ形のもので、長さ11.5cm・身幅約2cm・棟幅約2mm、普通内反りになるのが、切先の方へやや外反りになる。

6. 土 器 類

向野田古墳の場合、土器は竪穴式石室や石棺の内からはほとんど見出されなかった。

向野田の墳丘を確かめに登り、前方後円墳であることを現地検分した際、筆者らが前方部西北の一角で採集したわずかだが一括遺物とみられる土器片がある。

その後、墳形測量の頃、前方部前端ほぼ長方形の高み東南隅で葺石の間に壺形土器とみられる破片が見つかった。

さらにブルドーザーによる前方部削平のため行なった前方部西側の細長い残存墳丘発掘の

折、葺石の間に点々と埴輪片の存在がみとめられた。

ついで前方部が失われ、後円部を主とする調査では、後円部墳頂・後円部東斜面・西斜面や南斜面から土器片が出土し、埴輪片や壺形土器などの存在が確かめられた。東・西・南の3斜面へ入れたトレンチから出土した埴輪片は、墳丘の大きさからしては数少なく、埴輪の樹立が少なかったのではないかとと思われる。

(1) 現地検分した際の土器片

前方部西北の一角で、ブルドーザーの削った崖面から採集した土器小片が20片ほどある。その中にやや大形の破片が1個あり、タガ幅5.5cmの埴輪胴部のものもあった。この特殊な破片が埴輪に属することは、その後の発掘調査で同じくタガ幅の広いものがみつき、ほぼ間違いないことが明らかになった。採集後、問い合わせたことがあったが、このような例はないようであった。この報告作成中、偶然のことからこの破片が機縁となり、埴輪研究の進んでいることを知ることができた。この破片は黄褐色の間に黒斑が大半を占め、器壁は堅く、タガの両側端の上方片側はヘラ状工具でおさえ削り、そのためタガ上面に細長く低めにはみだし、下方片側も同じく上面にはみだしている。タガの上方胴部は幅約3.8cmの板の小口でやや斜めのタテハケを左から右へ少しずつ重ねてつけ、その上にまたナメハケが付き、タガ上方はユビで強くおさえ、指紋のような線が残り、タガと胴部の接合部はヘラ状工具でヨコナデしたようなところがある。タガ下方の接合部はユビナデとみられる。タガの中央はやや高まり、タガ裏面の器壁をおさえ、なでたためであろう。タガ下方胴部にも同じくタテハケがわずかつく。この破片には縦3.3cm・横9mmの方形スカシが残り、当初気がつかなかった。スカシの面は削り、磨きがかかり、縦辺の下端に長さ5mm・幅0.5mmほどの切先のあとがある。スカシ器壁の厚さ約1.3cm。この破片の裏面は淡赤褐色、地肌は荒れて細かい砂粒や砂粒あとの孔が目立つ。ナデ・オサエ・縦にユビナデした形跡がうかがわれる。

口縁片の中、長さ7.7cmと約14cmの2個はその後の調査から朝顔形の二重口縁のものではないかと思われ、長さ6.2cm・口縁の長さ約2cmのものは縦約4.5cm・横5.6cmの破片と同一個体の二重口縁をなすものではないかと思われ、ともに同じ胎土・焼成の黄褐色で、赤色顔料がつき、約2cmの口縁片にはやや斜めのタテハケにヨコハケがつく。口縁上面は黒色の地肌である。

埴輪片か疑問であるが、縦約5.7cm・横9.6cmの肩部とみられる破片がある。タテハケにナメハケがかすか、その上に4本の重弧文状の沈線がつく。このような破片はこの1個だけで、その後の調査でもみられなかった。外面に赤色顔料がかすかにつく。

二重口縁頸部が肩部につづく頸部下端につく長さ7.2cm・幅2cm、内彎し上向き、先端円味のある突帯片がある。下面に赤色顔料がつく。頸部に接合する部分はいく字形を呈し、タテハケの痕跡が残る。接合した時、突帯の幅1.7cmとなり、先端辺で厚さ5mm。

縦4.1cm・横6.7cmの三角形突帯のついた破片がある。器壁の厚さ約1cm、淡黄褐色で、地肌は荒れる。このような突帯の破片は、その後の調査で見あたらない。

(2) 埴輪

ブルドーザーが前方部前端の高さ約3mの長方形の高みを削り、ほぼ前方部を削平し、墳丘西側が細長く残存していた。その状況に驚き、緊急調査した際、前方部西側墳丘の段築二段目とみられる斜面からくびれ部の方へかけ、AからGまで区域を分けて調べた葺石は断続したところもあったが、長さ約16mにわたり、幅1m～1.5mくらい帯状に続いていた。その間に埴輪片とみられるものが点々と散在していた。破片がグループをなしたところも数個所みられ、或いはそれが本来の埴輪樹立の位置であったかもしれない。その心々間の距離は1m～1.3mをはかる。葺石は長さ10cm前後、幅7cm前後の自然石で、河原石のような丸味を帯びたものもあり、山石を割ったようなものもある。

後円部の墳丘斜面におけるⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの5個所のトレンチから葺石や埴輪片の出土が確かめられた。いずれも余り良好な出土状態ではなく、散乱した形を呈していた。

後円部墳頂平坦部の墓壇東側で葺石がほぼ半環状をなして出土した。その中から葺石と埴輪の基部の破片と重なり見出された。墳頂に葺石がしかれ、埴輪円筒の立っていたことが想像される。

埴輪片の整理進行中に、方形や三角形のスキャン孔とみられるものが見出された。方形の一辺の残存長16cmのものもあるのに驚いた。

墳丘をめぐる埴輪片の所在については墳丘の変容があり、また発掘が局部的であったこともあって、埴輪の原初的な姿を明らかにできなかった。

向野田の前方後円墳発見当初、前方部前端西北角西側で採取した埴輪片とみられるものが異常な幅の広いタガをなしていた。埴輪円筒は普通タガは狭いものが多いのに対し、向野田の例は幅が広く、タガはさまざまな大きさを示している。別表の通り、タガの幅の広さ3.3cm～8.8cmまでである。このような例は、今のところ、他にみられないようである。

向野田の場合、埴輪の完形品の出土がなく、墳丘の大きさにくらべ土器片の数はそう多くなく、また復原に足る土器片もない。葺石の間にあり、また朝顔形口縁片・頸部片・胴部片や基部片などもあって、埴輪の残欠であることは間違いのないように思われる。

① 埴輪口縁部片

口縁部を上半・下半と分けたけれど、それぞれ上半に下半、下半に上半が部分的につく。上半・下半をかなり残したものはわずか1個にすぎない(第24図2)。別表の通り、A・B2種類の形式がみられる。

A類……く字形の反りがある。6個ある。そのうち1個は上半・下半をよく残し、口縁が外反し、口縁端面はケズリで平らとなり、上半・下半接合部に同じ口縁端面がめぐる。接合部の

口縁端面は、退化というか消えていくようである。外面にタテハケ、内面にヨコハケがある。

B類……く字形が外反の傾向を示すのと異なり、逆にやや内反りの形をとるものがある。4個ある。口縁端面は内面がまるくなり、また内外両面とも円味をおびるかと思われる。さらに上半・下半接合部で低い側高で段状となり下半へつづくもの、また段状の側面がへこみ、内彎してゆくものなどがある。外面にナナメハケ、内面にヨコハケがある。

別表の通り、向野田の場合、出土した埴輪口縁部片は二重口縁とみられる朝顔形のみであり、円筒埴輪の口縁片として直立するものはなかった。古式古墳の埴輪には口縁のひらく例があり、向野田の場合もあるいはB類としたものが口縁のひらく円筒埴輪をなす可能性があり、疑問が残る。

② 埴輪頸部片

朝顔形円筒埴輪の頸部片とみられるものが2個ある。そのうち1個は内外両側面が淡赤褐色、頸部は直立し、残存高10.6cm、下端近く内彎し、上向きの突帯がめぐる。復原径17.8cm、外面のタテハケ、ナナメハケはナデで消え、なめらか、裏面はヨコハケにナデ。上端外反の部分ヨコハケ、下端底面の部分はナデ。後円部墳頂すぐ下方東斜面から出土した(第24図10)。頸部のほぼ同じ突帯片が前方部西北角西側から出土している。この直立した頸部片と似た頸部の破片が1個ある。同一個体が明らかでない。こうした突帯は松橋町前田遺跡の顔顔形円筒埴輪^⑧にもつくけれど、端面は垂直に近く、向野田のそれと異なる。

なお1個は口縁につづく頸部も欠け、大きさ縦約6cm・横13.5cm・厚さ約1cm、頸部の復原径13.2cm内外両面とも淡黄褐色、外面は地肌がかなり荒れ、砂粒が目立ち、器面調整は不明、内面はナデ。口縁上半へつづくふくらみから、二重口縁とみられるが、器形が明らかでない。

他の1個は、薄手で内外両側面は淡黄褐色、上方は欠け、下方肩部へつづく。外面頸部と肩部の接合部に突帯があったか、灰色の帯状のあとがめぐる。裏面はヨコハケ・ナナメハケ、下方肩部へナナメハケがつく。この頸部の突帯は、前方部西北角西側出土の三角形突帯に似たものかもしれない。この頸部片は、復原径16.9cm、口縁のひらく壺形土器で、壺形埴輪として決め手を欠く^⑨。

③ 埴輪肩部片

埴輪肩部片とみられるものが2個ある。1個はやや厚手・円弧状で、上辺でやや反り・上端の厚さ約9mm、タテハケにナナメハケ、ハケメはナデでほとんど消える。上下両端に1・2本ヨコハケがつく。裏面はナデ。もう1個はやや薄手、円弧状で、裏面はナナメハケにナデ、2個も縦のスカンがつき、縦の割れかたが短い。

土器肩部片が5個ある。埴輪のものかどうか、明らかでないが、参考例としてあげておく。重弧文状の4本の刻みがタテハケの上につき、ハケメはナデで消える。

④ 埴輪タガ片

向野田古墳の埴輪タガ片が、これまで例を見ないものであることは前述した。現在17個のタガ片があり、別表の通りタガの器面調整から分類した。

A類……タガ上面にハケメがなく、ヨコナデのもの。4個のうち3個は同一個体に属するものとみられ、その1個はタガ上下両方にスカシが残る。上方は縦・横わずか、下方は縦13cm・横1.7cm方形スカシで、長方形と思われる。タガの裏面はナデ。

B類……タガ上面はヨコハケで、2個ある。内外両面2個ともそれぞれ地肌の荒れかたはちがうが、タガの作りは似ている。同一個体か、または工人が同じであったか。スカシがつく。

C類……タガ上面がヨコハケにナナメハケのかかるもの。1個ある。A・B両類とくらべ、タガ幅7.5cm・突出長3mmでひらたい。裏面はナデ。小片で、上面は黒斑が占める。

D類……タガ上面にナナメハケにナナメハケで、格子状になるもの。3個ある。そのうち2個はタガの作り、ハケメの残存状態が同じで、両者の裏面ハケメや色調なども似ている。同一個体か、または工人が同じであったか。他の1個は交叉するナナメハケの幅が同じく広く、ハケメの線の幅も広く、黒斑が占める。3個とも裏面にハケメがつく。スカシがつく。

E類……タガ上面に太めのタタキがつくもの。格子状ナナメタタキのもの、ヨコやナナメタタキのものなどを一括した。6個ある。方形・三角形スカシのつくものもある。

F類……タガ上面はナデ・オサエで、下方側端は調整がないもの。1個ある。スカシがつく。

⑤ 埴輪胴部片

胴部片が12個ある。タテハケの明らかなものが4個ある。そのうち2個は黒斑があり、外見上似ているけれど、裏面のハケメやナデが異なる。他の2個はハケメの幅が広く、似ているが、こうしたタテハケは向野田の場合、他にみられない。最近筆者の発見した不知火町塚原平古墳にもこの幅広いハケメの例がある。また赤褐色のナナメハケの2個は、外見上やや似ているが、内面がハケメとナデで別個体である。黄褐色の一見複雑なハケメの破片は、スカシの一边16cmあり、タガ間の長さに近いものであろう。胴部辺ではスカシのつくものが5個あり、その割れかたは主に水平で、円筒の作り、輪積みか巻き上げとのかかわりが察せられる。またスカシの大きいことは円筒の大きさを示唆するものではないかと思われる。

⑥ 埴輪基部片

埴輪基部片とみられるものが4個ある。それぞれ底部へかけ、やや異なる。そのうち、最大の破片は、後円部墳頂で墓域東側の葺石の間にあったもので、残存高約19cm・復原径34.7cmある。内外両側とも明淡赤褐色で、白みがる。主に外面はタテハケ、裏面はヨコハケで、器壁の厚さは約1cm、薄手にみえる。底部から逆Y字状に立ちあがる。後円部南斜面のトレンチ出土のタガ幅8.8cmの破片は、この基部片と同一個体のものではないかとみられる。墳頂平坦部に埴輪方形配列があったかどうかは明らかでないが、墳頂部に埴輪の樹丘があったことが知られる。埴輪片の残存の少ないことから、向野田の場合、方形配列としても埴輪の数は多くは

なかったと思われる。

(3) 埴輪の整理から

タガについて、すぐ思いつくのは弥生式甕棺の突帯である。それについては先学が指摘されている^⑧。北九州で甕棺の突帯がやや幅広く、低いもののあることをみたこともある。また鹿児島県成川遺跡出土のものに低めで幅広い突帯がつくという。向野田の場合、タガ幅の広いことは異常といってよいであろう。先学にしばしば尋ねたが、今もって謎で、将来の課題といわなくてはならない。今いえることは、タガ幅やタガ上面調整がまちまちで、まだ定型化していないことが注意される。それは向野田の埴輪の各部についてもみられる。さして出土の数も多くないのに、さまざまな形がみられることは、なにか理由がなくてはならない。埴輪工人が集団をなしていたとすれば、そこに或る製作技術が伝えられるか、または創られるかしていたのではないかと思われる。工人は集団ではなく、別々であったことも考えられる。また別々であったとしても、ひとついえることはタガ幅の違いはあっても、共通して概してタガ幅の広いことであろう。これまでのところ、他所に見出されないとすれば、工人は別々であったとしても、向野田古墳被葬者の支配圏ではタガ幅の広いものが用いられたのであろうか。広形化するということは、土器ではないが、銅剣銅鉾などの場合にあり、参考される。タガの幅が広ければ円筒の側面が補強されるかもしれない。また幅の狭いものと違い、装飾化に役立つかもしれない。しかしまた変わった意味があるかもしれない。

はじめ埴輪片のうち、タガの幅広いことに関心を持っていたが、整理が進む段階で部分的であるけれど、スカン孔のつくものがあることも分かった。タガの幅の広いことから、これまで筆者らが復原したことのある宇土郡不知火町国越古墳や八代郡竜北町姫ノ城古墳などの円筒埴輪とは系統が異なるものかもしれない^⑨。隣の松橋町大塚古墳近くの前田遺跡出土の朝顔形円筒埴輪の例があるけれど、それともタガがちがっている。

埴輪円筒につくスカン孔に方形・三角形をとるとみられるものがある。方形ではL字形のもの、三角形では逆V字形また胴部側面の在りかたから三角形の一辺と推定されるものなどがあり、方形は長方形と思われる。松橋前田遺跡は筆者も発掘現場を実見したが、円形のほか三角形のあることを知った^⑩。主に九州外の例で、分けられた円筒埴輪編年の図によると、長方形・三角形のスカン孔は古墳前期から中期へかけみられるようである^⑪。

向野田の埴輪片で気をつくことは、外面に黒斑が多いことであった。不知火町国越古墳の埴輪片は未整理であるけれど黒斑はないようである。また最近筆者の発見した不知火町塚原平古墳の埴輪円筒片も、黒斑はなく、須恵質の破片がみとめられる。黒斑の有無は焼成法の違いによることが指摘されている。向野田の場合、野焼きであったことが知られる。また埴輪片には赤色顔料が残り、赤色が塗られていたことが分かる。

後円部墳頂平坦部で墓壙東側の残存葺石の間に出土した埴輪基部は1個ではあるけれど、向

野田の埴輪片中、最大のものであった。墳頂部における埴輪の樹立があったことを示すものとして興味がある。ただ墳頂部で埴輪方形配列を見出すことができなかったことが惜しまれる。

校正中、川西宏幸氏から次のご教示をいただいた。

「向野田の円筒埴輪につきましては、弥生式土器のタタキ技法の伝統を遺存させている点で、在地色の強さに驚かされました。同時期の畿内の円筒埴輪製作上の約束を忠実に模倣していないと思います。

ところが有佐大塚古墳の円筒埴輪は、向野田のものと隔たらない時期だと思われませんが、拝見させていただいた限り、畿内色が感じられます。」と記されている。

埴輪のタガについてはご所見が述べられていなかった。有佐大塚古墳の墳丘上に埴輪円筒の基部が原位置に所在したことは、筆者が報告したことがある。最近、この古墳の石室残欠の確認調査を、同地永松豊蔵文化財専門委員長とともに行ない、確かめることができた。また高木恭二氏の知らせにより、永松氏所蔵の有佐大塚古墳出土埴輪にタガの端面幅7mmの狭く、色調のくすむものと口縁部で端面の厚さ1.5cmと広く、淡黄褐色のものなど2種類のあることを確かめた。二種類がそれぞれ二時期にわたるらしく、注意される。

埴輪について、次の報文は高木恭二氏による。

熊本県内における埴輪について、これまで概括的に述べたものはなく、わずかに伊藤奎二氏によって県内の埴輪の地名表・集成図が作成され、そのほかには個別の古墳に報告された資料があるのみである。菊水町清原台地の報告は、京塚・船山・塚坊主・虚空蔵塚の各古墳についてなされ、単一小地域におけるこのような報告は今後に望まれる有効的な方法であろう。

ところで熊本県内における初期の埴輪については、わずかに底部穿孔を有するいわゆる壺形埴輪について、八代郡高塚東原遺跡・宇土郡弁天山古墳・玉名郡院塚古墳・阿蘇郡長目塚古墳などの例について報告されているのみで、円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）でこれらの時期に属するとする確実な例は知られていなかった。向野田古墳では確実に円筒埴輪と考えられるような直立する口縁部はみられず、朝顔形埴輪のみが樹立されていた可能性もある。ちなみに巻末第19表熊本県内埴輪地名表にみるように肥後における朝顔形埴輪の出土例を瞥見すると、玉名郡稻荷山古墳・同船山古墳・同塚坊主古墳・山鹿市臼塚古墳・同金屋塚古墳・鹿本郡高熊古墳・下益城郡琵琶塚古墳・同前田A地点・同松橋大塚古墳・宇土郡鴨籠東古墳・同国越古墳・八代郡姫ノ城古墳・八代市大塚古墳などがあげられる。

前田・琵琶塚出土の朝顔形埴輪は円形のほかに三角形・方形のスカシがみられ、特に前田の朝顔形の肩部に三角形のスカシを有する例を指摘されているが、琵琶塚にも同様のスカシを有し、円筒埴輪ではないが長目塚古墳の例もこれらに通じるものであろう。なお前田の埴輪には方形・三角形スカシなどに古い伝統を残すものの時期的には下降するものであろう。

宇土地方の古墳で壺形埴輪も含めて、埴輪の存在が確認されているのは宇土市スリバチ山・

同迫の上・同神合・同向野田・不知火町弁天山・同国越・同道免・同鴨籠東・同塚原平・松橋町大塚などの古墳である。また古墳ではないが宇土市轟貝塚・同西岡台遺跡・松橋町前田遺跡(A地点)などからも出土しており、前田A地点は松橋大塚古墳から南へ約100mはなれたところにあり、古墳に樹立されたような状態ではなく、朝顔形・円筒埴輪が20本近く雑然と出土しており、報告がなく、その詳細や性格について明確にされたものはない。ただ窯あるいはそれともなう工房などの可能性を指摘されたことがある^⑩。すぐ近くに存する大塚古墳に埴輪を有することが明らかにできたので、それとの関連が重要なポイントとなろう。

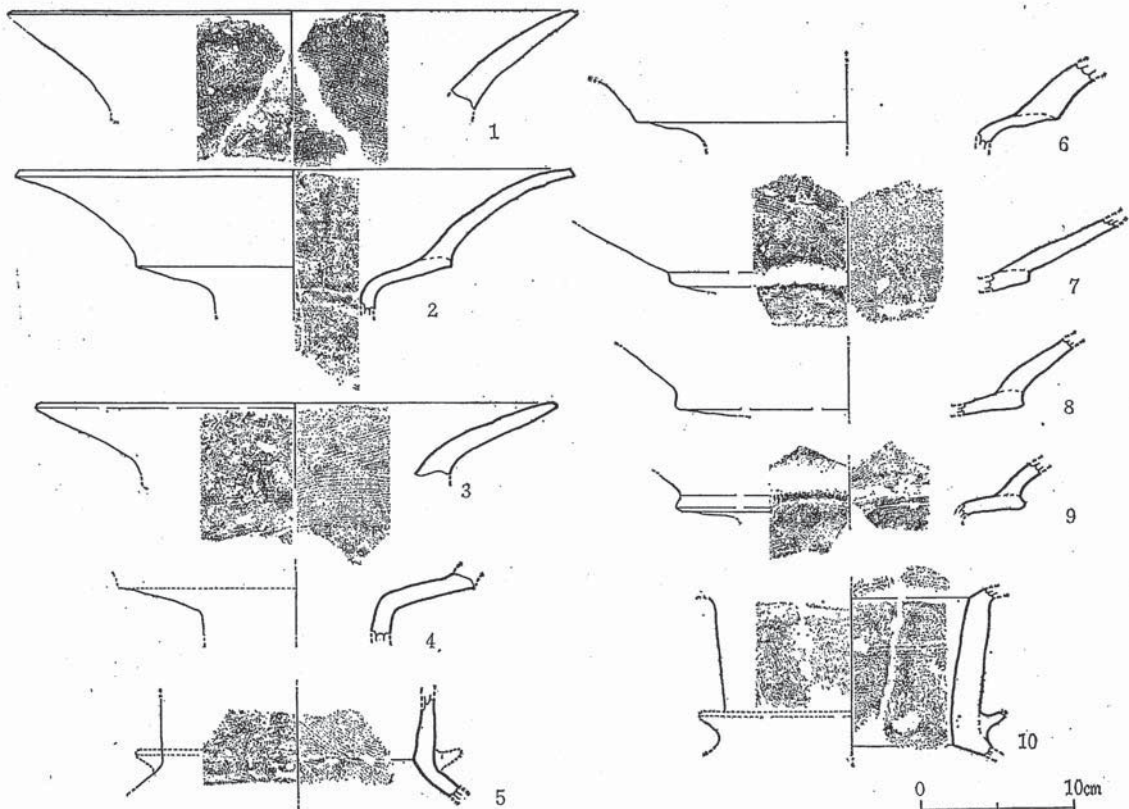
スリバチ山・迫ノ上・弁天山の各古墳から出土しているのは底部に穿孔のある壺形埴輪であり、向野田古墳の時期にいたってはじめて円筒系埴輪が導入されたことになる。

向野田古墳の埴輪については既に述べているように種々の点で特殊なあり方を示している。すなわち、タガの幅は3.3~8.8cmと異常に広く、その上をタタキ目や格子目状のハケ目が施され、スカンは長方形か三角形であり、円形はみられない。しかもその大きさは長方形で最高15.5cm、三角形で最高11.5cmをはかり、かなり大きく、古い埴輪に共通する点であろう。しかし全体をうかがい知るような埴輪はみられず、その高さがどれくらいになり、タガが何段施され、スカンがどのような位置にいくつあったかなど不明な点が多い。黒斑を有し、底径では約34cmをはかる。タガ上にはないが外面調整に須恵器と同様の叩きをほどこす大阪淡輪^⑪・和歌山大谷^⑫・宮崎下北方^⑬などにみられ、向野田の叩きはこれらとは異なり弥生式土器の系譜につながる叩き技法^⑭であることが考えられ、地方色がつよく感じられるが、管見によれば類例はない。

九州における円筒埴輪出現後の埴輪変遷を高橋氏は6期に分けられ^⑮、そのI期を「円筒埴輪は比較的小型で器壁も薄い。タガは幅狭くかつ外へ突出する。外面は縦あるいは斜行の刷毛目が施される。……一般に胎土は良質で、黒斑も認められる。この時期は埴輪はまだ普及せず、特定の大型前方後円墳にわずかに採用されたにすぎない。」と述べられ、4世紀末葉から5世紀前半に比定されている。

向野田の埴輪のタガやタガ上の調整など、他に例をみずこの編年にそのまま適用できるとは思われないが、タテハケ目が施され比較的薄い器壁で黒斑を有し、スカンなどに共通した面をもっていることが知られ、I期にあげられた佐賀空路寺古墳^⑯などでも朝顔形埴輪がしられている。なお同谷口古墳^⑰・福岡老司古墳^⑱などは年代的にも近い時期が考えられ、向野田は九州の埴輪編年では同氏のI期に比定できるものと考えられる^⑲。

このほか肥後における円筒埴輪で窰窯を用いる以前の、いわゆる野焼きと考えられる黒斑を有するものは八代郡有佐大塚古墳^⑳・下益城郡琵琶塚古墳^㉑・鹿本郡岩原狐塚古墳^㉒などであり、同じく岩原双子塚古墳もその可能性が考えられる。

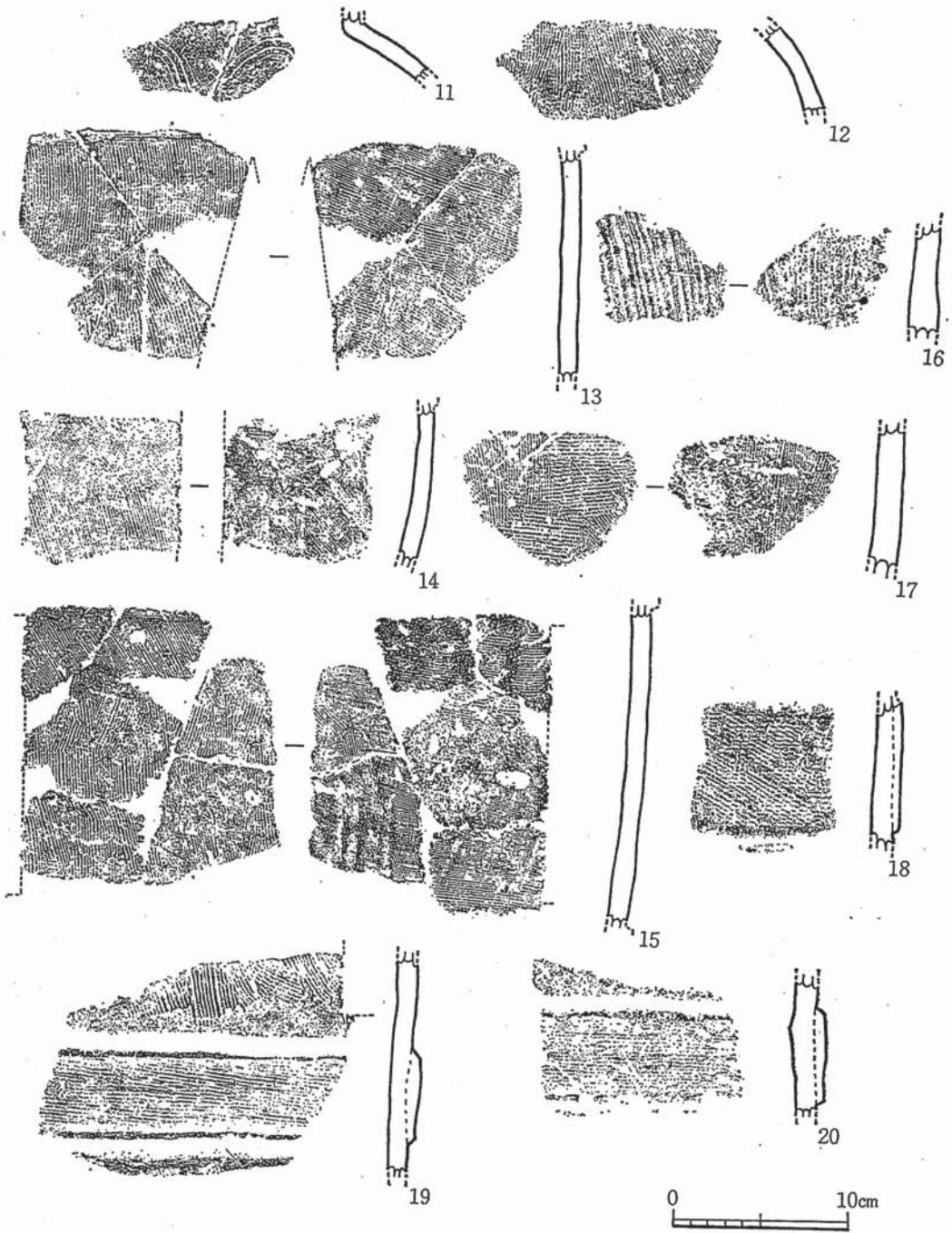


第 24 圖

壺

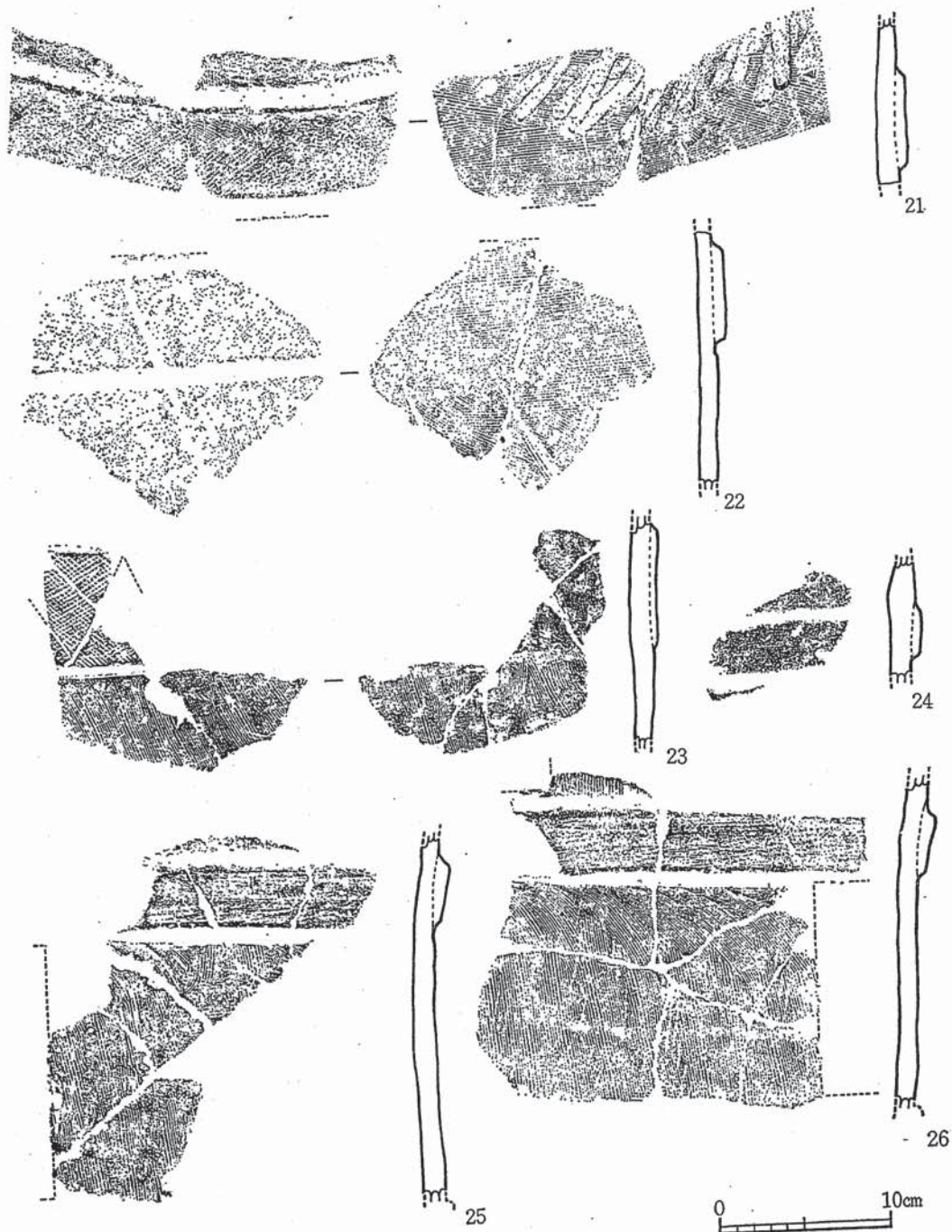
輪

(1)



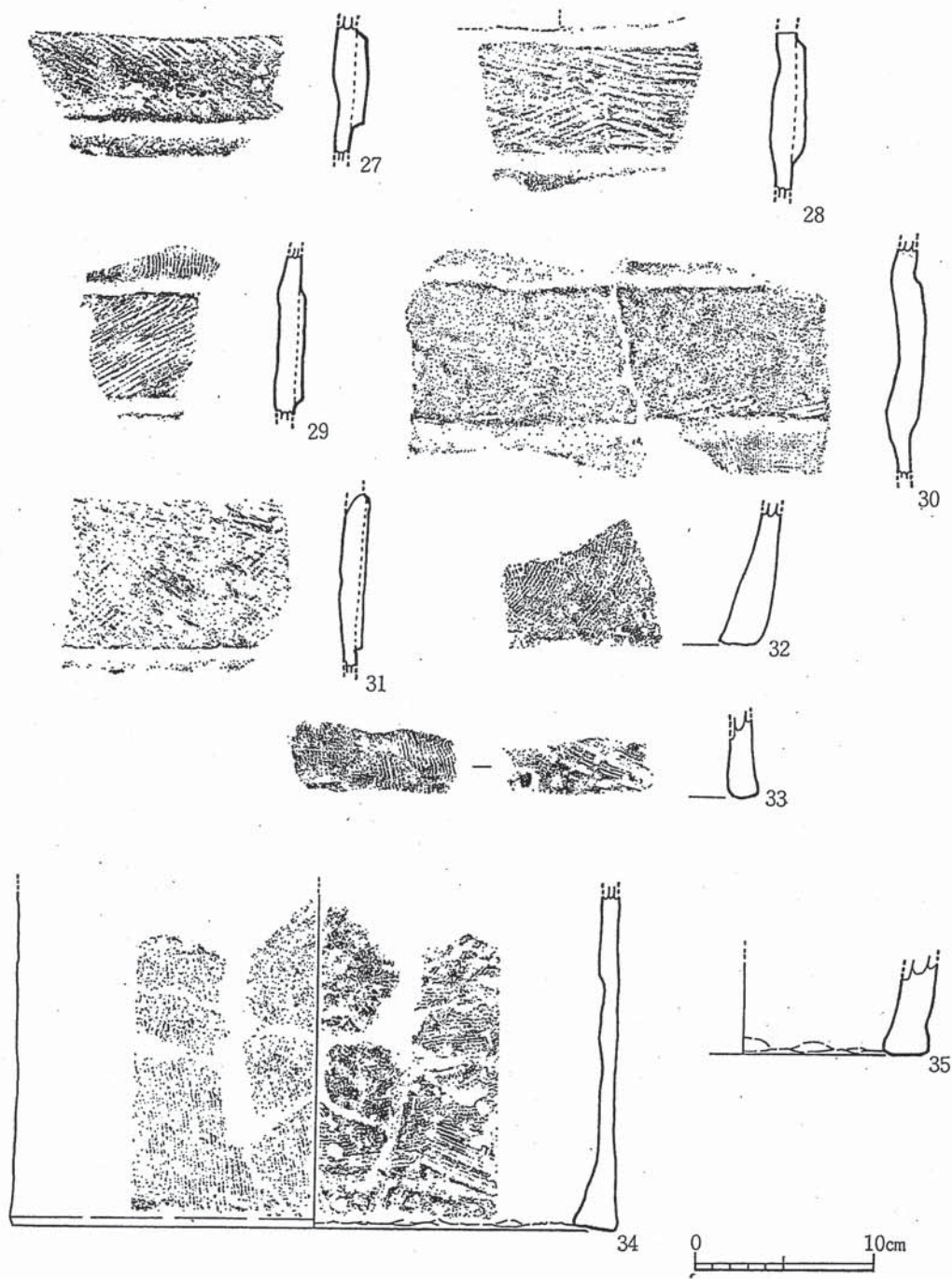
第 25 圖

埴 輪 (2)



第 26 图

埴 輪 (3)



第 27 圖

埴 輪 (4)

(3) 壺形土器

① 前方部出土の壺形土器 (第28図3・4)

墳形実測後間もなく前方部のほぼ長方形の高み東南隅で、葺石の間から破砕した土器片が一部露出しているのを見つけて、採取した。これまであまり見かけたことのない淡紫褐色で、やや薄手にみえる焼成良好のもので20数個の破片となっていた。口縁は接合部で欠け、頸部は立ち上り高さ約2.5cmあり、外面タテハケにヨコナデ、裏面はナデ。完形ではないが、胴部片は半分近く残り、大きさ縦最大長41.5cm・横最大幅29.3cmある。外面はナナメハケ(2cm幅につき12本、右上→左下)に左から右へナナメハケがやや重なり、胴部中央から下方へタテハケ近くなり、下方でナナメハケがつく。タタキがある。裏面も淡紫褐色で、タテハケ(2cm幅につき16本)が一貫してつき、下方でナナメハケがある。タテナデがある。器壁の厚さは6mm~9mm。内外両面に石英粉や雲母微粉とみえるものを含む。

丸底の壺形土器とみられ、おそらく供献されたものであろう。确实ではないが、口縁部を含め推定高さ45cm前後・頸部復原径13.2cm・胴部中央復原径33.6cmある。なお外面下方に縦約12cm・横約14cmの黒斑があり、裏面にはみられない。この現象は向野田の埴輪と似たところがあり、焼成法も同じものであろうか。土師器としても注目される。

② 後円部出土の壺形土器 (第28図2)

後円部墳頂から南斜面に入れたⅡトレンチでコンターのー5m辺で上部の欠けた壺形とみられる土器1個が土中に直立した形で発掘された。その付近には葺石や埴輪片もわずかながら出土した。

この丸底の土器残欠は、残存高約22cm・胴径約23cm・器壁の厚さ4mm~9mm、色は淡黄褐色。表面はなめらかだが地肌が荒れ、器壁調整は裏面の凹凸が目立ち、縦方向のへら削りである。裏面の地肌も荒れる。器壁に雲母微粉とみられるものがまじる。

おそらく壺形土師器として据えられた形で意識的に地山へ一部掘り込んでいた形跡がある。土器底部に穿孔はない。発掘当時、この土器と同じ土器の出土を期待したけれど、この1個だけであった。この1例では壺形埴輪ということに決め手を欠く。墳丘主軸線の通る付近にあることが注意される。

調査当時、実測図に記入された次の報文は石橋新次氏による。

ハニワと思われるが、器形はツボであり、底部に穴はうがっていない。葺石と思われる所の近くにあるので、ツボのハニワへの転用と思われるが、この1例では決め手を欠く。葺石の配置状態もあまりよくない。葺石は地山に乗っているのを確認できた。ただツボの周囲の土は若干質が異なっており、掘りこまれた結果であることはうかがえる。このツボ形ハニワをもう1箇所発掘して、その性格が何であるかを確認しなければならない。石は普通、山石と言われるものである。ツボと葺石の南側は開墾のためか崖になっている。ハニワ片はツボと焼成など

異なり、朝顔形もしくは円筒形と似ており、低い凸帯を有している。凸帯には斜行文等が見られる。

ツボとは異なり、2種類のものがハニワとして配列してあったのか。

(4) その他土器片

壺形とみられる破片2個と甕形とみられるもの1個がある。壺形の1個はごく小片で、残存高約2.5cm、口縁は欠け、頸部立ち上り長さ約1.9cm、周り長さ5.3cm、器壁厚さ約3mmで、小形の壺形土器片である。前方部のほぼ長方形の高み東南隅出土。

口縁の欠けた甕形とみられる土器で、破片の大きさは縦約9cm・横約12cmある。淡赤褐色で、外面にやや斜めのタテハケ(2cm幅につき9本)がつき、内面はヨコハケがわずか残り、ヘラケズリで、地肌やや荒れる。焼成良好、胎土にこまかい砂粒、雲母微粉かごく細い長方形の黒片がひかる。(第28図1)

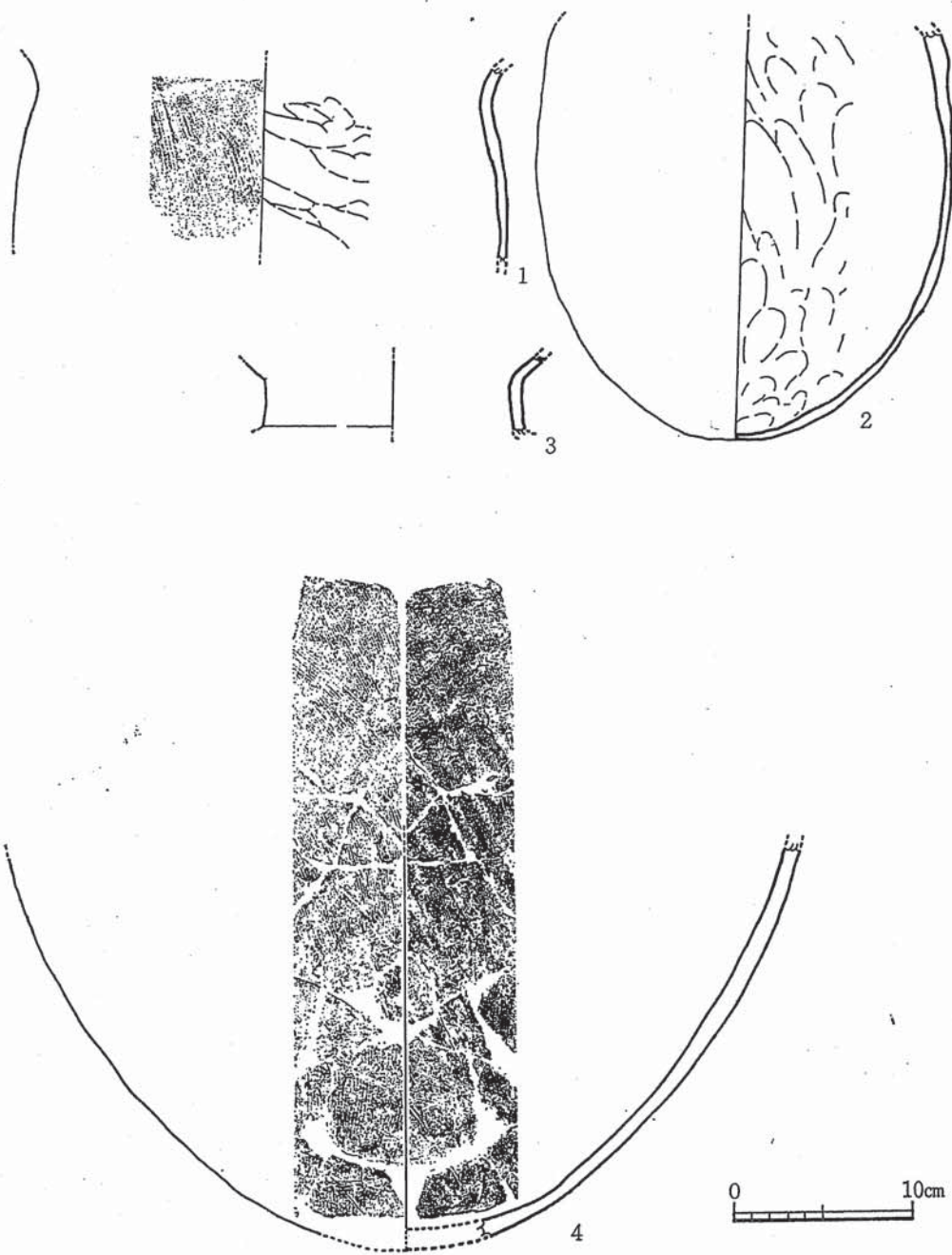
(5) 須恵器提瓶片

前方部上面が削平され、前方部西側墳丘斜面が細長く残された時の緊急調査で、C区の葺石や埴輪片の間にまじり、地表下約30cmに須恵器の提瓶の破片が見出された。大きさ縦8.2cm・横9.8cm・厚さ7mm~1.2cmあり、表面に轆轤の円文がめぐり、ヘラケズリで、裏面はあらい轆轤のあとが中心にやや盛り上がり、右廻りする。色は表面が裏面より少し黒みがかかる。厚手で、はじめ杯の蓋と思ったが、おかしく、提瓶とみればおちつく。古式の須恵器とはみられないようである。葺石や埴輪片の間にまじっていたもので、墳丘築造当時のものかどうか疑問が残る。

須恵器は、墳丘南側Ⅱトレンチで小片1個が採取された。表面に格子目、裏面に線条の叩きがある。厚さ約1.1cm、色は灰白色、甕形土器のものかとみられるが、分からない。

(6) 土師器小皿

後円部墳頂の平坦部東側が斜面となる所で、土師器小皿1個が表採された^⑤。口縁径9.6cm・高さ2.7cm、口縁内面に一部黒く漆を塗ったようなあとがあった。1個だけで、後円部で葬礼かなにかを行なったときのものかどうか明らかでない。



第 28 图

土 師 器

- 註 ① 乙益・田辺・三島・田添「院塚古墳調査報告」熊本県文化財調査報告第6集、1965
- ② 三木文雄「埴輪・鏡・玉・剣」日本原始美術6 参考図版、⑦内行花文鏡、講談社、1966
- ③ 前掲書註②、図版14
- ④ 責任編集坪井、本巻編集田中「4鏡—権力とまつり」日本原始美術大系4、講談社、1977
「拙著御指摘の記述は、小生の解釈でありまして、とくに典拠があるわけではありません。ただし天を蓋笠で象ることは、拙著179頁所引の註9林巳奈夫氏論文にくわしいところです。また円弧間の小単位文が蓋笠あるいは幕の結び紐の表現であることは、漢代の画像石等にもみられるものとはほぼ一致するところから確かだと思っております。」田中琢氏の私信による。—1978・6・28付
- ⑤ 梅原末治「椿井大塚山古墳」副葬の遺物 古鏡2、京都府文化財調査報告第23冊、1964
- ⑥ 後藤守一「古鏡聚英 上篇」図27—6（再版）、東京堂、1977
- ⑦ 山越茂「方格規矩四神鏡考（上）・（中）・（下）」考古学ジャーナル93・95・96、1974
- ⑧ 前掲書註④
- ⑨ 富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獸鏡」石人No.106、1968
- ⑩ 林巳奈夫「鳳凰の図像の系譜」考古学雑誌第52巻第1号、1966
- ⑪ 水野清一、小林行雄編「図解考古学辞典」創元社、1959
- ⑫ 藤・井上・北野「河内における古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室報告第1冊、1964
- ⑬ 岡田清子「3 喪葬制と仏教の影響」日本の考古学V、河出書房、1966
後藤守一博士調査の群馬県白石稻荷山古墳や茨城県丸山1号墳の例をひき、古墳時代前期に玉の緒を切る慣習があり、後期に玉の緒を切る呪術的行為の必要が痛感されなくなったとみられる。
- ⑭ 増田精一「1 古代人の葬送観」埴輪の古代史、新潮社、1976
註⑬の見方に対し、死霊への恐怖感だけから前期の宏大な高塚築造が可能であったろうか、縄文期の抱石葬などにみる 制圧呪縛の観念がみとめられても、古墳時代はそうした原始的な時期ではない。玉の緒が切れ、乱れ散ったという表現はあっても、玉の緒を切るという歌は古代歌謡にあるのであろうか、と反論される。
- ⑮ 責任編集坪井、本巻編集金関「武器・装身具」日本原始美術大系5、講談社、1978
図版270 車輪石の説明に「車輪石には、鉄形石や石釧のような碧玉製品は現在のところまだ発見されていない。輪郭が卵形を呈するものには珪板岩製がみられるが、一般には凝灰岩製が多い。」とある。
- ⑯ 前掲書註⑩
- ⑰ 原田大六「続沖の島」宗像神社復興期成会、1961
- ⑱ 三木文雄・小林行雄「伝統工芸と新興工芸—装身具の変遷」世界考古学大系3、1963
- ⑲ 前掲書註⑰
- ⑳ 富田紘一「鹿本町周辺の古墳」鹿本町史、1976
- ㉑ 大塚初重「大和政権の形成—武器武具の発達」前掲書註⑱所収
- ㉒ 伊達宗泰ほか「メスリ山古墳」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第35冊、1977
- ㉓ 切羽という見方について、熊本大学白木原和美教授のご教示による。
- ㉔ 樞本誠一・山本三郎「城の山・池田古墳」和田山町教育委員会、1972
- ㉕ 前掲書註⑱
- ㉖ 九州歴史資料館亀井明德氏へ問い合わせ、のち熊本大学甲元真之 助教授に前方部西北角出土の埴輪片をおみせした折拓本をとられ、京都へ送られた。川西宏幸氏あてであった。
- ㉗ 早大考古学研究室市毛勲氏のご教示により「大阪文化誌」通巻第8号所載川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」を入手。同志社大生古森政次君により「史林」第56巻第4号 川西宏幸「埴輪研究の課題」コピーを入手。岡山大学春成秀爾講師のご教示により「九州文化史研究所紀要」第23号 横山

- 浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」、1978を知る。
- ㉔ 伊藤肇二氏作成前田遺跡出土埴輪実測図による。
 - ㉕ 壺形埴輪について、富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の竪穴式石室」熊本史学第30号、1965。同「摺鉢山古墳」宇土市の文化財第3集、1977
 - ㉖ 原田大六「三古墳文化が背景となる」日本古墳文化、昭和29年、再版1975、福井式カメ棺と有孔器台の複合説を提唱。
 - ㉗ 国越古墳の埴輪は昭和38年筆者が発見、姫ノ城古墳の復原埴輪は昭和47年に筆者・卯野木盈二・井上讓二が発見。
 - ㉘ 前掲書註㉔
 - ㉙ 前掲川西氏の「埴輪研究の課題」に「スカシの形状にも言及しておく、古墳時代前期には、三角形・巴形・鉤形など多彩であるが、中期以降、円形にはほぼ画一化するらしい。」とある。同氏による円筒埴輪編年の図によると、長方形・三角形はⅠ期（4世紀中葉）Ⅱ期（4世紀後半）にあげられている。また春成秀爾氏の円筒埴輪の編年（7埴輪、地方史マニュアル6考古資料の見方〈遺物篇〉、1977）によると、三角形・長方形はⅡ期（4世紀中頃～後半）からⅣ期（5世紀中頃～後半）へあげられている。
 - ㉚ 塚原平古墳の埴輪は昭和53年9月筆者が発見。
 - ㉛ 前掲書註㉗川西宏幸氏論文
川西氏の私信による。—1978.8.14付
 - ㉜ 富樫卯三郎「熊本県鏡町大塚古墳存在の一証」古代学研究第62号、1972
有佐大塚古墳石室残欠の確認調査は八代郡鏡町教育委員会が昭和53年8月実施。
 - ㉝ 昭和53年9月実見。石室残欠確認は前方部。未調査の後円部内部主体とかかわるか。
 - ㉞ 西田道生ほか「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告書第1集、1976
 - ㉟ 花岡興輝「八代郡竜北村における土師器の埋没遺跡について」熊本史学第11号、1957
 - ㊱ 前掲書註㉔
 - ㊲ 前掲書註①
 - ㊳ 坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告第3集、1962
 - ㊴ 原口長之『白塚古墳調査報告』プリント版、1956
 - ㊵ 野田・松本・島津・江本ほか「塚原」熊本県文化財調査報告第16集、1975
 - ㊶ 坂本経堯「鴨籠古墳2号」不知火町史、1972
 - ㊷ 置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」考古学雑誌第63巻第3号、1977
 - ㊸ 三島格「肥後における古墳研究」古代文化第17巻第3号、1966
 - ㊹ 前掲書註㉔
 - ㊺ 宮崎県立博物館所蔵資料
 - ㊻ 川西宏幸氏私信による。
 - ㊼ 高橋徹「九州の埴輪概観」二子塚遺跡、1976
 - ㊽ 大塚初重・小林三郎「佐賀県空路寺古墳」考古学集刊第四冊、1962
 - ㊾ 梅原末治「玉島村谷口古墳」佐賀県文化財調査報告第2輯、1953
 - ㊿ 九州大学文学部考古学研究室「老司古墳調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告第5集、1969
 - ① 前掲書註①
 - ② 高木らの採集資料による。
 - ③ 井上正氏の提供による。

第11表

埴輪片分

① 埴輪口縁部片

類	番号	残 存 部			器 面 調 整	
		口 縁 上 下	口 縁 上 半	口 縁 下 半	外 面	内 面
A	1		く字形、残存長3cmの口縁端ややまるく、端面に沈線1本がめぐる。口縁近く内反気味、下端厚さ1.8cm、中凹み、刻みあり。		タテハケ(11)ナデ	ヨコハケにナナメハケ(12、右上→左下)ナデ
	2	く字形、口縁残存長3.5cm、口縁外反、端面ケズリ、厚さ6mm			ハケメ不明 口縁端ケズリ、ナデ	口縁上半ヨコハケかすか、下半もヨコハケ、接合部辺にナナメハケ残る。口縁端面ケズリ
	3		く字形、口縁端磨滅するが、端面まるくみられ、内反気味。		ヨコハケかすか	ヨコハケ(11)にナナメハケ、ナデ
	6	く字形にひらき、上下両辺欠け、下端頭部わずか。			不明	ヨコナデ
			く字形、口縁端欠け、下端厚さ1.8cm、中凹み刻みあり。		タテハケ(11)ナデ	ヨコハケにナナメハケ、ナデ
			口縁片、口縁端長さ7.7cm、厚さ6mm		ハケメ不明	ヨコハケ、ナデ、口縁端面ケズリ
			口縁片、口縁長さ約14cm、厚さ6mm		ハケメ不明	ハケメ不明、口縁端面ケズリ
			口縁片、口縁長さ約2cm、厚さ6mm		タテハケ、ヨコハケ	ヨコハケ、ナデ、口縁端面ケズリ
			く字形、口縁残存長約2cm、口縁内反気味、接合部端面消える		不明	ヨコハケかすか、ヨコナデ、接合部指ナデ

類 一 覧 表

焼成	色 調		径	備 考	
	外 面	内 面			
良		淡赤褐色、地肌荒れる。	淡赤褐色		内外両面で上下両辺はナデでハケメ消える。以下の破片ハケメのある場合同様。
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色、口縁上半地肌荒れ、砂粒目だつ。接合部内面に赤色顔料。		
良		淡黄褐色、地肌荒れる。	淡黄褐色	口径34cm	
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色、赤色顔料残る。		
良	黒斑わずか	淡赤褐色、口縁近く地肌荒れる。	淡赤褐色		中凹み、刻みは接合部、1と同一個体か。
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒あり。	淡黄褐色		参考例、前方部西北角西側出土
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。		同 上
良	黒色(口縁端面)	灰色、赤色顔料残る。	淡黄褐色、地肌荒れる。		同 上
良		淡黄黄色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色		

類	番号	残 存 部			器 面 調 整	
		口 縁 上 下	口 縁 上 半	口 縁 下 半	外 面	内 面
			口縁片、口縁長さ5cm、端面まるくみられる。		やや斜めタテハケ(10)	ヨコハケ(10)とめて続く
			残存長5.4cm、口縁欠ける。下端厚さ1.4cm、中凹み、ハケメ様刻み。		ナデ	不明
B	7			残存長6.3cm、上半が多く残る。下半と接合側高5mm、側面ややへこみ、下半へつづく。	上半にナナメハケ(12、右上→左下)ナデ	ヨコハケ(11)
	8			残存長17cm、上半も残る。く字形でなく、接合側高9mm、側面へこみ強まる。	上半にタテハケのあとあり、ナデ	ヨコハケ、ナデ
	9			残存長11cm、上半わずか残る。接合側高8mm、側面へこみ強まり、下端突出気味	ヨコナデ	ヨコハケ、ナデ
				残存長15cm、上半わずか残る。下半と接合、く字形でなく、外反気味。接合部側高約4mmで下半へつづく。	上半にナナメハケ(15)接合部指ナデ、下半ナデ	ヨコハケ(12)にナナメハケ(12、右上→左下)ナデ

焼成	色調		径	備考	
	外面	内面			
		淡赤褐色、赤色顔料わずか	淡赤褐色		参考例
良		淡黄褐色、赤色顔料残る。	淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒あり。		参考例、上の黒色口縁片と同一個体か。中凹みは接合部。出土同じ。
		淡黄褐色、上半に赤色顔料残る。	淡黄褐色、地肌やや荒れ、砂粒あり。		
良		淡黄褐色、地肌荒れる。砂粒大きめ。	淡黄褐色、地肌荒れる。砂粒大きめ。		
良		淡黄褐色、上半に赤色顔料かすか。	暗黄褐色、地肌かなり荒れる。		
良		淡黄褐色、地肌やや荒れる。	淡赤褐色		

② 埴輪頭部片

番号	残存部	器面調整	
		外面	内面
4	残存長13.5cm, 残存高5.4cm。欠けた頸部に口縁下半わずか残る。器壁の厚さ約1cm。	ハケメ不明	ナデ
5	残存長約15cm, 残存高約5cm。肩部わずか残る。接合部に灰色の突帯があったとみられる跡あり。	タテハケ、灰色の辺までつく。	ヨコハケ(12)4個所とめて続ける。それに一部ナナメハケ。肩部にナナメハケ、それに太めのナナメ刻みところどころつく。
10	半分近く残り、上下接合部で欠ける。残存高10.6cm、下端から高さ約1.5cmに内弯、上向きの突帯がめぐる。器壁厚さ1.6cm	タテハケ(10)にナナメハケ、ナデ、接合部指ナデ。突帯わずかはげたあとにタテハケあり。	ヨコハケ(上方9、下方12)下方とめて続ける。ナデ、オサエ。
	約9.5cm×9.7cm、上端接合部で欠ける。	タテハケにナナメハケ、ともにかすか、ナナメハケは3個所とめて続けたか。ナデ、接合部に指ナデ。	ヨコハケかすか、ナデ
	頸部の突帯残存長7.2cm、幅1.7cm、内弯し、上向き、先端は円味をもつ。先端で厚さ約5mm	ナデ。突帯接合の部分にタテハケのあとあり。	
	約4.1cm×6.7cm、残存長3.6cm、幅約1.6cm、突出長5mm三角形の突帯がつく。器壁厚さ約1cm	タテハケ一部かすか。	ハケメ不明

③ 埴輪肩部片

番号	残存部	器面調整	
		外面	内面
11	5.7×9.6、厚さ約1cm、下方に接合部わずか。	タテハケにナナメハケかすか、4本の重弧文状の刻みつく。	ヨコハケにナナメハケ、ナデで消える。
12	6.1×9.2、厚さ約1cm	タテハケ(12)にナナメハケ(11)	ナデ、指でタテナデ
	9.3×6.5、厚さ約1.1cm	ナナメハケ(10、右上→左下)	ヨコハケ(10)幅3cmの工具、とめて続く。
	7.4×8.8、厚さ1.1cm	ナナメハケ(12、右上→左下)にタテハケ、下辺にヨコハケ	ナデ、指でタテナデ

焼成	色 調		径	備 考	
	外 面	内 面			
良		淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒が目立つ。	淡赤褐色。	復原径13.2cm	二重口縁
良	接合部突帯はげたか。幅約1.4cmの灰色が帯のようにめぐる。	淡赤褐色	淡赤褐色。	復原径16.9cm	口縁のひらく壺形土器、埴輪か不明。
良		淡赤褐色	淡赤褐色	復原径17.8cm	後円部東斜面出土
良		淡赤褐色	暗黄褐色、地肌かなり荒れる。砂粒あとあり。		上の頸部と同一個体か。
良		淡黄褐色、下面に赤色顔料残る。			埴輪につく突帯として、前方部西北角西側出土
		淡黄褐色、地肌荒れる。	淡赤褐色、地肌荒れる。		参考例、前方部西北角西側出土

焼成	色 調		備 考	
	外 面	内 面		
良		淡黄褐色、赤色顔料かすか残る。	前方部西北角西側出土	
良		淡黄褐色	やや暗黄褐色	
良		淡赤褐色、	暗黄褐色	
良		淡赤褐色	やや暗黄褐色	12と同一個体か。

④ 埴 輪 タ ガ 片

類	タ						ガ			焼 色 調		
	番号	残存 長 cm	全幅 cm	上面 幅 cm	突出 長 mm	厚さ(タ ガと 胴 部) cm	器 面 調 整		成	色 調		
							外 面	内 面		外 面	内 面	
A	24	9.5	3.3	2.6	7	1.9	ヨコナデ	ナデ	良		淡赤褐色	暗黄褐色
	25	14	4.2	3.3	7	1.9	ヨコナデ	ナデ	良		淡赤褐色、 一部に赤色 顔料	
	26	19	4.2	3.2	6	1.7	ヨコナデ	ナデ	良	黒斑胴部に あり	淡赤褐色	淡赤褐色
		8	4.2	3.3	9	1.9	ヨコナデ	ナデ、オサエ	良		淡赤褐色、 地肌荒れる	淡赤褐色
B	19	18	5.5	4.8	7	1.9	やや斜めのヨコハ ケ(10)にごく細い ヨコハケ	タテナデ	良	黒斑半ば以 上	淡黄褐色の 間に黒斑	淡赤褐色、 地肌荒れる
	20	11	5.7	4.8	6	1.9	ヨコハケ	ヨコナデ	良		淡黄褐色、 地肌荒れる	淡赤褐色
C	18	7.5	8.2	約 7.5	3	1.5	ヨコハケ(8)にナ メハケ(9、右 上→左下)	ヨコナデ、のち指 でタテナデ3個所	良	黒斑が占め る	淡黄褐色に ずか、地肌 やや荒れる	淡赤褐色 砂粒目だつ
D	21	24	6	4.5 ~5	6	1.7	ナメハケ(14)に ナメハケ(9)格 子状、黒斑に残る	ヨコハケ(12~15) とめ、続ける、3 個所。その上にナ メハケ(12、右 上→左下)、さら に2、3本のユビ でナデ(左上→右 下)めぐる。	良	黒斑一部	淡黄褐色に 黒斑、地肌 やや荒れ、 砂粒目だつ	淡赤褐色

タガと胴部の接合	胴 部					備 考	
	タ ガ		器 面 調 整		ス カ シ 孔		径 cm
	上方	下方	外 面	内 面			
	一部残存	わずか残存	上方にタテハケ	わずかナデ			
	わずか残存	一部残存	上方にタテハケ、下方にタテハケをはさみ、弧状のハケメあり、その上を一部ヨコナデ。	ナデ、オサエ		26と同一個体、タガ間の幅15.7cm	
	わずか残存	約12cm×19cm	上方にタテハケ(11)下方にややナメハケ(15)、タガ直下約6cmの間に弧状のハケメが右から左へ約2cm幅で重なり続く。左辺に黒斑。	ナデ、オサエ	タガ上方7mmに残存長縦8mm、横1.7cm方形スカシ孔、タガ下方5mmに残存長縦13cm、横1.7cm方形スカシ孔	最大径約33cm(タガ上)の幅13.7cm	
	わずか残存	一部残存	タガの一部胴壁からとれ、ナメハケがみえる。下方にもナメハケ			25、26と同一個体か	
上方側面板状工具でナデ、平らか、ついで胴部ナデる。下方側面も同じくナデ、指ナデも用いたか。タガ上面両側端おされ、やや高まる。	一部残存	わずか残存	上方幅約3.5cmやや斜めのタテハケ(9、右上→左下)、がわずか重なりめぐり、右辺でさらにナメハケが重なりつく。タガ直上ヨコナデ、オサエ。下方やや斜めのタテハケ。	ナデ、オサエ	タガ直上約2cmで、残存長縦3.3cm、横9mm方形スカシ孔、厚さ1.3cm、切込みのあとあり。	径推定約36cm 前方部西北角西側崖面より出土	
同 上	一部残存	わずか残存		ヨコナデ		19とよく似る破片。	
タガ上方側端欠ける。下方側端やや磨滅するが、ヘラ状工具で削ったか。	欠ける	わずか残存					
タガ上方側面ならかに胴部に続く下方側面は傾斜やや急。ヒトサン指とオヤ指で両側をなでたか。	一部残存	胴部欠け、スカシのみわずか残存	上方にわずかタテハケ	上方ナメハケの上に指ナデ 下方ヨコハケ	タガ下方6mmに残存長横3cmスカシ孔		

類	番号	タ				ガ						
		残存長	全幅	上面幅	突出長	厚さ(タガと胴部)	器面調整		焼成	色調		
		cm	cm	cm	mm	cm	外面	内面		外面	内面	
	22	17	6.3	5.3	6	1.8	ナナメハケ(14、右上→左下)にナナメハケ(9、左上→右下)格子状	ヨコハケ(13)にオサエ	良		淡黄褐色、地肌やや荒れる	淡赤褐色
D	23	5	7.2	6.5	4	1.6	ナナメハケ(9、右上→左下)にナナメハケ(9、左上→右下)格子状、下端ハケメみだけ、傷つく。	ナナメハケにオサエ	良	黒斑が占める		淡赤褐色
	27	19.5	5.8	4.7	6	1.6	太めのナナメタタキ(7、右上→左下)にナナメタタキ(左上→右下)残る。	ナデ、凹凸あり	良	黒斑わずか	淡赤褐色	淡赤褐色
	28	12	6.8	5.9	6	1.8	太めのゆるやかなナナメタタキに太めのナナメタタキにナナメタタキ、格子状	ヨコナデ	良		淡黄褐色	淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ
E	29	8	6.5	5.8	5	1.4	太めのやや斜めタテタタキハケ(左上→右下)に太めのナナメタタキ(7、左上→右下)格子状	ヨコナデ	良	黒斑わずか	淡黄褐色	淡赤褐色
	30	22	8.3	7.2	6	1.8	太めのゆるやかなナナメタタキ(左上→右下)が目立つ。	ナデ、オサエ、かなりへこむ。	良	黒斑わずか	淡赤褐色、地肌荒れ、	淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒目立つ
	31	12	8.8	8.4	5	1.4	太めのナナメタタキ(右上→左下)に太めのナナメタタキ(7、左上→右下)上方は太めのヨコタタキ、格子状。下部わずか外反。	ナデか、不明	良		明淡赤褐色、白みがかかる。地肌荒れ、砂粒目だつ。	明淡赤褐色、白みがかかる。地肌荒れ、砂粒目立つ。
		16	5.7	約5	6	1.9	不明	ナデ			淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ	淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ
F		8.5	6.6	6.2	約1.5	3	ヨコナデ	ナデ			淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ	淡赤褐色

タガと胴部の接合	胴 部				備 考		
	タ ガ		器 面 調 整			ス カ シ 孔	径 cm
	上方	下方	外 面	内 面			
タガ上方側面と胴部の接合に板状工具の角でなでる。下方側面は傾斜やや急。	一部残存	わずか残存	上方にやや斜めのタテハケ	ヨコハケ(12)に上方ナメハケ(12)、さらに幅約1cm6本のナメハケ1個所と同じ工具による2個所のハケ	タガ下方8mmに残存 長横2cmスカン孔		
タガ上方側面板状工具でナデ、下方板状工具が棒状工具の先でナデ	欠ける	一部残存、両端にわずか黄褐色、器壁厚さ1.1cm	ナメハケ(12、右上→左下)	ナメハケ(12~15、右上→左下)に一部タテハケ		タガ上に鋸歯文状の沈線あり。	
タガ上下両側面板状工具でナデ、タガ上面側端やや高まる。	欠ける	わずか残存	下方にタテハケわずか	ナデ			
タガ上下両側面板状工具でなで、上方側面はややなだらかに指ナデか	わずか残存	わずか残存	タテハケ、ナメハケわずか		タガ下方3mmに横残存長3.5cm、方形スカン孔		
同 上	わずか残存	わずか残存 器壁厚さ1cm	上方にタテハケ(10)、下方ナメハケわずか。	ヨコナデ			
タガ上下両側端板状工具つかい、ユビナデ、タガ上方側面なだらかなら、下方側面ゆがむ	一部残存	わずか残存 器壁厚さ1.1cm	上方にヨコハケ(9)にタテハケ(13)、赤色顔料わずか	ナデ、オサエ		最大径約30cm	
タガ下方側面へラ状工具で削ったかタガ直下の胴部やや磨滅。	欠ける	わずか残存				後円部墳頂の埴輪基部と似る。	
タガ下方ほとんど欠けわずか工具の先の痕跡残る。	欠ける	一部残存	胴部からタガ上方側面へタテハケらしい痕跡	ナデ	タガ直上1.5cmに三角形スカンの鋭角切り込みあり、器壁厚さ9mm		
タガ上方側面やや残るが欠け、下方側端調整なし。	欠ける	わずか残存	ヨコナデ、オサエ	ナデ、オサエ	タガ直下8mmに残存 長横3cmスカン孔、 厚さ8mm	異例のタガ。山鹿市チブサン古墳の円筒埴輪に平たくおさえた例あり。	

⑤ 埴 輪 胴 部 片

番号	残存部 cm	厚さ cm	器 面 調 整	
			外 面	内 面
13	13×12	1.1	タテハケ(12)、中ほどナナメハケ。 タテハケ上端にヨコハケ。	やや斜めヨコハケ(12)とめて続く
14	8.5×9		やや斜めタテハケ(11、右上→左下) に同方向のナナメハケ(14)半ばつく	ナナメハケ(12、右上→左下)にナ デ
15	18×13	1.2	ナナメハケ(13)が途中タテハケ(11) となり、ナナメハケ(12)が交叉。	ヨコハケ(12、16)にタテハケ(16)、 ナデ、一部縦に指ナデ
16	7.5×7.1	1.5	あらいタテハケ(5)	タテハケ(7)
17	8×10.5	1.4	タテハケ(12)、ナナメハケ(12)にヨ コハケ(9)	タテハケ(12)ナデ
25	14×9	1.1	ナナメハケにタテハケ(11)	ナデ、縦に指ナデ
	9.3×12	1.4	タテハケにタタキ	ナデ、縦に指ナデ。
	13.5×6	1.1	ナナメハケ(右上→左下)にやや斜め タテハケ(12)	ヨコハケにナナメハケ(13)、ナデ
	12×6	1.1	不明	ナナメハケ(13)、オサエ
	9.5×8.4	1.2	タテハケ(12)上端にヨコナデ	ナナメハケ(15、右上→左下)ナデ、 縦に指ナデ
	5.3×10.7	約1	ナナメハケ(13、右上→左下)	ナナメハケ(15、右上→左下)ナデ
	8.3×5.7	1.7	あらいタテハケ	タテハケ(うち3本太め)にナナメハ ケわずか

焼成	色		調		スカシ孔	備考
	外	面	内	面		
良	黒斑が占める	淡黄褐色	淡赤褐色、白み がかかる	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長11.5cm三角形 スカシ孔、厚さ 1.1cm	やや円弧状に張 り、割れかた縦 が短い。
良		淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	縦残在長7cm、 厚さ9mm	円弧状にやや張 る。
良		淡黄褐色	淡黄褐色 砂粒あとあり	淡黄褐色	ケズリ、縦残存 長16cm、方形ス カシ孔、厚さ1.1 cm	
良		暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色		
良	黒斑が一部	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色		
良		淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長9cm、方形ス カシ孔	
良		淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長6.5cm、方形 スカシ孔	やや上辺へカー ブする。
良		淡赤褐色、地肌 荒れ、砂粒あと 目だつ	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長9.5cm方形ス カシ孔、厚さ1.2cm	
良		淡赤褐色 砂粒ふくむ	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長11.5cm方形ス カシ孔	
良	黒斑が半ば	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色		
良		淡黄褐色、地肌 荒れる	淡赤褐色	淡赤褐色		
良		暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色		16の破片と似る

⑥ 埴輪基部片

番号	残存部	器面調整	
		外面	内面
32	約7.5cm×8.7cm、外面底部へかけ内反、やや円味もち、内面はやや外反。底部幅2.2cm、平ら。厚さ上端1.2cm。	やや斜めのタテハケ(10、右上→左上)に円弧状のナナメハケ(10、左上→右下)	ナデ、オサエ。左辺に幅約4cmの板の小口らしいあと
33	9cm×3.5cm、逆Y字形に外面やや張る。底部幅1.7cm、平らで両端やや円味もつ。厚さ1.4cm	タテハケ(9)底部から高さ2cm前後でオサエ、タテハケ重複。	ナナメハケ(9、右上→左下)うち1本は太く、板小口の端か
34	基部半分近く残る。残存高約19cm。底部幅約2.6cm、逆Y字形に、内面巻き上げ成形。底部から高さ3.5cmで器壁厚さ1.1cm。薄めにみえる。	やや斜めのタテハケ(10、右上→左下)に一部交叉するナナメハケ。基部下端わずかヨコナデ	ヨコハケ(10)左から右へ、とめて続け、ナナメハケとなる。他にヨコハケにナナメハケ。ナデ。下端はオヤユビでオサエ、ナデ。底部平ら、凹凸わずか。
35	5.8cm×9cm、逆Y字形に外面かなり張り、底部幅2.4cm、平ら。厚さ2cm。	ナデ	ナデ
	残存長7.4cm、残存高3.1cm、底部幅2.4cm、逆Y字形になり、底部平ら。	ナナメハケかすか	やや弧状のヨコハケ、指でオサエ、ナデ

- 【備考】
- ()内数字は幅2cm内のハケメ、タタキメの本数、但し同一個体でも場所により1.2本増減がある。
 - ()内方向は埴輪片にむかった場合の便宜的なもので、工具のうごく方向ではない。
 - ヨコハケ、ヨコナデが右から左へ、タテハケが下から上へ、左から右へつけられ、ヨコハケBは埴輪技法、ヨコハケCは須恵器技法、タテハケは弥生式土器技法にさかのぼることが指摘されている。(川西氏論文による。)
 - 本表は試案として掲げる。番号は図版のもので、変化の順ではない。欠番は図版のないもの。

焼成	色		調	径	備 考
	外	面			
良	黒斑かすか。	淡黄褐色	淡赤褐色		
良	黒斑が占める。		淡灰褐色		底部から約3.5cm辺で欠け、巻き上げにかかわるか。
良		明淡赤褐色、白みがかかる。赤色顔料わずか。	明淡赤褐色地肌荒れ、砂粒あり。	復原径34.7cm、残存高19.2cm	基部内面で底部から高さ約3cmに巻き上げとみられる線つく。後円部墳頂東側出土。
良		淡黄褐色	淡黄褐色		後円部墳頂東側出土。
良	黒斑わずかつく。	明淡赤褐色	明淡赤褐色		上記のものと割れめ接合。はじめ高さ約3cmの巻き上げか。後円部墳頂東側出土。

(付) 石蓋土壙

—— 向野田古墳前方部の北方出土 ——

向野田古墳前方部の北方約40m先をブルドーザーが削平し、西側崖面を削った所、穴があり、石蓋土壙の存在が分かった^①。

主軸の方向はほぼ南北で、やや東へ片寄り、4枚の板状自然石を蓋石にする。安山岩とみられる長さ80cm・幅約90cm・厚さ5cmの一番大きな石からやや小さな石が2枚続き、4枚目はそれらよりやや大きく、南側から順に石の端にのせてかけ、東側と西側を小さな石2枚で補なう。蓋石裏面には赤色顔料が塗られる。蓋石の周りに粘土が巻かれる。土壙は長さ上面で1.65m・床面で1.45m、幅南側で上面約47cm・北側で43cm・床面南側で29cm・北側で26cm、土壙の上面・床面ともに側壁に歪みがあるが、舟形状を呈している。深さ南側で30cm・北側で20cm、蓋石は南から北へやや傾斜する。南側壁に接し、高さ15cmで北へ凹みをもちながら傾斜する長さ30cm・幅15cmの粘土枕とみられる高みがある。その辺は赤色顔料もこく目立った。頭部が置かれたものであろう。遺物はなかった。土壙は地山を利用している。

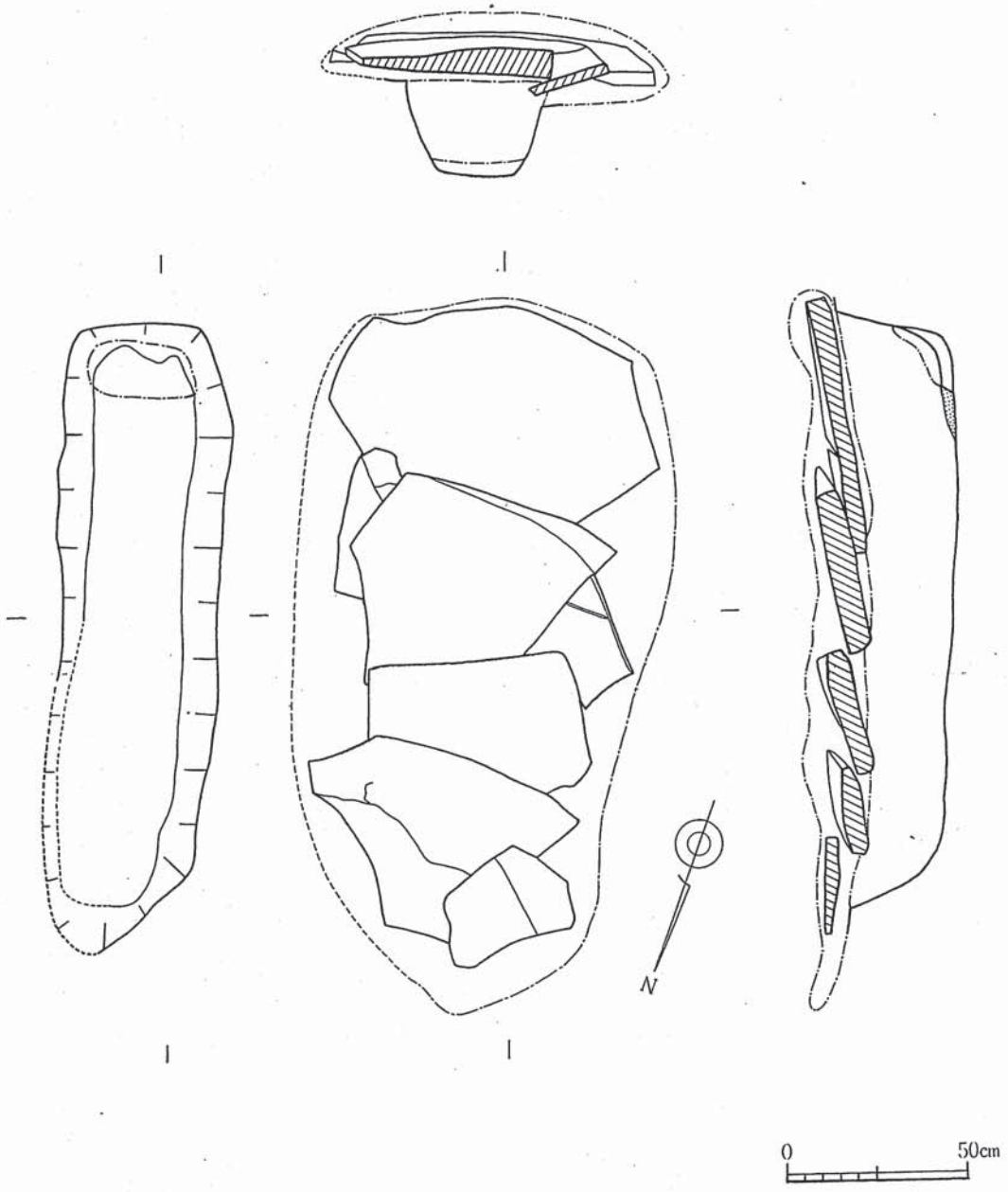
向野田古墳の東北図上直線距離約1.7kmの地点、立岡池に臨む丘陵突端に宇土市花園町榑崎古墳がある。その後円部南北一列に西側小口壁を一直線に揃えた第4棺は石蓋土壙で、もと長方形の箱式を呈し、上面からやや斜めに傾斜し、側壁・床面は箱式となっている。宇土高校社会部で、墳形・石棺実測の折、筆者も土壙を測図した。上面の長さ約1.7m・幅約75cm・床面長さ1.47m・幅東側40cm・西側30cm・深さ約43cmある。蓋石は阿蘇溶岩で板状のものが1枚現存した。

大正11年の京大調査によると、長さ4尺・幅2尺6寸・厚さ2寸5分内外の蓋石があり、一文字蓋とあるのが現存の1枚に当たるのではないかと思われる。他の蓋石はこわれている。「身は蓋の石製なるとは異なり、粘土を固めて作りたる土棺と覚しく、長さ6尺1寸、幅2尺5寸の長方形の堅き土質の中央に縦5尺1寸・横1尺3寸の大きさを1尺2.3寸掘り凹めて遺骸装置の部分形造れる所、我が古式の古墳に往々類例を見る粘土槨と石棺の中間型を示すものとして興味を惹く。」とある^②。

土壙の底の堅さは、向野田の例と似るけれど、蓋石・土壙・枕状の粘土などがうところもある。榑崎古墳は六朝中期かなお降る頃といわれるが、今日6世紀前半に比定される見方がある^③。

向野田の石蓋土壙は、前方後円墳の近く、ほぼ同じレベルにあり、或は関連があったのではないかと思われるが、明らかでない。榑崎古墳の家形石棺3基と石蓋土壙共存の例と異なり向野田古墳の場合、距離的にやや離れている。

石蓋土壙について、土壙の形式に箱形と舟形の2種類をとり上げ、前者が弥生後期から古墳末期にあり、後者が弥生中期から古墳前期におよんでおり、後者の方が基本形かとも思われる



第 29 图

石 盖 土 坟

との指摘がなされている^④。檜崎は箱形でも、上半が外反りになり、箱形と舟形の間にあるともみられ、向野田は舟形に近い。形式的に、石蓋土壙として檜崎より向野田の方がやや古いのではないかと考えられる。

なお宇土市椿原町に、古墳とは離れて、側石1個をそなえた石蓋土壙があった。石蓋は阿蘇溶岩の1枚もので、土壙は舟形であった^⑤。同立岡町西潤野には家形石棺のつく土塚があり、舟形を呈している^⑥。

註 ① 昭和43年2月1日暮方、池田組からの連絡で、筆者はただちに向野田へ登り、石蓋土壙であることを確かめた。

② 梅原・古賀・下林「宇土郡檜崎の古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第二冊、熊本県、1925

③ 昭和50年11月、県指定史跡となる。

④ 鏡山猛「弥生式墳墓 4土壙墓」北九州の古代遺跡 第二版、1957

⑤ 三島格「宇土市轟榛原における石蓋土壙の一例」熊本史学第15・16号、1959

⑥ 富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」ともしび第5号、宇土高校社会部、1960

VIII おわりに

1. 考 察

墳丘・墓壇・石室・石棺・副葬品・被葬者

向野田古墳は、熊本県宇土市松山町3993番地（後円部）を主とした地点にある。その北方丘陵は前方部をはじめかなり広く削平されてしまった。

宇土半島基部前方後円墳群の1基として、女夫塚古墳・松橋大塚古墳などを除き、他の前方後円墳の例とともに近年続いて筆者らにより発見されたものである^①。

この古墳は半島基部の前方後円墳の中であって、今のところ唯一の処女墳であったことも特記される。多くの古墳が盗掘・破壊されている中に、ことに後円部において原初的な姿を残してこられたのは謎とってよからう。

半島基部の前方後円墳の分布について、宇土半島基部前方後円墳群として、それらの古墳の間に竪穴式石室から横穴式石室への変遷過程がみられ、さらにいくつかの小グループを形成している。また出土遺物の中に、城ノ越古墳の三角縁四神四獣鏡、チャン山（茶臼山）古墳の鳥獣鏡^②、また国越古墳の画文帯神獣鏡・四獣鏡・獣帯文鏡^③、さらに向野田古墳の3面の鏡を加え、とくに国越の画文帯神獣鏡は熊本県江田船山古墳出土のものと同範鏡の関係が指摘され、半島基部前方後円墳の考察にあらたな視点がひらかれ、今後の追究に期待がもたれる。

向野田古墳の立地は、半島基部狭隘地帯東側丘陵の南端上にあり、不知火・有明両海を控え、熊本・八代両平野を結ぶ重要なルートを扼する地位を占め、どちらかといえば不知火海へ志向する形を示している。標高37m余の丘陵尾根の自然地形を利用し、岩盤を削って、墳丘を築成し、また石室を構築している。

1. 墳 丘

墳丘は、丘陵尾根南端に後円部を、その北方に前方部があり、前方部切断の形を呈していた。宇土地方で前方部切断の例に摺針山古墳があったが、その前方部は道路化してしまった。向野田の場合、墳丘は丘陵尾根いっばいに跨り、墳丘斜面の段築は明らかでない所がある。墳丘に葺石のあることは前方部先端の高み、後円部墳頂のほか、東・西・南三斜面の残存の葺石の所在により確かめられた。ただ墳形の変容が甚しく、わずかに前方部東北の一角から三段築成ではなかったかと推測される。葺石がコンターの-4m~-5m辺に、また-7m~-8m辺に見出されることも参考される。ただ葺石を探し求めた発掘が局部的であって、東・南両斜面が雑木林に覆われたこともあり、全容を推定することはできかねた。

なお葺石が東西両斜面でわずかであるが、コンターの $-14m \sim -15m$ 、また斜面裾近くにもあった点は、墳丘斜面落下の葺石かどうか、またそうした斜面下方まであって、聖域視されたものかどうか、今後の問題点としておく。

墳丘に企画性のあることは、前方後円墳に関心を抱くとき、想像されることである。今回、桐国男氏の「古墳の設計」を読み、墳形実測図に当たったところ、意外にも日葉酢媛陵型に近いことが明らかとなった。墳丘の計測数値は松本雅明博士の計測を参照して、実測図から墳丘長を $86m$ 前方部幅を $33.5m$ とした。 $AB : CD : EF = 8 : 4(2) : 3.1$ 弱となった。日葉酢媛陵型の第二型式は、「後円部が大きくなり、このために短くなった前方部を、幅と開きの増加によって補った設計型、山裾の緩傾斜地や平坦部などに自然地形を生かして築造され、主体部は竪穴式石室で、石棺が使われはじめる。埴輪は円筒型のほかに器財埴輪も現われ、墳丘の裾に沿ってクビレ型の濠がめぐらされる。成務陵や神功皇后陵に代表され、その設計比は、 $8 : 4(3) : 3.5$ である」とある。向野田の場合、主体部は似るけれど、丘陵尾根にあり、濠はなかったとみられる。墳丘長八分比設計が行なわれたのではないかと考えられるが、ひとつの試みとして検討を待ちたい。

2. 墓壙・石室

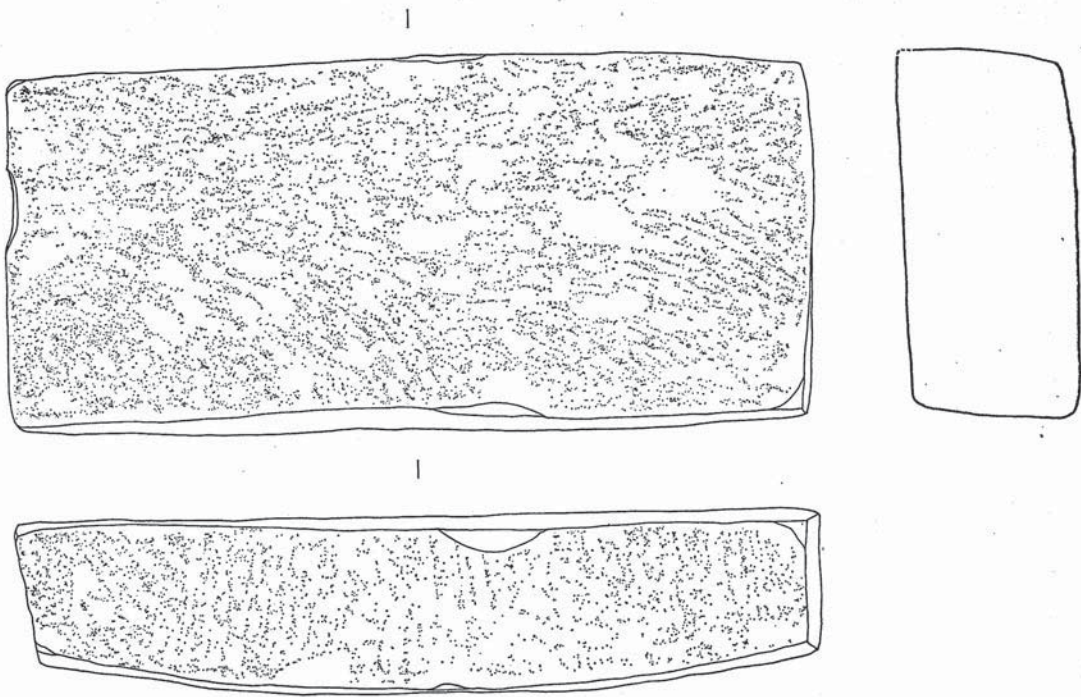
墳頂平坦部の現状は、楕円形に変形し、東西 $16m$ 、南北 $12m$ あり、中央は $50cm$ ほど高くなる。墳丘の南北主軸に添って長方形近く上面で長さ $9.86m$ 、約 $10m$ 、幅南側 $7.08m$ 、北側 $6.46m$ 、約 $7m$ で、逆台形に掘り込まれ、床面長さ $8.65m$ 、幅南側 $5.57m$ 、北側 $5.26m$ あり、墓壙斜面の傾斜は $50^\circ \sim 70^\circ$ をなし、深さは $1.5m \sim 1.7m$ ある。仮に第1次墓壙としたものである。その墓壙床面の周りを残し、中央に長さ $6.93m$ 、幅南側 $4m$ 、北側 $4.01m$ を逆台形に掘り下げ、斜面傾斜が 70° 、深さは $1.5m \sim 1.7m$ ほどある。第2次墓壙で、この中に小さめな砂利、小さめな礫、拳大の礫をしき、板石をのせ、さらに粘土をおいて石棺を据え、石棺の周りに割石を持送式に小口積みになっている。天井石は7枚で、南端の1枚は石室にかからないが、他の6枚と続いておかれる。天井石上はややつぶされた蒲鉾形に粘土被覆がひろがり、その南端に板状割石1個が直立した形にあった。割石は第1次墓壙の残された床面の高さまで積んである。

前期的な竪穴式石室で、石棺の基底部に排水、排湿が工夫されている。

内部主体の基底部の型式で、粘土床下に板石があり、その板石下に礫石のある滋賀県安土瓢箪山古墳の基底部の例は、礫石と板石を使い、その上に粘土床をおいた点で注意をひく。^⑦

向野田の場合、基底部の調査は石棺南端長さ $1m$ ほどを棺身中央へ掘り込んだものであった。保存のため基底部の一部調査であって、排水溝の有無は分からなかった。構造の用意からみて排水溝はなかったのではないかと思われる。

この基底部調査の折、割石積み中に凝灰岩の石枕とみられる石材1個が出土した。この石材



第 30 圖

枕 石 未 製 品

には頭部の彫り込みなどみられず、未完成のものともみられる。被葬者2体分のためのものであったかどうか、2体の場合とすれば、北側に1個、南側に1個おくほかしくなく、竪穴式石室の伝統から、石棺としても1体分の石枕をととのえ、捨てられたものと思われる。

竪穴式石室の構造について、小林行雄博士は三つの群に分けられたことがある。(註、次の表は筆者がまとめたもの)

第12表 竪穴式石室分類表(1)

	石室長	石室幅	石室高さ	備考
A	1.5~3.5m	0.5~0.9m	0.5~0.9m	底部に砂・小石・板石しく。
B	5~8m	1m前後	1~1.5m	割竹形木棺を含むものがある。狭長な石室。
C	2.7~6m	1.5~2.5m	1.2~2m	石棺がある。矩形化した石室。

向野田古墳の石室は長さ・幅および高さの数値は3群のうち、B群に当たるものであるけれど、石棺のある点でC群にかかわる。A・B両群石室の年代は近くにあり、C群は木棺を石棺にかえた後に生じた石室で、石棺の関係から生じた形式とされる。向野田古墳はB群の石室例であり、内部に石棺がある点で、C群へのつながりが考えられ、前期的であるけれど、より下る年代にかかることが思われる。

最近、この竪穴式石室の分類方法から、割竹形木棺、粘土床、舟形石棺、複数屍床また箱式石棺などの内蔵、その他から県内の竪穴式石室をA~E類に分類された三島格氏らの研究がある。(註、次の表は筆者がまとめたもの)

第13表 竪穴式石室分類表(2)

	石室長	石室幅	特 色	該 当 古 墳 名
A	約5~6m	1m前後	割竹形木棺を収めたもの。	弁天山古墳、迫の上古墳、4世紀代。
B	4.5m前後	1.3m前後	長さは短かいが幅は大きくなる。	竜王山古墳、粘土床が遺存、4世紀後半~5世紀初。大風蔵楠木山古墳、やや時代の下降するもの。
C	3.5~4.5m	1m前後	舟形石棺を内蔵。	向野田古墳、大王山古墳(石棺の法量で石室長に差)5世紀前半。
D	3m	2.3m	方形に近い長方形プラン。	別当塚古墳、2区の屍床、5世紀後半。小風蔵1号墳、箱式石棺を内蔵。
E	2m前後	1m前後	小型のもの。E類の一部はC類と並存。	成合津2号墳、長目塚前方部石室、丸尾7号墳、瀬崎古墳、通詞島東古墳。成合津と通詞島東は箱式石棺内蔵。成合津2号墳は5世紀後半、長目塚前方部石室・丸尾7号は5世紀前半。

なお熊本県では5世紀末～6世紀初には竪穴式石室の姿は消え、他の墓制に転換していくものとされる。そこでは、向野田古墳を5世紀前半に比定されていることが注意される。

上述の研究から3年前、福岡県を中心に竪穴式石室の形態を三大別された研究と、その後九州に於ける竪穴式石室を三類別された研究があり、いま手許にある後者の後告による。(註、次の表は筆者がまとめたもの)

第14表 竪穴式石室分類表(3)

	石室構造	特 色	該当する古墳
I	扁平割石小口積みの畿内型	三角縁神獸鏡を中心として鏡のあるのが多く、玉類・刀剣を主とする武器類を伴なう。大和政権とかかわる首長墓の性格が窺われる。	福岡県、石塚山古墳・銚子塚古墳・沖出古墳。 熊本県、弁天山古墳(以上4世紀代) 福岡県、月の岡古墳。 佐賀県、谷口古墳。 熊本県、向野田古墳(以上5世紀代)
II	畿内型を受容し、伝統的墓制を脱した塊石積みの竪穴式石室	竪穴式石室(I類)の拡充、円墳が多く、石室内法は縮少する。またII類の前提には箱式石棺が多くみられる。I類の系譜をもちながら畿内文化として舟型・長持石棺の導入(月の岡、谷口、向野田)、竪穴系横口式石室(老司)、九州型石棺(石人山、船山)などがあらわれる。	福岡市、今宿2号墳・持田ヶ浦2号墳・粕屋郡七夕池古墳(以上5世紀代) 福岡市、老司古墳。 福岡県、石人山古墳。 熊本県、船山古墳(以上5世紀代)
III	箱式石棺を母胎に竪穴式石室を導入した石棺系石室	箱式石棺の伝統的墓制の古さが残る。副葬品が貧弱、鉄製農工具・刀剣・鉄鏝が中心で、鏡玉類はほとんどない。古墳の群集性が強い。また控積みをもち、大型の天井石の石室化の傾向があり(栗崎山4号、石亀城、荒田比)、年代が降る。	福岡県、東宮ノ尾古墳群・片山古墳群・炭焼古墳群・栗崎山4号墳・石亀城古墳・荒田比石棺・こうしんのう5号墳(以上5世紀代)

大和政権と氏姓制的身分秩序関係から、在地首長層、その象徴とみられる筑紫君・肥君、また配下の共同体の首長と古墳のかかわりを指摘されている。

以上3表のまとめについて不十分な点は御寛恕を請う。

向野田古墳が、小林博士の3群分類のうち、B、C両群にかかわることはすでに述べた。三島格氏らの熊本県内の例から分類されたA～E類のうちでは、とくに一項目としてC類を立てられている。また山中氏の九州内の例から示されたI～III類の分類では、I類におかれ、内容的にはII類の特色として舟形石棺が注目されている。

以上先学の指摘により、向野田古墳が舟形石棺をもつ竪穴式石室として、石室変遷過程における編年の位置づけがほぼ明らかにされたことは重要であると思われる。

なお、内部主体は異なるけれど、向野田古墳の場合、奈良県東大寺山古墳その他と同じく二段墓壇をなしていることが明らかになった。東大寺山古墳の例について、古代中国の墓壇にこのような構造をしのばせるものがあることは興味がある。向野田の場合、大陸に近い中九州西海岸にあることが注目され、今後の追究が望まれる。また向野田がながく処女墳であったのは、この二段墓壇の深さに埋納されていたこととかかわりがあるのではないと思われる。

3. 石 棺

向野田古墳の舟形石棺は、いわゆる典型的な舟形石棺でないことは先に記した。棺蓋が舟形で、棺身は箱形、その底部は箱形の周りに台状の平縁部をそなえている。棺身のそうした形はどこから工夫されたものかは興味がある。

割抜式石棺について割竹形石棺→舟形石棺→家形石棺という展開の単線形図式も考えられるけれど、向野田の舟形石棺の一例をみても、そこに箱式棺の伝統が窮われるようである。

割抜式の場合、棺材として阿蘇凝灰岩のもつ役割は九州においては決定的とみられる。また割抜のため適当な石工用具が用意された段階でなくてはならない。

肥後の舟形石棺について、玉名郡に中心があることが指摘され、その形式を3分類された研究がある^①。

A式……舟縁を有せず、枕付、尻細りの平面形を有す。

B式……舟縁を有し、枕付、尻細り。

C式……退化形式の舟縁を有し、枕なし、平面形は矩形だが胴太りのものもある。

共通点は棺身の断面が矩形でなく、丸味を帯びる割抜式のものである点。蓋を有するものは皆家形だが、全般を察し得ないとある。

向野田の舟形石棺にも、棺身の箱形をのぞけば、B式のおもかげが残されているように思われる。蓋が家型というのも注目される。向野田の場合も、棺蓋断面は扁円形というより家形に近いところがある。

向野田の舟形石棺について、先学は九州的な舟形石棺の系譜の中におかれている^②。

向野田古墳から図上直線距離約25km南方に八代市宮原町早尾の標高約20mの丘陵上に大王山古墳がある。はるか不知火海に面している。大王山古墳北方2キロの丘陵上に野津古墳群があり、南方丘陵に岡谷川などの古墳群が続いている。大王山古墳は、円墳とみられるが、現在封土は失なわれ、竪穴式石室の残骸の中に舟形石棺が露出していた。石室の大きさは、報告によると、長さ3.60m・幅1.15mあり、棺蓋は半ば欠損し、棺身の大きさは長さ3.04m・頭部幅88cm・中央部幅90cm・尾部幅88cmある^③。

この大王山の舟形石棺出土の状態は、見たところ、向野田古墳の竪穴式石室を開いた時の舟

形石棺の状態ときわめて類似していることであった。

阿蘇熔岩の刳抜式で、棺蓋の一端に縄掛突起があり、棺蓋の舟縁状の平縁部に長方形の孔がつき、棺身に石枕が設けられていた。棺身の舟縁状の平縁部下方は埋まってみえない。外見上、そこまでは向野田古墳とほぼ似ている。こうした石棺製作上の類似は、石棺工人の問題を考えれば、工人集団の間になんらかの形で石室・石棺の図式が伝えられたものか、または工人集団のうちに工人の移動によりその図式が知られたものか、さらにその図式が独立に考案されたものかなどいろいろの径路が臆測される。距離的にそう遠くはなく、独立に考案されたというより、なんらかのかかわりが考えられるようである。

問題は、両者の舟形石棺が棺身底部の調査で、大王山は舟形で地山に直接埋められており、向野田の場合は棺身基底部の構造が舟形ではなく、小さな砂利、小さな礫、拳大の礫をしき、板石をのせ、さらにその上に粘土をおいて石棺を据えていたことである。

佐賀市熊本山古墳の舟形石棺は全長4.3 m、その石棺を一見して驚き、密柑畑の熊本山をたずねたことがある。墳丘はほとんど跡形もなくなっていた。報告によると、熊本山の舟形石棺は石室もなく、直接地山に埋められていた。そして棺身底部は舟形を呈している。石棺の長大さは、その内部が主室の前後に副室がおかれたこととかかわりのあることが指摘されている。^⑭

鹿本郡大塚古墳は二段封土の円墳で、下段の頂に舟形石棺1基、長持形石棺1基が東西に並べられていた。その破砕した舟形石棺の復原棺身の長さ約4 mで、両端に40cmの大きな縄掛突起があった。その石棺の辺から碧玉製石釧片が出土した。^⑮

向野田の舟形石棺は、棺蓋で現存の縄掛突起を含め、長さ4 m、棺身では長さ3.95 mであり、棺蓋の縄掛突起を復原すれば、棺蓋の長さは4.20cm以上となろう。

向野田の場合、広い二段墓壙、丁寧な割石小口積み竪穴式石室の構想から、はじめ石棺は舟形が考えられ、棺蓋は舟形近く作られたのに、のち棺身基底部の構造に対応して棺身の方は箱形・台状の平底がとられることになったのではないかと考えられる。平底としても棺底は両側から中央底部へかけ比高3 cmほど傾斜している。舟形の名残りであろうか。

京都府八幡町茶臼山古墳は径18 m以上の円墳で埴輪がめぐり、竪穴式石室に割竹形に近い長さ2.88 mの舟形石棺を納めていた。^⑯ 棺身の箱形の周りに舟縁状の狭い平縁部がめぐり、大王山古墳の棺身に似たところがある。向野田の場合、舟縁状平縁部の舟形棺底が基底部の構造に対応してカットされたとみられる。

第 15 表

関 連 石 棺

番号	古墳名	所在地	墳形・規模	石棺長	幅		
					頭側	足側	
1	向野田古墳	熊本県宇土市松山町 字向野田	前方後円墳 88.5m	蓋	400(345) 推420	100	87
				身	380	106	90
石棺蓋石の小口に穿孔があり、環状をなすもの							
2	熊本山石棺	佐賀県佐賀市久保泉町 川久保	円墳 約30m	蓋	430	88	
				身	430	88	
3	備前丸山古墳	岡山県備前市島田丸山	円墳 約50m	蓋	394(342)	94	
				身	375(348)	90	
4	竜野高校在	兵庫県揖保郡御津町中島		蓋	推350(294)	110	80
石棺の全長が縄掛突起を含めて 3 m をこえる長大な割竹形・舟形石棺							
5	辻古墳 1号棺	熊本県山鹿市方保田	円墳 30m	蓋	344	88	75
				身	370	78	72
6	津袋大塚古墳	熊本県鹿本郡鹿本町	円墳		推480(400)		
7	吉野古墳	宮崎県延岡市吉野町吉野	円墳 22m	蓋	303	75	
				身			
8	石舟天神社在	香川県綾歌郡国分寺町山内	(出土古墳不明)	身	364(310)	90	72
9	三谷丸山古墳	香川県高松市三谷町	前方後円墳 約90m	身	300(275)	76	64
10	快天山古墳 1号棺	香川県綾歌郡綾歌町	前方後円墳 約100m	蓋	290(253)	79	
				身	300(252)	72	77 74
石棺長辺に穿孔を有するもの、あるいは長辺の突起が環状をなす舟形石棺							
11	大王山 3号墳	熊本県八代郡宮原町早尾字 腹巻田	円墳	蓋		102	
				身	304	95	95
12	室の山 1号棺	熊本県八代郡宮原町今字室		蓋	252	63	
				身	248	63	
13	室の山 2号棺	熊本県八代郡宮原町今字室		蓋	265(260)	78	
				身	262	78	77
14	北川石棺	熊本県八代郡竜北町大野		蓋	204	78	76
				身	210	77	75
15	もと大野貝塚付近	熊本県八代郡竜北町		蓋			

一 覧 表

縁辺突帯	石枕	縄掛突起		穿 孔	石 材	備 考	註
		小 口	長 辺				
あり(長辺)	あり (はめ こみ)	各1(環状—水平穿孔) —	—	長辺に各3 (矩 形)	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内	本書
あり (四周—棺台状)		—	—	—			
あり(長辺)	あり	—	—	長辺に各2 小口に各1	阿蘇凝灰岩	石棺内部を3区に仕切る。穿孔は楕円形。	①
あり(長辺)		—	—	小口に各1			
あり(長辺)	—	各1(環状—垂直穿孔) —	—	—	火 山 石	竪穴式石室内。石室蓋石に穿孔あり。石棺蓋石に家の浮彫あり。棺身箱形	②・③
—		1(頭側) 2(片側のみ)	—	—			
あり(四周)	—	各1(環状—垂直穿孔) —	—	—	阿蘇凝灰岩	—	③
あり(長辺)	—	各1	—	—	阿蘇凝灰岩	—	④
あり(長辺)		各1	—	—			
—	—	各1	—	—	阿蘇凝灰岩	破碎	⑤
—		各1	—	—			
—	あり	各1	—	—	凝 灰 岩	—	⑥
—		—	—	—			
—	あり	各1	—	—	鶯の山石	—	③
あり(長辺)	あり	1(足側)	—	—	鶯の山石	—	③
—	あり	各1	—	—	鶯の山石	竪穴状石室内	⑦
—		各1	—	—			
あり(長辺)	あり	各1	—	長辺に各3 (推)	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内・蓋に浅く段状にくりとった区画	⑧
あり(長辺)		—	—	—			
—	—	—	各3(環状)	—	凝 灰 岩	—	⑨
—		—	—	—			
あり(長辺)	あり	1(足側) 各3(環状)	—	—	阿蘇凝灰岩	—	⑩
あり(長辺)		—	—	—			
—	—	—	各2(環状)	—	阿蘇凝灰岩	—	⑪
—		—	—	—			
あり	—	—	各2?(環状)	—	—	内側に亀甲様の区画	⑫

番号	古墳名	所在地	墳形・規模		石棺長	幅		
						頭側	足側	
16	八幡茶臼山古墳	京都府綴喜郡八幡町八幡荘 字笹ヶ谷	前方後方墳	50m	蓋	310(288)	105	69
					身	304(286)	97	63
長辺の突起が環状をなす家形石棺								
17	晩免古墳	熊本県宇土市立岡町字晩免	円墳		蓋	210	108	
					身	内法180	内法75	
18	潤野古墳	熊本県宇土市立岡町字潤野	円墳		蓋	240	114	
					身	222	75	
19	石の室古墳	熊本県下益城郡城南町塚原	円墳 推30m		蓋	300	210	
					身	内法235	内法155	
20	西隈古墳	佐賀県佐賀市金立町西隈	円墳	40m	蓋	200	110	
					身			
21	石櫃山古墳	福岡県久留米市高良内町	前方後円墳	100~115m	蓋	285(273)	150	127
					身	250	162	158
22	浦山古墳	福岡県久留米市上津町二軒 茶屋	前方後円墳	60m	蓋	198	106	
					身	内法186	内法79	
23	大谷古墳	和歌山県和歌山市	前方後円墳	70m	蓋	295	160	150
					身	内法210	内法98	
環状はなさないが上記家形石棺と似た形状の縄掛突起を有するもの								
24	神ノ山1号墳	熊本県宇土市松山町	円墳		蓋	217	106	96
					身			
25	西潤野古墳	熊本県宇土市立岡町字西潤野	円墳		蓋	208	87	
26	目尾古墳	福岡県飯塚市目尾			蓋			
					身			
竪穴式石室に舟形石棺・割竹形石棺を内蔵するもの(前出の石棺は除く)								
27	太尾古墳	熊本県八代郡竜北町大野字 太尾	円墳					
28	唐仁大塚古墳	鹿児島県肝属郡東串良町唐 仁	前方後円墳	120m	蓋	268	84	63
					身			
29	岩崎山4号墳	香川県大川郡津田町相地	前方後円墳	50m	身	236	76	68

縁辺突帯	石枕	縄掛突起		穿孔	石材	備考	註
		小口	長辺				
—		各1	—	—	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内（二段墓壇）。穿孔は矩形。	⑬
あり(四周)		—	—	小口に各2(長方形) 長辺に各4(長方形)			
あり(四周)		各1	各3(環状)	—	凝灰岩	棺身組みあわせ。棺身小口・長辺の内壁に各一對の刀掛突起あり。装飾あり	⑭
—		—	—	—		棺身組みあわせ。棺身長辺の内壁に一對の刀掛突起あり。装飾あり。	⑭
あり(四周)		—	各2(環状)	—	阿蘇凝灰岩	棺蓋2枚組みあわせ。棺身組みあわせ。妻入横口式。棺身内壁に装飾あり	⑮
—		—	—	—			
あり(四周)		—	各2(環状)	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。妻入横口式。装飾あり。	⑯
—		—	—	—			
あり(四周)		2(後端部)	各3(環状)	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。妻入横口式	⑰
—		—	—	—			
あり(四周)		—	各2(環状)	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。妻入横口式。装飾あり。扉石に把手状の突起あり。	⑱
—	あり	—	—	—			
—		—	各4(環状)	—	阿蘇凝灰岩?	棺蓋2枚組みあわせ。棺身組みあわせ。底石あり	⑲
—		—	—	—			
あり(四周)		—	各3	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。棺身小口の内壁に一對の刀掛突起、それに剣が一振かかる。	㉔
—	—	—	—	—			
あり(四周)		各1	各3	—	阿蘇凝灰岩	石蓋土壇の蓋石	㉕
あり(四周)		—	各4?	—	阿蘇凝灰岩		㉖
—		—	—	—			
						竪穴式石室内	㉗
—		頭側1・足側2	—	—	硬質凝灰岩	竪穴式石室内身は箱形	㉘
—		各2	—	—			
—	両端に各1	—	—	—	火山石	竪穴式石室内	㉙

番号	古墳名	所在地	墳形・規模		石棺長	幅	
						頭側	足側
30	丸山古墳	香川県観音寺市室本	円墳 20m	蓋			
				身	200	105	
31	快天山古墳2号 棺	香川県綾歌郡綾歌町	前方後円墳 約100m	蓋	262	64	
				身	233	64	
32	新庄天神山古墳	岡山県邑久郡長船町服部	前方後円墳 127m	蓋			
				身	195以上	76	67
33	足羽山山頂古墳	福井県福井市足羽山	円墳 60m	蓋			
				身	206	71	60
34	三池平古墳	静岡県清水市庵原大字原	前方後円墳 67m	蓋	240	80	55
				身	227	91	70
35	愛宕塚古墳	群馬県群馬郡群馬町	前方後円墳 92m	身	235	124	

一 覧 表 註

◎ 石棺計測値は原則として各報告書によった。その他実測図により計測したものや、メートル法になおしたものなどもあり、あくまでも概数である。

◎ 石棺長は縄掛突起を含むが、() 内にそれを含まない場合の数値もあげた。

◎ 表作成にあたり註にあげた以外に以下の文献を参照した。

間壁忠彦・葭子「石棺研究ノート(1)~(4)」倉敷考古館研究集報第9・10・11・12号、1974~1976

岩崎卓也「舟形石棺をめぐる二、三の問題」史潮新1号、1976

◎ 表作成にあたり、以下の方々の御教示を得た。記して謝意を表します。

上野辰男氏・東光彦氏・伊藤奎二氏・佐藤伸二氏・川西宏幸氏

① 木下之治、小田富士雄「熊本山船型石棺墓」佐賀県文化財報告書第16集、1967

② 梅原末治「備前和気郡鶴山丸山古墳」近畿地方古墳墓の調査 3、1938

③ 藤田憲司「讃岐(香川県)の石棺」倉敷考古館研究集報第12号、1976

④ 熊本県立鹿本高校所在

⑤ 坂本経堯「古墳文化」熊本県史 総説編、1965

⑥ 鳥居龍蔵『上代の日向延岡』、1935

⑦ 和田正夫・松浦正一「快天山古墳発掘調査報告書」(香川県)史跡名勝天然記念物調査報告第15、1951

⑧ 乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11、1962

⑨ 末永雅雄・小林行雄『本山考古室圖録解説』岡書院、1934。大阪市立美術館蔵

⑩ 佐藤伸二『室山古墳調査報告書』宮原町教育委員会、1976

縁辺突帯	石枕	縄掛突起		穿孔	石材	備考	註
		小口	長辺				
あり(四周)		各2	—	—	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内	③
あり(四周)		各2	—	—			
—	あり	各1	—	—	鷲の山石	竪穴状石室内	⑦
—		—	—	—			
—	あり (はめ こみ)	—	—	—	不明 (枕石は砂岩)	竪穴式石室内	
—		—	—	—			
—	あり	各1	—	—	笏谷石	竪穴式石室内	⑮
—		—	—	—			
—	—	—	—	—	安山岩	竪穴式石室内 身の断面は矩形	⑯
—		—	—	—			
—	—	—	各2?	—		竪穴式石室内 箱形に近い家形石棺?	⑰

- ① 熊本県文化課上野辰男氏の御厚意により、拝見した実測図による。
- ② E. Sモース著 石川欣一訳「日本その日その日3」東洋文庫179、平凡社、1971
- ③ 堤圭三郎・高橋美久二「茶臼山古墳」(京都府)埋蔵文化財発掘調査概報(1969)、1969
- ④ 濱田・梅原・島田「肥後国宇土郡花園村の古墳」京都帝国大学文学部考古学研究报告第3冊、1919
- ⑤ 松本雅明編『城南町史』、1965
- ⑥ 佐賀市教育委員会『佐賀市金立町西隈古墳』、1975
- ⑦ 宮小路賀宏・渡辺正気・古賀寿「石櫃山古墳」福岡県文化財調査報告書第41集、1968
- ⑧ 濱田耕作・梅原末治・島田貞彦「筑後国三井郡上津荒木村二軒茶屋の古墳」京都帝国大学文学部考古学研究报告第3冊、1919
- ⑨ 樋口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』和歌山市教育委員会、1956
- ⑩ 宇土高校社会部『宇土高校社会部報第2号』、1968
- ⑪ 富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」ともしび第5号、1960
- ⑫ 佐田茂・高倉洋彰「九州の家形石棺」筑後古城山古墳、1972
- ⑬ 江上敏勝「熊本県八代地方の舟形石棺出土地一覧表」竜北村史、1973
- ⑭ 上村俊雄「南九州における古墳文化の諸問題I」鹿児島考古第7号、
- ⑮ 斉藤優『足羽山の古墳』福井市教育委員会、1960
- ⑯ 内藤晃・大塚初重『三池平古墳』庵原村教育委員会、1961
- ⑰ 後藤守一「上野愛宕塚」考古学雑誌第39巻第1号、1953
- ◎ 有孔棺蓋家形石棺に熊本楠原例(熊本史学31、1966)がある。竪穴式石室内舟形石棺に福岡倉永茶臼塚一号墳(同概報、1978)を追加。

4. 副 葬 品

出土遺物の副葬位置によって、その種類が異なり、また棺外と棺内では遺品の性格にかなり差のあることが注目される。

静岡県三池平古墳は、前方後円墳の竪穴式石室内で割竹形に近い割抜式の石棺が直接土層の中に埋められた。棺内に遺骸に添えた玉類・腕飾類の装身具、棺外北側に四神鏡・筒形銅器・碧玉製品、南側に武器・農工具が主として副葬されていた。このような副葬品の棺内・棺外分納という方法は前期から中期にかけて行なわれ、さらに横穴式石室の後期にも続けられて、多くの類例がみとめられた。^⑩

向野田古墳の場合、竪穴式石室内の舟形石棺で、棺外に主として武器、棺内被葬者をめぐって鏡のほか装身具が納められていた。棺外の武器は被葬者を守護する形に置かれ、また被葬者の生前所持したものとみられ、その勢威が示されている。

佐賀市熊本山古墳の長大な舟形石棺は、棺内が3区に彫られ、主室を中央に、副室が両側にある。副葬品は副室に入れられていた。

宇土市周辺で、筆者が亀崎古墳群と命名したその中の一基国越古墳は奥壁利用の石棺と東西両屍床の間にある別床内に鉄器類が見出された。

熊本山、国越などの例は、形は変わっても、箱式石棺の一端に設けられた別区とのつながりが指摘されている。^⑪

向野田の場合、竪穴式石室の例として副葬品分納の典型的な例といえる。横穴式石室の国越の場合、別床はひとつで、石棺被葬者に属するか、また石棺・両屍床の被葬者共同のものか明らかでないところがある。

① 鏡 類

向野田古墳では、3面の鏡が一人の被葬者に納められていた。

宇土半島基部の周辺で出土した古鏡の数は少なく、それも一人の被葬者に1面の鏡が添えられていたにすぎない。発見順に記すと次の通りである。

- a. 画文帯環状乳神獸鏡 径14.6cm (石棺内)、四獸鏡 径9.1cm (東屍床)、獸帯鏡径17.1cm (西屍床)。国越古墳、横穴式石室。
- b. 三角縁四神四獸鏡 径21.7cm。城ノ越古墳、箱式石棺の疑いがある。
- c. 鳥獸鏡 径10.5cm。チャン山(茶臼山)古墳、竪穴式石室内粘土床。
- d. 方格規矩鏡 径18.4cm、内行花文鏡 径17cm、鳥獸鏡径11.2cm。向野田古墳、石棺内。
- e. 獸形鏡 推定径15.5cm。西岡台遺跡千畳敷南側V字溝上層。古墳の存在不明。

向野田の場合、石枕の上で人骨頭部直上に内行花文鏡、石枕東側に鳥獸鏡が鏡背を上にして置かれ、石枕すぐ下で西側内壁に鏡面を表にして方格規矩鳥文鏡を立てかけていた。石枕の上の方格規矩鏡を置けば置けるゆとりがあるのに立てかけた点に、他の2面より重きをおかれた

鏡であったのだろうか。

方格規矩鏡はV字が開きすぎ、L字文は左向、T・Lの両側に尾を向けた鳥文はほぼ同形、銘文も明らかなこの鏡は、方格規矩四神鏡の分類によると、第九形式にあたるのではないかとみられる。中国出土の方格規矩四神鏡表2に長宜子孫内行花文鏡・方格規矩四神鏡各1面を出土した中国塚室墓の例があげられている。向野田は内行花文鏡のほかに、やや小形の鳥獸鏡1面がある。半肉彫りで、鳥と獸が交互にめぐる。この鏡と似た鳥獸鏡がチャン山(茶臼山)の鳥獸鏡で、同じ半肉彫りながら図像もすぐれ、鑄上りもよい。鳥獸は麟鳳とみて、麟鳳鏡とよんだことがある。

方格規矩鳥文鏡・内行花文鏡の2面は中国製、鳥獸鏡は仿製とみられる。半島基部周辺で3面の鏡を副葬された向野田の女性被葬者の地位はかなり重要なものがあったにちがいない。

② 玉 類

ガラス製の小玉、碧玉製の管玉、硬玉製の勾玉の3種類がある。被葬者をめぐる玉類の分散した在りかたから、その組み合わせはむずかしいところもあるけれど、大体3つに分けられるのではないかと思うにいたった。

頭部から両肩上へかけ、小さめな管玉や小形勾玉がそれぞれ散っており、小形勾玉2個を根玉として約20個の小さめな管玉を一組としたものが考えられる。

管玉でなく、ガラス製小玉32個と小形勾玉2個の出土した宇土市古保里2号石棺がある。内部主体は異なるが、向野田の小さめな管玉と小形勾玉をみる上に参考となりはしないかと思う。一組とした場合、頸飾りとみられる。

次に上腕骨両外側に接して、それぞれ上腕骨に添った形の太めの管玉が一組として考えられる。その場合、左上腕骨内側にあった大きめの勾玉が根玉としてみられる。やはり頸飾り状のものとみられる。太めの管玉は約47個ある。

小玉の分散は、骨盤上方から下肢の方へのびていた。計133個のうち、両側骨盤外周りにとくに密集したものが目立ち、約70個を数え、ほかに大小8箇所小玉の破碎した痕跡があった。東側骨盤外周りにあった小形勾玉は1個だが、根玉であったのではないかとみられる。小玉は首飾りともなるが、手にまかれたことも想像される。

着装のまま埋葬され、玉の緒が切れ、散った形が頭部から肩部へ、両上腕骨辺でみられるけれど、勾玉が4個とも尾が一様に南を指して、小さな点だが、ややおかしいようである。小玉の散りかたは骨盤から下肢の方へかけてひろがっていた。このことは玉の緒が切れたとすれば、なにかの理由で流動したものではないかとも思われる。

石棺の石枕に頭部をのせた状態から被葬者は人骨化する以前に葬られたことはまちがいない、玉類を着装していたとみられる。胸部内に玉類が1個もみられないのもおかしい点であるけれど、玉の緒が人骨化以前に切れたとすれば、上腕骨両側へ散ったことも想像されなくはない。

③ 車輪石

向野田の車輪石は、長さ10.2cm、卵形の、稜に刻線のある碧玉製の完形品で、古い形式のものに属する。

鹿本郡津袋大塚古墳^①、沖の島17号遺跡、福岡市西区飯氏山古墳^②などの車輪石は円形をなしている。嘉穂郡稲築町沖出古墳^③の車輪石がある。

いくつかの車輪石を、図版などでわずか36個を見たにすぎないけれど、刻線などで次の4種類の形式がみられた。

1. 稜とくぼみにそれぞれ刻線のあるもの…19例
2. 稜のみに刻線があり、くぼみにないもの…3例
3. 稜に刻線がなく、くぼみにあるもの…1例
4. 稜とくぼみだけで、刻線のないもの…9例

1の場合、刻線の本数に多少の変化、また2線、3～4線が1組をなしたものなどがある。わずかの例で不十分であるけれど、刻線の10本以内のもの1例、10本代のは9例（変形を除く）、20本代のは7例、30本代のが1例ある。

車輪石は福島県から熊本県へわたり分布し、大阪・京都周辺に多い。卵形をA、円形をBとしてAは畿内を主とし、Bはかなり広く分布することが先学により指摘されている^④。向野田の車輪石はAに属しながら、九州の中部西側にあることが注目される。このことは、城ノ越古墳の三角縁四神四獣鏡が複像式四神四獣鏡として同じ地域に出土していることが思い合わされ、興味がある。

第16表

図版から見たいくつかの車輪石一覧

	名称	所在地	長径 cm	外形	内孔	稜刻線	くぼみ 刻線	稜だけ のもの	石色 質調	備考
A8	大師山古墳	大阪府河内長野市	20	卵	円	15	15		安山岩	表面に木目状の平行線がみえる
A9	マンバイヘボン塚古墳	兵庫県神戸市	8.4	円	円	21	21		濃緑色	裏面にも放射状の施文
A①	求女塚古墳	神戸市住吉町		卵	円	18	18			
A②	馬ノ山4号墳	鳥取県羽合町	10	卵	円	30	30			
A③	丸山古墳	徳島市上八分町		円	円	16	16			
A④	馬ノ山4号墳	鳥取県羽合町		円	円	13	13			
A⑤	銚子塚古墳	山梨県中道町		円	円	15	なし			
A⑥	〃	〃		円	円	19ヶ所 変形	なし			2～3線一組で放射状に19箇所ある
A⑦	馬ノ山4号墳	鳥取県羽合町		円	円	17	17			
B232	瓢箪山古墳	滋賀県安土町		卵	卵	16	16			
B114	石山古墳	三重県上野市	10	卵	円	28	28		碧玉	

	名称	所在地	長径 cm	外形	内孔	稜刻線	くぼみ 刻線	稜だけの もの	石色 質調	備考
B114	石山古墳	三重県 上野市		卵	円	なし	なし	26		
B115	"	"	14.3	卵	卵	23	23		碧玉	
"	"	"		卵	円	14 変形	14			稜にあたる所の刻線両側 はほそく高まる
B116	"	"	15.4	卵	円	なし	なし	31	碧玉	
"	"	"		円	円	なし	21	21		表面に木目状の平行線が 目立つ
C 8	"	"		卵	円	15	15			
D92 の4	大 師 山 古 墳	大阪府河 内長野市		円	円	23	23			
D92 の5	"	"		卵	円	なし	なし	24		
E35	新沢千塚 500号墳	奈良県 橿原市	9.3	卵	円	なし	なし	28	碧玉	車輪石3個の中の1個
F 4	紫金山 古墳	大阪府 茨木市	14.5	卵	円	27	なし		碧玉	刻線は稜のみにみえる
F 7	東大寺山 古墳	奈良県 天理市	12.3	円	円	9 変形	9			稜の刻線両側はほそく高 まる
"	"			円	円	なし	なし	17		
"	"			卵	円	なし	なし	16		
"	"			卵	円	なし	なし	20		
"	"			卵	円	なし	なし	27		
G258	東之宮 古墳	愛知県	13.6	卵	円	14 3ヶ所 変形	17			稜の刻線14本のほかに5 線1組で上、左右に放射
G270	鶴山丸 古墳	岡山県	12.2	卵	円	26	26		濃青 色	
"	"	"		卵	円	なし	なし	22	青緑色	
G309	けんか 古墳	京都府	12.3	卵	卵	16ヶ所 変形	16			稜の刻線は2線1組で16個所 木目状の平行線がみえる
H41	三池平 古墳	静岡県	9	円	円	8ヶ所 変形	なし		碧玉 や鼠 色	割れて、両端の両側に2孔づ つあけ、つないだとみられ る。稜にあたる所に2線一 組で8個所の凸鑿をつける
I 12 J 37	沖ノ島 遺跡	福岡県	約10	円	円	12	12		碧玉 (凝灰岩) 淡褐色	
I 12 J 36	"	"	約10	円	円	13ヶ所 変形	なし		碧玉 (頁岩) 白緑色	3~4線一組で放射状に 13個所にある
J 60	飯氏山 古墳	"	約8.7	円	円	20 (推定)	なし (推定)			
K41	津袋大塚 古墳	熊本県 鹿本町	約10 (推定)	円 (推定)	円 (推定)	16 (推定)			碧玉	
L324	丸山古墳	徳島県		卵	円		なし			稜刻線か稜だけか、21本 を数える
G312	丸山古墳	岡山県 津山市 下田邑	10.5	卵	卵				銅	車輪石形銅釧、放射状の 太めの線の間に2~3本 の細めの線がある

A日本原始美術6(1966)、B世界考古学大系3(1963)、C古墳時代の研究(1965年)、D新訂日本考古図鑑(1965)、E日本文化の歴史2(1969)、F古代史発掘6(1975)、G日本原始美術大系4(1977)、H三池平古墳(1961)、I宗像沖ノ島の遺宝(1978)、J続沖ノ島(1961)、K鹿本町史(1976)、L日本と世界史1(1977)

第 17 表

車 輪 石 出

	府 県	出土 数	名 称	所 在 地	墳 形	埴 輪	内 部 構 造
1	熊本県	1	向野田古墳	宇土市松山町字向野田	前方後円	朝 顔	堅穴式石室 (舟形石棺)
2	〃	1	津袋大塚古墳	鹿本郡鹿本町津袋	円		舟形石棺
3	福岡県		沖ノ島5号遺跡	宗像郡大島町			半岩陰の祭祀遺跡
4	〃	2	沖ノ島17号遺跡	宗像郡大島町			巨岩上の祭祀遺跡
5	〃	1	沖ノ島18号遺跡 ?	宗像郡大島町			巨岩上の祭祀遺跡
6	〃	1	飯氏古墳	福岡市西区周船寺町	円		箱式石棺 (推定)
7	〃	1	沖出古墳	嘉穂郡稲築町漆生字沖出	前方後円		堅穴系横口式石室
8	香川県	1	岩崎山4号墳	大川郡津田町相地	前方後円	円・家	堅穴式石室 (舟形石棺)
9	徳島県	8+α	星河内丸山古墳	徳山市星河内巽山	円	なし	堅穴式石室?
10	岡山県	2	備前丸山古墳	備前市鶴山丸山	円	円・形	堅穴式石室 (特殊な舟形石棺)
11	鳥取県	3	馬の山4号墳	東伯郡羽合町上橋津	前方後円	円・朝 顔・家	堅穴式石室1のほか 箱式石棺4・円筒埴輪2
12	兵庫県	1	求女塚古墳	神戸市東灘区住吉町呉田	前方後円		堅穴式石室のほか 前方部に木棺
13	〃	1	万籟山古墳	宝塚市長尾山精華園	前方後円	円	堅穴式石室
14	〃	1	丸山1号墳	米上郡山南町	前方後円	なし	堅穴式石室3・ 箱式棺・木棺
15	大阪府		御神山古墳	豊中市蜚ヶ池南町	前方後円		
16	〃		待兼山古墳	豊中市柴原	前方後円		
17	〃	1	紫金山古墳	茨木市宿久庄	前方後円	円	堅穴式石室
18	〃	3	弁天山C1号墳	高槻市服部	前方後円	円・形	堅穴式石室1 粘土埴輪2
19	〃		津堂城山古墳	藤井寺市美陵町	前方後円	円	堅穴式石棺 (長持形石棺)
20	〃	16	大師山古墳	河内長野市三日市町字萩 の前	円		木棺
21	〃		安威古墳群	茨木市安威神社裏山	円・19基		粘土埴輪 横穴式石室
22	〃		娛三堂古墳	池田市北新町	円		堅穴式石室
23	〃	1	黄金塚古墳	和泉市上代町	前方後円	円・家	粘土埴輪3
24	〃		乳の岡古墳	堺市石津町	前方後円		長持形石棺
25	〃	1	久米田古墳	岸和田市	円		
26	〃		東ノ大塚古墳	柏原市国分町	円		
27	京都府	3	ケンカ谷古墳	京都市伏見区深草・鞍ヶ 谷			
28	〃	2	深草B号墳	京都市伏見区深草			
29	〃	6	百々ヶ池古墳	京都市右京区椋原町岡	円	円	堅穴式石室
30	〃		西車塚古墳	綴喜郡八幡町八幡	前方後円	円	堅穴式石室

土 地 名 表

(1979.1.現在)

副 葬 品	参 考 文 献
鏡3・車輪石1・勾玉・管玉・小玉・貝輪・劍・刀・刀子・鉄斧	本 書
車輪石片1・勾玉・管玉・小玉・劍	鹿本町史 1976
鍬形石・車輪石	沖ノ島 I、1970
鏡21・車輪石2・石釧1・劍・有樋鉄劍1・刀・蕨手刀子・硬玉製勾玉・碧玉製管玉・滑石製管玉・滑石製環玉・ガラス小玉・滑石製小玉	続沖ノ島 1961
車輪石1・石釧5・勾玉・管玉・白玉	
車輪石片1	続沖ノ島 1961
車輪石片1・石釧片1	
鏡1・車輪石片1・石釧4・勾玉・管玉・小玉・貝釧・刀・劍・斧・鎌・銅鍬	
鏡3・鍬形石4・車輪石8+α・石釧4・刀	石 井 1962
鏡31・車輪石2・勾玉・石製盤・石製合子・石製埴・石製器台・刀・劍・鍬・斧	近畿地方古墳墓の調査3 1938
(石室)鏡5・車輪石3・石釧12・勾玉・管玉・刀・劍・鉞・斧・鋸	山陰の前期古墳文化の研究 I 1978
鏡8・車輪石1・刀	
鏡2・車輪石1・石釧4・管玉・十字形石製品・斧	近畿地方古墳墓の調査2 1937
(北石室)鏡1・車輪石1・ガラス小玉	丸山古墳群調査の概要 1977
鏡1・車輪石	
鏡1・鍬形石・車輪石・石釧	
鏡12・鍬形石6・車輪石1・勾玉・管玉・貝釧・刀・劍・斧・鉞・銛・短甲他	古代史発掘6 1975
(石室)鏡3・車輪石3・石釧4・合子・勾玉・管玉・筒形石製品・刀・銅鍬・工具など	弁天山古墳群の調査 1967
鏡9・車輪石片1・石製品(劍・刀子・鍬)・勾玉・管玉・環玉・劍・刀・鉄鍬・銅鍬・巴形銅器ほか	
鏡1・鍬形石1・車輪石16・石釧13・管玉・鉄劍・刀子・紡錘車4	大阪史蹟名勝天然記念物調査報告3 1932
鍬形石・車輪石・石釧・須恵器(墳丘に土師壺)	
鏡1・車輪石・管玉・劍・刀・土師器	
(中央塚)鏡1・車輪石1・石釧1・勾玉・八角管玉・管玉・環玉・白玉・小玉・水晶製筒形品、(中央塚外)鏡1・刀・劍・刀子・斧・鎌・劍身型工具・小型工具	和泉黄金塚古墳 1954
鍬形石・車輪石	
車輪石1・石釧1	古代学研究83 1977
鏡片・鍬形石・車輪石・齒車形石製品	河内における古墳の調査 1964
鏡1・車輪石3・銅鍬	
鏡1・車輪石2・石釧4・紡錘車1	古代学研究57 1970
鏡8・車輪石6・石釧6・紡錘車・勾玉・管玉・刀	
鏡5・鍬形石・車輪石・石釧・玉類	

	府 県	出土 数	名 称	所 在 地	墳 形	埴 輪	内 部 構 造
31	京都府		興戸古墳	綴喜郡田辺町興戸	円	円・家	粘土槨
32	〃		平尾城山古墳	相楽郡山城町平尾山	前方後円	円・朝顔・家	竪穴式石室
33	〃	10	飯岡車塚古墳	綴喜郡田辺町草内	前方後円	円	竪穴式石室
34	〃	9	園部垣内古墳	船井郡園部町園部	前方後円	円・形	粘土槨
35	〃	2	カジャ古墳	中郡峰山町	円	なし	竪穴式石室 外に3土壙
36	奈良県	4	北和城南古墳	(伝)奈良国立博物館			
37	〃	3	佐紀古墳群 日葉酸緩陵古墳	奈良市山陵町	前方後円	円・家・ 榎・蓋	竪穴式石室
38	〃	1	平城京北 極大路地	奈良市佐紀町君田			
39	〃		東大寺山古墳	天理市櫛本	前方後円	円・朝顔	粘土槨
40	〃	1	上殿古墳	天理市和爾町	円	円・家	粘土槨
41	〃	1	西山古墳	天理市柚之内町	前方後円	円・朝顔	
42	〃	10+ α	櫛山古墳	天理市柳本	中円双方	円・家・ 榎・蓋	竪穴式石室 (長持形石槨)
43	〃	2	茶臼山古墳	桜井市外山	前方後円	壺形埴輪	竪穴式石室
44	〃	1	メスリ山古墳	桜井市高田	前方後円	特殊円・ 円・蓋	竪穴式石室 2
45	〃	1	池ノ内3号墳	桜井市磐余	前方後円	円	粘土槨
46	〃	3	新沢千塚 500号墳	橿原市川西町	前方後円	円・蓋	後円部粘土槨 くびれ部粘土槨 埴輪円筒棺 前方部粘土槨
47	〃		島ノ山古墳	磯城郡川西村唐院	前方後円	円	
48	〃	5	新山古墳	北葛城郡広陵町大塚	前方後方	円	竪穴式石室
49	〃	4	巢山古墳	北葛城郡広陵町三吉	前方後円	円・家 ・蓋	竪穴式石室 3
50	〃	2	葛城山	伝			
51	〃		オサカケ古墳	御所市柏原	前方後円 ?		粘土槨
52	滋賀県	1	瓢箪山古墳	蒲生郡安土町宮津	前方後円	円	竪穴式石室 3 前方部箱式石槨 2
53	三重県		志氏古墳	四日市市羽津町	前方後円		
54	〃	44	石山古墳	上野市才良	前方後円	円・朝顔・ 形象	粘土槨 3
55	〃	4	向山古墳	一志郡嬉野町下之庄	前方後方	円	粘土槨
56	〃		高取塚古墳	一志郡嬉野町天花寺	円		粘土槨 ?
57	〃	2	上野所在古墳	一志郡嬉野町	円		
58	岐阜県		親ヶ谷古墳	不破郡垂井町平尾深谷	円		粘土槨
59	〃		陵山古墳	可児郡可児町伊香	円		

副 葬 品	参 考 文 献
鏡3・鍬形石・車輪石・石釧・管玉・刀・劍	山城に於ける古式古墳の調査 1955
鏡1・車輪石・石釧6以上・勾玉・管玉・白玉・金銅環・鉄劍・土器	
鍬形石1・車輪石10・石釧42・勾玉・管玉・小玉・刀・劍・土器	近畿地方古墳墓の調査 3 1938
鏡6・車輪石9・石釧3・刀・劍・斧・鏃・槍・銅鏃・短甲・木製刀・木製劍ほか	園部垣内古墳調査概報 1973
鏡1・鍬形石4・車輪石2・石釧2・管玉・筒形銅器・劍・刀子・のみ・鉦・鍬先・土師器	カジヤ古墳 1972
鏡4・鍬形石2・車輪石4・石釧2	
鏡7・鍬形石3・車輪石3・石釧1・石製品(イス・合子・高坏・臼・琴柱形)・勾玉・管玉	書陵部紀要第19号 1967
車輪石1	日本考古学年報24 1973
鍬形石・車輪石・石釧・玉・石製壺・巴形銅器・環頭付刀・劍・銅鏃・鉄鏃など	重要文化財28・考古I 1976
鍬形石1・車輪石1・石釧2・筒形石製品・管玉・短甲・革襖・劍・ヤリ・鏃・斧・手斧・鍬・鏃・ノミ・刀子・鉦・銅鏃	和爾上殿古墳 1966
鏡片2・車輪石片1・石製鉄片・管玉・刀片・劍片	考古学雑誌第59巻第4号 1974
車輪石10+ α 分・石釧9+ α 分・玉・石製合子・後方部からも異形石製品・石製品・土製品(鍬形石形3・車輪石形2・石釧形1)劍・斧	櫛山古墳 1961
鏡24・鍬形石1・車輪石2・石釧1・玉杖・勾玉・管玉・ガラス玉・劍・銅鏃・鉄鏃	桜井茶臼山古墳 1961
(主室)鏡3以上・鍬形石2・車輪石片1・石釧15+ α ・石製合子・石製椅子・勾玉・管玉・刀・劍(副室)銅鏃・鉄鏃・刀・劍・ヤリ・石製鏃・玉杖・工具	メスリ山古墳 1977
車輪石片1・刀・劍・鏃・斧・のみ	磐余池の内古墳群 1973
(主櫛)勾玉・丸玉・小玉・管玉・琴柱形石製品 (副櫛)鏡6・鍬形石1・車輪石3・石釧1・筒形銅器・異形銅器・車輪石形銅製品1・石製紡錘車・石製埴・石製罎・銅鏃・直刀・劍・刀子・槍・鉄鏃・鉦・短甲・鏃・斧・鉦・短冊形鉄斧	大和考古資料目録4 1975
車輪石	
鏡34・鍬形石1・車輪石5・石釧8・勾玉・管玉・刀・劍・金銅製帶金具・筒形石製品・石製刀子把・石製鏃・椅子形石製品・石製斧	佐味田及新山古墳研究 1921
鍬形石6・車輪石4・石釧・石製模造品・玉	奈良県に於ける指定史蹟1 1927
車輪石2	本山考古室目録 1934
鏡1・車輪石・玉類・琴柱形石製品・碧玉製合子・刀・劍	
(中央石室)鏡2・鍬形石1・車輪石1・石釧2・管玉・筒形銅器・銅鏃・鉄鏃・刀・劍・鉦・斧・鍬・短甲・刀子・鏃	滋賀県史蹟調査報告7 1938
鏡1・車輪石・勾玉・管玉	
(西棺)鏡1・鍬形石10・車輪石44・石釧13・玉類・石製模造品・紡錘車・琴柱形石製品13・刀・劍・鏃・鍬・鉦・ノミ・刀子・斧など	日本考古学年報3 1955
鏡4・車輪石4・石釧11・筒形石製品・刀	三重考古図録 1954
鏡2・鍬形石・車輪石・玉	
鍬形石2・車輪石2・管玉・コハク玉・碧玉製合子	三重考古図録 1954
鏡15・鍬形石・車輪石・石製合子・石製埴・石製盤・石製高坏・勾玉・管玉・小玉	
鏡2・鍬形石・車輪石・銅鏃・巴形銅器・琴柱形石製品	

	府 県	出土 数	名 称	所 在 地	墳 形	埴 輪	内 部 構 造
60	岐阜県		身隠白山古墳	可児郡可児町広見	前方後円		
61	〃		遊塚古墳	不破郡赤坂町提ヶ谷	前方後円	葺埴石輪	粘土槨
62	福井県	1	小山谷古墳	福井市鬼武	円		舟形石棺
63	〃		河和田玉造遺跡	坂井郡坂井町河和田			玉造遺跡
64	石川県		片山津玉造遺跡	加賀市片山津本町			玉造遺跡 工房(住居)址約40
65	愛知県	1	東之宮古墳	犬山市北白山平	前方後方		竪穴式石室 木棺(前方部)
66	〃	1	瓢箪塚古墳	犬山市白山平	前方後方		竪穴式石室
67	静岡県		庚申塚古墳	磐田市陵田	前方後円		粘土槨
68	〃	1	三池平古墳	清水市庵原町	前方後円	壺・葺石	竪穴式石室 (舟形石棺)
69	山梨県	5	銚子塚古墳	東八代郡中道町粕	前方後円	円	竪穴式石室
70	長野県	1	將軍塚古墳	長野市篠ノ井川柳	前方後円	円	竪穴式石室
71	千葉県	1	手古塚古墳	木更津市小浜	前方後円		粘土槨
72	福島県		大槻古墳群	郡山市大槻町字堂山東	円・百数十基		切石積石室多し (壊滅)

註 ◎ 地名表作成にあたっては参考文献にあげたもの以外には下記の文献を参考とした。

日本の考古学Ⅳ(1966)、古墳時代の研究(1961)、前方後方墳(1974)日本における古鏡発見地名表(1976~1979)、東京国立博物館紀要8(1973)、新庄屋敷山古墳(1975)、古墳の航空大観(1975)。

◎ 校正中、車輪石を含めた石製腕飾類の出土地名表が『河内長野一大師山』関西大学文学部考古学研究第5冊、1977に掲載されていることを同書を入手して知った。しかし中上京子氏作成の同地名表は1974年現在のものでもあり、その後の例を本書では収録しており、若干の遺漏もあったが、それらは加えなかった。同書は石製腕飾類を網羅しており、伴出遺物等も詳細であり、参照されたい。

副 葬 品	参 考 文 献
鏡・鍬形石・車輪石・石剣	
車輪石・石製模造品・銅鍬・鉄器類・須恵器	
鏡・鍬形石1・車輪石1・石剣2・勾玉・管玉・白玉・刀	足羽山の古墳 1960
車輪石・紡錘車・管玉・丸玉・砥石製品および未製品	
車輪石(未)・石剣(未)・勾玉(未、製)・管玉(未、製)・鉄器・砥石・叩石	加賀片山津玉造遺跡の研究 1963
鏡11・鍬形石1・車輪石1・石剣3・勾玉・管玉・石製合子2・剣・刀・鍬・斧	日本原始美術大系6 1978
鏡11・鍬形石1・車輪石1・石剣3・合子2・勾玉・管玉・武器	
鏡1・車輪石・石剣	
鏡2・車輪石1・石剣1・石製品・筒形銅器・工具・農具・剣・刀・鍬	三池平古墳 1961
鏡5・車輪石5・石剣6・勾玉・管玉・刀・剣・斧・鍬・貝輪など	
鏡27・車輪石1・琴柱形石製品・勾玉・管玉・銅鍬・筒形銅器・金環・銀環・切子玉・小玉	川柳村將軍塚の研究 1929
鏡2・車輪石1・石剣2・紡錘車・玉・籠手・刀子・刀・剣・斧・銅鍬	
車輪石・玉類・金環・銀環・鈴環・鈴杏葉・銅鍬・桂甲片	

④ 貝 輪

向野田の女性被葬者の足先の方に20個ほどの貝輪片が置かれていた。日常生活に用いられ、死後埋葬にあたり威儀を示すものとして車輪石のみが添えられて、貝輪は足先の方へ納められたものであろう。

二枚貝がほとんどみられるけれど、腐蝕がいちじるしく、明らかでない。

宇土市周辺では、轟貝塚でサルボウ製などの貝輪が女性人骨に伴っていた。^⑧

最近みた北九州市立博物館の女性人骨着装の貝輪は遠賀郡岡垣町榎塚貝塚出土のものである。「九大解剖学教室永井昌文教授の鑑定では50代の女性です。左手に29個のタマキ貝の貝輪を嵌めております。後期（鐘ヶ崎式期）のもので、おそらく特殊な身分を保証された女性でしょう。」とのご教示を小田富士雄主幹からいただいた。^⑨

三島格氏の「貝をめぐる考古学」を読んで、^{*}かつて哈爾濱博物館でシャーマンの衣裳の背にタカラ貝がいっぱいつけられているのをみたことを思い出した。

貝輪着装人骨は女性が多く、その風習が弥生時代を通じ、古墳時代へ引きつがれている。向野田の場合、女性被葬者は或る時期に貝輪にかわる車輪石を入手したのであろう。

⑤ 鉄 器 類

長剣・短剣合わせて4本、直刀4本、刀子78本と鉄斧3個が棺外周りに納められていた。

棺外西側、被葬者の右側にあたる方に置かれた長剣は現存長1.18 mある。刃部の長さ1.08 m・身幅4.2 cm～4.9 cm・厚さ約1 cm、腐蝕した木柄の中の茎の長さ17.2 cmある。柄に対して剣身の長大なことが注目され、実戦用というより儀礼用のものではないかと思われる。

宮崎県下北方地下式横穴第5号の長剣は長さ1.07 m・刃長86 cm・刃幅5.7 cm・厚さ0.5～0.8 cmある。長崎県諫早市小野古墳の横穴式石室の長剣は83.8 cm・剣身長67.8 cm・茎長16 cmある。成川遺跡出土の75 cm、若八幡古墳、片山11号墳、栗崎山4号墳、名子道遺跡1号墳などで50～62 cmがある。そのほか九州では、30～45 cm程度、短剣の部類が多い。そうした鉄は4世紀末から6世紀中頃まで続いてみられ、5世紀の古墳に多く、6世紀には激減するという。^⑩

向野田の長剣は柄尻になにか装着すれば、推定全長は1.20 m前後となろう。遅くとも5世紀には数えられよう。

短剣は棺外東側に残存長39.8 cmと31 cmの2本、西側36.3 cmの1本と計3本ある。

東側の39.8 cmの短剣の北へわずか離れ、棒状の残欠が図上にあり、もし短剣に続くものとするれば、この短剣はヤリ先であった可能性もある。西側の短剣は呑口式の木柄であった。

直刀は、棺外北側礫床上のは補修後の2個の直刀片は長さ50.8 cm・25.3 cmで、計76.1 cmある。北側石棺平縁部上のは補修後の2個の直刀片は63.9 cm・27.4 cmで、2個の間の空白の長さ13 cmを加えると長さ1.04 mはある。棺外東側のは補修後の長さ89.8 cmある。また棺外西側のはほぼ完形のもので、現存長1.01 mある。

直刀4本のうち、1m以上のものが2本あり、その他もかなり長い。直刀では柄元につく倒卵形近い木質部が特徴としてあげられる。鉄剣ではあるが写真でみた京都府愛宕神社古墳や奈良県塚山古墳の鹿角製鉄剣の柄元では柄元装具の方が片側で長くのびた例があり、向野田の柄元の倒ドングリ形の木質部が下方に垂れた形に似ている。こうした柄元刀装具をなんとよぶかであるが、切羽や紐とはちがう。向野田のは、北側石棺平縁部上の例では補修後の長さ6.7cmをはかり、驚かされた。

なお剣はすべて糸の繁巻きで、刀はすべて平紐を巻いている。

刀子は78本が整理された。そのあと、もう1本シャーレに入れたものが出てきた。刀子をとり上げたあと、見つかった破砕したものであった。計79本となる。長さ数センチのが多く、長くて10cm余り、刃部と木柄の接着でやや斜めになり、刃先の部分を長く出して、使いやすいように工夫されている。

形も大きさもほぼ似ており、同じ工房で作られたのではないかとみられる。ナイフのような役目をしたものにちがいない。

埋葬にあたり、棺外周りに散った形で置かれていた。

向野田の刀子には布痕がほとんどついていた。布痕は1枚から6枚まで数えられ、2枚～3枚残存したものが多し。刀子を絹帛かなにかで包んだものとみられる。別表の通り、とくに棺外北側Nでは残存の重ねの枚数が目立った。Nの同じ場所なので、腐蝕はあったにしても、重ねの枚数は鄭重さのちがいを示すかもしれない。もしそうみられるとすれば、向野田の被葬者から分与された刀子があらためて供献されたのではないかと考えられる。

鉄斧は長さ16.1cm、14.8cmと9.8cmの3個がある。

上部を両側から平たい楕円形に折り曲げ、袋式鉄斧のものであってかなり重い。竪穴式石室北側の礎床の東北隅に3個がまとまって納められていた。

宇土市周辺では国越古墳から、鉄斧8・錐形鉄斧3が鋤先・鎌などと出土した。鉄斧は有肩式のもので、錐形のはずんどう形のものであった。

阿蘇長目塚の鉄斧は1個だけで、長さ16cm、袋部は矩形をなし、鑄造のものであった。「日本古典では斧が儀式用に使用されているので、この斧も墓室の守護を意味するものであろう。」という先学の見方がある。

なお、鉄器として鉄鎌1個が前方部から出土している。ブルドーザーで採土の折、こわされて運ばれたという箱式石棺にあったものではないかと思われるけれど、明らかでない。

剣、刀、刀子や鉄斧についての布帛については関西大学角山幸博教授が鑑定されている。

⑥ 土器類

土器は、主なものは朝顔形円筒埴輪、前方部出土の壺形土器、後円部出土の壺形土器で、その他は小片であった。

向野田古墳の墳丘で出土した埴輪片は数量も多くなく、それらを整理して、口縁部では朝顔形とみられるものがあり、口縁の直立するものはなかった。将来さらに発掘を重ねるならば、或は円筒埴輪の出土が期待されるかもしれない。

朝顔形円筒埴輪として、三角形や長方形のスカシがつくとみられ、円形のスカシがない。円筒埴輪の編年によると、4世紀中頃～4世紀後半には三角形や長方形のスカシが行なわれ、5世紀後半へ及んでいる。

向野田の朝顔形口縁部にはく字形の外反するもの(A)と、逆にやや内反の形をとるもの(B)とに大別してふたつの傾向がみとめられる。

朝顔形頸部の1個は残存高10.6cm、下端近くに内彎し、上向き、先が円味のある突帯がめぐらる。この突帯片だけ剝離したのも出土した。

埴輪肩部かとみられる円弧状の張りのある破片の1個は重弧文状の文様がつく。

円筒埴輪胴部は、その割れかたがタガに添った傾向がみとめられ、タガ間の幅13.7cm・15.7cmなどのものがある。松橋前田遺跡の朝顔形円筒埴輪^⑧や国越古墳の円筒埴輪などのタガ間の幅10cm前後のものより広めである。向野田のタガは幅広く、突出が低く、ひらたい特色をそなえている。幅3.3cm～8.4cmまでである。タガ上面の調整について、別表の通り、ハケメがなくヨコナデのもの(A)、ヨコハケの(B)、ヨコハケにナナメハケのかかるもの(C)、ナナメハケにナナメハケで格子状になるもの(D)、タタキのつくもの(E)、ナデ・オサエで、下方側端は調整がないもの(F)と分類した。

朝顔形円筒埴輪の基部4個があり、底部から逆Y字状に器壁の立ちあがるもの、外面だけ底部へややまるくなるものなどがある。その1個は淡赤褐色、明るく白みがかり、残存高19.2cm、復原径34.7cm、器壁の厚さ1.1cmある。後円部墳頂で墓壙東側の葺石の間出土した。墳頂平坦部に朝顔形円筒埴輪が樹立されていたことを窺わせるものとして注目される。後円部南斜面のⅡトレンチー6m辺の所に出土したタガ幅の8.4cmの胴部片と色調、焼成がよく似ている。墳頂平坦部に埴輪方形列があったかどうか明らかでない。

なお向野田の朝顔形円筒埴輪には、黒斑のつくのが目立っている。黒斑のある埴輪は弥生式土器と大差ない焼成法による^⑨。また弥生式土器のタタキ技法による伝統がみられ、在地色のつよいことがあげられる。

朝顔形円筒埴輪として、胴部のタガひとつをとってみてもそれぞれ異なり、定型化していないところがある。工人が集団をなしていたとすれば、或る傾向が見出されるのではないかと思われる。集団をなしていたとしても、工人が別々に作ったことが想像される。ただひとつ共通した点は概してタガ幅の広いことであろう。向野田古墳被葬者の支配圏ではタガ幅の広いものが用いられたのであろうか。

鳥栖市岡寺古墳・久留米市釘崎2号墳の円筒埴輪最下段のタガはナデ、オサエでタガ上面は

まるく、また平らになり、円筒に密着していた。^⑤山鹿市チブサン古墳の円筒埴輪最下段のタガも似る。向野田の埴輪片の(F)はナデ、オサエで幅広い带状となり、円筒を巻いている。岡寺・釘崎・チブサンと向野田はタガ幅のちがいはあっても、ともに器壁の補強からナデ、オサエしたものとみられる。後者はタガというより幅広い帯とよいくらいのものになっている。向野田の幅広い带状のタガは、いわゆるタガをナデ、オサエしたものから出てきたとすれば、幅広い形を説明することができるようである。

宇土市周辺では弁天山、播鉢山の底部穿孔の壺形埴輪が見つかり、向野田で朝顔形円筒埴輪が出て、さらに国越・道免、最近発見の塚原平などの円筒埴輪、形象埴輪へと続いている。松橋前田遺跡の朝顔形円筒埴輪は地下に捨てられた形で埋没していたのを実見した。すぐ近くの松橋大塚古墳に使用されたものかどうか興味がある。

土器として後円部出土の上半が欠失した黄褐色の土師器は壺形埴輪の疑いはあったけれど、明らかでない。また前方部出土の淡紫褐色の短頸、胴長の壺形土器は内外両面にハケメがあり、薄手のものである。その口縁は二重口縁とみられる。供献の土器であることは間違いない。

前方部西側で葺石の間に出土した須恵器の提瓶片がある。墳丘が荒れて埋まったことは確かである。埴輪片のまじる葺石の間にあり、この1片の土器も無視してはならない。この須恵器は、宇土市周辺の須恵器の窯でつくられたものであろうか。須恵器の生産開始を、4世紀末とする説と5世紀中頃とする説があり、後者が新羅焼との関係から妥当という。^⑥上記の壺形土器とともに今後の問題点としておく。

5. 被 葬 者

チェーン・ブロックで棺蓋が開かれた時、離れてみたせいか、棺内被葬者の人骨が微妙な幾何学的な細い線をなしているような錯覚にとらわれた。

長大な舟形石棺内の人骨はほぼ完形であった。

平面図ではかると、人骨の長さ1.45mある。調査者の九州産業医科大学北條暉幸教授(当時熊本大学第二解剖学教室助手)によると、身長150cm前後・肩幅32~33cm・年令30才代の後半から40才ぐらいまでの女性で、骨盤の部分などが決め手となった。人骨からみたところでは細くきゃしゃな女性であったという。

宇土市周辺で、筆者の発見した人骨で完形に近いものはわずか2例、城南町御領貝塚と宇土城本丸跡出土壺棺からであった。^⑦2体とも向野田のととも、熊大解剖学教室に保管されている。

熊本県内で阿蘇長目塚古墳では、前方部竪穴式石室で板石の枕に仰臥伸展葬された1体は、^⑧8本の歯から年令35才ぐらいの女性であることが推定された。熊本市西部地区の高城山第3号古墳の封土内直葬の舟形石棺で、彫りだした石枕に仰臥伸展葬された1体はほぼ完形。30才未満の女性であった。^⑨城南町塚原古墳群の丸尾5号墳の組合せ箱式石棺は男女2体で、顔面を下

にした腹臥伸展葬の女性人骨は壮年と推定された^④。人骨の保存状態が悪かったという。

「葬法の変遷よりみた古墳の終末」^④に、同志社大学森浩一教授が古墳前期、中期の確実な例として、徳島市恵解山二号墳の組合式箱形石棺、岡山県久米郡柵原町月の輪古墳の南の粘土槨、神戸市得能山古墳の竪穴式石室などの女性遺骨例をあげられ、また男女2体合葬で、堺市野々井二本木山古墳の封土中直葬の舟形石棺、和歌山市東国山古墳群の第一号墳の後期初頭竪穴式石室、福井市足羽山古墳群竜ヶ岡古墳の古式の家形石棺、同古墳群寶石山古墳の舟形石棺などを示されている。二本木山ほかの3例はすべて男女各1体を合葬する。前期や中期古墳では完全な人骨が遺存した例は皆無に近いという。

なお森教授から、次のご教示をいただいた。「栃木、小山市桑57号墳（蛇行形鉄剣の出土地として有名）は、最近報告書をよむと女性でした。珍しい例と思います。なかなか性別の分かるものが少なく、古墳の基礎資料は意外ととぼしいもので、にもかかわらず概論・定説だけが先行している気がします。」桑57号墳の人骨は歯牙4本から女性と判定された^⑤。

「出土人骨の性別よりみた古墳時代社会の一考察」^⑤に、間壁葎子氏は古墳出土人骨例を整理され、大体5世紀前後から6世紀前後の間に、21例の古墳中、主棺の主が男性の例12、女性が主1例、男女同棺5例、男性と幼児同棺が1例、不明3例をあげられ、男性がその古墳の主であることが圧倒的に多く、わずか見られる女性主体の古墳も構造や遺物の面で同時期の他の男性主体の古墳より劣ることを指摘されている。

向野田古墳は、確実な女性単独埋葬例として、二段墓壇の竪穴式石室に長大な舟形石棺をそなえ、副葬品もかなりあり、男性主体の古墳に比較してまさるとも決して劣らないものであることがいえるようである。

向野田古墳は、宇土半島古墳群の中の1基であり、その変遷の過程において位置づけられなくてはならない。かつて「周辺の遺跡から見た西岡台」の中で、宇土半島基部前方後円墳群として、弁天山古墳→迫ノ上古墳→城ノ越古墳→向野田古墳→国越古墳→檜崎古墳→女夫塚古墳と編年の順を試みたことがある^⑥。今回は半壊のチャン山（茶白山）古墳をのぞく。

壺形埴輪を出土した播鉢山古墳は半島基部の主墳といってよいものであるが、弁天山古墳との編年上の前後関係は発掘を待たなくてはならない。ほかに未調査の有明海に臨んだ天神山古墳、不知火海に面した松橋大塚古墳や半島狭隘地帯に控えた仁王塚古墳がある。なお本年新発見の向野田古墳近くの丘陵先端に前期的様相をそなえた御手水の前方後円墳がある。

竪穴式石室の弁天山・迫ノ上両古墳、三角縁四神四獣鏡出土の城ノ越古墳と横穴式石室の国越古墳の中間に向野田古墳をおくことはさして無理はないであろう。

九州の前期古墳で、玄海灘から周防灘へかけた北九州の場合、前期古墳は点在しているのに対し、宇土半島基部では集中している。最近発掘された西岡台遺跡は高地性集落跡として半島基部の古代的な重要性を裏付けるものとして注目される、西岡台の古墳時代のV字溝から二重

口縁の壺形土器その他が出土した。城南町沈目遺跡のものと同時期のものであることが指摘されている。^⑧

向野田古墳の被葬者が半島基部周辺の支配的な首長であったことは墓壙、石室や石棺の構造から窺われる。また貝輪や車輪石をはめ、長剣を持した姿は、貝輪をはめた縄文人の伝統をうけつぎながら、中央勢力への服属はともかく、車輪石をもつことは畿内の風習とつながりのあることを示している。

2. ま と め

古墳の立地と周辺の遺跡

向野田古墳は熊本県宇土市松山町3993番地に、前方後円墳の後円部が残存している。前方部は採土のため失われてしまった。

雁回山南麓につづく丘陵の突端上にある向野田古墳は、その丘陵つづきと宇土半島中央を縦走する宇土山地が半島基部においてさし挟むV字状の平野の狭隘地帯にのぞんでいる。その地帯は熊本・八代を結ぶ重要なルートをなしている。

東から西方へ突出した宇土半島基部の北辺は緑川が有明海へ流れ、南辺は大野川が不知火海へ注ぐ。有明海側に轟・曾畑の貝塚、不知火海側に松橋大野貝塚がある。弥生時代の甕棺が境目・善導寺・宇土城跡や宮庄北平へ半島基部の中央をつらぬき、出土した。北九州の甕棺文化の影響が窺われる。古墳時代には12基の前方後円墳が半島基部周辺をめぐるように築かれている。また半島基部の宇土山地をめぐる、舟の線刻のある装飾古墳が5箇所あり、古保里・境目には箱式石棺群などがある。

かつてたずねた京都郡刈田町石塚山古墳などは点在しているのに対し、宇土半島基部では丘陵の高みにあり、集中していることは古代西南日本のフロンティアとして注目に値する。

墳 丘

熊本・八代を結ぶ国道3号線すぐ近くの丘陵標高37m余の頂上で後円部を南に、前方部を北にした前方後円墳で、採土以前は雑木林に覆われていた。現在も後円部の東・南両斜面は雑木林となっている。

前方部切断の前方後円墳で、長い間に変形したところもあり、調査当時、墳丘西斜面はブルドーザーでかなり削られていた。全長86m・後円部径53.7m・前方部幅33.5m後円部は前方部より2m高い。八分比設計によると、日葉酢媛陵型に近いものがあり、前方部三段、後円部四段築成ではなかったかとみられる。

墳丘上に葺石があり、埴輪が立っていた。葺石は前方部西側、後円部の東・南・西各斜面で散乱した状態で発掘され、埴輪片がまじっていた。やや良好な個所は西斜面の登り路左手の一個所であった。埴輪は朝顔形で、円筒埴輪はなかったようである。後円部頂上の平坦部で葺石

にまじり、円筒の基部片が出土した。黒斑のある朝顔形円筒埴輪はすべてタガが幅広く、形がそれぞれかわり、定型化したところがみられない。宇土周辺で朝顔形円筒埴輪は向野田がはじめて、松橋前田遺跡の朝顔形円筒埴輪は地下に埋められていた。向野田古墳後円部斜面から壺形埴輪の疑いのある上半の欠けた土師器、前方部から短頸・胴長な壺形の土師器が出土している。後者の口縁は二重口縁とみられる。今後の検討で、土師器は編年の重要な手がかりとなるう。

墓壇・石室・石棺

後円部頂上の平坦部に南北長約10m、東西約7mの長方形で、逆台形に深さ1m半ほど掘り込み、さらに壇内の周り幅約70cmの平縁部を残し、1m半ほど掘って二段墓壇をなしていた。板状割石を竪穴式石室に小口積みし、周りの平縁部の高さまで積んでいる。石室内に4mの阿蘇凝灰岩の刳抜式舟形石棺を納めていた。棺蓋は舟形で両端に横孔のつく縄掛突起、両側に長方形の穿孔が3個ずつあり、棺身は箱形で周りに狭い平縁部がめぐる。棺底は基底部の排水、排湿の仕組みがしてあった。蓋石は7枚あり、その上を粘土で覆っていた。墓壇内の東北隅に三段の踏み石がつけられている。

向野田の石室、石棺と似た例に八代郡大王山古墳があげられる。円墳とみられ、石棺はかなりいたんでいる。

副 葬 品

向野田古墳では副葬遺物は、棺外と棺内で区別されていた。棺外には剣・刀・刀子や鉄斧、棺内には石枕をした被葬者をめぐって鏡・玉類・車輪石や貝輪が納められていた。このような副葬品分納は他の古墳にもみられるけれど、向野田古墳は代表的な例といえる。

石室内・棺内は赤色顔料が塗られて、ことに被葬者の頭部辺はあざやかであった。頭部近く、内行花文鏡・鳥獸鏡が石枕上に、方格規矩鳥文鏡が西側内壁に立てかけてあった。大小の管玉・勾玉が頭部から上腕骨外側へ散り、多くの小玉が骨盤辺から下肢へ散っていた。車輪石は完形で、右手先の方にあり、貝輪は足の先の方へおかれていた。

長剣は現存長1.18cm、短剣は3本、刀子は79本を数える。直刀4本のうち3本に柄元の刀装具がつく。鏡をはじめ剣・刀・刀子や鉄斧に布痕があり、絹帛などで包んだものとみられる。

被葬者と古墳の編年

舟形石棺の石枕に仰臥伸展葬の人骨はほぼ完形に近いものであった。人骨片の残存は多いけれど、完形に近いものは数えるほどしかない。

向野田の場合、完形の人骨は女性であった。人骨の残ったことをみても、石棺をかこむ構造のすぐれていることが分かる。女性の身長150cm前後、肩幅32~33cm、年齢は30才の後半から40才ぐらいまで、骨は細くきゃしゃな体格らしい。宇土半島基部にあり、周辺はもちろん海上活動を支配した首長級の人物であったことが、その厚葬から知られる。ただ副葬遺物からただ

ちにその性格を窺うことはむずかしい。それには文献や民俗学などの研究に待たなくてはならない。

「火の国」では考古学的所見に加え、文献などにより酋長的巫女とされ、最近は巫的女王と表現されている^④。「古代史ノオト」では「火の国」の成果をふまえ、民俗学などから「不知火海の巫女」として探求がすすめられている^⑤。向野田の被葬者は、祭司的首長の性格をもつものではなかったかと筆者は考える^⑥。

向野田古墳が宇土半島基部前方後円墳群の中にあつて、弁天山古墳、迫ノ上古墳、城ノ越古墳と国越古墳の間に編年されることはすでに述べたところである。

二段墓壇の竪穴式石室に舟形系の石棺があり、貝輪とともに古式の車輪石があり、舶載の漢式鏡に仿製鏡があり、長大な剣・短剣3本に4本の直刀、うち3本は柄元の刀装具がつく。朝顔形埴輪は定型化せず、スカン孔は4世紀後半の要素をそなえ、タガ幅の広いことがあり、年代はやや下降することも考えられる。4世紀末から5世紀前半の頃には墳丘は築造されたとみられる^⑦。

註 ① 宇土半島基部前方後円墳群編年順試案

② 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡」熊本史学第33号、1967。同「茶臼山古墳出土の鳥獸鏡」石人 No.106、1968

③ 乙益重隆「宇土郡不知火町国越古墳」昭和41年埋蔵文化財緊急調査概報、熊本県教育委員会、1967

④ 小林行雄「倭の五王の時代」古墳文化論考、平凡社、1976

⑤ 富樫卯三郎ほか「宇土市の文化財第三集」、宇土市教育委員会、1977

⑥ 梶 国男『古墳の設計』築地書館、1975

⑦ 北野耕平「前期古墳における内部構造の問題」河内における古墳の調査、1964

⑧ 小林行雄「竪穴式石室構造考」古墳文化論考所収、平凡社、1976

⑨ 阿部・今井・山崎・西・松本・三島「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」熊本史学第50号記念特集号、1978

⑩ 山中英彦『東宮ノ尾古墳群—北九州市小倉北区東宮ノ尾所在石棺系石室の調査』、1974

⑪ 田辺哲夫「肥後の船型石棺に就て」昭和25年度秋季学術大会部会発表要旨、西日本史学第7号、1951

⑫ 間壁忠彦、間壁護子「長持形石棺」倉敷考古館研究集報第11号、1975

⑬ 乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11、1962

⑭ 木下之治、小田富士雄「熊本山船型石棺墓」佐賀県文化財報告書第16集、1967

⑮ 富田紘一「通史（原始古代）」鹿本町史、1976

⑯ 梶圭三郎「茶臼山古墳—八幡丘陵地」埋蔵文化財発掘調査概報（1969）、京都府教育委員会、1969

⑰ 内藤晃、大塚初重「三池平古墳」庵原村教育委員会、1961

三池平古墳について、明治大学大塚初重教授から次のご教示をいただいた。

ご連絡のありました「三池平古墳」の報告書は昭和36年、「日本の考古学」は41年の刊行で5年の間があります。おそらく、36年当時は、石釧・帆立貝型石製品・筒形銅器をはじめ、仿製四神鏡などの示す様相が前期形式であっても、東国なるがゆえという意識で、表現として400年代まで降りうるとしたからだと思います。

41年段階では、土師器論なども多少進展し、私どもが考えていた以上に東国への古墳波及が早いことが判明しつつあったので、4世紀後半という表現をしたと思います。30年代には、関東の前期古墳は、誰もが5世紀前葉と表現していました。これほど当時の年代論にはあやふやな点があったということです。

- ⑬ 前掲書註③、註⑭
- ⑭ 原口・富樫・大田・平山・高木ほか「宇土城跡（西岡台）」宇土市教育委員会、1977
- ⑮ 山越茂「方格規矩四神鏡考」（中）考古学ジャーナル No.95、1974
- ⑯ 前掲書註⑮
- ⑰ 原田大六『続沖の島』宗像神社復興期成会、1961
- ⑱ 校正中に着く。車輪石について九州歴史資料館渡辺正気氏の私信。貝輪について田添夏喜氏の繁根木古墳（伝佐山古墳）のプリントなどとともに昭和53年10月。本書P57参照。
- ⑲ 小林行雄『女王国の出現』国民の歴史1、文英堂版、1967
- ⑳ 濱田耕作・榊原政職「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」京都帝国大学文学部考古学研究報告第5冊、1920
- ㉑ 北九州市立歴史博物館小田富士雄主幹の私信による。昭和53年8月。
- ㉒ 野間・石川・茂山・田中「下北方地下横穴第5号」宮崎市文化財調査報告書第3集、1977
高野晋司「小野古墳の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報1、長崎県文化財調査報告第35集、1978
- ㉓ 大塚初重「大和政権の形成—武器武具の発達」世界考古学大系3、1963
- ㉔ 井上辰雄『火の国』学生社、1970。向野田の刀子を鉄生産に従事する集団からの供献とみられている。また註⑦前掲書 P185、群馬県白石稲荷山古墳の報告に、後藤守一博士は石製刀子の分類から、多人数により奉献されたとみるべき可能性を述べられている。なお、古代傷身哀悼の風習があったことを思い、それらの刀子が傷身に用いられたのち、供献されたとすれば、興味はあるが、決め手がない。
- ㉕ 前掲書註③。昭和53年12月末、宇土市上網田町の田平城跡の城2号墳（旧称塩屋2号墳）の調査で、小型鉄斧・琴柱形石製品2などが発見された。ご厚意により三島格氏らの調査を実見できた。昭和52年3月発見の装飾のあるチンカンさん古墳（小田良古墳）とともに、宇土半島の遺跡についてあらためて見直さなければならない。城2号墳は円墳、割石小口積み堅穴系横口式石室で床面は仕切り1枚が石室主軸に添ってあり、1枚は奥壁の方へとり上げられ、礫にまじり石灰藻がしかれていた。大矢野町の維和島の石棺の床面にはサンゴがしかれていたのを実見したことがある。
- ㉖ 坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告第三集、1962
- ㉗ 伊藤奎二作成「松橋町前田遺跡出土埴輪実測図」、未発表

- ③ 川西宏幸「埴輪研究の課題」史林第56巻第4号、1973
- ④ 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」大阪文化誌第2巻第4号（通巻第8号）、1977
- ⑤ 川西宏幸「円筒埴輪総論」考古学雑誌第64巻第2号、1978。第1図円筒埴輪の技法、写真4、押圧技法（最下段タガ）、畿内および周辺における円筒埴輪の編年で、押圧技法はタガの端面を板状工具で押圧するという方法で第Ⅳ期にあらわれる。昭和53年12月、石橋新次・横尾義明・堤論吉氏らのご好意により筑後考古学研究会の資料岡寺古墳・釘崎2号墳などの埴輪を実見することができた。
- ⑥ 吉田恵二「4須恵器」考古資料の見方〈遺物編〉、柏書房、1977
- ⑦ 富樫卯三郎「甕棺とその遺跡」宇土市の文化財第一集、1972
- ⑧ 前掲書註⑩
- ⑨ 東光彦「高城山遺跡群」熊本市西山地区文化財調査報告書、熊本市教育委員会、1969
- ⑩ 隈・野田・松本・島津・江本・緒方「塚原」熊本県文化財調査報告書第16集、1975
- ⑪ 森浩一「葬法の変遷よりみた古墳の終末」末永先生古稀記念古代学論叢、1967
- ⑫ 昭和53年12月、森浩一教授の私信による。
大和久震平「桑57号墳発掘調査報告」小山市教育委員会、（株）小山カントリー倶楽部、1972
- ⑬ 間壁菫子「出土人骨の性別よりみた古墳時代社会の一考察」（1962、7月稿）岡山史学
- ⑭ 富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」前掲書註⑩所収
- ⑮ 平山修一「千疊敷」前掲書註⑩所収
- ⑯ 前掲書註⑩
- ⑰ 谷川健一「古代史ノオト」大和書房、1975
- ⑱ 上田正昭「日本の女帝」講談社現代新書、1972
京都大学上田教授は、女帝史の上から三つの段階をあげておられる。第一が巫女王の段階で、向野田の被葬者はその段階の中に数えられ、古墳に埋葬されるものとして祭司的首長の色彩がみとめられるようである。
- ⑲ 土師器のことから「宇土城跡（西岡台）」（前掲書註⑩）の千疊敷の項をみたところ、西岡台遺跡の土師器が4世紀末～5世紀初頭に比定されている。向野田古墳の編年と考え合わせ、ふと西岡台の生活遺跡と向野田古墳とのかかわりが思い浮んできた。向野田古墳とかかわるかどうかは、今後の討究に待たなくてはならない。

補註

- ※ 三島格「貝をめぐる考古学—南島考古学の一視点」学生社、1977
特殊な貝が早くから宝器・呪物あるいは装飾品として使用されたことを説かれ、タカラガイの呪力・スイジガイの呪性その他について示されている。

第 18 表

熊 本 県 内 前 方

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 丘 の 規 模 (m)				
			全 長	後 部 円 径	前 方 幅	後 部 円 高	前 方 高
1	三の宮古墳	荒尾市下井手字持田丸	37	23	19	6	2.3
2	院塚古墳	玉名郡岱明町開田字京塚	78	43	26	6	3
3	藤光寺古墳	玉名郡岱明町高道字大馬場	85	35	50	9	
4	稲荷山古墳	玉名市繁根木字宮中					
5	山下古墳	玉名市山部田字山下	59	36.5	16	6.5	3.5
6	徳丸1号墳	玉名市上小田字下徳丸					
7	塚坊主古墳	玉名郡菊水町江田字清原	47	38.5	25+ α ?		
8	虚空蔵塚古墳	玉名郡菊水町江田字清原	53?	33			
9	船山古墳	玉名郡菊水町江田字清原	61	40	40		
10	若宮古墳	玉名郡菊水町江田字中小路	30	20	7.5	5	
11	岩原双子塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原字塚原	102	57	48	8	7.1
12	チブサン古墳	山鹿市城字西福寺	44	23	16.5	7	6
13	竜王山古墳	山鹿市杉		20~25		4~5	
14	ひょうたん平古墳	山鹿市杉	(40)	(20)		(5)	
15	中村双子塚古墳	山鹿市中字双子塚	46	25	6(10)	2.5	4.5
16	神社裏古墳	山鹿市方保田字宮田					
17	亀塚古墳	山鹿市方保田字塚ノ本	83	37.7	17.3	1	3
18	清水山古墳	山鹿市方保田字日置					
19	蛇塚古墳	菊池郡七城町亀尾字蛇塚					
20	大塚古墳	菊池市長田字大塚					
21	フタツカサン古墳	菊池市木柑寺字下向原	41.8			5.4	4.5
22	高熊古墳	鹿本郡植木町古閑字平神平	61.5	33	15	4.5	1.5
23	横山古墳	鹿本郡植木町有泉字槍	39	15		4	
24	石川山2号墳	鹿本郡植木町石川字塚前	34	22	10	4	2
25	塚園古墳	鹿本郡植木町岩野字塚園		14		(4)	
26	上鞍掛A古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	65.5	33.7	26.7	5.56	3.8
27	上鞍掛B古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛					
28	長目塚古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	111.5	59.5	約30	9.2	約4
29	富ノ尾3号墳?	熊本市池田町富ノ尾	30	20	10	2.4	

後 円 墳 地 名 表

(1978.4.現在)

外 部 施 設	内 部 主 体 の 構 造	出 土 遺 物	文 献
石人、円筒埴輪	横穴式石室(装飾)		①
周溝、排水施設、壺形埴輪	舟形石棺 4	画文帯神獸鏡、鉄剣、直刀、勾玉、管玉 切子玉、ナツメ玉、ガラス小玉	②
			③
朝顔形埴輪			③
	後円部…舟形石棺1、壺棺2 前方部…舟形石棺1	鉄斧、 鉞、鉄鏃、鉄釧、鉄剣、	④
	舟形石棺		③
周溝、円筒・朝顔形・ 形象埴輪	横穴式石室(装飾)		⑤
周溝、円筒埴輪			⑤
周溝、円筒・朝顔形埴 輪	横口式家形石棺	画文帯神獸鏡、画像鏡、獸形鏡、鉄刀、鉄剣 鉄槍、鉄鏃、冠、笄、帯金具、耳飾他多数	⑤・⑥
	舟形石棺		⑦
周溝、葺石、円筒埴輪			⑧
周溝、石人、葺石、円 筒埴輪	横穴式石室(装飾)		⑦・⑨
	竪穴式石室	刀子片	⑩
	竪穴式石室?		⑩
円筒埴輪			⑦
			③
		直刀等	⑦
	石棺?		
円筒・形象埴輪	横穴式石室? 前方部 に箱式石棺	須恵器、杏葉	③・⑩
			③
石人?、円筒埴輪			⑦
円筒・朝顔形・形象埴輪			⑪
	横穴式石室(装飾)	直刀、馬具残欠、玉類、金環、須恵器	
			⑫
周溝			⑬
			⑬
周溝、壺形埴輪	前方部に竪穴式石室	内行花文鏡、勾玉、管玉、丸玉、小玉、鉄 刀、刀子、鉄鏃、鉄斧、須恵器、土師器	⑭
円筒埴輪			①・⑭

No.	古墳名	所在地	墳丘の規標(m)					
			全長	後部 円径	前部 方幅	後部 円高	前部 方高	
30	長塚古墳	上益城郡御船町久保	46.2	36.2	23.1			
31	今城大塚古墳	上益城郡御船町滝川字大塚						
32	甚九郎山古墳	下益城郡城南町沈目字奥野	36.9	21	15	4.5	4	
33	狐塚古墳	下益城郡城南町陳内字狐塚	23	10.5	8.5	4	3.5	
34	花見塚古墳	下益城郡城南町塚原字北原	33(42)	12.5(25)		3		
35	土取塚古墳 ?	下益城郡城南町塚原字丸山	(29)	(16)	(8)			
36	琵琶塚古墳	下益城郡城南町塚原字丸山		47		5		
37	女夫塚古墳	下益城郡松橋町古保山字女夫塚	46	26	24	5	5.5	
38	松橋大塚古墳	下益城郡松橋町松橋字大野	79	45	28	5	3	
39	天神山古墳	宇土市野鶴町字桜畑	(110)	(60)	(40)	14	9	
40	スリバチ山古墳	宇土市神合町字水谷	96	64	15	11	8	
41	迫ノ上古墳	宇土市神合町字迫ノ上	54(56)	28(32)	(15)	4	2	
42	城ノ越古墳	宇土市栗崎町字城ノ越	43.5	(23)				
43	櫛崎古墳	宇土市花園町字櫛崎	(32)	(18)	(15)	(3)	(2)	
44	御手水古墳	宇土市松山町字御手水	(65)	(37)	(15)	(4.5)	(3.0)	
45	向野田古墳	宇土市松山町字向野田	86	53.7	33.5	8	4	
46	仁王塚古墳	宇土郡不知火町小曾部字北園	46.8	21.8	26.8	3.5	3.5	
47	国越古墳	宇土郡不知火町長崎字国越	62.5	36.2	22.5	6.5	6	
48	弁天山古墳	宇土郡不知火町長崎字弁天山	53.5	33.4		6	3	
49	寺島1号墳 ?	宇土郡三角町戸馳字寺島						
50	東新城古墳	八代郡竜北町高塚字東新城	65	40	20	4	2	
51	物見櫓古墳	八代郡竜北町野津字下北山王	70	38	29			
52	姫の城古墳	八代郡竜北町大野字北川	85	37	50	9	10	
53	天提古墳	八代郡竜北町大野字天提						
54	中の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	98	57	68	13		
55	端の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	62	40	42	7.5		
56	有佐大塚古墳 ?	八代郡鏡町下有佐字大塚						
57	車塚古墳	八代市川田町東川田字大塚						
58	岡塚2号墳	八代市川田町東川田字岡塚	40		20			

外部施設	内部主体の構造	出土遺物	文献
周溝		周溝内より須恵器	⑮
	横穴式石室(装飾)		⑮
周溝	横穴式石室(装飾)	須恵器、鉄の小片	⑮
	粘土埴6	鉄鏃、金環、馬具残欠、金銅製金具	⑮
	石棺?	鉄剣、鉄鏃、金環、鎧片、玉類	⑮
	石棺?		⑮
周溝、朝顔形埴輪			⑰
	横穴式石室?	墳丘より須恵器	⑦
円筒・朝顔形埴輪			⑦
			⑱
壺形埴輪			⑦
葺石、壺形埴輪	縦穴式石室	鉄剣、刀子、鈍	⑦
	箱式石棺?	三角縁四神四獣鏡	⑲
	家形石棺3、石蓋土壇1 前方部に箱式石棺	直刀	⑱・㉔
葺石			(略測)
朝顔形埴輪、葺石	縦穴式石室内に舟形石棺	方格規矩鳥文鏡、内行花文鏡、四獣鏡、車輪石、勾玉、管玉、ガラス小玉、鉄剣、直刀、刀子、鉄斧	本書
周溝			⑱
円筒・形象埴輪、須恵器、葺石、排水施設	横穴式石室内に家形石棺(装飾)	画文帯神獣鏡、四獣鏡、獣帯鏡、鉄鏃、銅製腕、骨製飾付鉄矛、玉類、他多数	⑳
葺石、壺形埴輪	縦穴式石室		㉔
			③
円筒埴輪		墳丘より須恵器	
			⑦
周溝、円筒・形象埴輪、石製品			⑦
			⑦
周溝、円筒・形象埴輪			⑦
周溝、円筒埴輪			⑦
円筒埴輪			
			⑦
			⑦

No.	古墳名	所在地	墳丘の規模(m)				
			全長	後部 円径	前方 幅	後部 円高	前方 高
59	長塚古墳	八代市上片町字下野森					
60	八代大塚古墳	八代市上片町字下野森	55.8	28	49	4.5	3.5
61	竹原古墳	八代市竹原町					
62	高取上の山古墳	八代市上片町高取	59.09		16.3	3.64	3.6
63	乙町6号墳	八代市宮地町乙町					
64	亀塚古墳	球磨郡錦町西字亀塚	(28)			(3)	(1.5)

註 ◎ 地名表および分布図の作成にあたっては、次の方々に多くのご教示を受けることができた。記して謝意を表します。(敬称略)

三島 格・隈 昭志・杉村彰一・松本健郎・西 健一郎

- ◎ 表の外に前方後円墳の疑いがあるものもあるが、それらについては除外した。
- ◎ 墳丘の規模で()内の数値は、復原または堆定を表わす。
- ◎ 付録としてあげた前方後円墳の墳丘測量図のうち、迫ノ上古墳は松本雅明教授を団長とする熊日(熊本日日新聞社)学術調査団の手によるものであり、松本教授の御厚意により掲載させていただくことができた。また仁王塚古墳は熊本商科大学・短期大学文化財研究会の手によるものであり、山下敏文氏の御厚意により掲載させていただくことができた。
- ◎ 迫ノ上古墳・仁王塚古墳以外の向野田古墳を含めた8基は富樫らが宇土高校社会部・同OBとともに作成したものである。

外部施設	内部主体の構造	出土遺物	文献
			㉓
周溝、円筒・朝顔形・ 形象埴輪		墳丘より多量の須恵器	㉔
			㉓
	横穴式石室?		㉔
			㉓
			⑦

第 19 表

熊 本 県 内 埴 輪

番号	古 墳 名	所 在 地	墳 丘	墳丘長	内 部 主 体
1	三の宮古墳	荒尾市下井手字持田丸	前方後円墳	37m	横穴式石室(装飾)
2	別当塚東古墳	荒尾市本井手字亀原	円 墳		縦 穴 式 石 室
3	塚山古墳	荒尾市下井手字山の上	円 墳		縦 穴 式 石 室
4	院塚古墳	玉名郡岱明町開田字京塚	前方後円墳	78m	舟形石棺 4
5	稲荷山古墳	玉名市繁根木字宮中	前方後円墳		
6	伝佐山古墳	玉名市繁根木字北	円 墳	35m	
7	カミの塚古墳	玉名郡天水町辺田見字徳丸	円 墳		
8	経塚古墳	玉名郡天水町辺田見字城平	円 墳		舟形石棺
9	大塚古墳	玉名郡天水町辺田見字城平	円 墳		
10	塚坊主古墳	玉名郡菊水町江田字清原	前方後円墳	47m	横穴式石室(装飾)
11	虚空蔵塚古墳	玉名郡菊水町江田字清原	前方後円墳	53m?	
12	船山古墳	玉名郡菊水町江田字清原	前方後円墳	61m	横口式家形石棺
13	椿山古墳	玉名郡菊水町瀬川字白石	前方後円墳?		
14	岩原双子塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原字塚原	前方後円墳	102m	
15	狐塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原字下原	円 墳	38m	
16	チブサン古墳	山鹿市城字西福寺	前方後円墳	44m	横穴式石室(装飾)
17	中村双子塚古墳	山鹿市中字双子塚	前方後円墳	46m	
18	白塚古墳	山鹿市石字白塚	円 墳 ?	28.6m	横穴式石室(装飾)
19	金屋塚古墳	山鹿市石字金屋塚	円 墳	30m	
20	蛇塚古墳	菊池郡七城町亀尾字蛇塚	前方後円墳		横穴式石室? 前方部に箱式石棺
21	フタツカサン古墳	菊池市木柑子字下向原	前方後円墳	41.8m	
22	高熊古墳	鹿本郡植木町古閑字天神平	前方後円墳	61.5m	
23	大塚古墳	鹿本郡植木町正清字大塚			
24	葉山塚古墳	飽託郡北部町飛田字上原	円 墳	24m	
25	富の尾3号墳	熊本市池田町富尾	前方後円墳?	30m	横穴式石室
26	長目塚古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	前方後円墳	111.5m	前方部に縦穴式石室
27	上鞍掛塚A古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	前方後円墳	65.5m	
28	井寺古墳	上益城郡嘉島町井寺字富屋敷	円 墳	20m	横穴式石室(装飾)
29	琵琶塚古墳	下益城郡城南町塚原字丸山	前方後円墳		

出 土 地 名 表

(1978. 4 現在)

時 期	埴 輪											文 献	備 考	
	壺形	円筒	朝顔形	人物	鳥形	馬形	家形	楯形	靱形	短甲	その他 不明			
中～後		○											①	武装石人
中							○						②	
												○	②	(形象埴輪)
中	○												②	
			○										③	
		○											⑥	
												○	⑦	
中		○											③	
		○											③	
中～後		○	○	○	○?								⑤	
後		○											⑤	
中～後		○	○										⑤・⑥	
												○	⑦	
中		○											⑧	
中		○						○						
後		○											①・⑨	石 人
後		○											⑦	
後		○	○	○									②	石 人
中～後		○	○										②	
後		○		○?				○?					⑩	
												○	⑦	石人?
中～後		○	○	○									⑪	
									○				⑩	
						○?							⑫	古代推定
		○											①・⑭	
中	○												⑭	
中		○											⑬	
													⑭	
中		○	○										⑮	

番号	古墳名	所在地	墳丘	墳丘長	内部主体
30	松橋大塚古墳	下益城郡松橋町松橋字大野	前方後円墳	79m	
31	前田遺跡A地点	下益城郡松橋町大野字前田	出土地		
32	スリバチ山古墳	宇土市神合町字水谷	前方後円墳	96m	
33	迫ノ上古墳	宇土市神合町字迫ノ上	前方後円墳	54m	竪穴式石室
34	神合古墳	宇土市神合町	円墳		
35	轟貝塚	宇土市宮庄町字須崎	出土地		
36	西岡台遺跡	宇土市神馬町字千疊敷	出土地		
37	向野田古墳	宇土市松山町字向野田	前方後円墳	88.5m	竪穴式石室(舟形石棺)
38	国越古墳	宇土郡不知火町長崎字国越	前方後円墳	62.5m	横穴式石室(装飾)
39	弁天山古墳	宇土郡不知火町長崎字弁天山	前方後円墳	53.5m	竪穴式石室
40	道免古墳	宇土郡不知火町長崎字道免	円墳		
41	鴨籠東古墳	宇土郡不知火町長崎字城の越			横穴式石室
42	塚原平古墳	宇土郡不知火町高良字塚原平	円墳	約25m	横穴式石室
43	高塚東原遺跡	八代郡竜北町高塚字東原	方形周溝墓?		
44	東新城古墳	八代郡竜北町高塚字東新城	前方後円墳	65m	
45	姫の城古墳	八代郡竜北町大野字北川	前方後円墳	85m	
46	中の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	前方後円墳	98m	
47	端の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	前方後円墳	62m	
48	有佐大塚古墳	八代郡鏡町下有佐字大塚	前方後円墳?		竪穴式石室(前方部?)
49	園の迫1号墳	八代郡宮原町立神字園の迫	円墳	26m	礫床
50	岩立C古墳	八代郡宮原町立神字岩立	円墳	19m	横穴式石室
51	蕾園古墳	八代郡宮原町立神字蕾園	円墳		
52	野寺寺院跡	八代郡宮原町平原字野寺	出土地		
53	八代大塚古墳	八代市上片町字下野森	前方後円墳	55.8m	
54	鳩山古墳	八代市鳥越町			
55	竹原古墳	八代市竹原町竹原神社境内	円墳		
56	カミノハナ号墳	天草郡松島町字永浦	円墳	13m	

註 ◎ 地名表作成にあたっては次の方々に御教示を得ることができた。記して謝意を表します。(敬称略)

富樫卯三郎・三島格・江上敏勝・伊藤奎二・川西宏幸・松本健郎

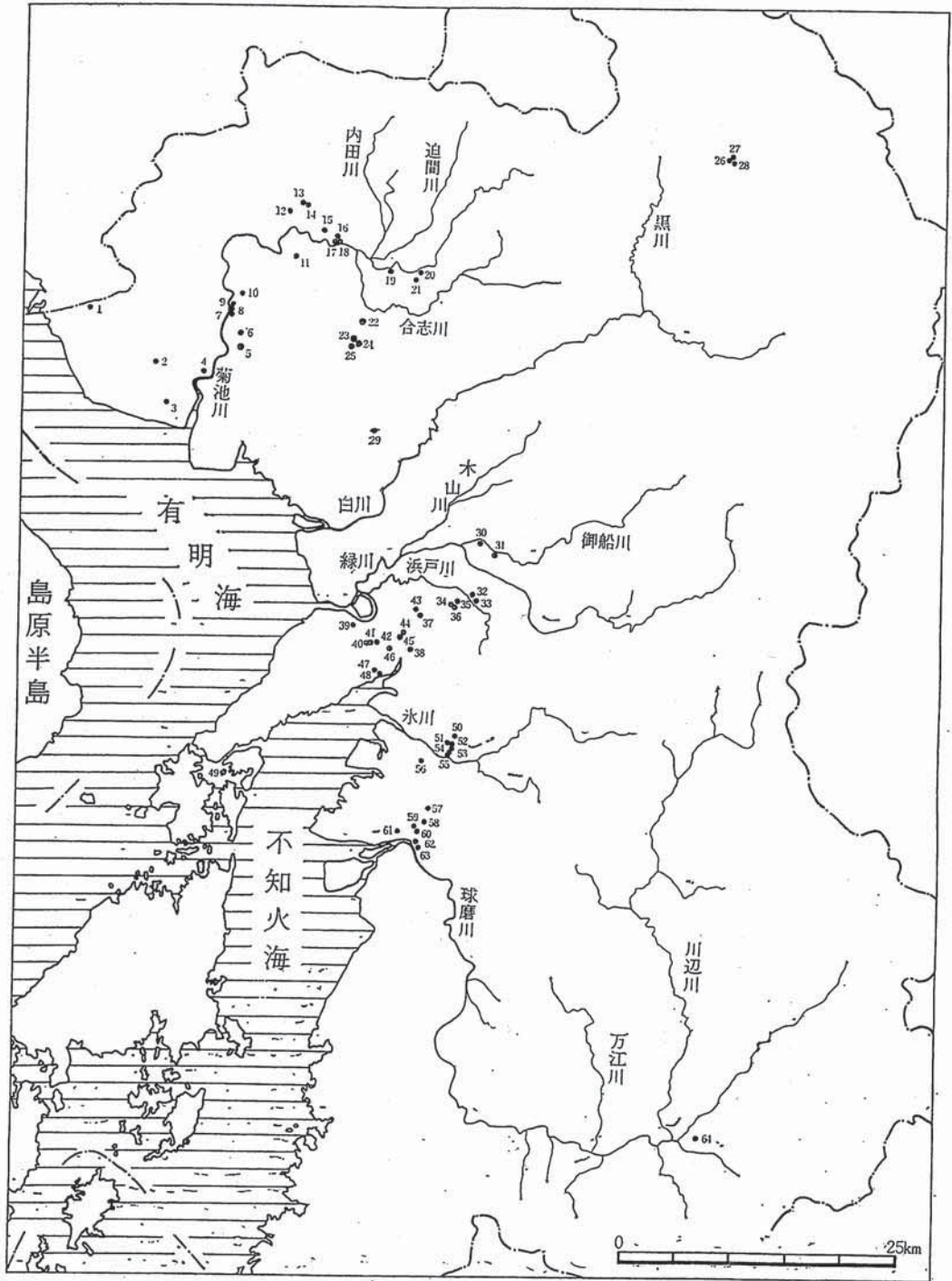
なお地名表に挙げたもののうち、報告などに墳輪の出土が報じられていながら、現地で確認できなかったものも含む。

時 期	埴 輪											文 献	備 考	
	壺形	円筒	朝顔形	人物	鳥形	馬形	家形	楯形	鞆形	短甲	その他 不明			
中～後		○	○?											
中～後		○	○										③⑤	
前	○												④⑧	
前	○													
		○												
		○												
		○											⑩⑮	
前			○										本書	
中～後		○	○	○		○					○		⑳	
前	○												㉑	
後		○		○									㉒	
		○	○										㉓	
後		○											㉔	略 測
前	○												㉕	
		○												
後		○	○			○		○					㉖	石製品(罎・ 蓋・鞆)
後		○		○									㉗	
後		○											㉘	
前～中 後		○											㉙	埴輪は二 時期
後		○											㉚	
後		○											㉛	
											○		㉜	
後		○												
後		○	○	○			○			○			㉝	
		○											㉞	
		○											㉟	
		○		○									㊱	

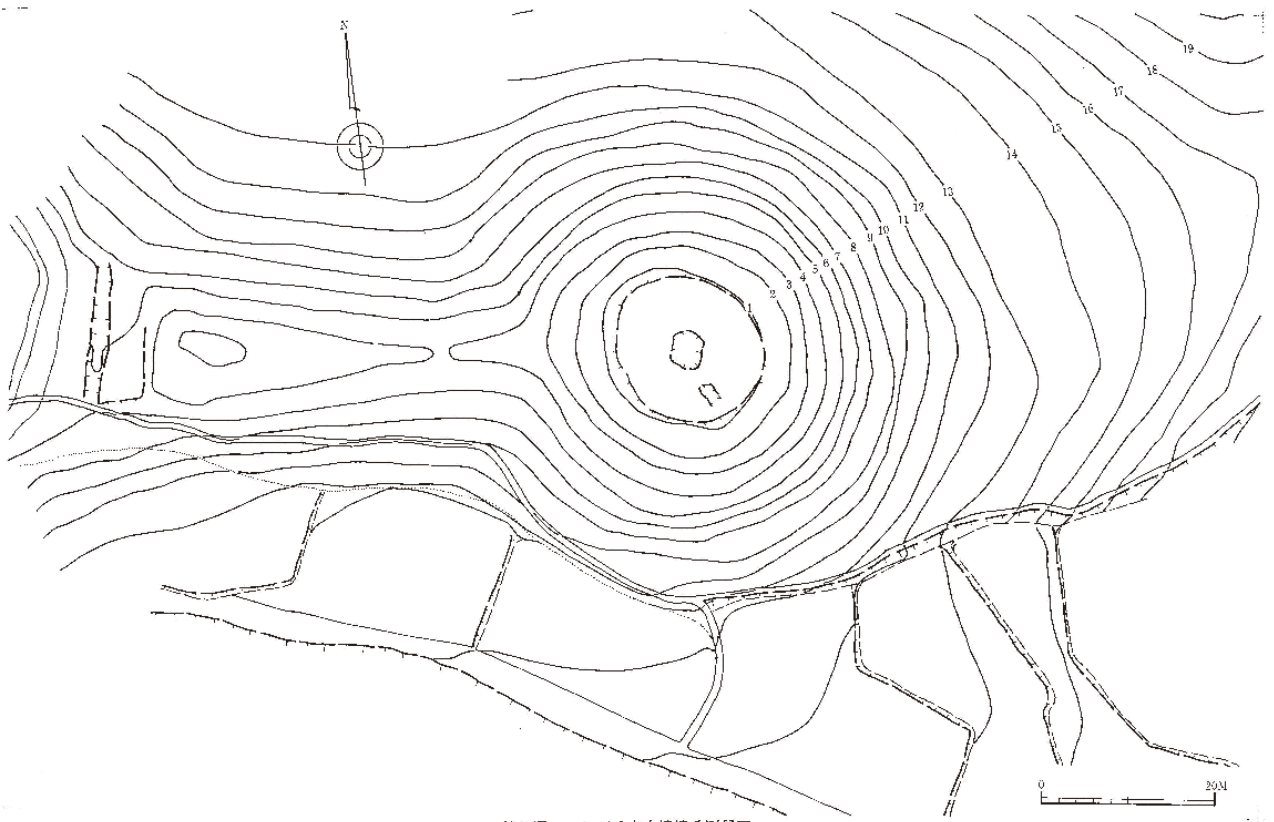
前方後円墳・埴輪地名表参考文献

- ① 梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下に於ける石人と其の表飾の古墳」(熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊)、1925
- ② 乙益重隆・田辺哲夫・三島格・田添夏喜「院塚古墳調査報告」熊本県文化財調査報告第6集、1965
- ③ 熊本県教育委員会『熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表 昭和51年度』、1977
- ④ 三島格他「山下古墳調査概報」熊本史学第50号記念特集号、1977
- ⑤ 西田道世「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告書 第1集、1976
- ⑥ 梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告 第1冊、1922
- ⑦ 三島格「肥後における古墳研究—戦後の成果と問題点—」古代文化第17巻第3号、1966
- ⑧ 田辺哲夫「岩原古墳」熊本史学第12号、1957
- ⑨ 下林繁夫「チブサン古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第4冊、1927
- ⑩ 隈昭志・杉村彰一「熊本県山鹿市竜王山古墳調査報告—竪穴式石室の一例—」考古学雑誌第57巻第3号、1972
- ⑪ 田辺哲夫「高熊古墳調査報告(その1)」「高熊古墳調査報告(続)」玉名高校考古学部部報第7号・第18号第2部、1964・1967
- ⑫ 田辺哲夫他「石川山古墳群調査報告」熊本県文化財調査報告第9集、1968
- ⑬ 乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」熊本県文化財調査報告書第3集、1963
- ⑭ 坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告書第3集、1963
- ⑮ 緒方勉・高木正文「久保遺跡」熊本県文化財調査報告第18集、1975
- ⑯ 三島格「原始—古墳時代」城南町史、1965
- ⑰ 野田拓治・島津義昭・江本直ほか「塚原」熊本県文化財調査報告第16集、1975
- ⑱ 富樫卯三郎他「宇土城跡(西岡台)」宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977
- ⑲ 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡」熊本史学第33号、1967
- ⑳ 梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「宇土郡檜崎の古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊、1925
- ㉑ 乙益重隆「不知火町国越古墳」昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報、1967
- ㉒ 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の竪穴式石室墳—」熊本史学第30号、1965
- ㉓ 江上敏勝「原始—古墳時代」竜北町史、1973
- ㉔ 八代市教育委員会『八代市の文化財 第3集』、1974
- ㉕ 三島格「三の宮・別当塚・塚山」荒尾市文化財解説 第1集、1971
- ㉖ 田添夏喜「伝佐山古墳調査概報」玉名高校考古学部部報 第17号、1966
- ㉗ 熊本県教育委員会『熊本県埋蔵文化財遺跡地名表(昭和37年度)』、1963
- ㉘ 原口長之『臼塚古墳調査報告』プリント版、1956
- ㉙ 隈昭志「金屋塚の沿革」チブサン 第14号、1969
- ㉚ 坂本経堯ほか『熊本県史総説編』、1965

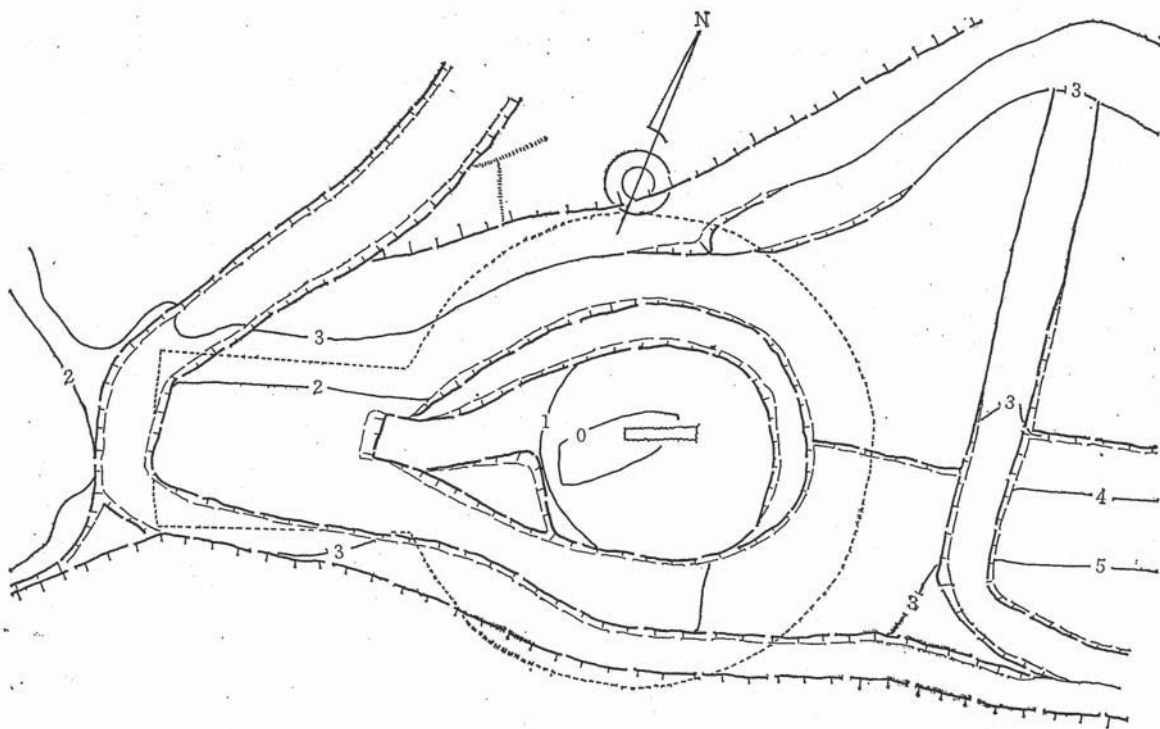
- ⑳ 三島格「ハニワ（形象埴輪）の分布」熊本の歴史1、熊本日日新聞社、1958
- ㉑ 三島格「肥後国飽託郡北部村発見の家形埴輪について」九州考古学10、1960
- ㉒ 熊本日日新聞
- ㉓ 浜田・梅原・島田「肥後国上益城郡嘉島村井寺古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊、1917
- ㉔ 伊藤奎二作成「松橋町前田遺跡出土埴輪実測図」、未発表
- ㉕ 熊本県教育委員会「遺跡地名表（追加及び工事関係分）」、1965
- ㉖ 坂本経堯「鴨籠2号古墳」不知火町史、1972
- ㉗ 富樫卯三郎氏採集資料による
- ㉘ 花岡興輝「八代郡竜北村における土師器の埋没遺跡について」熊本史学 第11号、1957
- ㉙ 永松豊藏氏採集資料による
- ㉚ 乙益重隆「八代郡宮原町園の迫古墳」日本考古学年報11、1962
- ㉛ 村井真輝「岩立C古墳」九州自動車道と文化財第1号、1977
- ㉜ 松本雅明「彙報」熊本史学第15号・第16号、1959
- ㉝ 江上敏勝「熊本県八代市上片町大塚古墳（前方後円墳）出土埴輪について」夜豆志呂第36・37合併号、1974
- ㉞ 江上敏勝氏のご教示による
- ㉟ 坂本経堯・坂本経昌『天草の古代』、1971
- ㊱ 乙益重隆「富ノ尾3号墳」熊本市西山地区文化財調査報告書、1969
- ㊲ 富樫卯三郎「揺鉢山古墳」宇土市の文化財第3集、1977



第31図 熊本県内前方後円墳分布図



第32図 スリハチ山古墳墳丘測量図



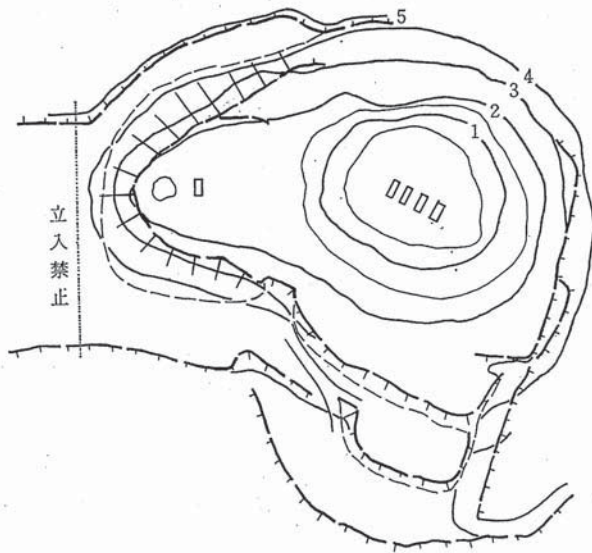
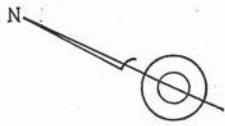
註：① 測量図はブルドーザーによって削平されたのち作製

② 線は発掘の結果確認された墳丘

0 20M

第 33 図

追ノ上古墳墳丘測量図

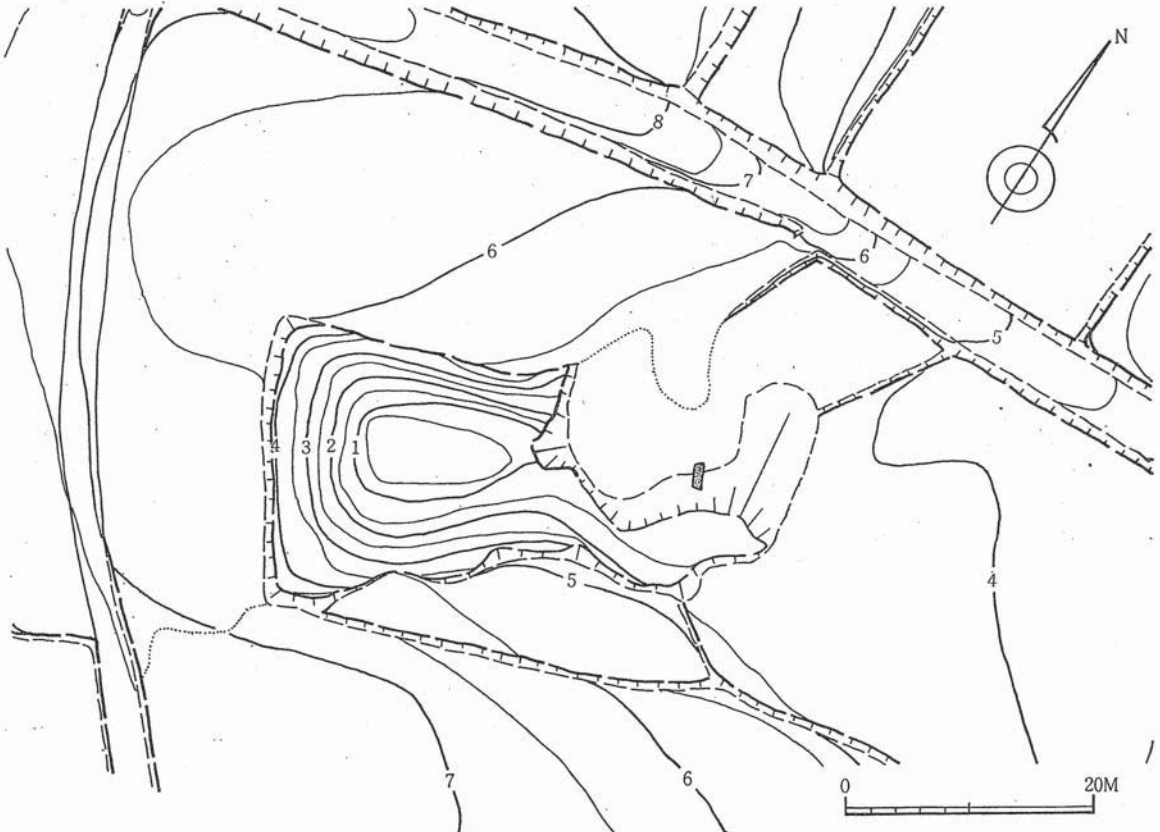


第 34 圖

檜崎古墳墳丘測量圖

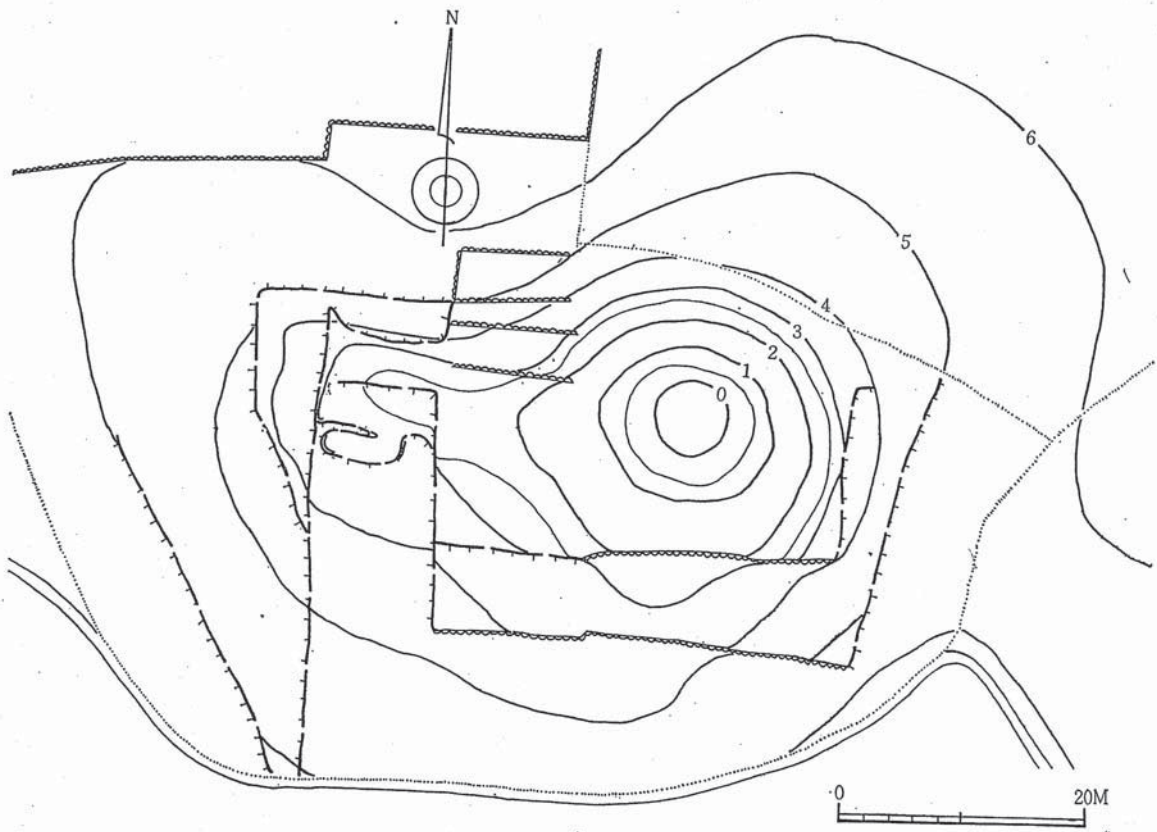


第35回 天神山古墳塚丘測量図



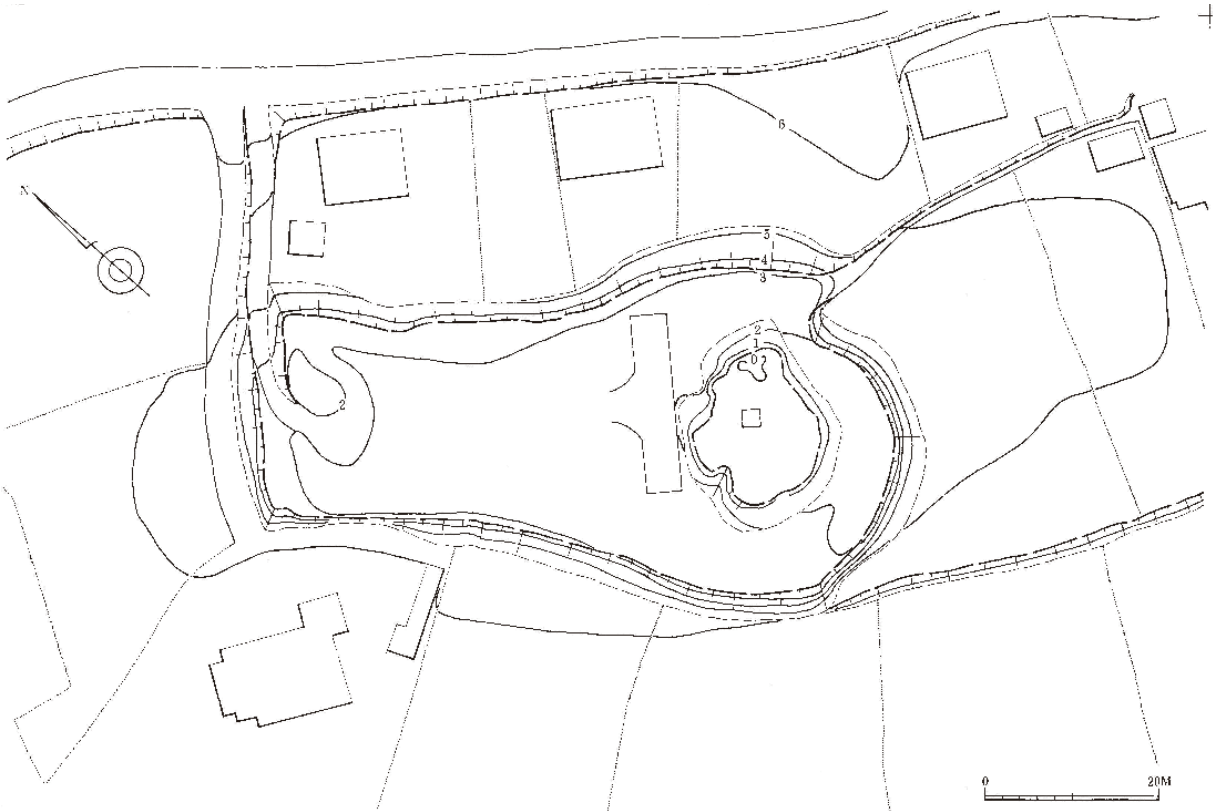
第36圖

女夫塚(男塚)古墳墳丘測量圖

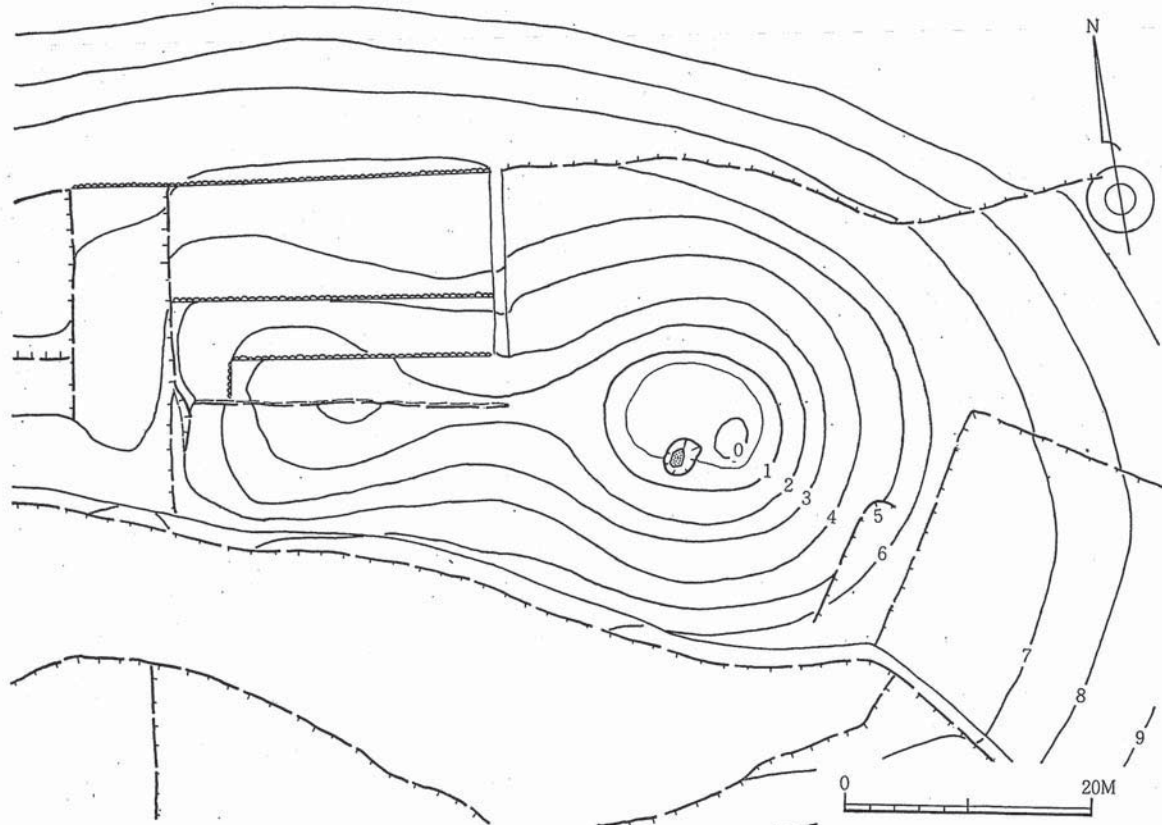


第 37 图

弁天山古墳墳丘測量図

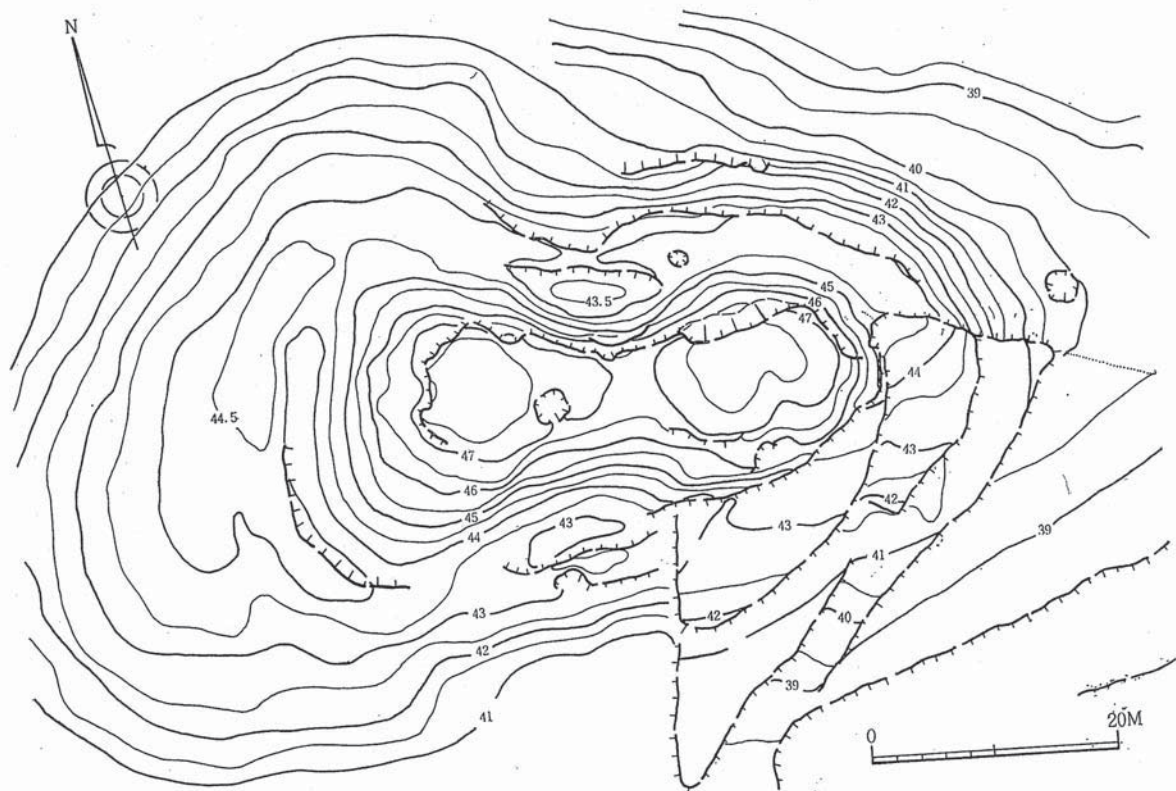


第36図 松橋大塚古墳墳丘測量図



第 39 圖

國 越 古 墳 墳 丘 測 量 圖



第 40 图

仁 王 塚 古 墳 丘 測 量 图

付 論

付論 1

向野田古墳の人骨について

北 條 暉 幸

今回の調査で、一般の興味を引いたのは何といても完全な女性の人骨が埋葬されていたことである。

ところで、骨を見ただけで性別や年齢がわかるのだろうかという疑問もわく。判定方法はいくつもあるけれど、今回は骨盤の部分などが決め手となって女性と断定された。年齢は、30才の後半から40才までぐらいと推定できる。

この女性、もしこの一帯を治めていた女王なら独身で、もっぱら神に仕える身だったろう。向野田古墳が女王の墓だったか、はたまた妃（キサキ）だったか、興味あるテーマである。

骨をも少しくわしく見てみよう。身長は150 cm前後、肩幅は32～33 cm、骨から見たところでは細く、きゃしゃな女性だったようである。

頭骸骨から判断すれば、細おもてで、鼻根部がくぼみ、上顎が少し出ている。歯はあまりすり減っておらず、虫歯らしいのが1本あるだけで、全体に美しい。堅い物をあまり食べていないらしいところからも、かなり高い水準の生活を営んでいたことが考えられる。

なお骨だけを見た限りでは殺害されたような形跡はみとめられなかった。

(九州産業医科大学教授)

北條教授は、北海道札幌医科大学から九州へご栄転の忙しい折にも拘わらず、とりいそぎ送っていただいた。詳細は、近々、学会に報告される予定である。

付論 2

向野田古墳の貝輪について

菊池泰二

出土した貝輪は、発見当時すでに著しく腐朽して、貝殻の本体である固い稜柱層もチョーク状に変化し、原形を失っていた。比較的保存のよい標本でもわずかに円周のま～まをとどめていたにすぎない。弧の曲線から推定すると、直径6～7cmのほぼ真円状をなしていたと考えられる。

保存のよい弧の幾つかについて計測したところ、断面の肉厚は大型のもので4%、高さ8%前後、やや小型のものでは断面の肉厚は3%前後であった。切断研磨された貝輪の断面も風化して粗い粒状の肌となり、内部の稜柱層が崩壊して外壁だけが残っている。このような状態では貝輪の材料となった貝の種を判定することは不可能に近い。

ただ僅かに残された輪郭から推測すると、貝輪の保存のよい部分は肉厚で真円の円周に近い形をしているが、一方貝輪の断片の中には、長さわずか3～4cmであるが、幅8～12%でやや広く斜めに傾きをもった剝片（表面のみが保存されたもの）が数個存在する。これがこの一群の貝輪の一部であるとする、大型二枚貝の腹縁の形態に似ており、ベンケイガイ科のタマキガイまたはベンケイガイである可能性が強い。その保存の良い側の貝輪の真円に近い曲線はイモガイの横切り貝輪の可能性を完全に否定するものではないが、その輪郭からみてオニシヤスイシヨウガイ科の大型巻貝の縦切り貝輪とはあきらかに異なっている。

(九州大学理学部附属天草臨海実験所所長・教授)

付論 3

向野田古墳出土鏡について

堀 一 夫

1. 白銅について

金属材料学の分野では白銅という名称を現在ではあまり用いないが、元来銅とニッケルの合金を白銅と称し、ニッケル含有量15~25%のものでニッケル様の白色を呈し、通貨などに用いられて白銅貨の名称がある。

広辞苑などには①錫を多く含む青銅。硬質で白色。②銅75とニッケル25との合金。銀白色。貨幣や装飾品などに用いる。という相反するふたつの記述があり、金属材料学的には明らかに矛盾した記述となっている。

金属材料学的には錫をいくら含有していようと銅と錫の合金は青銅であって、白銅とは成分的に明確に区別されなければならない。

理化学辞典にはこの点明確に記述されている。

考古学の分野で青銅鏡のうち白色を呈するものを白銅鏡と称しているようであるが、これは金属材料学的にはきわめて誤解を生じやすい表現であり、みかけ上白色を呈するからといって軽々に俗的な名称を付してはならない。

たしかに銅と錫の合金は、その錫含有量の増加と共に合金色に変化を生じ、東京国立文化財研究所保存科学部の石川陸郎氏が岩内山遺跡出土飛禽文鏡のX線透視と題する報告において、^①青銅の性質として5%錫までは銅赤色であるが、錫が増加すると黄色味が増し、15%錫では橙黄色を呈する。錫が更に増すと白味が加わり、25%錫になると青味がかかった黄白色となる。この合金に亜鉛や鉛が加わると銅の量が減少するので赤味が失われ、亜鉛では黄味が増し、鉛では青味が増すと述べておられるが、これが金属材料学的には全く正しい所見である。^②

2. 青銅鏡の成分について

これまで我が国において発見された古鏡の化学的成分については幾多の報告があるが、これら^{③④⑤}の分析値が試料のどの部分からどのようにして採取されたのかが不明のために論評することは出来ない。

元来銅と錫の合金である青銅はその凝固温度範囲が非常に広いため、凝固過程での錫濃度

は、晶出した固相よりも残留液相中に濃縮される。又固相内での錫の拡散がおそいこともあって錫濃度は α 樹枝状晶の核発生につづく成長の初期よりも、終了近くに晶出した α 相の方に高くなり非常に明瞭な樹枝状晶がみられる。この時期に凝固時の固体収縮による圧力、中心部に濃縮され気泡となったガスの圧力、あるいは樹枝状晶間の毛細管現象などにより、これら錫に富んだ液相が鑄物表面に押し出されて鑄肌が銀白色になり、丁度汗のようににじみ出る現象が生じる。これを錫汗といい、その錫量は20%にも達することがある。金属材料学ではこれを逆偏析といい、鑄物の外部は中心部よりも錫量が多くなるのである。

以上の現象から古鏡の化学成分決定に当たって、その試料の採取位置、採取方法が明記されねばならないことが理解出来よう。

3. 向野田古墳出土鏡について

今回所見を求められた三古鏡は大中小の三種あり、これまで考古学的には白銅鏡と称されているものであるが、この名称については既に述べた通り俗称であり、すべて青銅鏡である。但し今回の試料については些かの損壊も許されず主として肉眼観察と光学反射顕微鏡による表面検査のみであるから、確実な成分を同定することは不可能であった。

a. 方格規矩鏡

三種の内もっとも大きいもので、約692.4 grあり、表面の文様も精細をきわめており、鑄造技術的には三鏡の内もっともすぐれたものと考えられる。

写真1は鏡面端部の顕微鏡組織であるが、気泡も少なく、かなり質の良いものといえる。

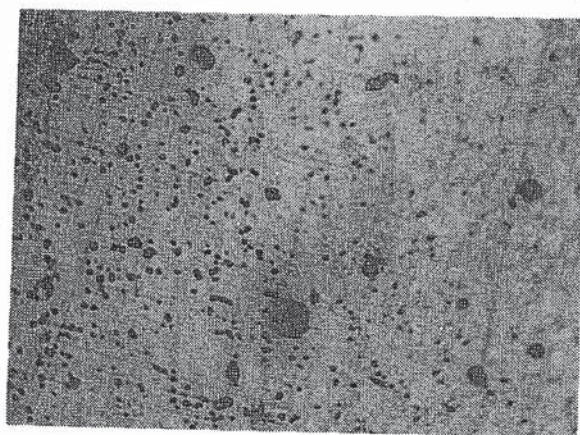


写真1 × 100

写真2及び3は Grad 液No. 1で腐食したもの。顕微鏡組織で夫々100倍と400倍である。これで見えて分かるように組織が均一で冷却がうまく行なわれたことを示している。錫含量もかなり多く、これまで分析報告されている古鏡の錫含量25~30%程度はあろうと考えられる。

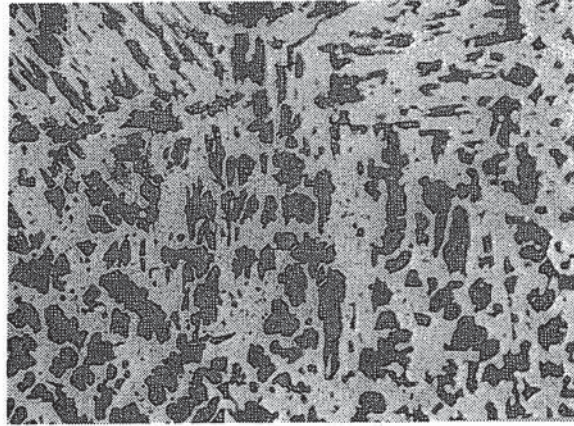


写真2 × 100

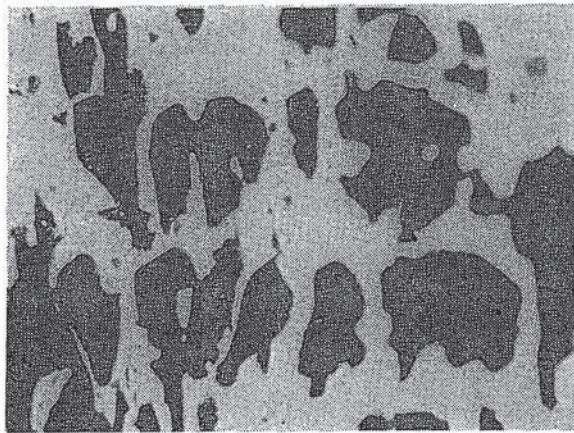


写真3 × 400

b. 内行花文鏡

三種の内、中の大きさのもので約 462.3 grである。

表面の模様も三種の内、中位の精度に属するもので、表裏面共に緑青色の錆がかなりみられる。しかし表面端部にはかなりの広さで緑青のない、錫を多く含んだ鋳物の特質であるやや黒ずんだ光沢のある酸化皮膜におおわれた部分があり、先の方格規矩鏡と同程度かやや少ない錫の含量ではないかと考えられる。

写真4は鏡面端部の顕微鏡組織であるが、方格規矩鏡に比べて小さな多数の気泡がみられ、冷却速度がかなり早かったものと考えられる。

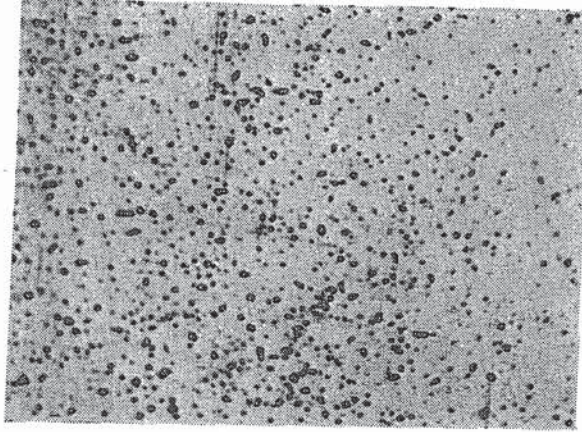


写真4 × 100

写真5及び6は腐蝕組織であるが、予想したごとく微細な組織となって冷却速度の相通を示している。

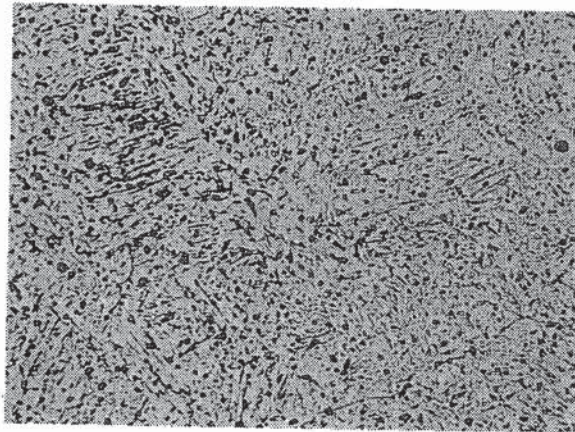


写真5 × 100

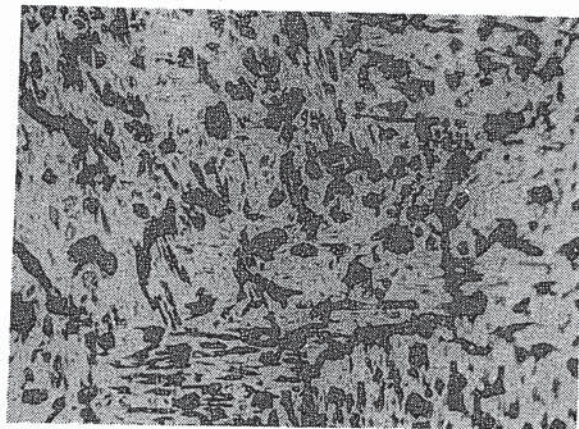


写真6 × 400

c. 鳥 獣 鏡

三種の内もっとも小型のもので約 154.8 grであった。

表面模様はかなり磨滅しているかにみえるが、鑄造技術の甘さとも考えられ、技術的には三鏡の内もっとも劣ると考えられる。

写真7は鏡面端部の顕微鏡組織であるが、かなり大きい気泡がみられる。

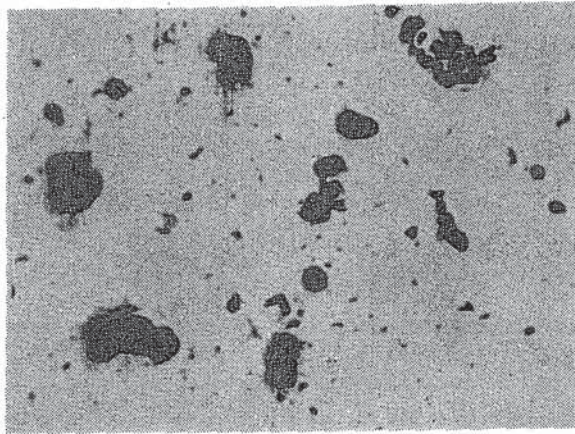


写真7 × 100

写真8及び9は腐蝕組織であるが、前二者に比べて他成分の含有量が多い印象をうける。即ち古鏡成分としては銅、錫、鉛、亜鉛が知られており、時代と共に錫が減少し亜鉛が増加するといわれているが、今回は分析しないので不明である。しかし組織的には前二者よりも複雑な化合物相と思われるものがみられるので、前二者とは些か異なるものとも考えられる。

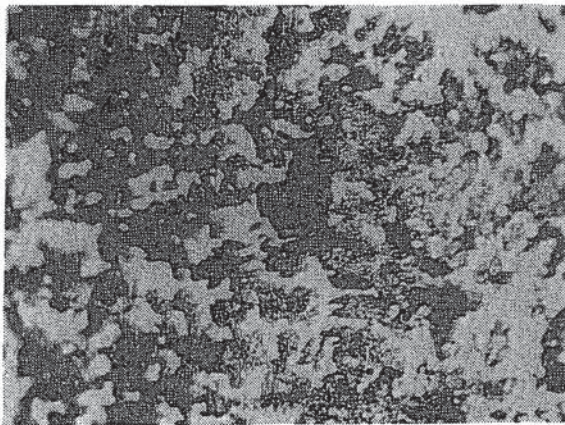


写真8 × 100

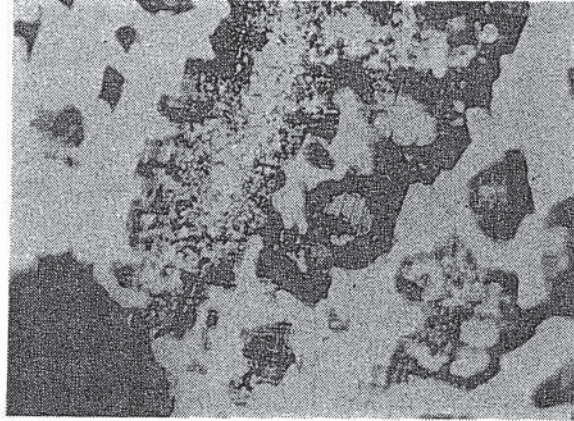


写真9 × 400

以上三鏡について金属顕微鏡による観察を行なったのであるが、夫々に鑄造技術上の差異がみとめられるものの、方格規矩鏡と内行花文鏡の二鏡の差異よりも、これらと鳥獸鏡との差異の方が大きいことが認められた。

何れにしても顕微鏡組織観察からだけでは厳密な成分同定は不可能であり、現状保存のままでは如何ともなし難い。

(熊本大学工学部金属工学教室教授・工学博士)

参 考 文 献

- (1) 石川陸郎、岩内山遺跡、P105、1976
- (2) 雄谷重夫、非鉄合金鑄物、P 12、1967
- (3) 近重真澄、東洋鍊金術、P 87、1929
- (4) 中口 裕、銅の考古学、P260、1972
- (5) 石野 亨、鑄 造、P182、1977

付論 4

向野田古墳出土車輪石・勾玉の石材について

井 上 正 康

車 輪 石

岩石名 碧玉 Jasper

表面を顕微鏡で観察すると、石英質からなるため、少しく光を透す。この点で全く不透明な、珪質粘板岩や輝緑凝灰岩と区別される。そして、塊状緻密質で色は、暗青～青緑色、不透明な点より、Jasper と鑑定する。

勾 玉

緑色を帯び透明な点で、翡翠と鑑定される。

外観よりの観察以外に、試験をすることが出来ないので、硬さ、結晶系、成分等、実測は出来ないが、上記のものに間違いないと思われる。

(熊本大学工学部資源開発工学科教授・工学博士)

付論 5

向野田古墳出土試料の分析

実 政 勲

依頼試料をNo. 1 及びNo. 2 と呼ぶ。両試料の分析を粉末X線^{かいせつ}回析法及び湿式化学分析法で行なった。この結果を以下に記す。

試料No. 1 ①向野田古墳、後円部石室内石棺、石枕上の朱、人骨頭部右側、1969. 9. 16 (昭和44)

試料No. 2 ②向野田古墳、石棺内人骨中央南付近より採集、1969. 9. 19 (昭和44)

粉末X線回析法の結果

試料No. 1 及びNo. 2 の両方に辰砂が含有されている。

No. 1 はほとんど辰砂ばかりであるが、No. 2 は辰砂以外にヘマタイト (赤鉄鉱) の存在が認められる。

湿式化学分析法の結果

試料No. 1 を王水に溶解し、水銀を原子吸光光度法で、また鉄を比色法で定量した結果、No. 1 の試料中には硫化水銀が95%、酸化第二鉄が1.9%含まれていることが判明した。

試料No. 2 を同様の方法で分析したところ、硫化水銀が55%、酸化第二鉄が20%含まれていた。さらにこの試料をアルカリ溶融した結果、その他の成分として酸化アルミニウムが10%含有されていることが判明した。

この結果を要約すると、

試 料	No. 1	No. 2
硫 化 水 銀	95 %	55%
酸 化 第 二 鉄	1.9%	20%
酸 化 アル ミ ニ ウ ム		10%

試料No. 1 は合計で96.9%となり、100%に満たない部分は少量の不純物によると思われる。試料No. 2 では合計で85%となり、100%に満たない部分はほとんどシリカ (約15%) と思われる。

粉末X線回析法及び湿式化学分析法の両結果から以下の様に結論される。

試料No. 1は HgS (硫化水銀) を95%含むかなり純粋な辰砂 (朱) であり、 Fe_2O_3 (酸化第二鉄) はごく微量であり、天然産辰砂に不純物として混入されていたか、あるいは、石棺中で囲りの Fe_2O_3 (酸化第二鉄) に富む試料No. 2の一部が混入されたかのふたつが可能性として考えられる。

試料No. 2は弁柄ではなく、辰砂(朱)を基調とし、これに酸化第二鉄を含むアルミノシリケート (鉄質粘土) を約半々に混合したものである。粘土質と結論したのはX線回析図に現われるピークが弱いからである。

ここでひとつの推論を行なうと、試料No. 2は囲りの壁に塗布する目的で、純粋の朱 (試料No. 1) と鉄質粘土を約半々に混合し、塗りやすく人工的に加工したものではないかと思われる。このとき使用した粘土は朱の赤色を考慮して、その色調を乱さないように鉄質粘土を用いたものと思われる。(ちなみに酸化第二鉄を含む粘土は赤色を呈する。)

要約すると、試料No. 1は疑いもなく辰砂 (朱) そのものであるのに対して、試料No. 2は辰砂と鉄質粘土を約半分半分に混合したものである。

(熊本大学理学部化学教室助手・理学博士)

付論 6

向野田古墳から出土した刀剣 付着の鉄銹状材の樹種

嶋 倉 巳 三 郎

熊本県宇土市向野田古墳から出土した多数の刀・剣・刀子等には、柄の部分などに木質の一部が鉄銹化して残存している。これら鉄製品を元興寺文化財研究所で保存処理するに際し、急遽樹種をしらべることになったがその結果をここに報告する。

試料はこれら鉄製品の表面にうすく付着した数mmから1cm内外の大きさの酸化鉄および水酸化鉄で、自然に剥脱したもの以外はそのまま表面をしらべた。垂直落射照明によって木材組織を顕微鏡観察したが、適当な破面が得られなかったり、細胞壁の風化変質が著しかったりして、十分識別上の特徴を見出すことができず、同定も不確実を免れなかった。

調査の結果は次の通りである。

試料	樹種	註記	写真	図番号	出土地番号
刀 1	サクラ様散孔材?		1~4	19-刀1	刀1
刀 2	〃 〃		5~9	19-刀2	刀2
刀 3	—	木質錆なし		19-刀3	刀3
刀 A	ヤマモモ様散孔材	刀片A-グループ	10~12		
刀 B	〃	〃 B-グループ	13~18		
剣 1	サクラ様散孔材?		19、20	19-剣1	剣1
剣 2	シイノキ		21~23	19-剣2	剣2
剣 3	〃		24、25	19-剣3	剣3
剣 4	シイノキ?	カシの疑いもある	26~28	19-剣4	剣4
刀子 1	サクラ様散孔材A			21-40	W-3
刀子 2	サクラ様散孔材B			21-39	W-2
刀子 3	サクラ様散孔材?		29	21-44	W-7
刀子 4	(散孔材)	保存不良		22-49	E-2
刀子 5	サクラ様散孔材A		30、31	22-48	E-1
刀子 6	〃 〃			22-59	E-13
刀子 7	〃 〃		32~34	22-50	E-3
刀子 8	〃 〃		35~37	22-67	S-8
刀子 9	サクラ様散孔材A		38、39	21-37	N-40
刀子 10	(散孔材)			21-45	W-8
刀子 11	サクラ様散孔材A		40、41	21-47	W-10
刀子 12	(散孔材)			22-60	E-14
刀子 13	サクラ様散孔材A		46	21-43	W-6
刀子 14	(不詳)			21-42	W-5
刀子 15	(〃)			22-56	E-10
刀子 16	サクラ様散孔材A		42、43	22-57	E-11
刀子 17	〃 〃		44	22-58	E-12
刀子 18	サクラ様散孔材B		45、72	21-38	W-1
刀子 19	—	木質錆なし		22-52	E-5
刀子 20	(不詳)			22-51	E-4
刀子 21	サクラ様散孔材A			22-53	E-6
刀子 22	(不詳)			22-54	E-7
刀子 23	サクラ様散孔材?			21-46	W-9

試料	樹種	註記	写真	図番号	出土地号
刀子 24	サクラ様散孔材B		71, 73	21-41	W-4
" 25	サクラ様散孔材?			22-61	E-15
" 26	サクラ様散孔材A			20-23	N-26
" 27	" "		48	20-13	N-15
" 28	マユミ様散孔材		83	20-14	N-16
" 29	サクラ様散孔材A		47, 49	21-31	N-34
" 30	—	木質錆なし		20-16	N-19
" 31	サクラ様散孔材A			21-28	N-31
" 32	" "			20-18	N-21
" 33	" "		50, 51	21-27	N-30
" 34	サクラ様散孔材B			20-17	N-20
" 35	" A		74	22-68	出土地不明
" 36	" B			20-21	N-24
" 37	—	木質錆なし		23-75	出土地不明
" 38	—	"		20-19	N-22
" 39	マユミ様散孔材		84, 85	21-26	N-29
" 40	"		86, 87	20-22	N-25
" 41	サクラ様散孔材?			20-11	N-13
" 42	サクラ様散孔材A			21-24	N-27
" 43	" "		52	21-25	N-28
" 44	" "		53	21-29 21-30	N-32 N-33
" 45	マユミ様散孔材		88	19-12	N-14
" 46	(散孔材)			22-69	出土地不明
" 47	(")			22-63	S-2
" 48	サクラ様散孔材A			21-32	N-35
" 49	" "			22-71	出土地下明
" 50	" "		54, 55	20-15	N-17
" 51	—	木質錆なし		21-35	N-38
" 52	サクラ様散孔材B		75, 76	21-36	N-39
" 53	サクラ様散孔材A			20-9	N-11
" 54	" "			21-33	N-36
" 55	" "		56	20-8	N-10
" 56	" "			20-4	N-6

試料	樹種	註記	写真	図番号	出土地号	
刀子 57	サクラ様散孔材A	木質錆なし	57	21-34	N-37	
〃 58	〃 〃		58	20-3	N-5	
〃 59	—			20-2	N-4	
〃 60	サクラ様散孔材B		77~79	22-55	E-9	
〃 61	サクラ様散孔材A		59, 60	22-62	S-1	
〃 62	〃 〃		61	20-1	N-2	
〃 63	(不詳)			22-66	S-7	
〃 64	—		木質錆なし			
〃 65	サクラ様散孔材A		69	20-10	N-12	
〃 66	サクラ様散孔材?		80~82	22-65	S-4	
〃 67	サクラ様散孔材B		62, 63	22-64	S-3	
〃 68	—		木質錆なし		23-76 23-77 23-78	出土地不明
〃 69	サクラ様散孔材A		70	20-20	N-23	
〃 70	〃 〃		64	22-70	出土地不明	
〃 71	〃 〃	65~68	20-5 20-6 20-7	N-7 N-8 N-9		

以上をまとめると次のようになる。

樹種	例数	試料
ヤマモモ様材	2	刀子
シイノキ様材	3	剣
サクラ様材A	32	刀子
〃 B	9	刀子
サクラ属材?	3	刀子
サクラ様材?	3	刀子
マユミ様材	4	刀子
不詳散孔材	8	刀子

材の構造説明

ヤマモモ様材

道管は単独または数個接続して平等に分布し、穿孔は階段状で著しい。放射組織は異性で、Ⅱ型のものが多く、幅は1—3細胞別。柔細胞は保存の関係か不鮮明。

穿孔の階段数が少ない点でヤマモモ *myrica rubra* の材に似るも、道管の配列では完全に一致しない。

シイノキ様材

小道管が疎に集まって放射方向に配列し、早材部の大道管も放射方向に並ぶように見えるが、二次的にできたと思われるものがあって紛らわしい。放射組織は単列、同性で、広放射組織は見出せなかった。これらの特徴からシイノキ *Castanopsis cuspidata* var *sieboldii* のように思われる。一例は晩材部の小道管が未確認で、カシの疑いもある。

サクラ様材

道管は中くらいの大きさで斜方向や放射方向に数個接続して分布することもある。単穿孔で、一般に側壁にラセン肥厚が認められるが、保存状況によって、はっきりしないものもある（?印の一部）。放射組織は異性で、幅が4—5細胞列時として6細胞列に達するものを“A”とし、1—3細胞列のものを“B”としたが、多数の試料でしらべたならば同種のものかも知れない。

道管がやや年輪状に配列するものや、放射組織の中広いもの、異性よりも同性に近いようなものもあり、詳細な検討が必要であるが、一応サクラ属 *Prunus* の材とした。この中にもヤマザクラ *Prunus sargentii* subsp. *Jamazakura*、ウワミズザクラ *P. grayana*、バクチノキ *P. Zippeliana* その他が九州にも分布する。

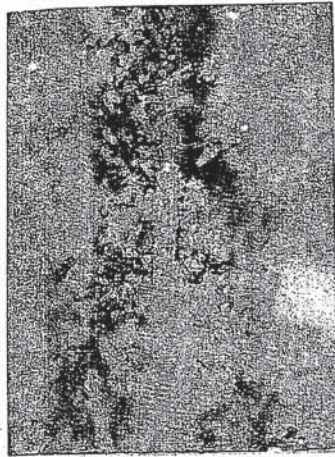
マユミ様材

道管は比較的小さく、多くは単独に平等に分布する。単穿孔で側壁に著しいラセン肥厚がある。放射組織は異性で1—2細胞列である。柔細胞は保存の関係が不明。

これらの性質はマユミ属に一致し、中でもマユミ *Euonymus sieboldiana* の材に似る。貴島恒夫氏によるとマユミの材は彫刻やいろいろの細工物のほか、柄や刀の鞘にも用いられるという（保育社版原色大図鑑、92頁）から興味ある例となる。

（関西外国語大学教授・理学博士）

Pl. 1



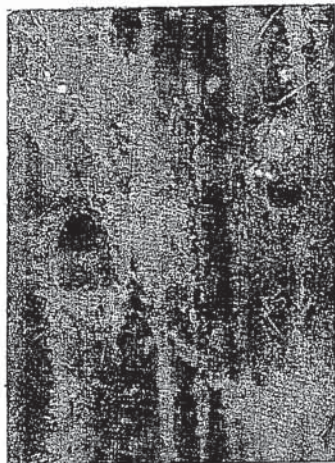
1. C, X30



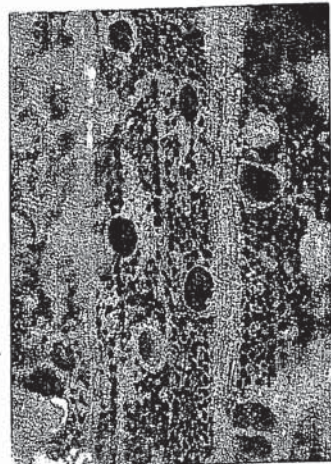
2. R, X55



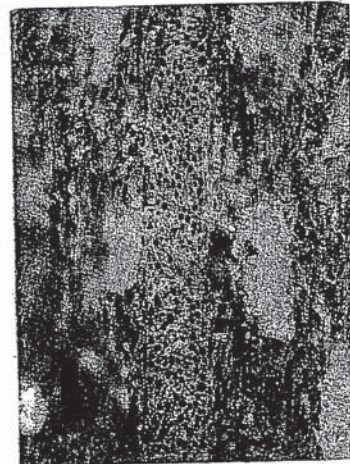
3. T, X60



4. C, X60



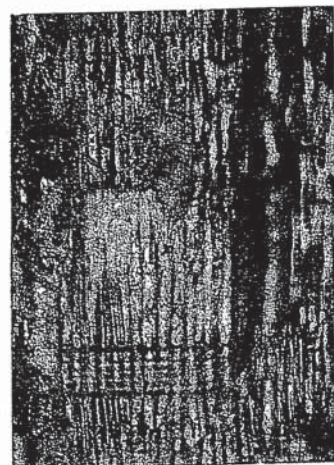
5. C, X60



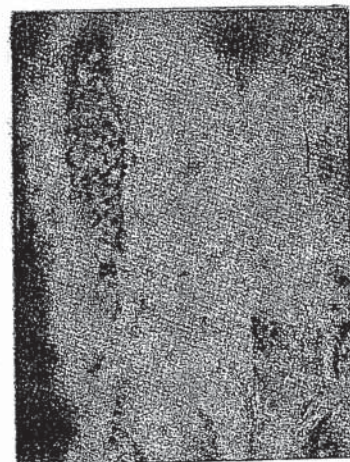
6. T, X60



7. T, X60



8. R, X55



9. T, X60

サクラ様散孔材 (1-4、刀-1; 5-9、刀-2)

Pl. 2



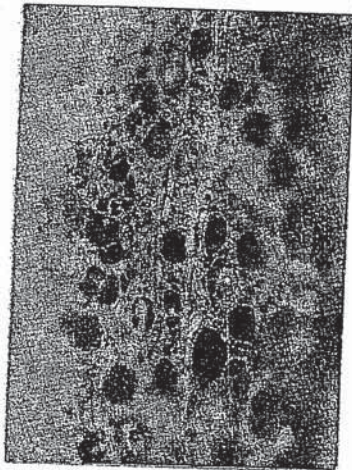
10. C, X30



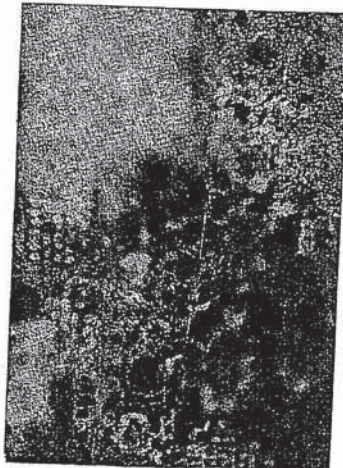
11. C, X55



12. T, X100



13. C, X



14. C, X



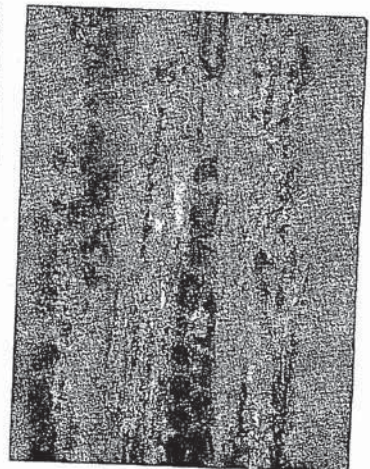
15. TX



16. R



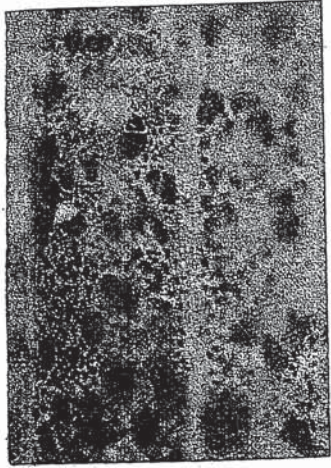
17. T, X60



18. T, X100

ヤマモモ様散孔材 (10-12、刀-A; 13-18、刀-B)

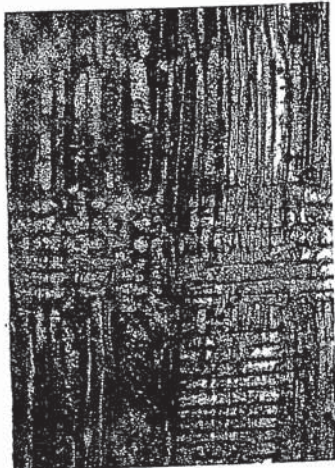
Pl. 3



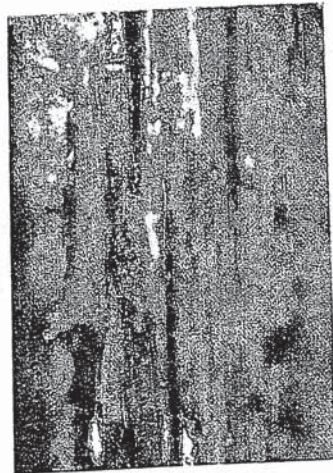
19.



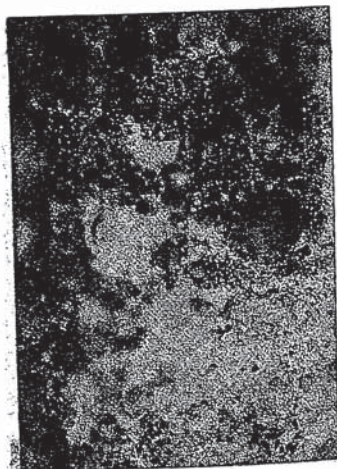
20.



22.



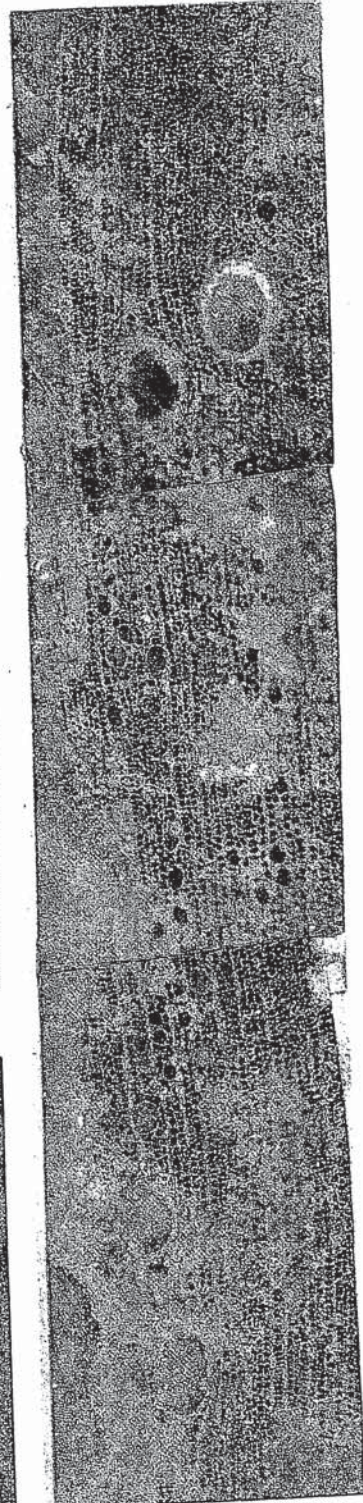
23.



24.



25.



21.

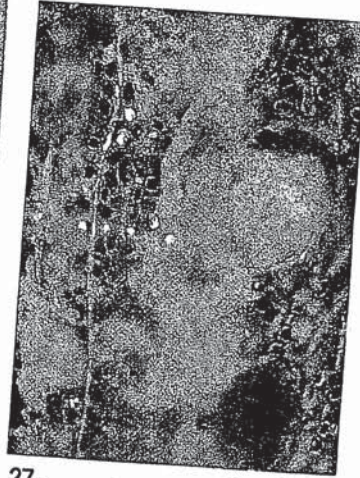
サクラ様散孔材? (19・20、剣-1)
シノキ様材 (21-23、剣-2; 24-25、剣-3)

Pl. 4



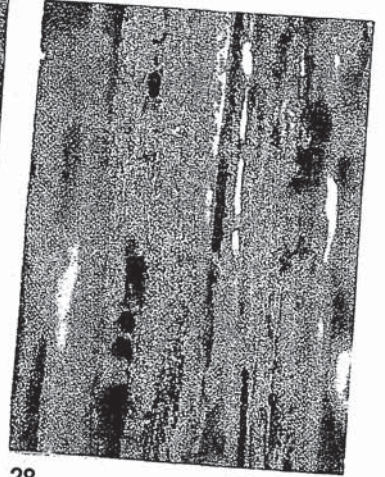
26.

C, X30



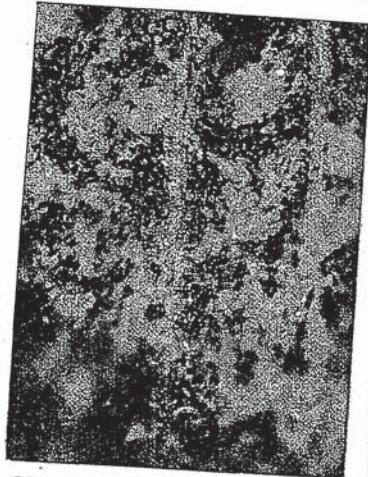
27.

C, X60



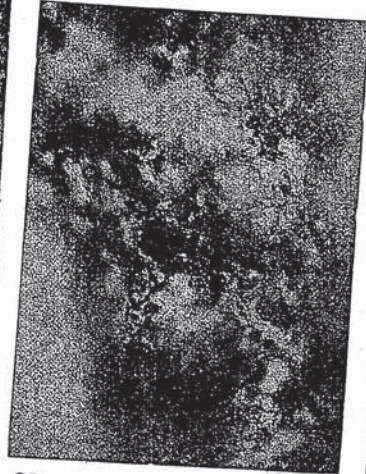
28.

T, X100



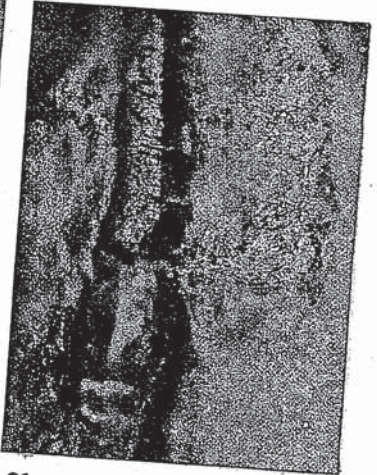
29.

C, X30

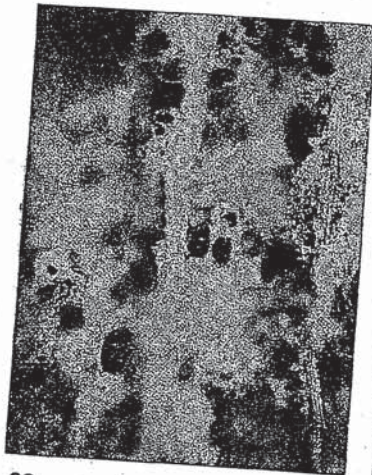


30.

C, X55



31.



32.



33.

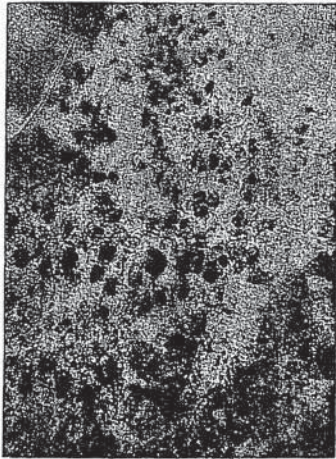


34.

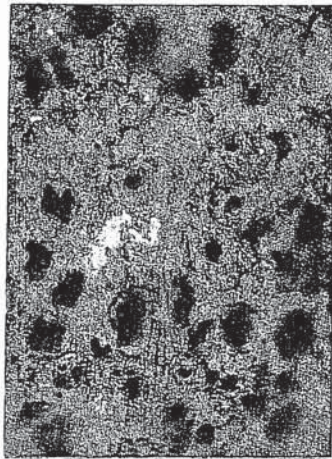
シノキ様材? (26-28、剣-4)

サクラ様散孔材 (29、刀子-3; 30・31、刀子-5; 32-34、刀子-7)

Pl. 5

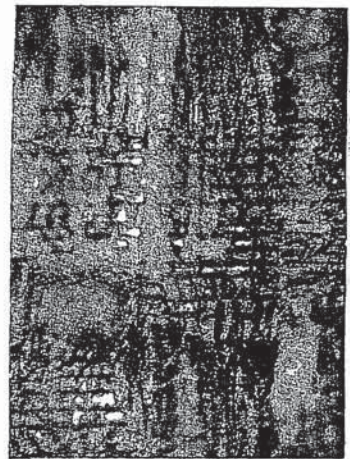


35.



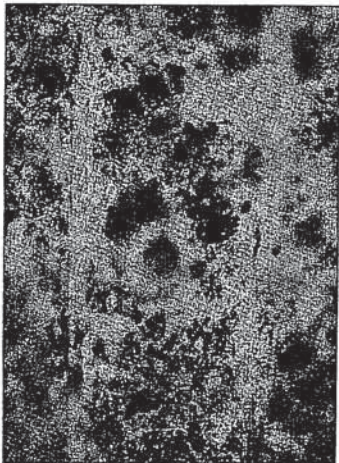
36.

×55

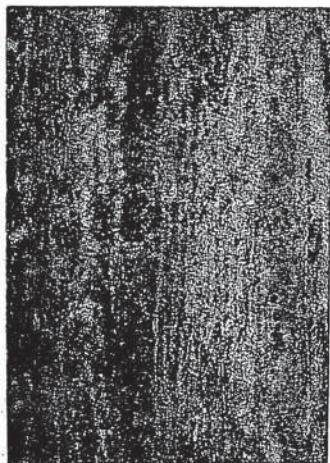


37.

×55

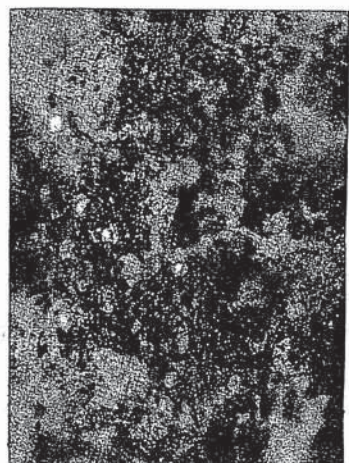


38.



39.

×55



40.

×55



41.

×55



42.

×50



43.

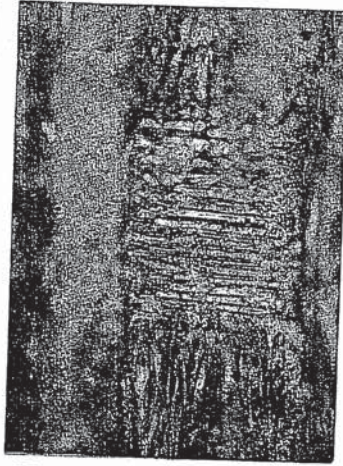
×55

サクラ様散孔材 (35-38、刀子-8; 38・39、刀子-9; 40・41
刀子-11; 42・43、刀子-16)

Pl. 6



44.



45.



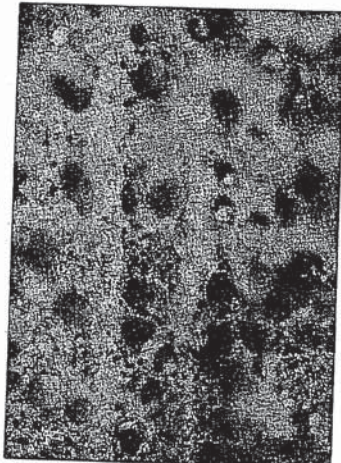
46.

×55



47.

C, ×25



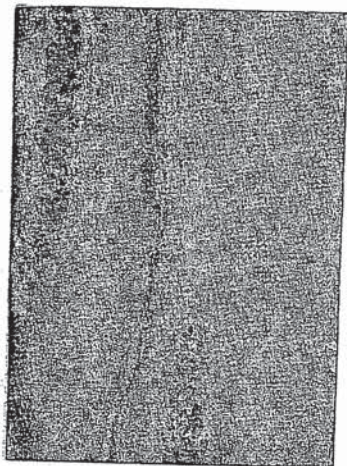
48.

C, ×55



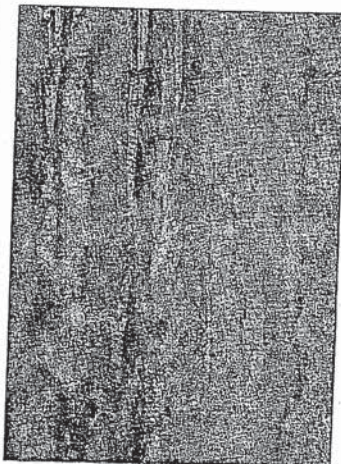
49.

C, ×60



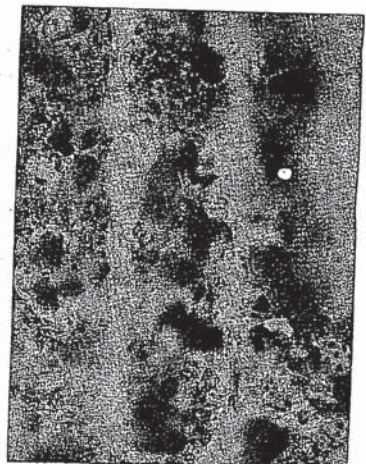
50.

T, ×60



51.

T, ×100

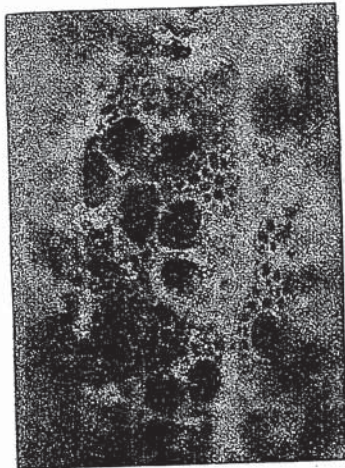


52.

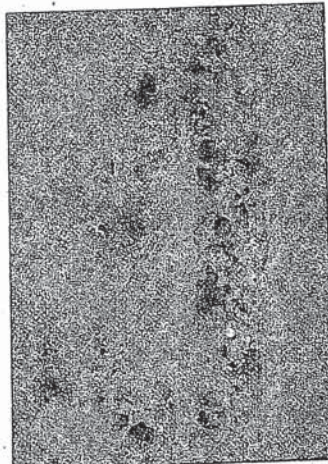
C, ×55

サクラ様散孔材 (44、刀子-17; 45、刀子-18; 46、刀子-13; 47・49、刀子-29;
48、刀子-27; 50・51、刀子-33; 53、刀子-43)

Pl. 7



53.



54.



55.



56.

×55



57.



58.

×55



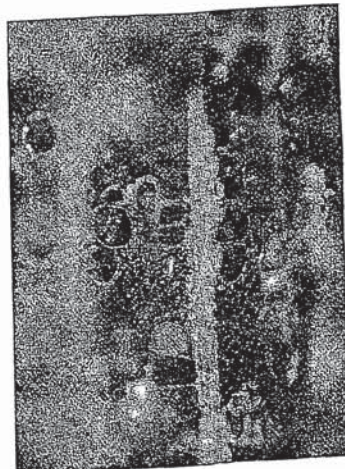
59.

C, ×55



60.

T, ×55

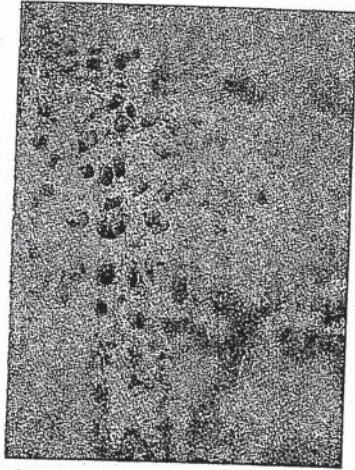


61.

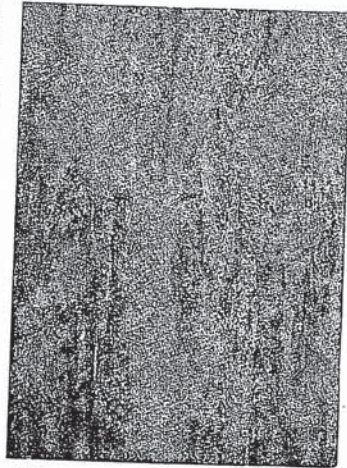
C, ×55

サクラ様散孔材 (53-55、刀子-44; 56、刀子-55; 57、刀子-57; 58、刀子-58;
59-60、刀子-61; 61、刀子-62)

Pl. 8



62.



63.



64.

×55



65.

×30



66.



67.

×60



68.

×50



69.



70.

サクラ様散孔材 (62・63、刀子-67; 64、刀子-70; 65-68、刀子-71;
69、刀子-65; 70、刀子-69)

PI. 9



71.

C, X55



72.

T, X55



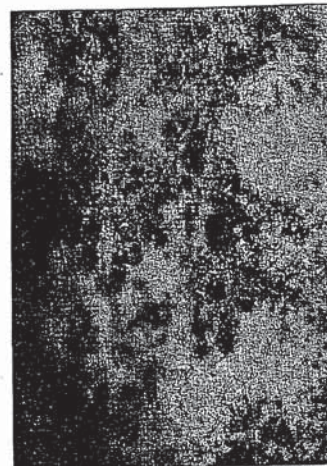
73.

C, X30



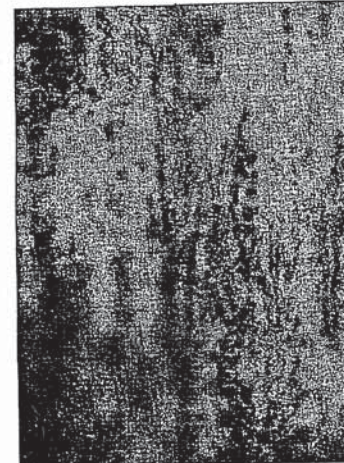
74.

T, X55



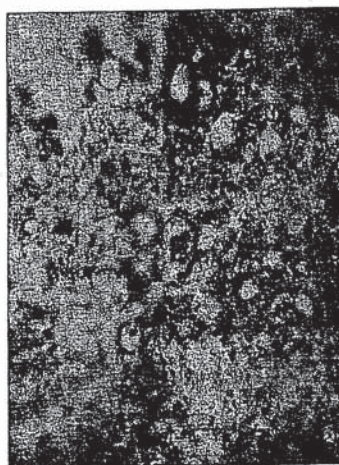
75.

C, X30



76.

T, X55



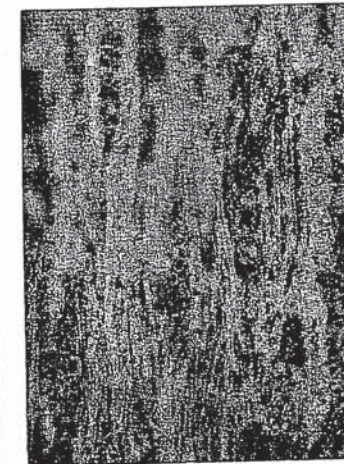
77.

C, X55



78.

R, X55

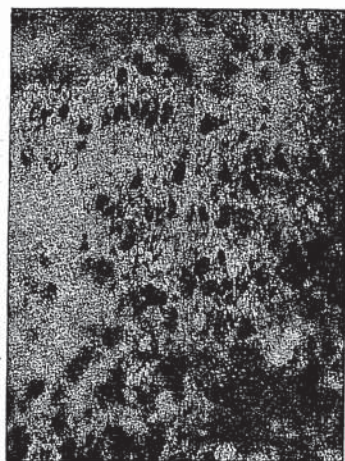


79.

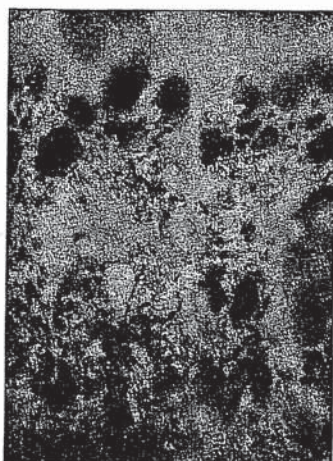
T, X55

サクラ様散孔材 (71-73、刀子-24; 72、刀子-18; 74、刀子-35;
75・76、刀子-52; 77-79、刀子-60)

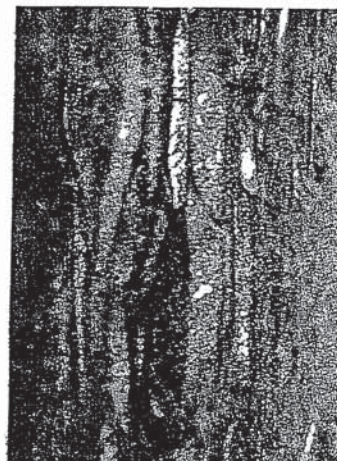
Pl. 10



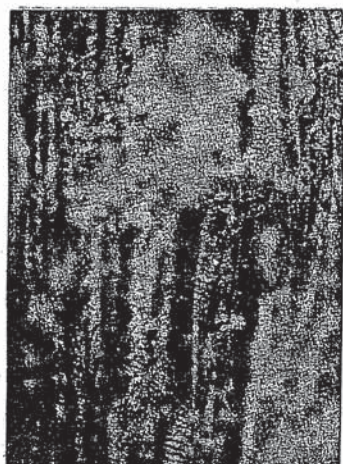
80. C, X25



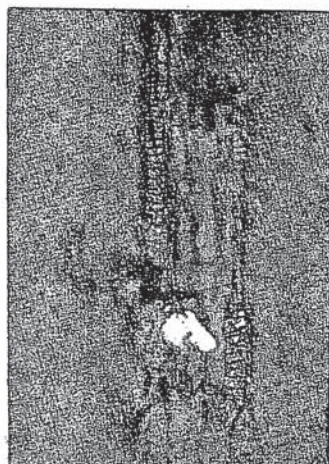
81. C, X55



82. T, X55



83. T, X55



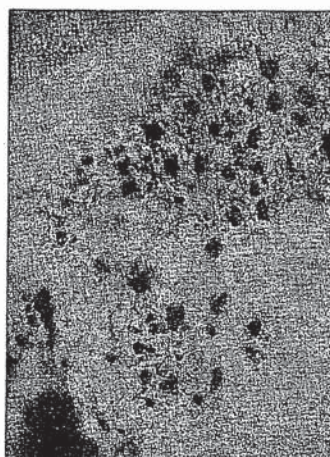
84.



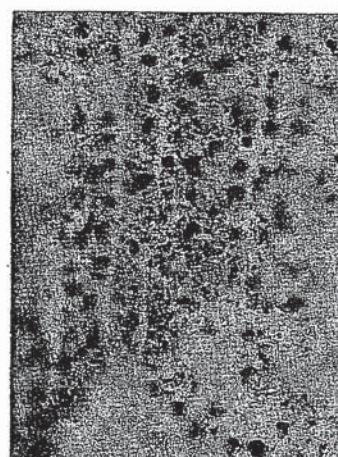
85.



86. C, X30



87. C, X55



88. C, X55

サクラ様材 (80-82、刀子-26)

マユミ様材 (83、刀子-28; 84-86、刀子-39; 86・87、刀子-40; 88、刀子-45)

付論 7

向野田古墳出土の薄片状物について

嶋 倉 巳 三 郎

試料は宇土市向野田古墳の石棺外東南隅で棺台の上から出土した。器物表層から剥脱したと思われる薄片状物3個である。これを反射顕微鏡で調査した結果をここに報告する。

試料1 (V形薄板)

表は塗料らしい半透明物質でおおわれ、裏は鉄錆状物質の部分(図4)と繊維質のものが、やや一定の方向に並んでいる部分(図2-3)とがあり、所々に太い^{すじ}條状の隆起部が長くのびている(図5)。これは所々に^{かくへき}隔壁状のものが見られ、広葉樹材の大きな単穿孔道管のレプリカのような形である。それで断面を見ると、2または3枚重ねになっている(図1)。

試料2 (曲尺状薄板)

前者と殆ど同じ構造で、裏は鉄錆状物質があり(図6)、表面に塗料?、中に繊維質のものがある(図7-8)。

試料3 (板状の薄片)

表にうるし様黒色物質が塗られているが、風化?により細く縦割れしており(図11)、その割れ目に下部層が見える(図11)。これは繊維質のものを^{よじ}振って並べたものようである(図12)。裏面は鉄錆もあるが、繊維状物が一面に貼られ、所々に太い^{すじ}條状の隆起部がのびている(図10)。隔壁状の痕もあり、稀に広葉樹材の放射組織の跡らしいものも残っている(図14、但しこれは破片)。

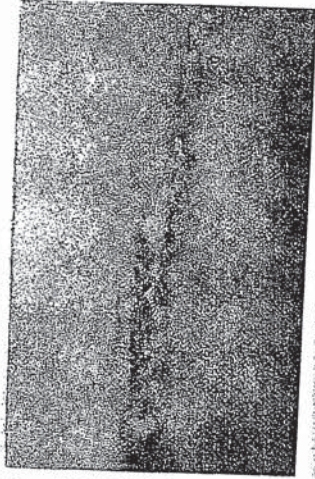
付、微小破片

以上のほか、1-2ミリの破片が数個あり、鉄錆粒のほか、材組織のうち、大きな単穿孔道管のレプリカ状のもの(図13)、放射組織らしいものが認められるもの(図14)、繊維状の紐が交叉して、織物片と思われるものなどがある。

以上から推定すると、広葉樹材の木製品に何か下地を塗り、繊維質のもの(布?)を貼り、その上にうるし、或は樹脂様塗料を塗ったものの様に思われる。材は全部消失し、その組織の痕が残っているらしいが、樹種は不明。しかし、コウヤマキ、ヒノキ、スギのような針葉樹材ではない。

付記：構造上、夾紵棺に似ているが、夾紵棺を調べる機会がなく、科学的比較ができない。
繊維状物であれば、糸の材料も明らかにする必要がある。

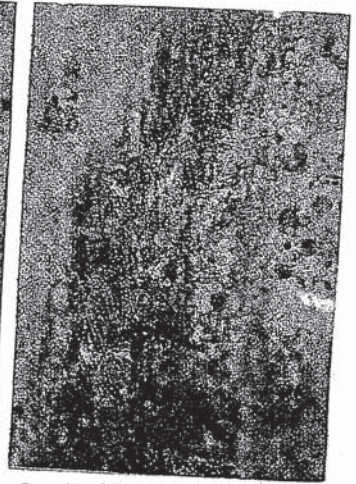
Pl. 1



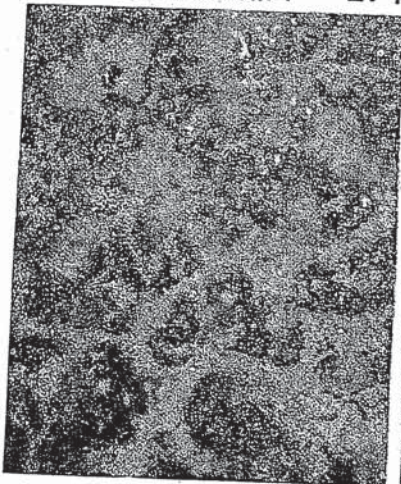
1. V字形薄板、断面



2. 同左、裏



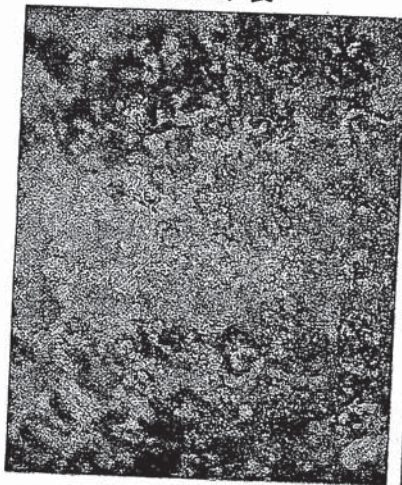
3. 同左



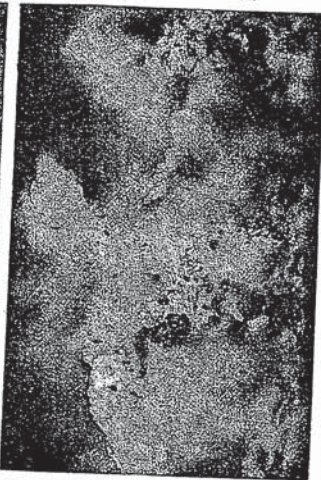
4. V字形薄板、裏



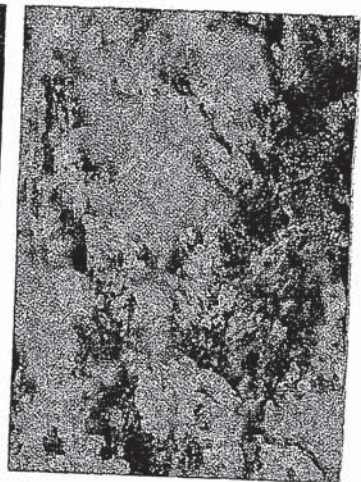
5. 同左、縦隆起部



6. 曲尺状薄板、裏

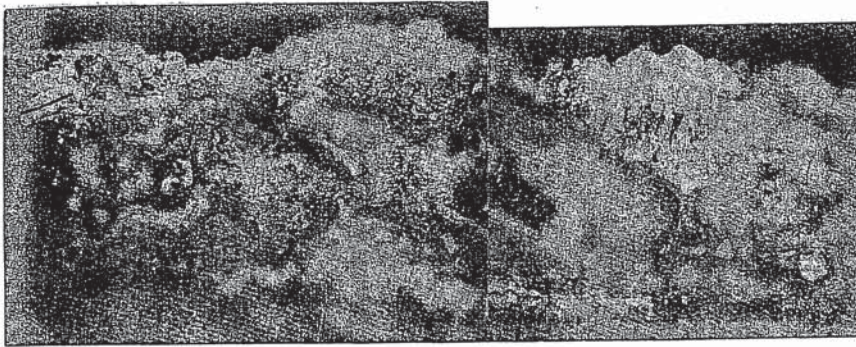


7. 同左、断面



8. 同左

Pl. 2



9. 板状薄片、断面



10. 板状薄片、裏



11. 同左、表



12. 同左



13. 破片



14. 破片

圖 版

図版 1



(1) 古墳遠望 (西側より)

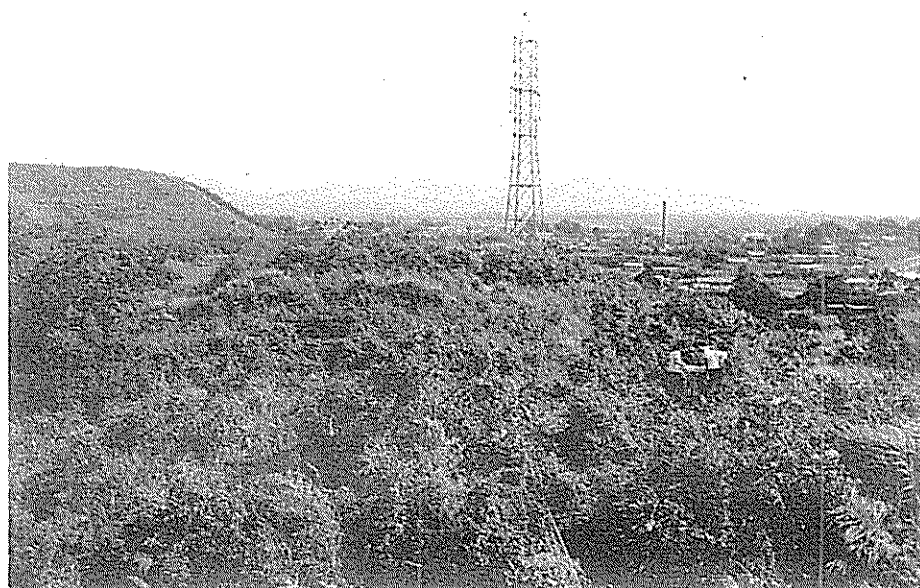


(2) 同上 (前方部は消滅)

図版 2



(1) 古墳近影 (西北側より)



(2) 同上 (北側より)

図版 3

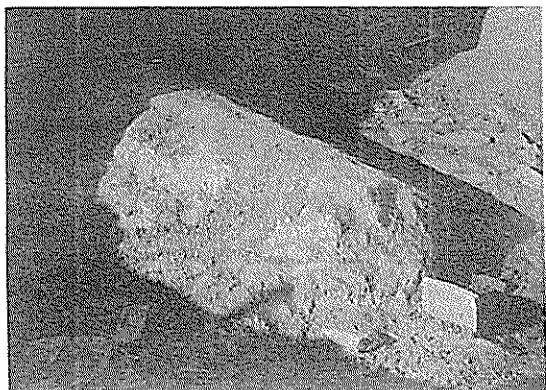


(1) 竖穴式石室 (墓壙と粘土被覆)

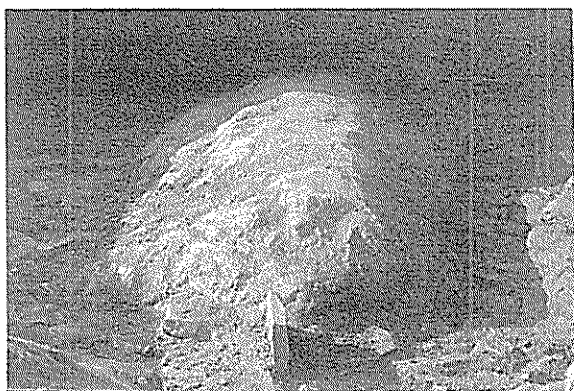


(2) 同上 (石室蓋石)

図版 4



(1) 粘土被覆南端の立石 (南西側より)



(2) 同上 (南側より)



(3) 墓壙北東隅の階段状遺構



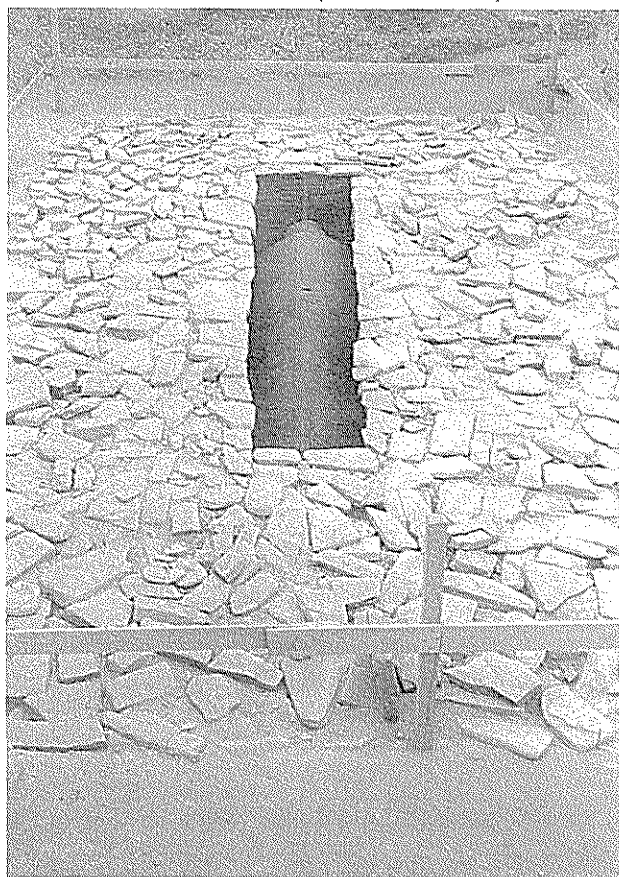
(1) 階段状遺構 (南側より)



(2) 同上 (西側より)

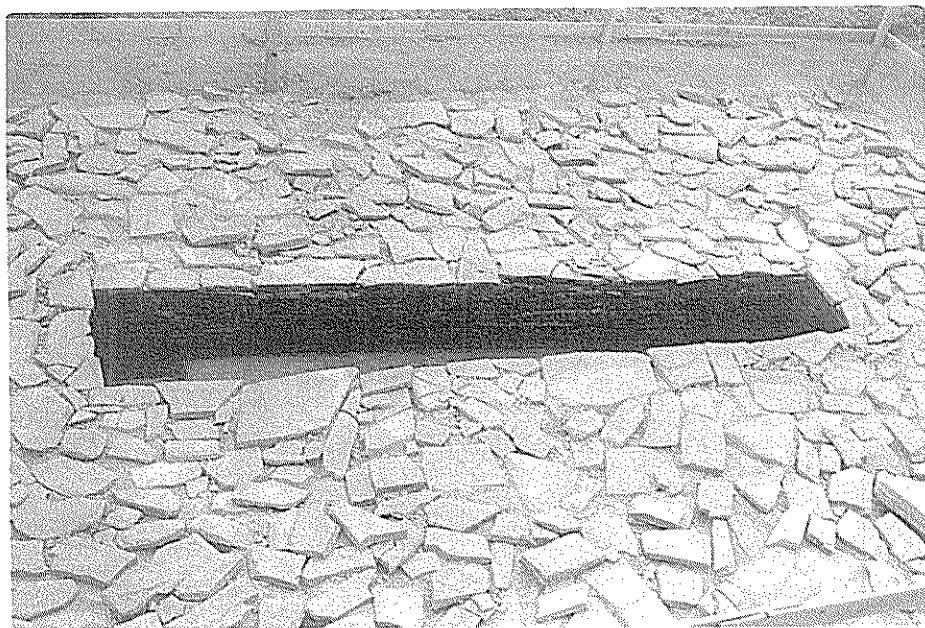


(1) 豎穴式石室 (石室蓋石除去)



(2) 同上

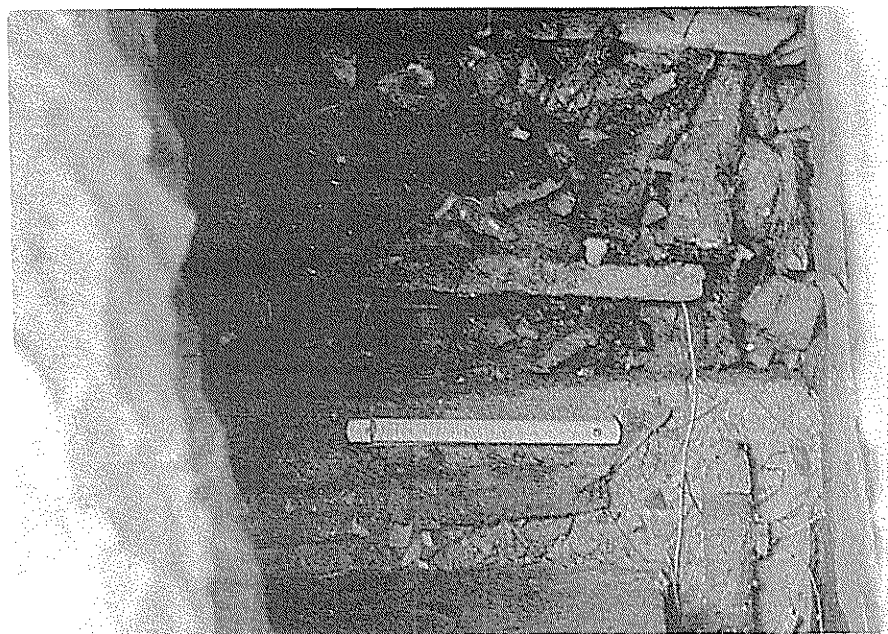
図版 7



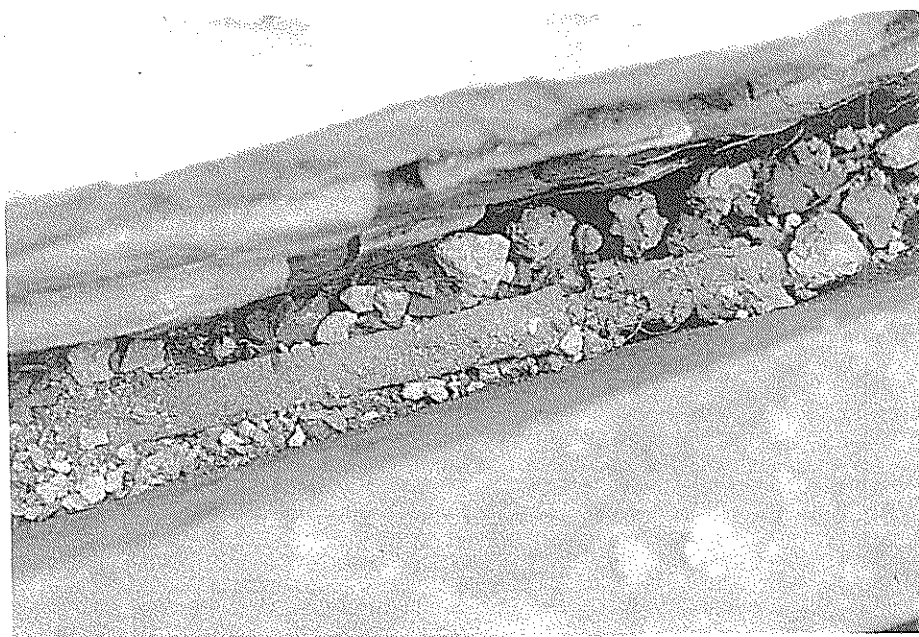
(1) 竪穴式石室（西側より）



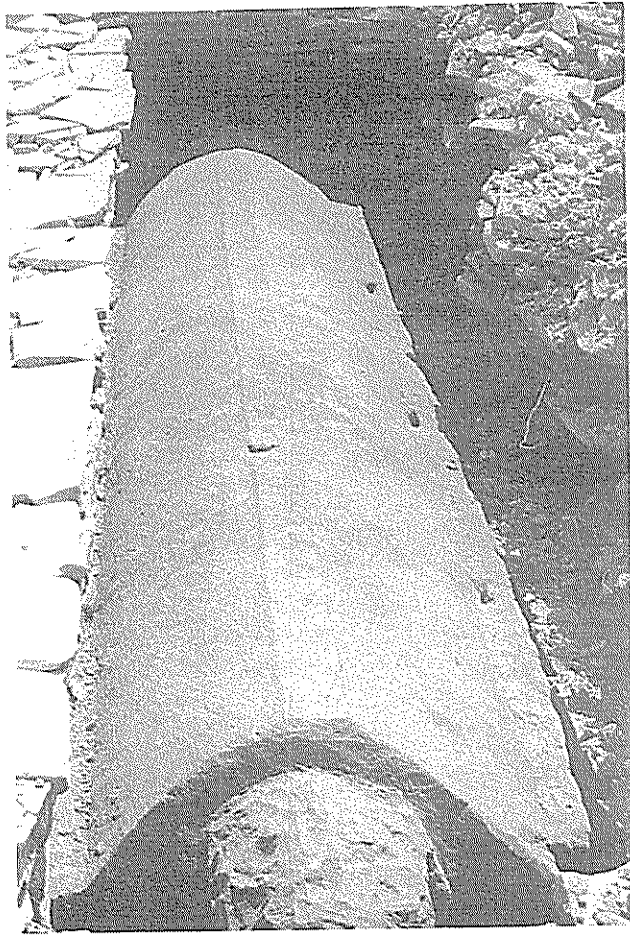
(2) 棺外遺物出土状態（北側）



(1) 棺外遺物出土状態 (北東側)



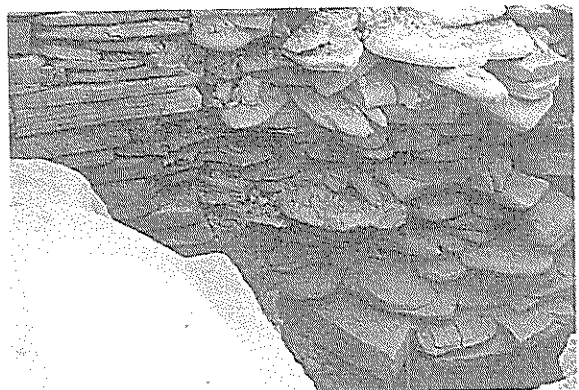
(2) 同上 (西側、刀4)



(1) 石棺蓋石出土状態



(2) 石棺蓋石の矩形小孔



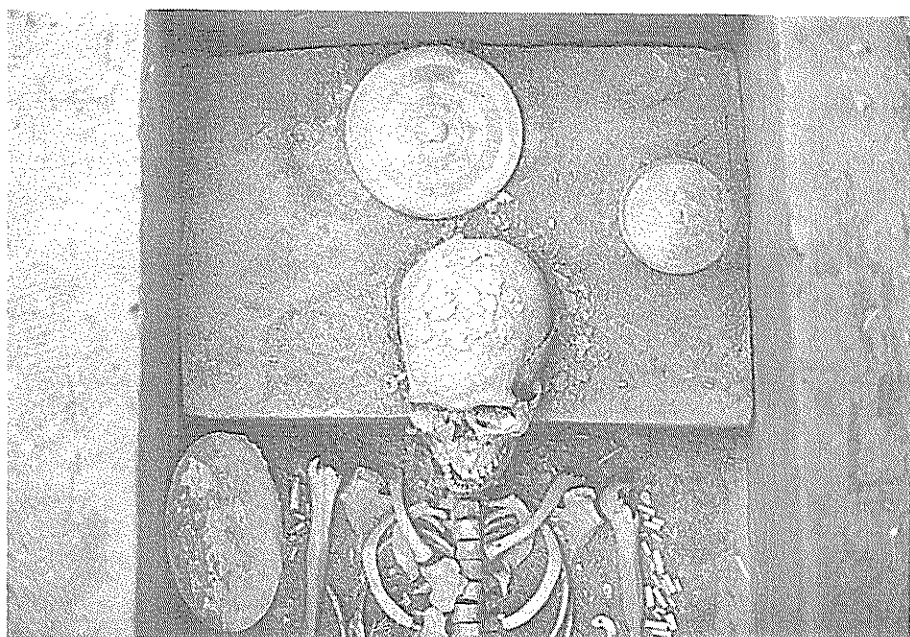
(3) 石室控積状態 (南西隅)



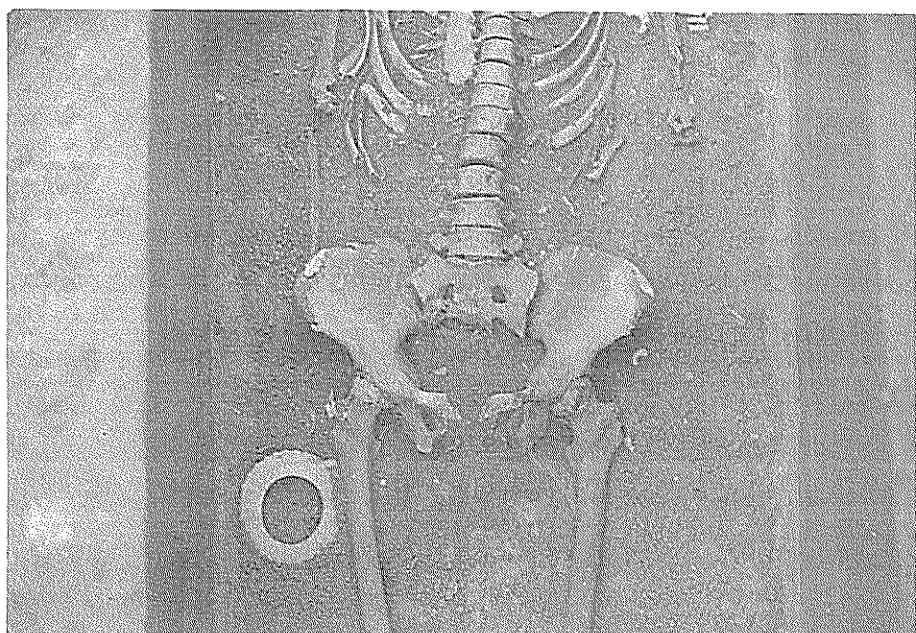
(1) 棺内遺物出土状態 (南側より)



(2) 同上 (北側より)



(1) 棺内 遺物出土状態 (頭部付近)



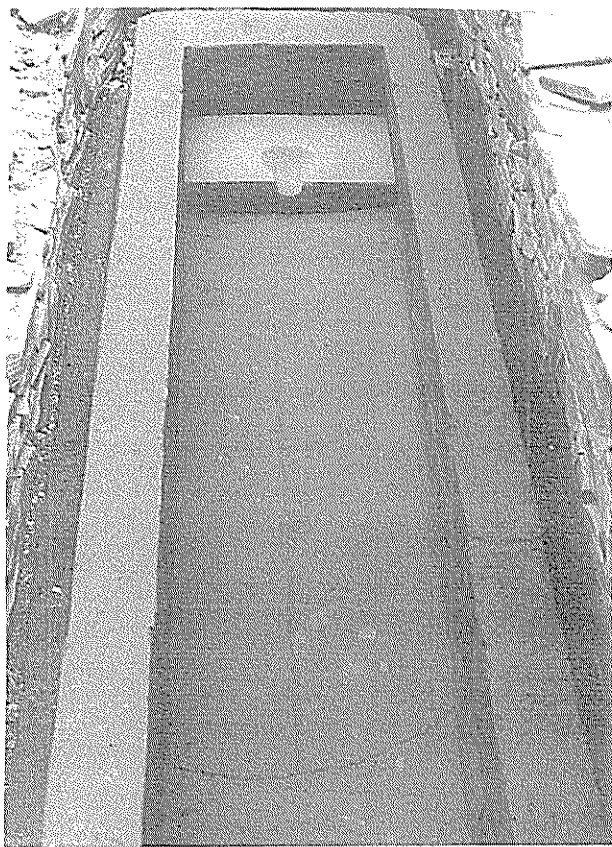
(2) 同上 (腰部付近)

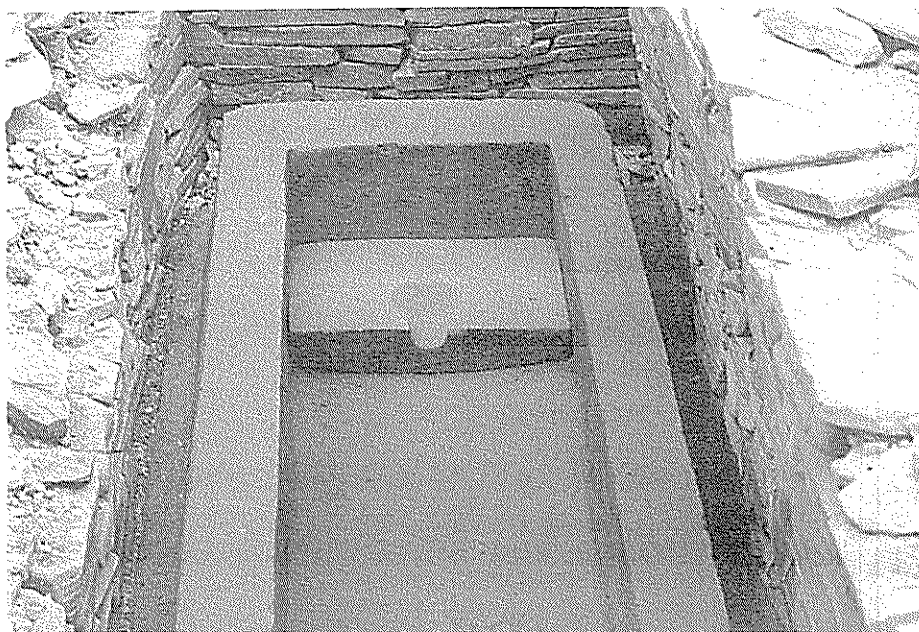
図版 12

(1) 棺内遺物出土状態 (南端)

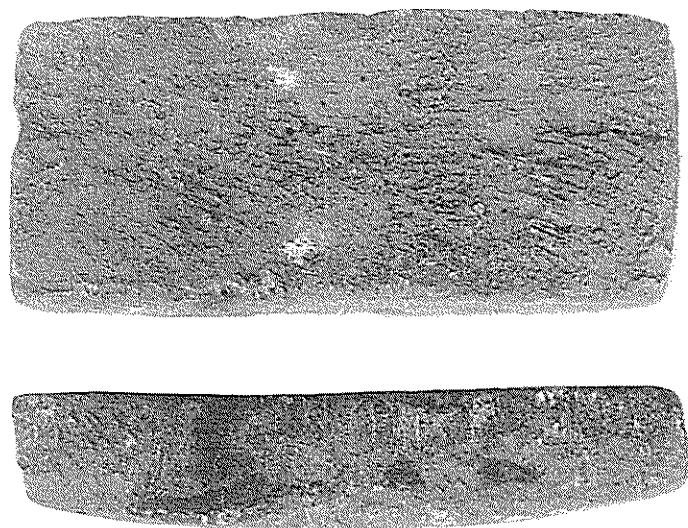


(2) 棺内遺物除去後

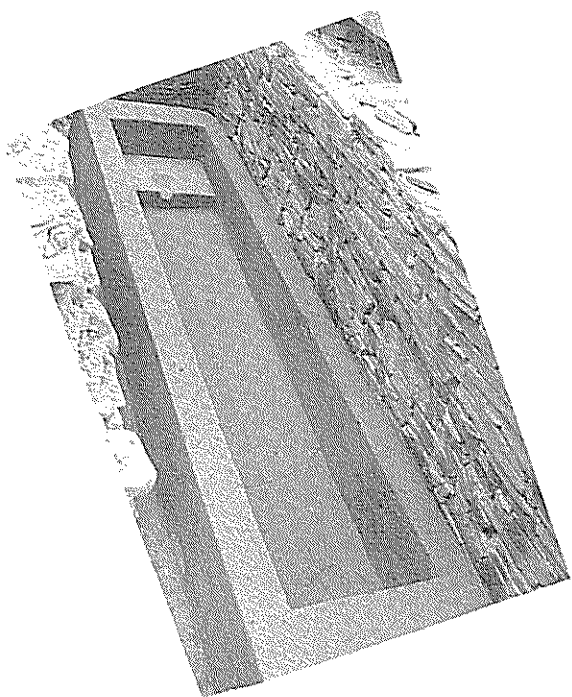




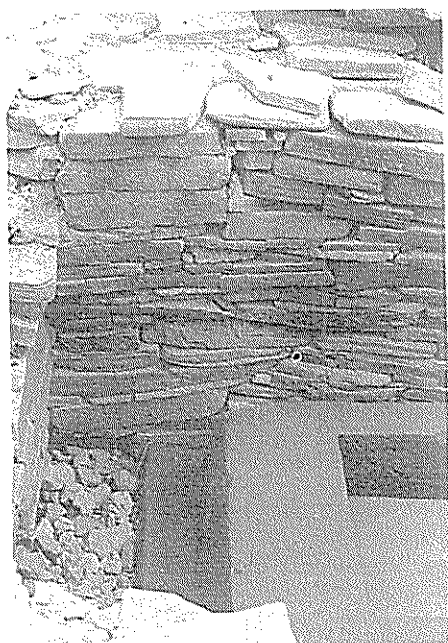
(1) 石棺内の枕石



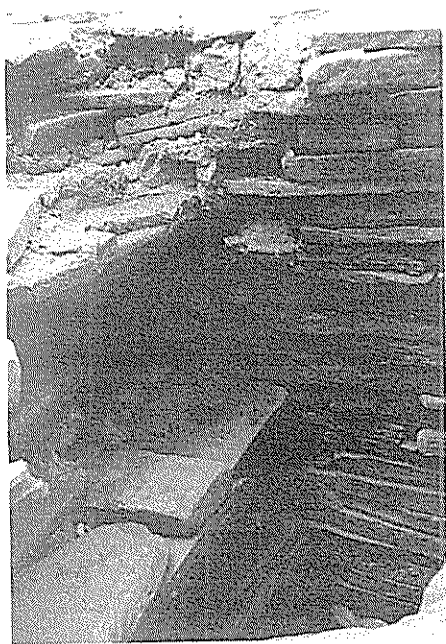
(2) 石室控積検出の枕石未製品



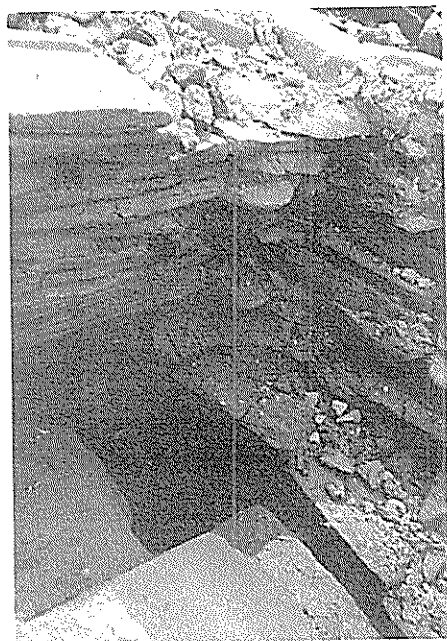
(1) 石室東側壁



(2) 石室北東隅側壁



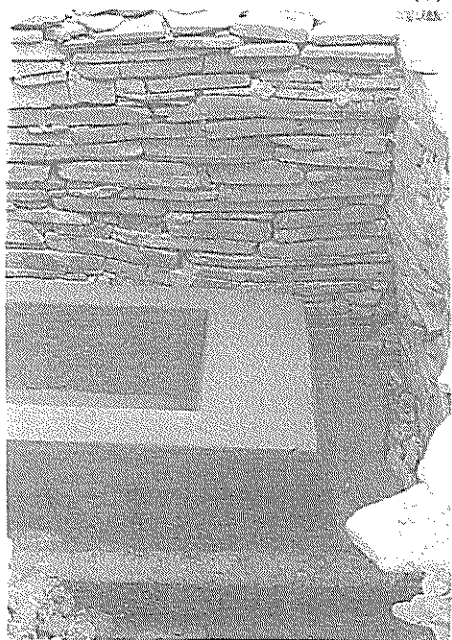
(3) 石室北西隅石積狀態



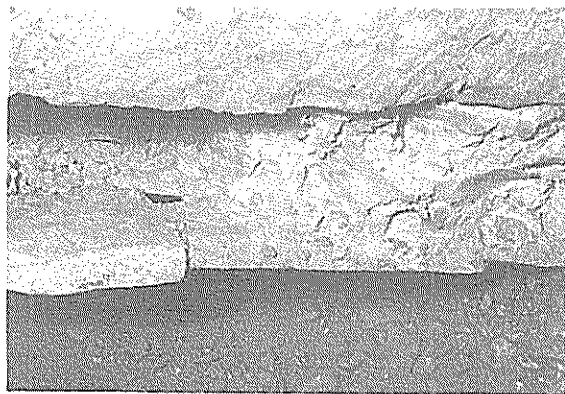
(4) 石室南西隅石積狀態



(1) 石棺南端部近影



(2) 棺身と石室側壁



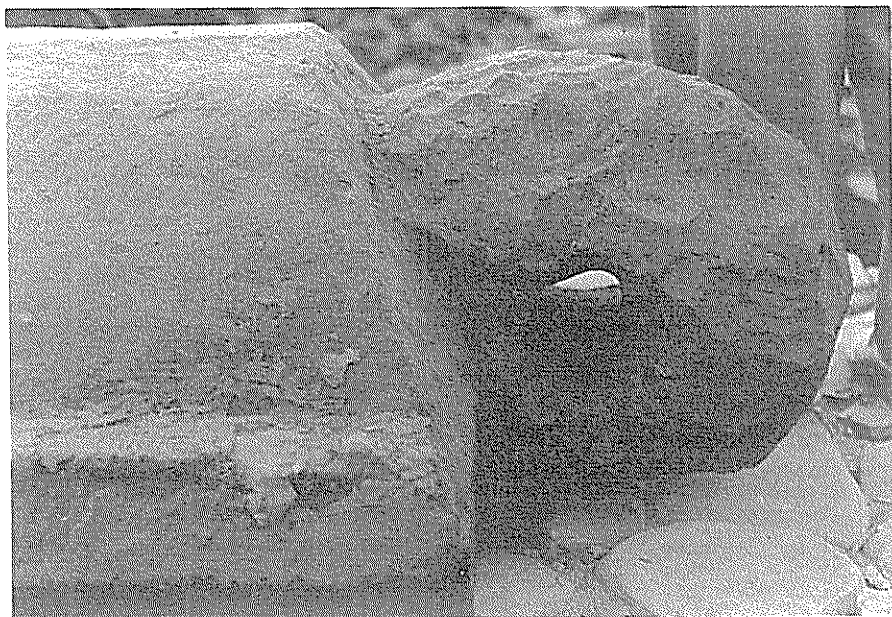
(3) 石棺基底部と板石敷



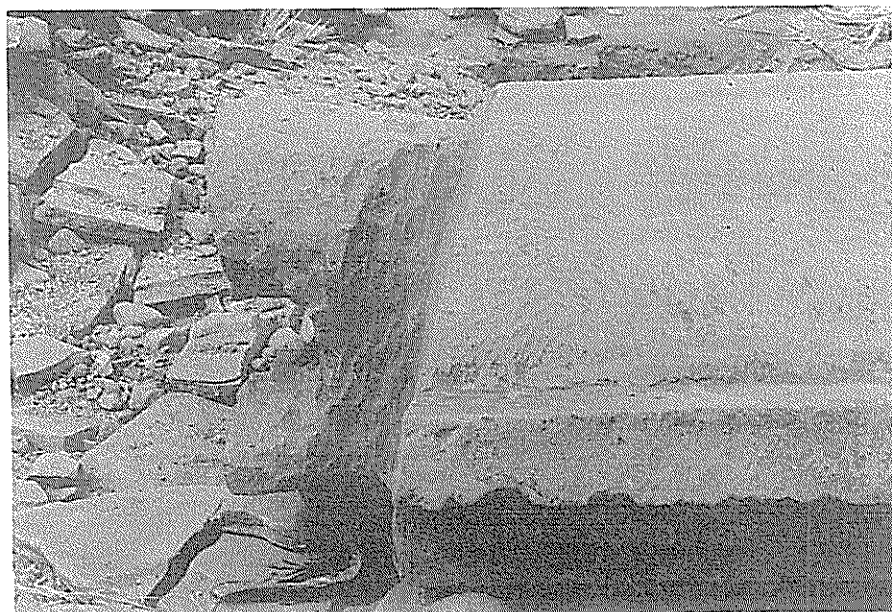
(1) 石棺盖石正面（北侧）



(2) 同上（南侧）



(1) 石棺蓋石側面 (北側)



(2) 同上 (南側)



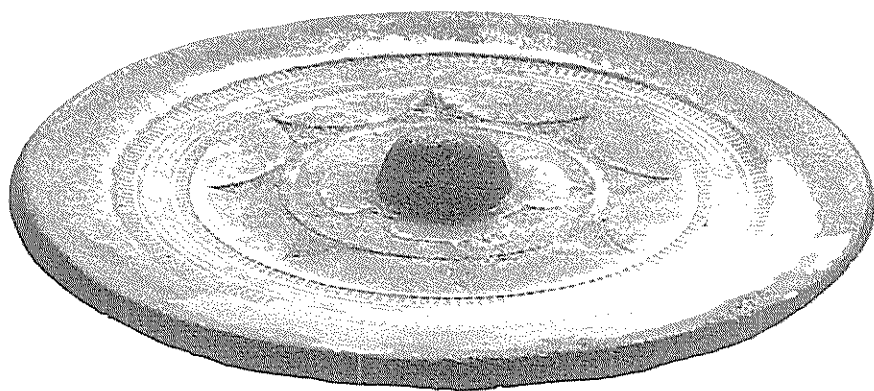
(1) 葺石・埴輪出土状態 (後円部東側)



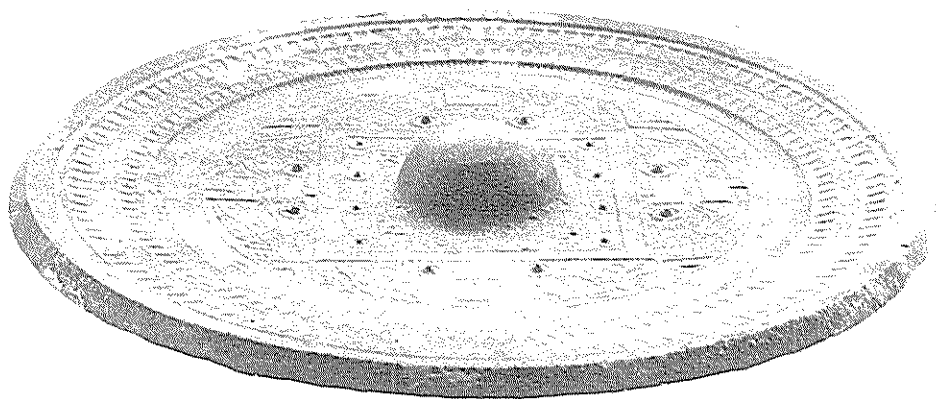
(2) 葺石・埴輪出土状態 (後円部墳頂)



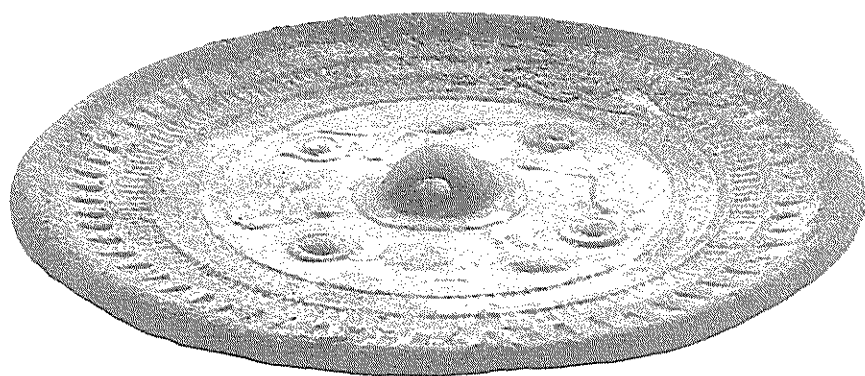
(3) 後円部南側、土師器 2 出土状態



(1) 内行花文鏡 径 17.1cm



(1) 方格規矩鏡 徑 18.4cm



(1) 鳥獸鏡 径11.3cm

図版 22



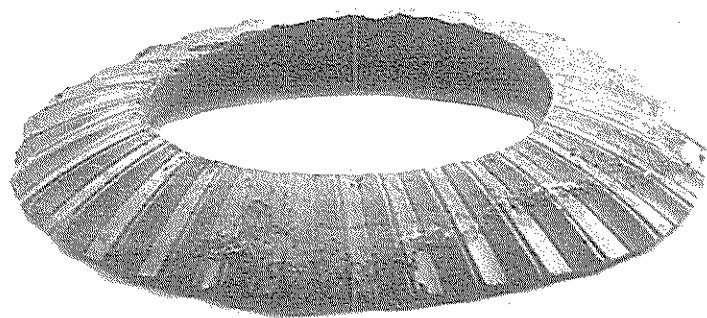
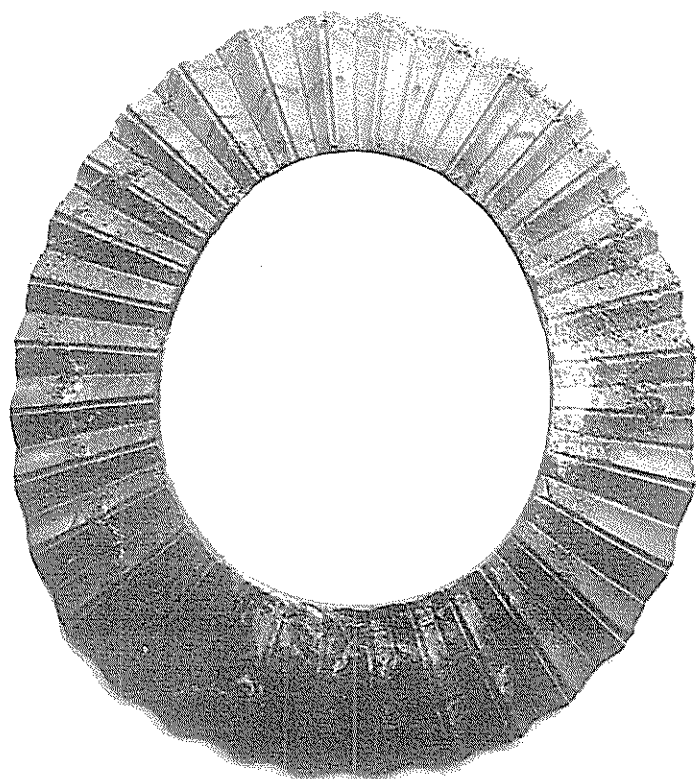
(1) 内行花文鏡鏡面 (出土時)



(2) 同左 (現在)

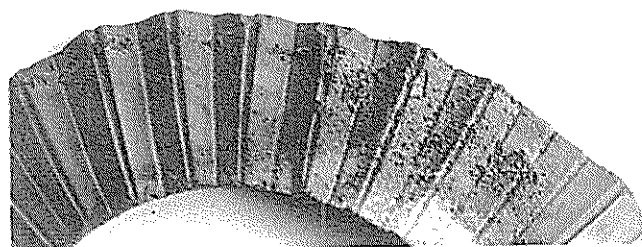


(3) 鳥獸鏡鏡面

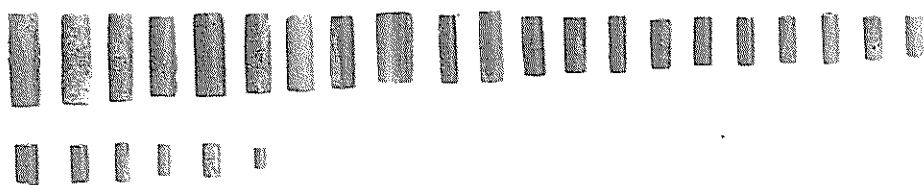
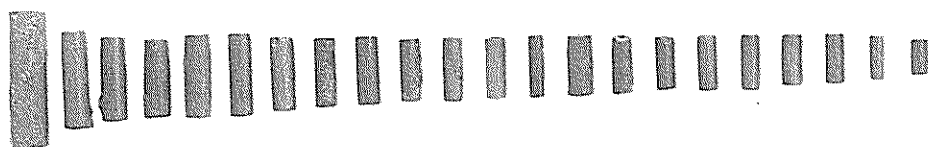
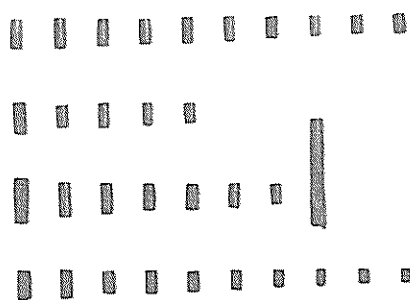


(1) 車輪石

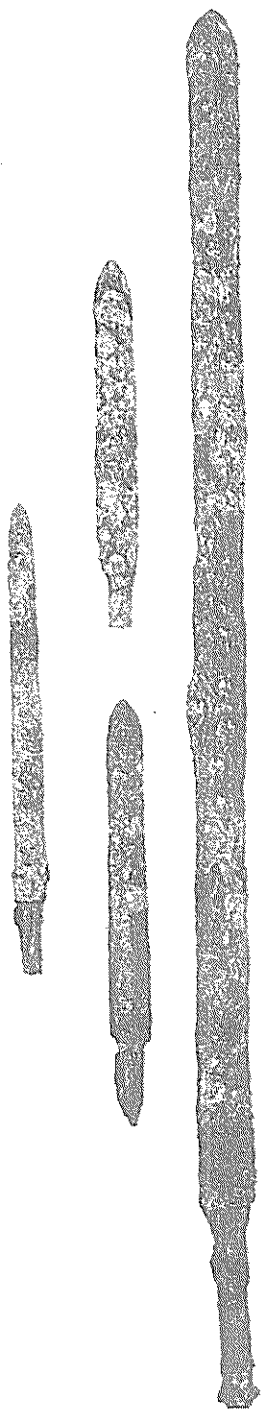
図版 24



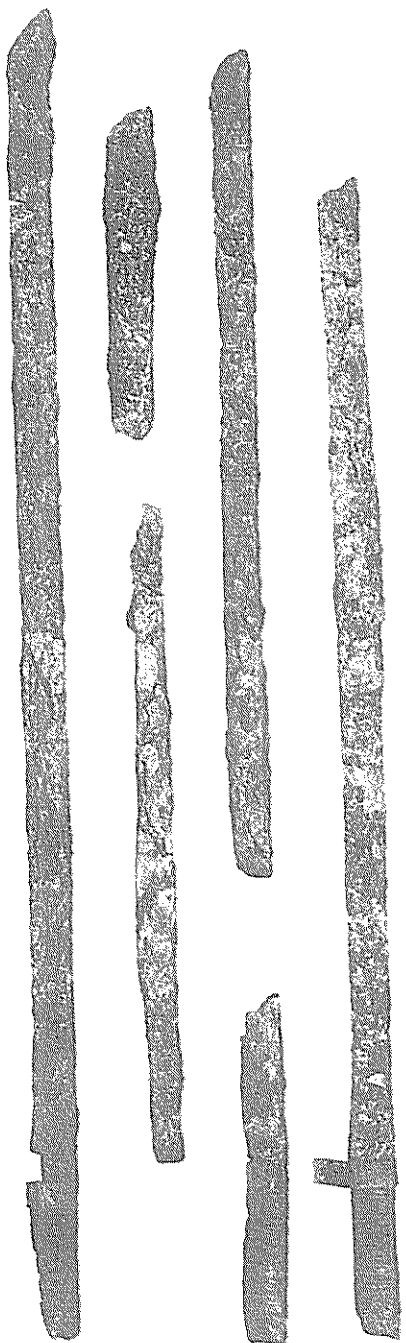
(1) 車輪石裏面 (上) (2) 車輪石部分 (下)



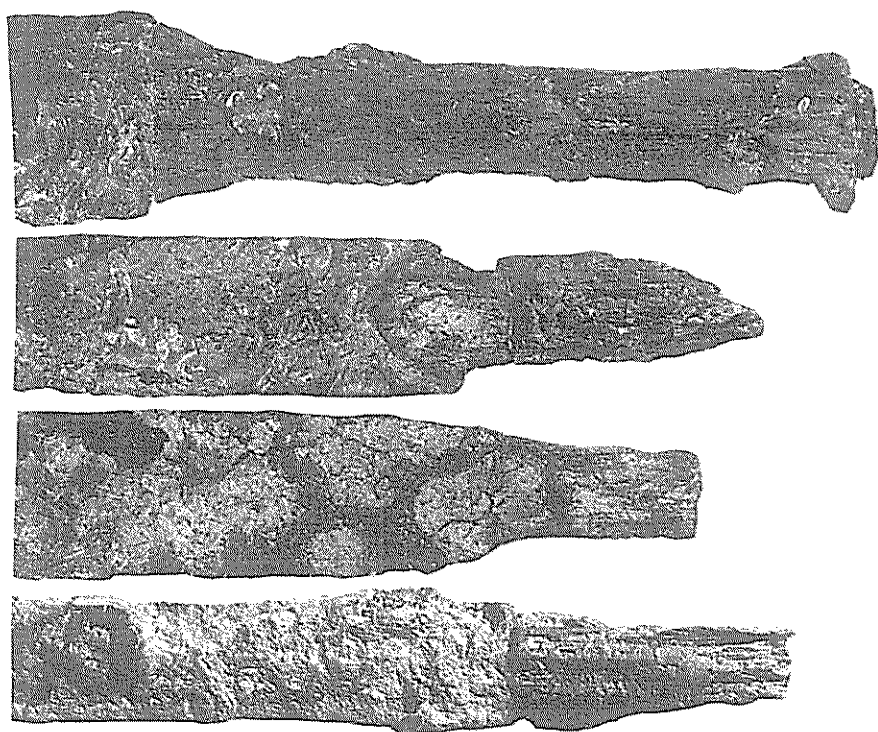
(1) 玉 類



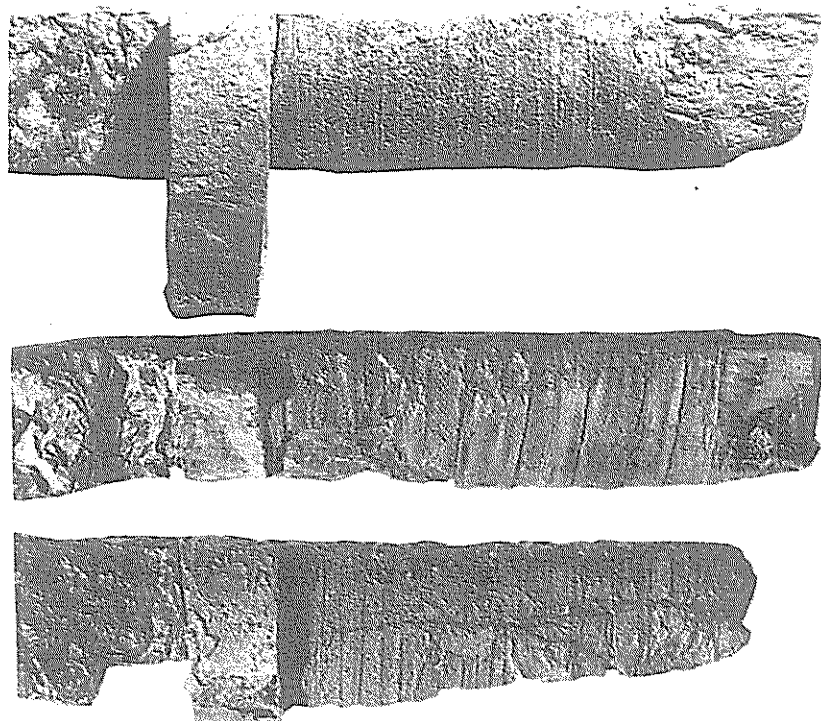
(1) 铁 剑



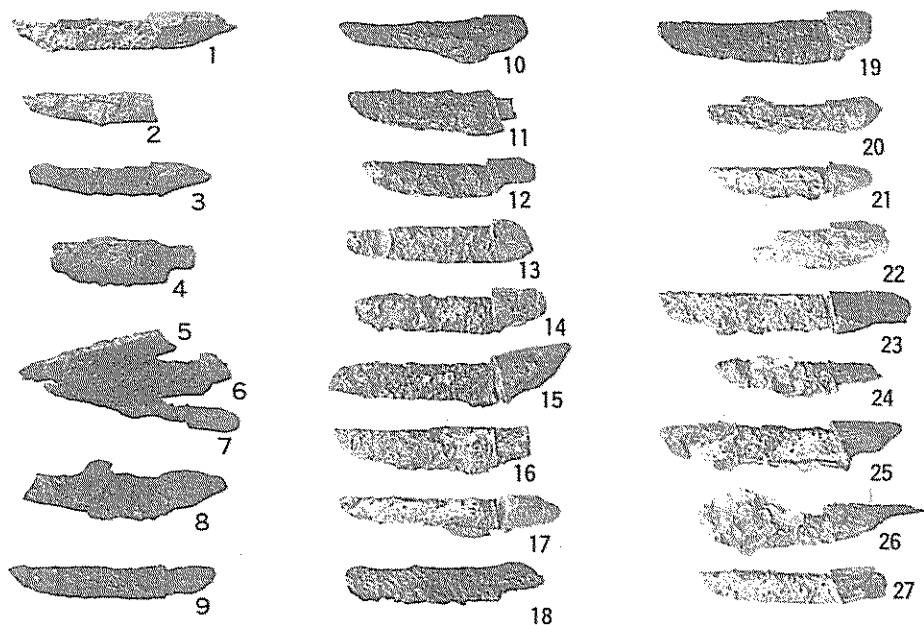
(2) 铁 刀



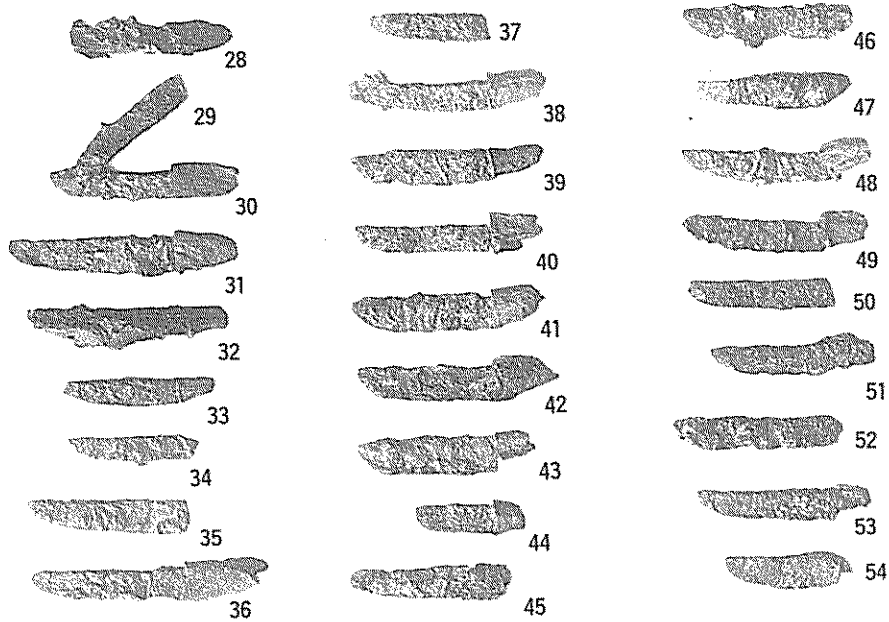
(1) 鉄剣柄部 (上から剣1、剣2、剣3、剣4)



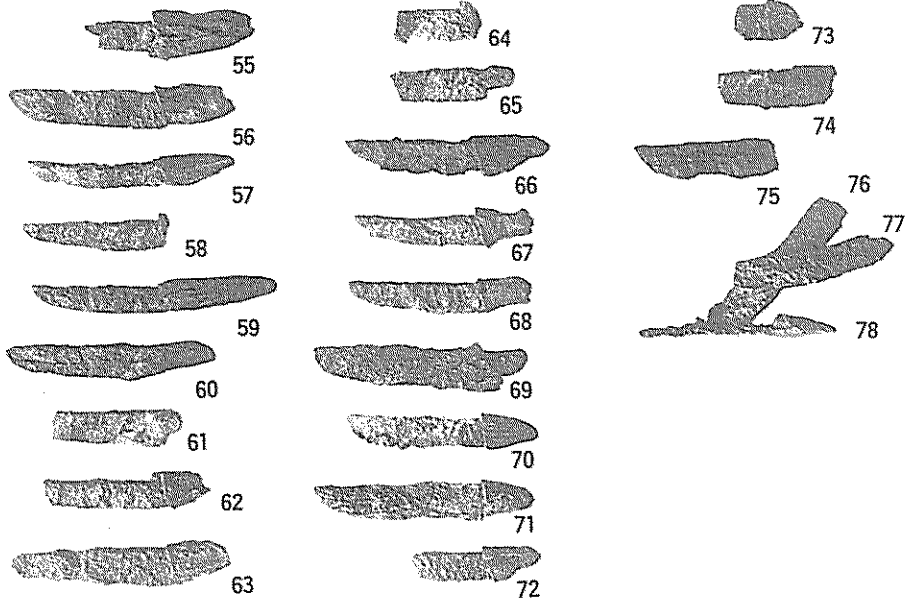
(2) 鉄刀柄部 (上から刀1、刀2、刀4)



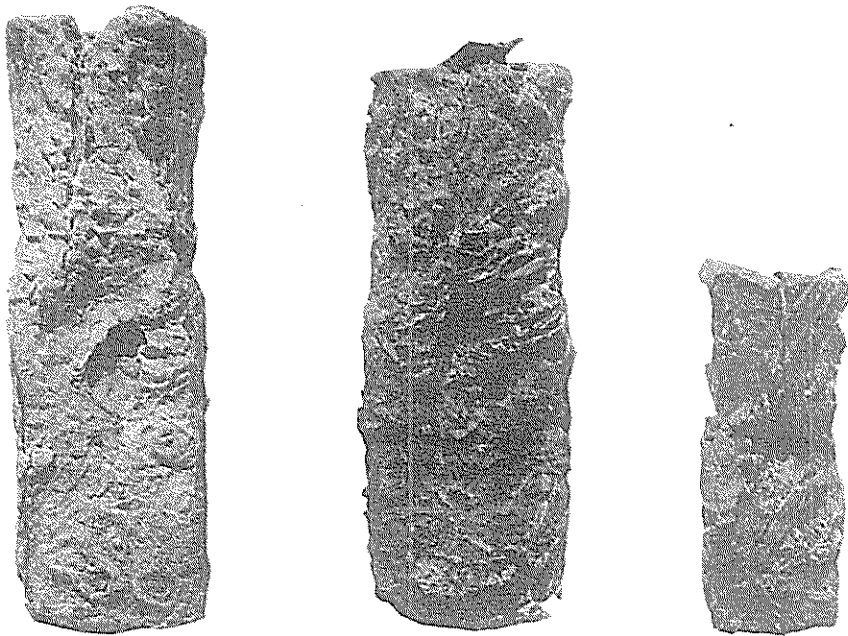
(1) 刀子 1



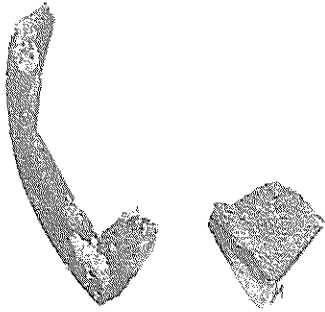
(2) 刀子 2



(1) 刀子 3



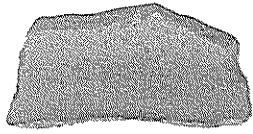
(2) 鉄 斧



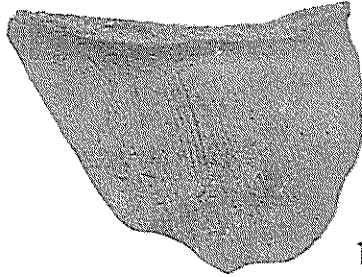
(1) 不明遺物



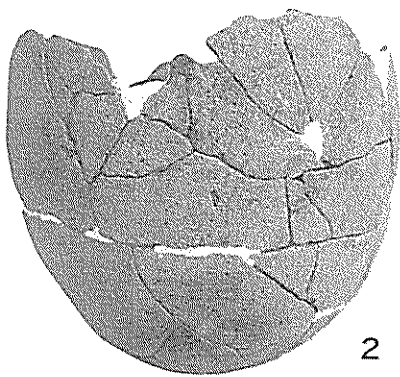
(2) 貝輪片



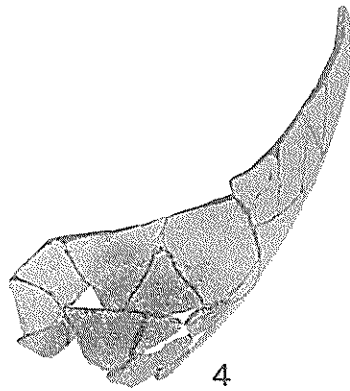
3



1

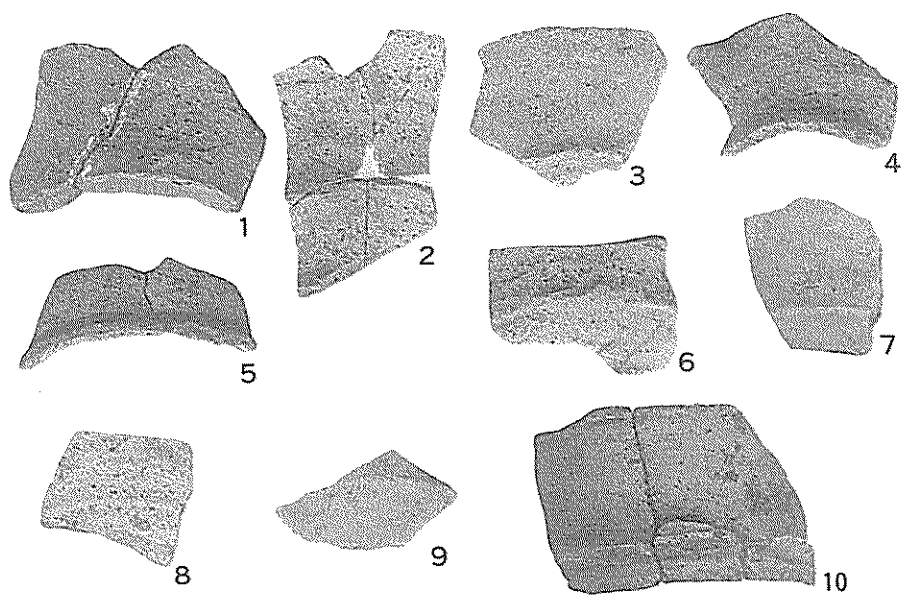


2

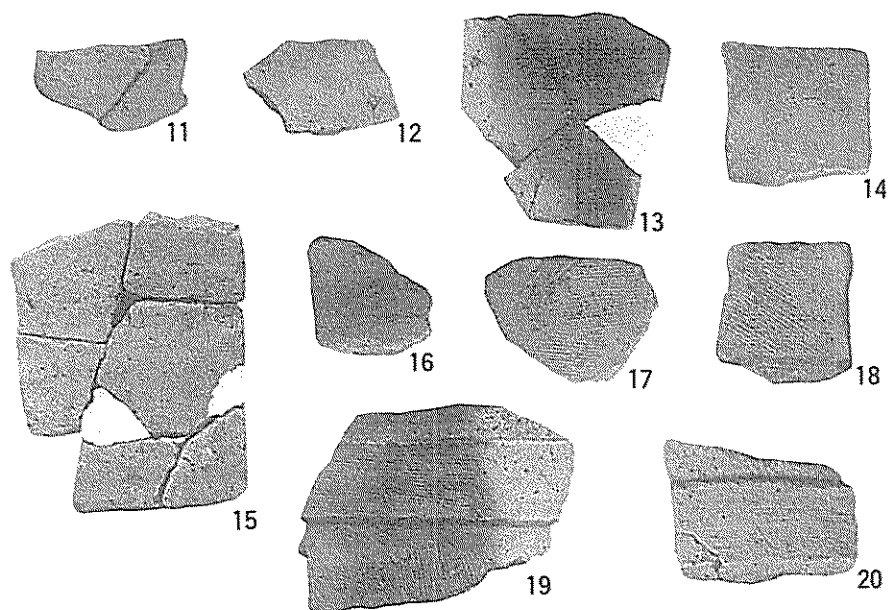


4

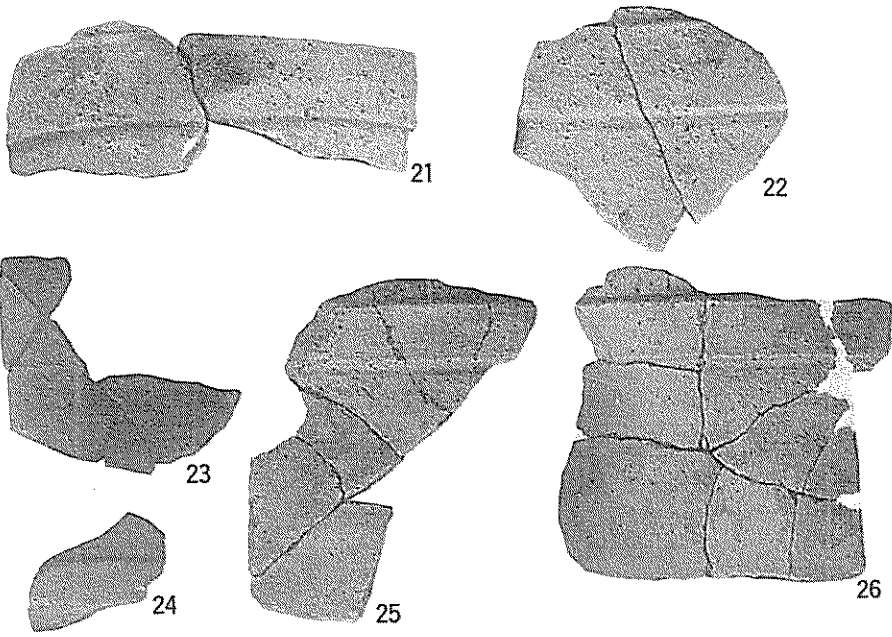
(3) 土師器



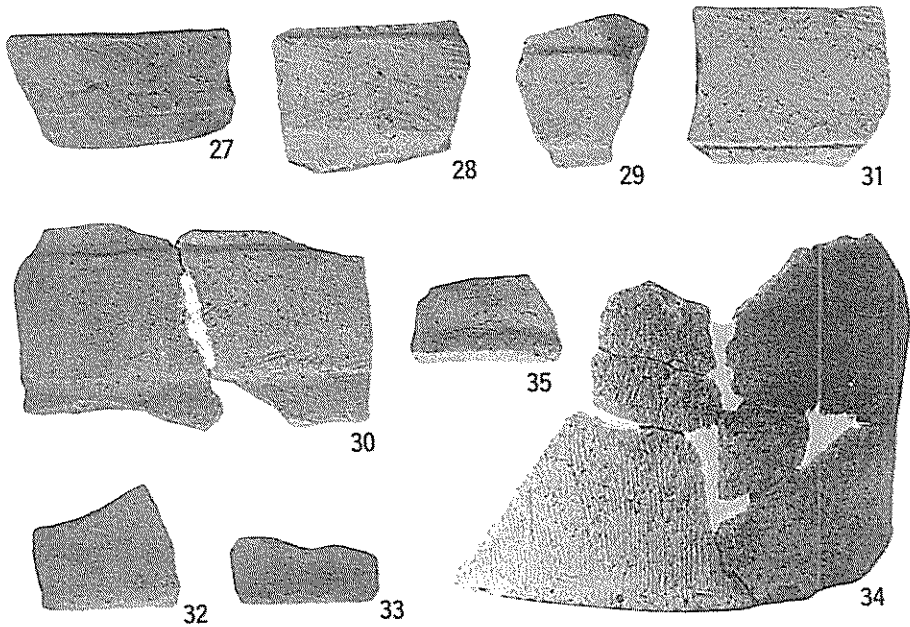
(1) 埴輪 1



(2) 同上 2



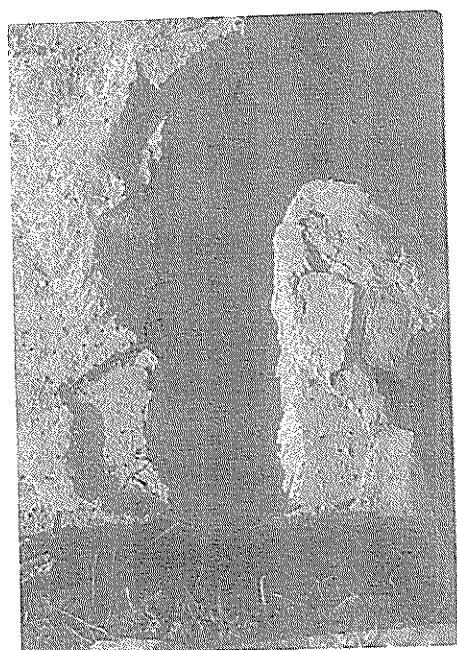
(1) 埴輪 3



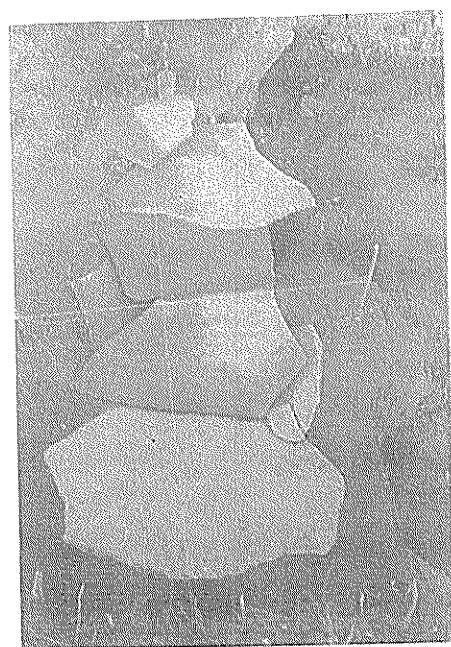
(2) 同上 4



(1) 石蓋土墳 (側面)



(3) 同 上 (蓋石除去後)



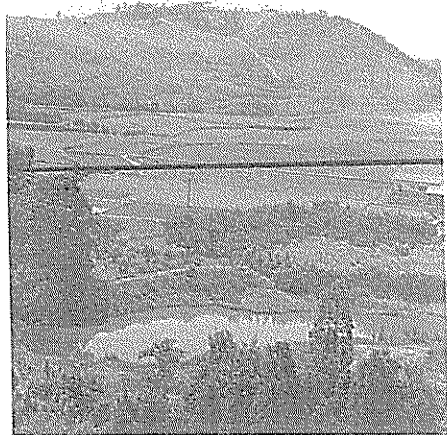
(2) 同 上 (平面)



(1) 東南より古墳を望む



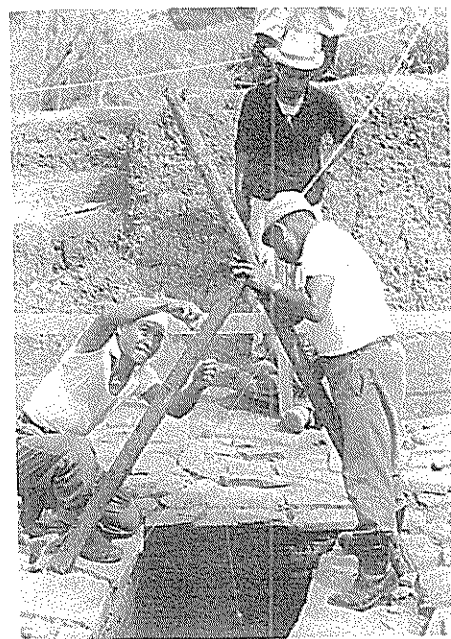
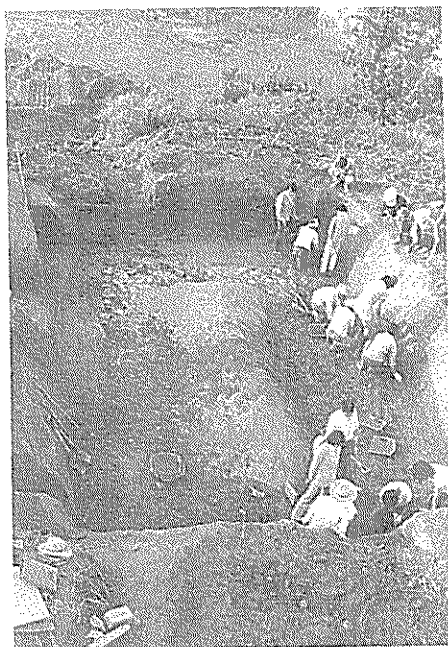
(2) 北側より後円部を望む (採土中)



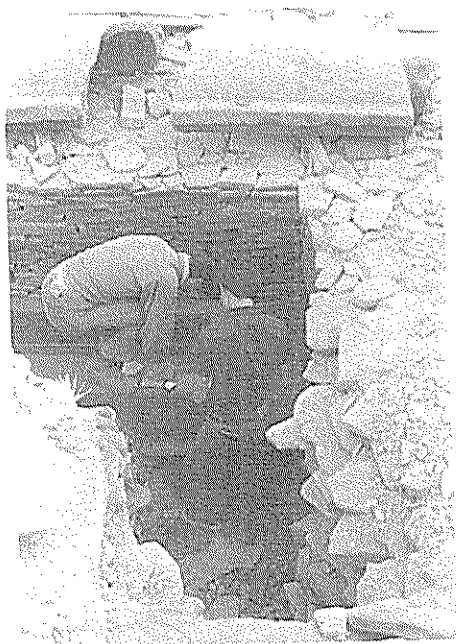
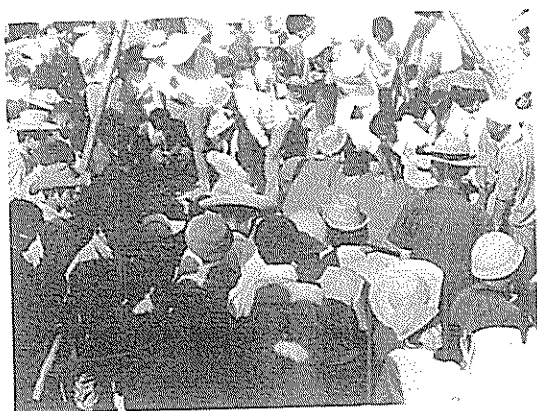
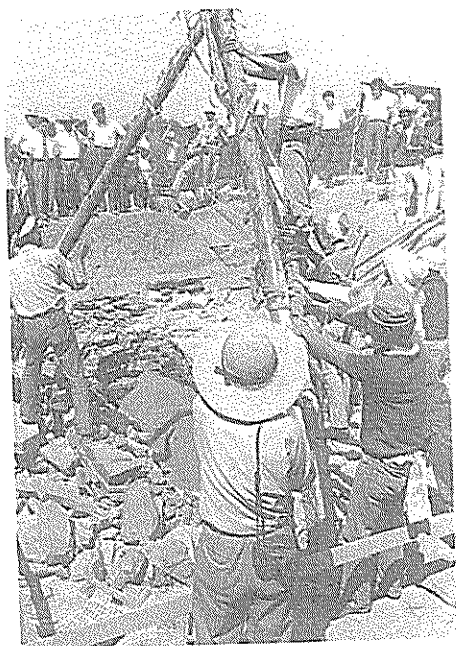
(3) 古墳より東南を望む



(4) 古墳より西北を望む



(1) 調査風景



(1) 調査風景